牡牧場　～牡畜２０７８０９２６ＴＹＯ２８３６ＩＨＬＥＦＥＳＣ１４３８７４９号の体験～

Ｃｕｒｔｉｓ　Ｅｍｅｒｓｏｎ　ＬｅＭａｙ

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。

このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】

牡牧場　～牡畜２０７８０９２６ＴＹＯ２８３６ＩＨＬＥＦＥＳＣ１４３８７７４９号の体験～

【Ｎコード】

Ｎ２６１８ＩＫ

【作者名】

Ｃｕｒｔｉｓ　Ｅｍｅｒｓｏｎ　ＬｅＭａｙ

【あらすじ】

この物語は、まもなく２１世紀が終わろうとする近未来（２０９０年代半ば‥今から約７０年後の世界）において、未知のウイルスによる感染症が全世界に広がり、日常の生活様式、なかでも男女の関係が完全に一変してしまった時代を、中学を卒業したばかりの主人公である２０７８０９２６ＴＹＯ２８３６ＩＨＬＥＦＥＳＣ１４３８７７４９号こと磯部崇史（いそべたかふみ）の体験を中心に描いたものである。（認識票の番号は、最後の４桁が個人識別番号となる。磯部崇史は８

７４９号と呼ばれるようになる。）

ディストピアではありませんが、特異なパンデミックによって、特に男女間の関係や意識が大きく変わってしまった世界における男性の義務を、やや極端に描いています。男性としての尊厳をすべて奪われ、完全な家畜として人権も失った状態での飼育、調教（軽い身体改造と重い精神改造が含まれます）そしてハードな射精管理と強制的な搾精を受け続けなければならない、男性M化のストーリーをお楽しみ下さい。（厳しい社会情勢の結果、そのような状況を、男性側も仕方がないものとして、ある程度は受け入れています。なので徹底的に男性受けで逆転は一切ありません。）なお、残酷な描写は特にありませんし、殊更虐げられるようなこともありません。男性は女性の飼育員によって、ペットを可愛がるように大事に扱われますが、基本的には家畜なので、牛や馬、豚などと同等の処遇を受けます。家畜にせよペットにせよ、動物ですから人権は一切ありませんし、プライバシーもまったくありません。飼育員の女性は、自分が飼育する男性たちを心を込めて一生懸命お世話しますが、それはまさに牧場で牛や馬を慈しむのと同じになります。

プロローグ（Ⅰ）と（Ⅱ）が少し長くて説明的ですが、この世界の状況を理解する上で、どうしても必要な設定なので、できたらお付き合い下さい。ただし、本編となる第１話から読みはじめて、必要に応じてプロローグに戻り読み返しても、充分に楽しめると思います。

プロローグ（Ⅰ）パンデミック（前書き）

かなり昔に書いて、ＨＤＤに眠っていた作品ですが、今般の掲載に合わせて、多少の修正をしています。（ストーリーは変えていませんが、コロナに関する記述など設定の一部）

分量からして中編（現状の「第1部（完）」までで12回分8万文字程度：このあと全部完成しても15万文字程度だと思います。）ですが、お時間がありましたら読んでみて下さい。

なお、第一部12回は既に書き上がっていますので、これから毎週日曜日の午前0時にアップすることとします。

プロローグ（Ⅰ）パンデミック

世界中に不思議な病気が広まって、もうかれこれ５０年になる。昔、あったというコロナ過のように、いきなり問題が発生したわけではなく、静かに罹患者が広がっていったらしいのだが、当初、誰も深刻に受け止めなかったので、当時の詳細な記録は、どこにも残っていないという。

この病気に罹ると、老若男女誰しも、軽い風邪のような症状となり、よほど重篤な基礎疾患のある人でない限り、数日で治癒する。乳児でも老人でも、特に重篤化するようなことはなく、従ってコロナや新型インフルエンザのように死亡率が高くなるような症例は一切観察されなかった。まさに「普通の風邪」という以外、形容ができなかったため、誰もまともに研究したり、何か対策を打つような医療関係者もいなかった。

実際、普通の風邪の薬（市販薬も含めて‥ただし風邪の薬は、昔からすべて対症療法薬であって、無数にある風邪のウイルスそのものに対処するものではないのは、この時代でも変わっていない。）が、良く効いたため、どこの国でも風邪の変種とか、せいぜい季節性インフルエンザの軽いもの、という程度の認識で、そのまま何の対策もしないうちに全世界に広がっていった。この状態が2年程度続いたらしい。

一部の研究医は、鳥インフルエンザとの関係に神経を尖らせたが、この新型の風邪は、ウイルスの形が大きく異なるようで、鳥には伝染しなかった。いや、それどころか牛や豚にも伝染せず、哺乳類で感染するのは人間と、チンパンジーなど霊長類の一部だけであったため、むしろどういったメカニズムでそのような選択的な感染が起きるのか、一部の研究医の興味対象となったりしたのだが、基本的には殆ど注目されなかった。

最初その異変に気付いたのは、国勢調査など、各国で人口統計をとりまとめる部門の担当者だった。統計データとして、高齢者の女性死亡率がじりじりと上昇し、70歳以上の女性の生存者の割合が、同年齢の男性よりも下回ってきたことだった。こんなことは、これまでの人口統計の歴史の中で、一度も見たことがなかった。そして、短期間で女子の平均寿命が男子の平均寿命を下回る事態となり、何かが変だ、何か重大なことが起きている、と皆が騒ぎだしたのが、確か2040年の頃だった。

何か重大な病気が流行っているのではないか。未知の病気があるのではないか。そういった話が最初は静かに囁(ささや)かれ、たちまち燎原(りょうげん)の炎のごとく炎上したのが、2041年であった。亡くなる女性は、誰しも皆、急に老け込んで、あっと言う間に後期高齢者もかくや、というような状態で老衰死する。しかも、これが一部の女性だけでなく、ほぼほぼすべての高齢女性が、一斉に同一の状態で死亡するようになったため、世界はコロナなど比較にならないほどのパニック状態となった。しかし、そもそもこれが病気であるのか、もし病気であれば、原因が何であるのか、まったくわからないまま、さらに数年が経過した。

すると、50台、60台といった、まだまだ老齢と言うには若い女性が急に老け込んで、60台、50台、そして40台後半位であるにもかかわらず、みるみる後期高齢者のようになってしまい、老衰で亡くなるケースが増えてきて、これが疫学的データからも裏付けられることとなったとき、人類は存亡の危機に陥ったことをようやく悟った。

病気の原因は、杳(よう)として判明しなかったが、臨床現場の報告と、実際に死亡する人の統計データから見えてきたことは、どうやら女性だけが急に老化現象を起こして亡くなってしまうこと、それは年齢や体質等とは関係なく、すべての女性に等しく発生していること、男性には一切発生していないこと、ということであった。勿論、病

気の進行には個人差があり、あまり影響を受けない女性もたまにはいるのだが、極めて少数派であり、殆どの女性は、どうやら急激な老化現象の果てに老衰で死亡してしまうということが明らかになってきた。

　ここから、全世界の医療関係者、製薬会社、各国の研究機関が血眼（ちまなこ）になって研究を進め、その研究成果は、すべてＷＨＯ（世界保健機構）の元に新たに設置された国際感染症研究所に集約することにしたところ、この未知の病気は、数年前に流行した新型風邪のウイルスに感染すると、発症するということが判明した。この未知のウイルスによる風邪は、既に全人類が誰しも一度は罹患（りかん）し、直ったと思った状態になっていた。つまり人類全員が、老若男女誰しも保菌者ならぬウイルス保持者となってしまっていた。従って、いまさらこれを駆除することは不可能であり、女性は等しく、発症して症状（老化現象）が出てくる日を恐れ怯え（おび）ながら暮らすこととなった。

　さらに臨床例が集まってきて、どうやらこのウイルスに感染すると、女性のみ老化速度が５倍程度になる、ということが判明し、このころから、人類滅亡の日まで、あと何年、という言葉が言われるようになった。つまり、５倍の老化速度ということは、通常の女性が思春期となり生殖可能年齢になる１５歳は、老化速度が５倍なので肉体年齢は７５歳となってしまい、到底生殖はできなくなってしまうということが明らかになってしまったためである。

　そこから、時間との戦いで、各国は研究資源を一気に集中させた。一説には、主要先進国はどの国でも、かつてのアポロ計画やマンハッタン計画に匹敵する研究資源をそれぞれで投入したと言われており、途上国にあっては薬草の類の研究から古（いにしえ）の呪術までを総動員して、何とかこのウイルスに対抗しようと努力した結果、この未知の病気のウイルスは、人間のＸ染色体に選択的に取り付き、性染色体がＸＸ型の女性のみ、老化を早めてしまうということが判明した。他方、Ｙ染色体を持つ男性は、Ｘ染色体に取りつかれて保菌者のようになってしまっても、Ｙ染色体があるため症状は発症せず、ウイ

ルスを保持したまま、通常の老化速度で寿命を全うするということも判明した。
しかし、どうやっても、この状態を治療する方法は見つからず、人類全体（正確には女性全体）が不治の病にかかってしまったとしか表現ができなかった。これに対処するべく、いろいろなアイデアが出されていたが、例えば女性の性成熟は概ね１５歳頃に完成するとしても、中には早熟な子で１０歳頃には生理が始まることもあるので、この年齢で生殖行為を行えば、肉体年齢は５０歳程度となり、ギリギリで出産が可能となるかもしれない、という対策が、極めて真面目に議論されたりもした。実際、ある国では、女の子の性成熟を促進させる薬を多量に投与して、８歳位から生殖人口とする、という政策を実施したようだが、生理が来たからといって、妊娠して出産できるかというと、それはまた別問題となる。これらの国では、極めて早期の妊娠・出産に伴う事故や妊娠不全が多発し、いろいろと不幸な事態も起きたようだが、それでも人類が滅亡の瀬戸際に追い込まれてしまった状況では、これを非難する声は殆ど出てこなかった。
そのような中にあって、最初は偶然だと思われていたのだが、この国でも必ず存在した、いわゆる風俗産業に従事する女性の中には、老化速度が従前と変わらない人が一定数居るとの統計データが観測されてきたため、藁にも縋る思いで集中的な研究と調査を行った結果、精液を定期的に経口摂取（つまり飲精）し続けると、この５倍速の老化が止められ、通常の老化速度となるということが判明した。（何故かセックスによる膣からの吸収ではダメだった。しかしアナルからの吸収は効力が半分程度に落ちるがＯＫだった。）これによって、消化管から吸収される何らかの成分が有効らしいというところまでは推測できたが、その物質が何であるかは、５０年たった未だに解明されていない。男性ホルモンが影響しているとか、摂取された精液に含まれるＹ染色体が発症を抑えているのだとか、

諸説あるのだが、どの学説でも説明できない謎が残っているという。もっとも、それを言うなら、なぜ性染色体であるX染色体が侵されると、老化が加速するのかといった本質的な部分については、まだ何も解明されていない。

この学説が最初に発表された当初は、人類滅亡が見えると、人は宗教に走るなどと揶揄されることもあったのだが、風俗産業に従事しなくとも、何故か老化の進行が人より遅い女性を各国で追跡調査したところ、これらの女性が例外なく、フェラチオや肛門性交を好んで行っていたという事実が判明したことにより、これが現状（甚だ対症療法ではあるのだが）、唯一の解決策だとされ、各国とも政策の中心に据えることとなった。これが今からおよそ、５０年前の２０４５年であり、以降、各国の関心は、どのようにして乳児から高齢者まで、すべての女性に男性の精液を満遍なく確実に配布するかという、その一点にかかるようになった。

家族のいる女性の場合、各家庭内での自家充足、すなわち家族の男性で射精できる者（父親であったり、兄弟であったり、場合によっては息子であったり）が必死になって、女性の家族全員に飲ませるだけ射精していたが、これは独身者や単身者など、独居する女性（必ずしも老人とは限らない。独居の女性は若年層にも存在し、彼女らの殆どは、精液を提供してくれる特定のパートナーはいなかった。）にとってはハードルが高く、彼女らの精液入手は困難を極めていた。

これを解決すべく、最初は献血のようなシステムが立ち上がったが、それだけですべての独居女性のニーズを満たすことはできず、鮮度や効果がわからないような闇精液が蔓延し、高額で取引されるなど、大きな社会問題となった。

更に家族にあっても問題はあった。というのも、家族の出した精液を飲むことについては、出す方も飲む方も、気まずくて抵抗が大きく、何とかならないかという声が社会に溢れていた。つまり家庭

では、保存技術がないため、出してすぐ飲まないと効果がないことから、見ている前で射精して、それを直ちに飲むしか方法がなかったため、理屈では理解しても、父親や息子の出したものを直ちに飲むというのは、母親や娘にとっては極めて高いハードルであり、それ位ならば、学校や職場で友人に出して飲ませて貰うほうが、まだマシという声も多かった。これは逆も同様で、父親や息子にとって、家族が見守る中、射精しなければならないというのは、恥ずかしさも極まることとなった。

そこで、これを何とかして、きちんとした流通に載せ、低価格で飲料に適した精液を広く誰にでも入手できるようにすることが急務となり、喧々諤々の議論の結果、若年の男性に兵役のような義務を課し、一定期間、「搾精牧場」（俗称「牡牧場」という。搾精という単語は、法律上の正式名称だが、あまりにも生々しいということから、牡牧場という呼び名が通常用いられていた。）と呼ばれる施設にて、精液を提供し続けることとされた。これは国及び地方自治体が事業として実施することとなり、男性の従事義務と合わせて、「飲料用精液の提供義務及び供給方法に関する法律（光明二年法律第六十四号）」という法案が与野党一致で国会を通過した。（なお、これは憲法に反することを強制することになるため、憲法が一部修正されるとともに、仮にこの義務を果たさなくとも、法律上の罰則規定は設けないこととなった。）

この法律では、事業主体としての特殊法人を新規に設立すること（その運営する精液生産場所が全国に設置された「搾精牧場」となる）、地方自治体がこれに協力すること（住民データの提供、幼稚園／保育園からはじまり、小学校、中学校から高校まで、あらゆる機会を捉えて行われる啓蒙教育）、そしてすべての男性の義務として、２年間の夫役（「ふえき」と読む。こちらも俗称で「牧場役」とも言う）に参加する、といったことが制定された。

この法律ができて４０年以上の年月が経っており、現在の女性は、

精液を飲むことに忌避感は一切なくなっている。（２０２０年頃の女性が牛乳やヨーグルトを飲む感覚。）というより、女の子は離乳食が始まると同時に飲精を開始せざるを得ないことから、幼少時より毎日習慣として飲精を続けてきた結果、殆どの女性（幼児から大人まで）は、精液を極めて美味しいものと認識していて、毎日嬉々として飲精している。（ただ、それであっても、家族間での精子提供については、依然として躊躇が残っているのが現状である。）

他方、男性はそもそも他人の精液を飲むという行為そのものに強い拒否反応を持つケースが多く、一部のゲイを除き、他人が射精した精液を飲んでみたいと思う男性は見当たらない。（ただし、ある民間のアンケート調査によれば、自分の出した精液を「味見」したことがあるという男性は、全人口の９９％を超えるというデータもある。）

なお、精液中の、どの成分が効いているのか、さんざん研究されているが、まだ特定できてはいない。従って、化学的に合成することは勿論、その特定成分のみを抽出して加工するということも成功していない。また保存性や飲みやすさを向上させるため、精液を何とか錠剤等に加工できないかという試みも行われているが、どのような処理をしてみても、効果があるのは射精から1週間というのが現状であり、これを過ぎてしまうと効果が一切なくなってしまうということが判明している。それどころか、下手に加工処理をすると、効力が衰える時間がどんどん短くなることも判明し、この試みも今のところは成功していない。ここから、射精したばかりの精液こそ一番効果が高いといった都市伝説が幾つも発生し、世の中の女性はこぞって「生搾り」という、フェラチオで直接飲精するスタイルとか、あるいは「搾りたて」と称して、目の前で射精したものを、その場で飲むというスタイルが定着していった。このような「生搾り」や「搾りたて」は、特にこってりとしてコクがあり美味しいとされ、セレブの間ではこういった精液に多額の金銭を支払うのが一般的と

なった。（非公認ではあるが、このような「生搾り」や「搾りたて」を扱う精液バーなる場所も存在する。）

勿論、これらは高級品であり、一般向けには低廉な製品として、１週間という消費期限つきの真空パックなどが各社から多数販売され、こちらは手頃な価格（ちょっと高めのヨーグルトといった金額）で全国津々浦々のスーパーやコンビニ、駅の売店などでも販売されるようになった。

ちなみに、１週間というのは、ここまでなら確実に効力がある、という保証時間であり、この消費期限以内であれば、飲料にも適していて、かつ寿命延長薬としての効果がある、という期限である。しかし味は日毎に落ちていくと言われていて、そのため多くの飲精商品にあっては、通常だと射精から３日程度の賞味期限と、７日の消費期限が併記されているのが普通である。（商品には必ず、搾精日、賞味期限、消費期限の３種類の日付が明記されることになっている。）

なお、言うまでもないことだが、この飲料用精液では、妊娠はさせられないように処理がなされている。

精液牧場での搾精であるが、通常、成人男性の１回の射精量は、平均で３．５ｃｃ程度であり、新鮮な精液ならば毎日この程度を摂取すれば老化は抑えられることになる。ただし商品としての飲料精液は、余裕を見て、すべて　５ｃｃのパックになっている。また、これに合わせて、牡畜（オスちく）からの搾精量は５ｃｃを基本としており、精液牧場においては１回の搾精量が５ｃｃを上回るように、薬品を投与したり訓練を繰り返したりして、睾丸や前立腺の機能を極限まで向上・増大させるための身体改造を実施している。

同時に、精液の保存技術も改善され、射精してから常温で２日程度、冷蔵なら概ね１０日程度は保存できるようになった。（実態ベース。従って記載としての消費期限１週間は、ずっと変化がない。）これは、多くの生鮮食品、例えば鮮魚などよりは、ずっと保存が楽

であり、ほぼ牛乳などと同等になったことから、現在の流通システムにおいては、販売上の問題は一切発生しておらず、確立された制度として広く社会に受け入れられているのが現状である。

プロローグ（Ⅰ）パンデミック（後書き）

この作品も、長い場面設定のためのプロローグが延々と続くので、初回に限りプロローグ２話分を一気に投稿します。
実質的な本編は、来週日曜日からスタートしますので、１週間お待ち下さい。

プロローグ（Ⅱ）制度の概要（前書き）

プロローグに限り、２回分を一気に投稿します。（Ⅰ）と（Ⅱ）を合わせて、この特殊な世界の背景をご理解下さい。

プロローグ（Ⅱ）制度の概要

夫役（牧場役）とは、日本人の男性全員に等しく課せられた義務である。

１５歳（中卒以降）から３０歳までの間に、自分で都合の良い時期を選び、精液を提供し続けなければならない2年間の義務であり、搾精牧場（俗称：牡牧場）と呼ばれる施設に収容され、毎日、一定量の精液を強制的に搾り取られることとなる。これは日本男児として生まれたからには、逃れることのできない国民的義務であり、精液検査で撥ねられた場合（極めて稀に発生するが、物凄く不名誉なことであり、男性として役立たずだというレッテルを貼られてしまう。また結婚は絶望的となる。）を除き、中学卒業の段階や高校卒業の段階、更には大学卒業の段階など、各自の都合と思惑で、それぞれ時期を選び、自らの意志により赴くのが普通である。

正式名称は夫役（昔あった義務は「ぶやく」と呼んだが、これは「ふえき」と呼ぶ。ただ「ふえき」の発音から連想される賦役とは異なり、夫役では労働を提供するのではなく、精液を提供する。）であるが、世間一般には「牧場役」と呼ばれている。

憲法にも明記された法律上の義務といっても、不参加に罰則があるわけではないので、行かない人もいない訳ではない。しかし単なる努力規定と意味が異なるのは、これを受けていないと、社会生活のいろいろな場面で、明確な差別を受けることになり、通常の国民としての権利すら、一部制限されてしまうことである。また、法令上の権利のみならず、牧場役を受けていないということは、一人前の成人男性とは見做されないことから、キモヲタ童貞の中年オヤジ以下の扱いとなってしまい、老若男女誰からも人間扱いして貰えないし、社会的にそれが当然と見做されてしまう。それで、いたたまれなくなり、引き籠もりニートを経て自殺する牧場役未了者も、か

なりの数に登るという。（あたかも昔の兵役と同様に、日本男児として生まれたからには、全員が行くものという社会的な圧力が大きく、健康なのに行かない者は、全男性の０．１％程度と言われている。）

このような社会の風習・空気というか無言の圧力が生まれた背景は、当然だがそれを行わないと女性が生殖可能年齢に達するまでに老衰で死んでしまうか、または生きていても老化により生殖可能ではなくなってしまうため、人類が死に絶えてしまうという厳然たる事実を突きつけられたことによる。といって、個々人の行動を縛るのは最小限にすべきだし、なるべくなら任意（志願制）にするのが望ましいという議論も強く、憲法にも義務は明記されたものの、特段の罰則規定は設定されなかった。つまり法令の建て付けとしては、日本男児としての義務という精神規定を憲法で明記し、この間の権利停止（人権返納やプライバシーの放棄）など特別な地位を明記する一方、実際の義務の履行は各自の自発的意志に基づくボランティア活動として、履行するかしないかは各人の自由意思に任せるという、かなり珍しい立法となった。

その代わり、幼稚園の時代から小学校、中学校、そして（未修了者には）高校や大学まで、毎週の授業の中で、このための特別な時間を設けて、男性国民のもっとも簡単にして、もっとも崇高な義務だという教育が、何度も繰り返し行われ、それは男女ともに一緒に受けるものであったことから、女性からは男性に対する深い感謝の念と尊敬、そして自分たちの生殺与奪の権を担っている男性に対する賛美が行われる一方、男性にあってはこれを果たさなければ、人類に対する背信行為とまで考えられ、参加しないという選択肢はあり得ないという社会全体の同調圧力となってのしかかってきた。いわば、一人前の男性となるための通過儀礼といった趣となっている。

ちなみに、共学校にあっては男女一緒に授業を受けることとなるが、中卒段階で終了してしまった者は、高校や大学では受ける必要がない。一方、女子は全員、大学まで受けなければならないため、

この授業を受けるクラスにおいて、出席数が次第に減って行く男子生徒は、加速的に居心地が悪くなり、それもあって殆どの男子は、特別な事情がない限り、中卒段階または高卒段階で受けてしまうのが一般的である。

　牧場役修了者には、精巧につくられたバッジが支給され、外出するときはこれを必ず佩用することになっている。勿論、佩用しなくとも特段の罰則規定はないが、牧場役を終えた男性は誇りを持って佩用するのが普通である。（特に改まった席では必ず佩用。）

　逆に、牧場役をやっていないのにバッジ（真贋を問わず）を着用することは重罪であり、最低でも7年以上の実刑となる。（健康上の理由その他により、牧場役を免除された男性は、同一デザインで色違いのバッジを支給され、身障者扱いとなる。）

　なお、特例として、兵役を済ませてきた成人男性は、牧場役を済ませたのと同等以上の扱いとなり、社会的ステータスもさらに上位となる。（兵役も基本は2年で、こちらは１８歳以上２６歳までに受けることになっている。）戦争などがあれば、愛国心の高まりもあって、兵役に志願する若者も多くなるが、兵役は一朝事あらば命を失うことも多く、また兵役は基本が2年だが、紛争があったり大規模災害があったりすると、事案終了まで延長される可能性があるため、その辛さ、厳しさは牧場役の比ではない。このため、兵役は人気がなく、積極的に兵役を選ぶ男性は少数派である。（ちなみに兵役はすべて志願制である。）

　牧場役の2年間は、精液を生産するための家畜と見做され、この間は一切の人権が停止（法律的には国に寄託）される。呼び名も「搾精畜」となり、牧場に入ることが決定した時点で示された登録番号で呼ばれるようになる。牧場内では搾精畜に対して、各種躾け（鞭による体罰）がある。ただしこれは搾精畜を従順に管理し、従わせるための調教であり、仮に逆らったとしても、何ら罪となるものではない。

　このように、人権を停止してまでも搾精を強制することには、多

少の反対が今でも残るのは事実だが、これが最も安価かつ確実に精液を生産できるため、憲法にも人権の停止その他の地位に関する特例が明記されることとなり、男女問わず国民の9割以上の圧倒的多数が現在の制度に賛成・支持している。

　法律上の正式名称は「搾精畜（さくせいちく）」だが、一般的にはこの呼称は、あまり使われていない。寧（むし）ろ俗称である「牡畜（オスちく）」が、よく用いられる。これは「搾精」という言葉が、さすがに生々しいと感じられているからであり、特に女性はこの単語を話すことに躊躇（ちゅうちょ）があるからと言われている。しかし、実際には女性で恥ずかしがる者は少数派であり、牡（オス）畜を好んで用いるのは男性のほうが圧倒的に多い。これは大多数の夫役修了者が、毎日精液を強制的に搾り取られた辛くて惨めな生活を連想させる「搾精」という言葉を忌避するためらしい。

　牧場における人間は女性のみとなっており、牡はすべて家畜であるため、この「牡畜」や「牡牧場」という呼称は、広く一般化している。

　牧場役は、１５歳（中学卒業段階）から３０歳までの間に連続して2年間務めるものとされていて、何歳で務めようとも待遇に差はない。男の子として生まれたからには、どこかで行かなければならないという認識は社会の隅々まで徹底しており、第二次大戦以前の兵役と同様、男の子が一人前になった証として社会に受け入れられていた。

　牧場役は年度単位で運営されていて、基本的には4月から2年後の3月までとされている。中学を卒業した男子は、３０歳までの１５年間のうち、自分でいつ行くかを決め、牧場役申請を行う。建前としては、人数調整があり、申請年度に行えるという保障はないのだが、実際には慢性的な欠員状態のため、申請した年度で１００％決定されている。

　牧場役を終えると、それぞれの年齢に応じて退役後の特典がある。

　中卒時だと、国公立高校進学に際して、内申点が満点の扱いとなる。もともと内申点の良い生徒には、意味がない恩恵だが、平均点

以下の生徒にとっては、大きな優遇となる。
　私立高校の場合も、概ね国公立に準じた特典を設けており、それどころか一部の私立高校では、牧場役を終えてきた学生は試験なしで無条件に合格とする高校も存在する。
　高卒時だと、国公立大学への受験に際して、統一テスト（かつての共通テスト：センター試験）の点数に2割（９００点満点だった場合には１８０点）の加点があり、これも、もともと優秀な生徒ならともかく、平均点以下の生徒にとっては、１ランクどころか2ランク上の大学を狙える特典となる。
　私立大学受験の場合は、やはり各学校に任されているが、どこも国公立と概ね同等の優遇措置が設定されており、そこに私立ならではの、各大学それぞれ特徴ある追加優遇措置があったりするので、ここを選択する男子も多い。特に中高６年間一貫教育の学校に通っている生徒においては、わざわざ中学と高校の間に入れる意味がなかったことから、高校卒業時に済ませるケースが多く、少年達は中卒時と高卒時のどちらが有利かを真剣に考えて選択をしている。（ただし、３年前から始まった、特典の繰り越し制度によって、一貫教育の途中で済ませておいて、特典は大学進学時に受け取るということが可能となったことから、これを選択する生徒も次第に増えて来ている。特に中高一貫教育のときは、2年間の休学扱いとなって、受験準備のための追加の1年が必要ないことが多いため、最近は人気急上昇中とのことである。）
　大学を出てからの場合だと、就職が決まってから、実際に就職する前に2年間の休職扱いで行くケースと、2年間のお役目を終えてから就職活動をするケースに分かれる。前者の場合は、法律で企業は必ず休職を認めなければならないことになっており（これは就職して働きだしてから行くケースも含まれる）、その間は有休休職となって、もし家族がいたとしても、生活は保障される。また、もし先に牧場役を済ませてから就職活動を行うとすると、どこの企業も既にこれを受けてきたということで、2年分の休職給を支払う必要

がないことから、優先的に採用してくれるため、そうする学生も一定数存在する。

　なお、中卒または高卒で牧場役に行く場合は、丸2年（4月から3月）をこれに充てるため、戻ってから受験勉強をする必要があり、実質的に3年間の遅れとなってしまう（前述の中高一貫校の生徒が途中で行く場合を除く）。それが大卒または社会人になってから行く場合は、2年間のみで社会復帰できるため、どちらが得かは、一概に言えないのだが（しかも社会人になって行くときは、有休休職扱いのため、その分の給与が貰えることとなる）、牧場役は毎日、ひたすら搾精されることから、精力が有り余っている１０台のほうが好都合であり、２０歳を超えると、毎日無理やり搾精されるのは、身体的にハードでとても辛いという下馬評がある。それで、結果的に3年の遅れとなっても、中卒または高卒で行く学生が多く、現在のところ、全体の比率は中卒時が4割、高卒時が4割、大学在学中が1割、大卒時が1割、完全に社会人となったあとで、就職して何年か経ってから行くのが若干名程度となっている。

　罰則規定がないにもかかわらず牧場役への参加率が極めて高いのは、長年にわたる教育のたまものであると同時に、受けていないと社会からの圧力でいたたまれなくなるからである。これは、あまり公表されていないのだが、牧場役を果たさないまま３０歳を超えてしまい、誰にも相手にされなくなって社会的に抹殺されてしまった男性の自殺割合は、極端に高いという実態がある。

　搾精牧場（牡牧場）での生活は、一切口外してはいけないことになっている。ただ、一応は法令で禁止されているにしても、口外したことの罰則そのものは、軽微な罰金のみであり、運用もそれほど厳しくはない。日常的な生活の中での肌感覚としては、立ちションをしたというレベルであり、仮に警官が聞きつけても、注意または説諭で済ますのが普通である。むしろ、経験してきた男性が、自身の男性としての尊厳を全否定されてしまう体験が、あまりに衝撃的であることから、皆一様に口を噤んでしまい、外部にほとんど様子

が出てこないというのが実情である。といっても、さまざまな噂（うわさ）は飛び交っていて、特に女子にも（表面的ではあるが）見学という形で牧場役の一部が公開されていることから、ある程度の情報はリークしている。（とはいえ、見学は意図的なショールームものが多いため、牧場役の実態は、あまり知られていないのが実情である。）

　精液として一番質が良く、美味しいのは高卒時とされている。第二次性徴が完成し、完全に成熟した成体の睾丸となった直後ということなのだが、これはあくまで平均的な評価であり、個人差も大きい。中卒組の中にも、いわゆるブランド精液を出せるようになる牡（オス）畜も居るし、高卒組であっても、大多数の牡（オス）畜が射精する精液は、普通の一般精液レベルのため、大量生産品となって手頃な価格で出回ることになる。（勿論、そういった用途こそ一番必要とされていることから、それが悪いという意味ではない。）

　他方、中卒時は一番性欲が盛んで、性器も成長している段階なので、射精量（正確には連続射精回数）は中卒時が一番とされている。また、中卒時は訓練（調教）による成長が一番顕著であり、ここで各種ホルモン療法や薬品投与を受けると、睾丸の発育（肥大化）が半端なく、当然の結果として射精量もどんどん増加する。

　睾丸が発育するということは、男性ホルモンの分泌も増大するため、ペニスも同時に大きくなるということであり、牡（オス）畜としての処置と相まって、中卒時に牧場役を済ませたグループでは、統計的にかなりの有為差をもって、ペニス及び睾丸が巨大化するというデータが出ている。（統計データでは、平均的な成人男性のサイズと比較して、ペニスで体積比2．5倍程度、睾丸で体積比3倍程度にまで肥大する。）政府はこのデータを、牧場役のメリットとして意図的にリークしていることから、それに釣られて中卒段階で参加する男子生徒も多い。

　なお、睾丸やペニスの発育は、前立腺や精嚢の発育・肥大化も伴い、射精量が飛躍的に増大する。この結果、毎日何度も、大量の射

精ができるようになる。いや、大量の射精をしなければいられない身体になってしまう。これこそが牧場の狙いであり、こうして優良な精液を毎日、多量に生産してくれる牡畜（オス）を、少しでも増やして行くことによって、ノルマを果たすとともに、余剰精液を高値で販売して経営的にも余裕を持たせているのである。

　このように性器が成長し、サイズ的にも射精量的にも、平均値を大きく上回るようになった牡畜は、牧場役を終えて社会復帰したときも、大変に女性の受けが良い。これは当然で、まず、大量の精液を毎日、射精しなければいられないということは、自分のみならず自分の家族や友人などにも、おすそ分けできるということであり、パートナーとしては超優良物件と言える。さらにペニス（特に亀頭部分）も大きいとなれば、それだけでも充分にモテる要素となっている。

　このような事情を受けて、多くの搾精牧場では、中卒のグループは量を確保するため、ひたすら搾り取ることを主眼とする搾精パターンを採用する一方、高卒以上は少し間隔を開けて、良質の精液を搾ることを主眼とする搾精パターンを採用することが多い。具体的には、中卒組では１日４回程度（多いところでは5回というところもある）だが、高卒組以上では１日３回程度というのが標準的となる。これは精液の質と量を天秤にかけ、販売価格なども考慮して決められている。

　一部の精液牧場（主人公が配属された日立実験牧場も含まれる）では、機械搾りではなく、手搾りによる精液を生産し出荷している。手搾り精液は、文字通り搾精機の搾精筒によらず、毎回飼育員が手ずから精液を搾ることとなり、こちらは量より質となるため、搾る頻度も少なくなる。（機械搾りは中卒者で４回〜5回程度、高卒者で３回程度となるが、手搾りは通常だと１日せいぜい２回となる。しかし実際問題として、手搾りで生産される精液の量は、１匹の牡畜同士で比較すると、手搾りのほうが回数は少なくとも射精量は多くなるという統計データが出ている。）

さらに、これら手搾り精液の頂点に立つ精液としては、搾精畜の固有番号を冠したブランド精液というのも存在する。（1回分5ｃｃで大枚1枚程度となるが、成金やセレブに人気がある）
これらは、ケース・バイ・ケースなのだが牡畜の睾丸が精子を製造する能力に鑑みて、72時間の禁欲をさせた上で、3日に1回という搾精パターンを採るところが多い。

人間を家畜として牧場で飼うというのは、メジャーとは言えませんが、ひとつのジャンルとして確立していると思います。試しにこのノクターンで牧場と検索すると１００以上の作品がヒットします。またアダルトマンガのサイトでも、やはりこの手の作品を得意とする作家の諸先生がいらっしゃいます。

しかし、そのような作品の大半は、女性を家畜として飼育し、母乳を搾るとか、繁殖させるといった、女性が受けのものと見受けられます。男女ともに家畜というものですと、あまり見当たらず、筆者が知るメジャーな作家の作品としては、柑橘ゆすら先生／さおとめあげは先生の「人間牧場」がありますが、あれはエルフが人間を食用家畜として飼育するという異世界ものです。エロの要素もそれなりにありますが、どちらかというと極限状態（生命の危機）における人間関係・人間模様を中心に話が進むので、牧場における飼育という場面は副次的ですし、家畜として飼育するというよりは、囚人とか奴隷を閉じ込めるイメージです。（他にノクターンでも、宇宙人が人間を食用に飼育するという話がありますが、本当に２つか３つ程度です。）なお、この分野では「約束のネバーランド」という名作がありますが、あれはまた自分たちが食用に飼われているということを認識していないところからスタートしますので、少し毛色が異なりますし、物語の中心は牧場であるＧＦハウスでの生活そのものではなく、そこからの脱出譚となっています。

さらに男性のみが家畜となる、という作品は、ありそうですが実は本当に少数でして、いろいろ探しても数点しか見当たりません。これは小説のみならず、マンガでも同様です。また、家畜にされるのは、成人（性成熟が完成した、つまり第二次性徴を終えた）男性よりも、どちらかというと少年（やっと陰毛が生えてきたかどうかと

いう程度…つまりショタ）ものが殆どです。（それとて同人誌で探しても、ほんの一握りしかヒットせず、単行本になっているようなものですと、片手の指で間に合ってしまう位の作品数です。）
しかし、精通したかしないか、というショタだと、本作品のような精液を生産する家畜には向かないでしょう。（ショタが精通させられる、というのは、これはこれでひとつのジャンルとして確立しているようですが、これも本作品の目指すところとは方向性が少し異なります。）
本作品に出てくる主人公たちも、完全な成人男性とは言い難いところもありますが、さりとてショタというには、もう少し年齢が上になっており、少年を卒業して、性的に成熟した青年となりつつある年齢です。思春期はそろそろ終わりかけ、第二次性徴が完成した、いわゆる「ヤリたい盛り」で、寝ても覚めても考えることは射精することばかりかもしれません（サル状態）。しかし、当然ですが、まだ女性経験は皆無であり、それどころか手を握っただけで舞い上がってしまうウブな状況ですから、思春期特有の性的羞恥心もひとしおでしょう。それが徹底的に辱められ、日々訓練とか躾けという名の調教を受け続け、これでもかと言うような性的羞恥を味わわされる。自分とあまり年齢の違わない女性に性器をすべて曝け出し、貶されたり揶揄われながら、射精するまで弄り回される。性的興奮の状況を克明に観察・記録され、排泄から射精までを完全に管理され、見ている前で排泄や射精を強制される。（というか、それが普通の状態として慣らされる。）そして最後は性癖を完全に歪められて、女性に支配・管理されることを無上の喜びとするＭ奴隷に調教されてしまうストーリーを書いてみようと思い立ち、勢いに任せて書き殴ったものです。
このお話は、私が最初に書いた小説なので、かなり粗削りで拙いところが散見されます。ストーリー展開が強引かと思えば、やたらと説明的になって話が前に進まなかったりしていて、自分で読み返し

てみても汗顔の至りです。
しかし、こういうジャンルの小説は、あまりなかったと思いますので、このような趣味を同じくする、ごく一部の方には、楽しんで頂けるのではないかと思います。ニッチな作品であることは間違いありませんので、万人受けするとは考えられませんが、もしうまくハマるなら幸いです。

第1話　卒業式の朝

「これが牡（オス）牧場の所在地マップだ。」
「牡（オス）牧場の所在地って、公表されていないんだろう？・・・よくこういうの調べるよな？・・・その情熱に感心するよ。」
「そりゃぁやっぱり気になるだろうよ。お前だって興味あるだろう？」
「まあ、公表はされていないにしても、秘密だとか、調べると捕まるとか、そういった話は聞かないけど。・・・衛星写真やストリートビューでも探せるし、そもそも各県別に牧場が何カ所あるかは、県議会に提出された資料なんかに載っているから、住所がわからなくても、その気になって調べれば、案外わかるもんなんじゃないか？」
「だから、『その気になる』ってのが凄いって言ってるんだ。」
「で、それを調べて何になるんだ？・・・どうせ、どこに配属になるかはわからないんだぜ？」
「でも気になるじゃないか。」
「まるでどこの刑務所に収監されるか心配する犯罪者だなｗｗｗ」
「場所はどこでも構わないさ。それより待遇は完全に一緒なのかな。友達と一緒になれれば安心なんだけど・・・。」
「同じ地区とか学校からは、なるべくバラバラになるように配属されるって話だぜ。」
「ああ、そのほうが、知ってるヤツとかいなければ、周囲の眼を気にしなくて済むんで羞恥心が少ないからって、どこかで読んだ記憶がある。・・・ちょっと心細いのはあるけど、まあ一理あるな・・・。」
今日は僕たち練馬区立遼星中学校の卒業式だ。これからホームル

ームがあって、その後体育館に移動して卒業式となる。僕たちの中学は、東京23区といっても、学校の後ろの通りひとつ隔てた向こう側はもう埼玉県だ。周囲には、まだ農地だって少し残っているような地区にある。

女子は皆、進路が決まって、かなり弛緩した雰囲気なんだけど男子は皆、牧場役の話しかしない。

最初はひそひそと、仲の良い男子が二人三人と集まって声をひそめて話していたのに、いつの間にかクラス中は、この話題で持ちきりになってきた。一部、女子も参加して、いやぁあちこちで姦しいったらありゃしない。

「石山さぁ、アイツ牧場役やらないんだって？」

「え！・・・なんで？？」

「アイツさ、一応タレントじゃん？・・・最近仕事してないみたいだけど・・・。」

「あー……なんか小学生の頃、子役でテレビとか出てたって話だな？・・・でもチョイ役だろう？」

「そうそう。で、一応、事務所の方針で今年の牧場役は見送るんだってさ。」

「えー、それ意味あんの？・・・だって仕事して無いんでしょ？・・・今行っとくほうが得なんじゃないかなぁ？・・・単に見栄張りたいだけじゃないの？」

「かもな。マジで売れてるアイドルとかなら分かるけど・・・・・・。」

「まーでも、高卒で行くヤツだって結構いるじゃないか。政府の発表した数字だと、中卒組と高卒組の比率はそんなに変わらないみたいだぜ。・・・俺たちは高校受験と大学受験で、牧場役の特典をどっちで使うのが有利かを考えて、早い方が良いと思ったけど、目標とする高校や大学と自分の学力を考えて、高卒で行く奴がいたって別に不思議じゃないさ。」

「ちげーねー。俺なんか高校受験が思わしくなかったから、それなら早い方が良いと思って申請したけどさ、そこは個人の価値観とか損得とか、いろいろ事情があるんじゃねーか？」

　ウワサ好きのヤツらの会話が聞こえてくる。まあ、15歳で牧場役に行かないヤツだって勿論居るだろう。でも、公立中学から公立高校というルートを目指す普通の男子学生は、少なくとも僕の周囲では、ほとんど全員が中学卒業のタイミングで牧場役に行くから、他の選択肢を考えたこともなかった。法律上は15歳から30歳までの間で2年間を自由に選べるんだから、今が大切だと考えるヤツは遅らせる選択肢もあるのか。確か以前、中高一貫の私立校だと、高卒の18歳で行くのが普通だって聞いたことがある。

　でも、僕たちみたいに受験して高校に進学することを考えると、牧場役を終えた後の方が特典によって内申の評定が上がるから入試も楽になる。・・・まあ、それは大学受験も一緒か。高卒で行けば、統一試験が加算されるらしい。いや、逆に大学卒業までに牧場役経験者じゃなかったら、就職はかなり厳しくなるだろう。といって大学卒業の後で牧場役に行ってしまうと、今度は就職のとき新卒組との競争ということになる。…勿論、一定の配慮はしてくれるらしいけど、やはり普通は15歳か18歳のどっちかで行くのが良いんだろう。

　そう言えば、以前確かテレビで見たような記憶があるんだけど、15歳では性成熟が完成していないから、精液を充分に生産できないんで、18歳以上にすべきだっていう主張があるらしい。でも、そんなの絶対に嘘だ。僕たちの年齢で、精通していないヤツはいないし、それどころか毎日2度3度とオナニーするのも普通だ。皆、頭の中は射精のことで一杯なんだ。とにかく射精したくてたまらない。まさにオナニーを覚えたてのサル状態なんだから、この性欲と精力が有り余っている、第二次性徴真っ只中の僕たちが、時期的にも一番適している筈だ。15歳っていっても、早い奴はすぐ16歳

になるんだし、16歳から17歳にかけてなら、一番やりたい盛りじゃないか。

年齢が上がると、彼女ができる可能性もある。さすがに大卒位にならないと結婚はまだだろうけど、彼女がいればそっちに精液を飲ませるほうが優先だろうし、セックスだってするかもしれない。そう考えると、自分で虚しく処理する僕たちの年齢で行くのは、精液を無駄にしないためにも、理に適っている。

それに、牧場役を申請するとき、精液を提出させられる。あれでチェックしているから、申請が通ったということは、提供可能な精液生産ができるというお墨付きの筈だ。・・・西田なんて、クラスで一番小さくて顔つきもあどけないから、体操着で短パンだと、まるで小学生にしか見えないけど、あいつだって牧場役に行くんだ。今も他の奴らにまじって、牧場役の話に没頭している。確かあいつは、2年生の夏の林間学校では、まだ殆ど毛も生えていない子供ちんちんだったけど、せんだってトイレで並んで連れションしたときは、しっかり生え揃っていたし、チンポも随分でかくなっていた。

――ペリペリ。

そんなことを考えていたからだろうか。少し離れた席の女子が、精液パックを開ける音がやけに耳に響いてきた。見た目やサイズは、コーヒーに入れるクリームとかガムシロップのパックそっくりだ。彼女は中身がこぼれないように素早くパックの先端に口を付けると、ちゅるるっと一気に吸っていた。

幼い頃は、何かおいしいものなのかと思ったこともあったっけ。でも、一度、沙織に一口飲ませて貰って、ちっともおいしくない。それどころか、変な臭いがするどろっとした液体で、喉の奥に絡みついて、とても飲めたものじゃなかったっけ。・・・あんなものを毎日飲まないと早死にしてしまうなんて、女子は不便なんだなーと思った記憶がある。

その後、中1で精通して、自分のをなめてみたこともあるけど、

やはりおいしいとは到底思えなかった。

　でも、・・・・・ついにあれを生産する側に回るのか……。男子なら誰でも、自分が世のため人のためになることができる……。その最も簡単で最も重要な義務なんだと、そう何度も聞かされてきた。・・・小学校の道徳でもそう、中学校の保健体育でもそうだった。たいていは男女一緒の授業で、ちょっと恥ずかしかったけど、女子からの感謝と称賛のまなざしが、少しだけ誇らしくてくすぐったかった。・・・性教育の時間でも、精液には二つの役割がある、というような内容を教わった。だから精通した男子は、誰もが牧場役に行かなければならないんだと、くどいほど言われてきた。

　聞いた話だけど、高校に入ってからも、まだ済ませていない男子生徒は、必ず事前学習に参加させられるらしい。・・・体裁としては奉仕活動ということになっているけど、男と生まれたからには、女性を守らなければならない。それが男たる所以（ゆえん）なんだ・・・。これは皆の常識だ。

　特に辛いとか大変だとは聞かなかった。でも、これだけ繰り返し刷り込まれて、成人男子で牧場役を済ませていない人は０．１％程度だって聞かされると、逆にやらなければ村八分になって、社会から爪弾きにされてしまうに違いない。それに、父さんのように兵役に行くことと比べれば、はるかに楽で安全だと思う。兵役も同じ2年で、しかもあっちは給料が出るらしいけど、死ぬことだってある訳だし、わざわざ志願して兵役なんて・・・。

「おい、根本はどこの牧場になったんだ？」

「え？・・・あれって、事前には教えてくれないだろ？・・・当日、バスが着いたときに始めてわかるんじゃないの？」

「建前はそのとおりさ。そもそも、どこに居るのか、２年間は家族にも知らされない。ただ、申し込んで送られてきたカードに識別番号が印刷されていただろう？・・・あれによって、どこの牧場かがわかるらしいぜ。でもネットなんかに上げられると、一瞬で削除されちゃうんで、よほど運が良くないと情報は入手できないらしいけ

ど・・・。」
「その話は聞いたことがある。けど、2年終わって戻ってきた人から聞き取りでもすればともかく、行く前にどうやって確認するのかなぁ。牧場に入っちゃったら、もう2年間は絶対に出てくることができないんでしょう？」
「いや、それどころか、行った人の体験談だかを前に聞いたんだけど、道案内とか看板の類は一切見かけなかったそうだ。それに到着してもどこの施設か、まったく知らされないんで、結局最後までわからなかったらしいぜ。勿論、道中のバスの景色から、どっちの方面かはわかるんだろうけど・・・。まさか目隠しされたり、窓のないバスということもないだろう・・・。」
「何だか護送車で秘密基地に連れて行かれるとか、そんな雰囲気だな。すると、そこに入れられたら最後、身体改造手術をされて、洗脳されちまうんだろう？・・・俺たちゃ全員、悪の戦闘員ってわけだｗｗｗ」
「ちげーねー。ただし悪の戦闘員じゃなくて、性（セックス）の戦闘員の間違いじゃないか。性器を巨大化されて、チンポもキンタマもでっかくて性欲の固まりのような身体にされるんだって。」
「射精魔人セイヨクダーとか？・・・若い女の前で巨大チンポを振りかざして、思い切り精液をぶっかけるってかｗｗｗ」
「その話は俺も聞いたことがあるぞ。どんだけでっかくなるのかは個人差としても、精力剤とか各種ホルモンとか、媚薬なんかも投与されて、毎日とにかく多量の精液を射精できるように改良されるんだって話だ。」
「チンポがでっかくなるって話は俺も聞いたことがある。事実なら魅力的だよな。」
「でも、キンタマもでかくなるんだろう？・・・狸のキンタマみたいになっちゃったらどうしよう・・・。」
「まあ、何だって構わないさ。どこだって国が統一基準で運営している筈だから、そんなに変わりはないだろう。ただ、精力増強サプ

リとかは毎日飲まされるのかもな。」
「入っちゃえばどこも同じでしょう？・・・人里離れた僻地(へきち)にあることは一緒だし・・・。」
「だから、このマップなんだって。・・・自分が行くところの情報があれば、少しでも安心じゃないか。隣接県だけじゃなくて、そのさらに隣の県の施設までは配属されることがあるらしいから、東京だと茨城県や栃木県、長野県、静岡県なんかまで行くこともあるらしいぜ。」
「いや、東京で一番遠いのは、八丈島の施設だと思うぞ。あんなところに回されたら、それこそ二度と戻れないと絶望するんじゃないか？」
「島流しかよ。まるで江戸時代の罪人だなｗｗｗ」
「どうせ2年間は出てこれないんだ。俺はどこでも構わないさ。八丈島なら、さすがに飛行機で行くんだろう？・・・ちょっと愉しそうじゃないか。」
「そう言えば、これも確かネットに一瞬だけ出たって話だけど、送られてきた識別番号あるだろ？・・・あれ、実は配属先が入ってるんだって噂だぜ？」
「その可能性はあるよね。だって、あれ、最初の8桁が自分の生年月日で、次のＴＹＯってのは東京ってことでしょ。とすれば、その次か次の何桁かが、配属先とか、そういった属性だと思うよ。あるいは、ＴＹＯに対応していて、次のアルファベットが配属先の地域を表しているのかもしれないし・・・。」
「お前、自分の番号覚えているか？」
「えーっと、確か・・・。」
「そんなこと、どうでも良いだろうよ。それよりさ、どうやって精液を集めるんだろう？自分でシコって出すのかな。毎日、オナニー三昧(ざんまい)の生活ってことなの？オカズはどんなものが揃ってるのかなぁ？」
「いや、多分だけど、牛の乳を搾るみたいな筒をチンポに装着され

て、機械で搾られるみたいだぜ。よく評論家なんかが人権侵害だ、なんて騒いでいる位だから、多分無理矢理射精させられて辛いんだと思うよ。・・・そうじゃなかったら、あんなに繰り返し、男性の義務だなんて教育しないだろう。」
「噂なんだけどさ、牧場によるのか、それとも何かの条件によるのか知らないけどさ、機械で搾り取るんじゃなくて、看護婦さんみたいなお姉さんが手で射精させてくれることもあるらしいぜ。」
「そ、それって、どこで、どうやったら、そんな天国みたいな体験ができるんだよ！！」
「俺は逆に悪いほうの噂を聞いたぞ。・・・なんでも、規定量の精液を射精できないときは、ケツに電極を突っ込まれて、前立腺を電気刺激されるんだって。」
「それ、確か牛とか豚とかの人工授精のときに射精させる方法だよな。・・・パンダの人工授精でも使われたって、だいぶ昔のニュースで見たことがあるぞ。」
「そもそもケツを刺激されると、そんなに気持ちが良いのかな・・・？」
「ゲイ同士でトコロテンとかいう話も聞くし、それなりに気持ち良いんじゃないか？」
「前立腺を刺激すると、誰でも必ず射精反応が起きるって聞いたことがあるぞ。」
「確かに、エロマンガでは男でもバックを攻められて、快楽漬け・・・いわゆるメス落ちさせられちゃう話とか定番だよな。でも、どんな状況であっても、無理やり射精させられるのって、かなり辛いんじゃないか？」
「僕、そういうの、ちょっと興味ある？・・・かな・・・？」
「ここにドMが一人居たぞ！！」
　さっきから西田が、凄いことを言い続けている。小学生にしか見えないあの顔で、あの体型で、そんなエロい話題の中心になってい

るなんて、テレビに出ていた評論家達はどう思うんだろう。
　こんな話をずっと聞かされていると、なんかずっと先の話だと思っていたけど、もう来週には出発するんだっていう意識が高まってきた。といっても、まだ実感があまり湧かないし、よく言われるような覚悟など、どこにもない。多分、周りで騒いでいる連中も、実際のところ、僕と似たような状況なんじゃないかな。
　――ガラガラッ。
　僕の長い考え事は、担任が教室に入って来た音で終了した。

―――――――――――――――
――――――――――――――

「・・・じゃあ、これで中学最期のホームルームを終わります。これから体育館で卒業式の式次第があって、その後、皆さんは一度またここに戻ってきます。そのとき、自分の荷物をとりまとめておいて下さい。在校生が校門のところに整列するのを待って、蛍の光が流れますので、そのメロディに合わせて、荷物を全部持って、在校生の拍手に送られて校門から出て行って下さい。もう戻らないので、忘れ物はしないで下さい。後ろのロッカーとか、下駄箱の中・・・毎年、上履きとか体育館用の運動靴を忘れる人がいるので、気をつけて下さい。・・・それと、壁に貼ってある皆さんの作品も、剥がして持って帰りましょう。」
「それでは、皆さん、これでお別れです。私はもう式次第が終わったら、他の先生と一緒に校門のところに直接整列してしまいますので、皆さんとこのクラスで話すのはこれが最期です。この1年間、皆さんと過ごして大変に愉しい毎日でした。来月から進学して高校生活を始める人、牧場役に行く人、それぞれの進路は様々ですが、どうか健康で、充実した人生を過ごして下さい。辛いこと、苦しいことも勿論あるかもしれませんが、皆さんの未来が明るく輝いてく

れますよう、心からお祈りします。さようなら。お元気で！」

第2話　出発（前書き）

ここまでは、まだ牡牧場に到着する前の段階の話です。

牧場役に行くときは、送られてきたカード2枚以外は、何も持たなくて良い。案内書にもそう書いてあるし、僕たちの間でも、半ば常識となっている。といっても、別に何を持って行っても構わないんだけど、荷物は最初の受付で全部預けてしまい、帰宅する日まで手にすることはできないので、持って行っても意味はないと書いてあった。多分、衣食住はすべて国が面倒を見ますということだろうから、帰りの交通費として小銭入れをポケットに入れて、あとは身ひとつで近くの市民ホールの駐車場に行くだけだ。そこで各地の牧場行きのバスに乗り込む。同じ地域や学校からは、なるべくかぶらないように配属されるから、駐車場にはたくさんのバスが来るらしい。たぶん知ってるヤツは殆ど一緒にならないだろう。

『・・・牧場役は明らかな人権侵害であるとの声が年々増えて来たように感じられます。また諸外国ではこのような制度を廃止している国も増えているとのことで……えー、石井先生、どう思われますか？』

『考え違いしないで下さい。牧場役は男子の義務です。確かに2年間というのは大きな負担です。しかし、たった2年の奉仕で国民の残り半分――つまり女性の方々を生涯に亙（わた）って救うことができるんですよ。こんなに素晴らしいことがあるでしょうか。誰も無理なことを強制しているわけではありません。ただ、歳をとってしまったら、できなくなります。できる人ができるときにできることをやる。社会というのは、そうやって皆が助け合って生きていくものじゃありませんか？・・・それに兵役と違って命の危険もまず考えられません。男子の2年で、女子の一生分の命を支えることになる・・・・・。これくらい出来なくて何が日本男児ですか！』

『付け加えれば、多少辛くても、苦労をしてくるのは、精神を鍛えて人間として一回り大きく成長する効果があります。最近の若い者は、などと言われて久しいですが、牧場役に行ってきた若者は、皆、鍛えられた大人の顔つきになって戻ってきます。兵役もそうですけど、若いときの苦労は買ってでもするべきなんです。』

『そうです。毎日、何度も射精しなければならないのは苦痛だという意見を聞いたことがありますが、30歳を過ぎればともかく、15歳から20台前半ですよ。ヤリたい盛りじゃありませんか。そもそも、健康な男の子なら毎日のように自分で何度も出しているのが普通でしょう。牧場役に行ってオナ（ピー‥放送倫理規制）三昧、快楽漬けの生活の、どこが辛いんですか？』

『いや、しかしですね。問題なのはその方法論であって、無理やり機械的に搾り採られるんですよ。思春期の青少年にとっては、羞恥心だってひとしおでしょう。こんな人権を著しく侵害するような運営方法がこの21世紀も終わろうという時代にですね・・・。』

『では、具体的にどうすれば良いのか、是非ともお聞かせ下さい。方法論と仰(おっしゃ)るのでしたら、その方法を示して頂いて、その上で議論しましょう。単に批判するだけでは、子供の戯(ざ)れ言(ごと)にしか聞こえませんよ。』

　テレビからアナウンサーとコメンテーターがやり取りするうるさい声が聞こえてくる。毎年この時期になると現れる風物詩みたいなものだ。

　牧場役の入所の時期になると人権団体が騒いで、それを朝のニュースが批判する。自分の番になっても、特に感想は変わらなかった。

「お兄ちゃん、牧場役って、苦しくて辛いの？」

「そんなこともないと思うけど？・・・何故そう思うの？」

「クラスで友達が話していたんだ。苦しくて辛いっていう子と、すごく気持ちが良いんだっていう子と、両方あって、言い争っていたんだ。」

「やったことないから、行ってみないとわからないよ。」

「気持ちが良いって、どういうこと？・・・みっちゃんやよしこちゃんは、精液を出すのは気持ちが良いことだって言ってるけど、なぎさちゃんは、無理矢理射精させられるのは苦しくて辛いんだって言ってて、あたしたちのクラスだと、まだ男の子は誰も精通していないのか、この話に回答してくれる子はいないのよ。」
「性教育の授業は小４からだっけ？・・・沙織はまだ小２だから、ちょっと早いかな？」
「沙織はまだ射精なんて知らなくても良いの！・・・いずれ性教育の授業で、全部教えて貰える筈だから、今はただ、崇史達が頑張ってくれるから、あたしもあなたも、こうして普通に生きていられることに感謝すれば良いのよ。」
「わかってる。それは何度も聞いているから・・・。お兄ちゃん、ありがとう。」
「うん、沙織のクラスの男の子も、いずれ頑張って貰うことになるんだから、友達の男の子にも、よく感謝するんだよ。」

――――――――――――――――――――

「じゃ、いってくる。」
「おぅ、しっかり務めてこいよ。まあ、俺が行った兵役よりは楽だろう。」
「うぅっ、気をつけてね。・・・連絡してね。」
「連絡はできないよ。それは案内にも書いてあるし・・・。」
　父さんはこういう時、決して感傷的にならない。わざと、という訳ではなさそうだけど、飄々（ひょうひょう）とした風体だ。対して母さんは感情的ですぐ涙ぐむ。
「危険なことはないから、別に大丈夫だよ。・・・じゃあね。」
　あまり長引かせてもいけないし、そろそろ急がないと9時の集合には間に合わなくなると思い、僕も軽い感じで玄関のドアを閉めた。

……父さんに似たのかもしれない。
　区民ホールの駐車場には既に大勢の人が集まっていた。牧場役に行く本人はもちろんのこと、その家族や友人、後輩、そして恋人達もだ。
　僕は恥ずかしいから両親には家で見送ってくれと言ったが、４割くらいの人は親も区民ホールに来ていた。
「……あのっ、磯部くんっ！」
「え！？」
　僕は突然後ろから話し掛けられて思わず声を上げて驚いてしまった。
「あの……。いってらっしゃい……。」
　居たのは同級生の塚田さんだった。　まさか自分を見送りに来てくれる女の子がいるなんて、まったく思わなかったので言葉が出てこない。
「あの……大丈夫？」
　塚田さんが心配そうな目で、僕の顔を覗き込むように見上げる。眼鏡の奥の目がすごく可愛い。肩までの綺麗な髪も可愛らしくて、僕はドギマギして言った。
「う、うん……あのー、うん、がんばってくるよ。」
「うん……がんばってね」
　会話が途切れる。塚田さんとは委員会の活動で一緒だったし、何度か放課後に委員会メンバー全員で連れ立ってファミレスに行ったこともあった。打ち上げで一度、男女二人ずつの４人組で休日にカラオケに行ったこともあった。・・・ダブルデート？・・・なんて、密かに思ったのはナイショだ・・・。
　……塚田さんとは、それ以外でも、ちょっと良い雰囲気になったこともあった。一緒に委員会の仕事をしているんだ。どんな小さなことでも——それこそシャーペンを拾ってくれたとか、そんな程度でも意識してしまう年頃なんだ。あのときは、塚田さんの手に僕の

手が触れて、その晩は何度抜いたことだろう・・・。夏休みの頃までは、僕も塚田さんのことをバリバリに意識していた。
……でも、結局女子は受験勉強で忙しくなって、そのまま試験の季節に突入して、登校する日も少なくなって……何とは言わないけれど疎遠になっていた。だから、もうとっくに終わったと思っていた。
ちょっとした淡い恋心？・・・とすら言えない、中学校での日常の思い出のひとつ。・・・そんなところだった筈だ。僕はシドロモドロになって、何とか言葉をつないだ。
「あ、あのっ、見送り……ありがと。・・・来てくれると思わなくて。」
「う、うんっ。どういたしまして……？・・・えへへ、なんか恥ずかしかったけど、その……ずっと会えなくなっちゃうから。」
「そんな……。一生の別れじゃないじゃん。・・・たった2年だし。」
「そう……そうだよね。でも……男の子は、そのっ、無理やり搾られるの、辛いって聞いたから……。」
「でも、みんなやってるんだし、僕だけって訳じゃないから……。」
「う、うん。そうだよね。あの……また、帰ってきたら遊びに行こうね？」
「ああ、行こう。その……僕も、塚田さんが待っててくれると思ったら……あー、その……がんばれる・・・、かな……。」
あまりに恥ずかしいセリフだと思って、言葉がしりすぼみになってしまう。
「うんっ、そうだよ！・・・待ってるからね！・・・早く帰ってきてね！」
自分では恥ずかしすぎると思ったけれど、塚田さんは素直に喜んでくれた。
「あはは、自分でどうにかは出来ないよ。みんな2年だから……」
「あっ、あのっ、念のため・・・なんだけど、カード番号控えても

良い？」
「これ控えても意味があるのかなぁ？・・・連絡は取れないんだし・・・。」
「そっ、そのっ、そのカード、磯部君の番号だから、携帯の待ち受け画面にしようかと思ってて・・・・・・。でっ、できたらっ、磯部君の顔写真もっ、・・・そのっ、・・・だめ？」
「勿論、構わないよ。じゃ、こうして顔のところに持ってるから、写真撮ってよ。」
そんな何でもないことを話していると、駐車所の入り口からバスが何台も連なって次々と入ってくるのが見えた。
「おーい！・・・集合ーー！！」
誰かが叫んでいる。

「あの……もう行かなきゃ。」
「……うん。そだね。」
「ありがとう。見送り。本当に嬉しかった。」
「うん……えへへ、悩んだけど、来て良かった。」
「……うん。僕も、……会えて良かった。……じゃあ。」
「うん。ばいばいっ。」
塚田さんがその小さな手を胸の前で振る。
「磯部君！」
「？」
「そのっ、帰って来たら、あたし・・・、磯部君の……。」
「えっ？……何？！！」
歩きだした瞬間、塚田さんが何かを言いかけた。何か、すごく大事なことのような気がしたけど、それぞれのバスに向かう人波に押されて、よく聞き取れないまま、僕は何度も振り返り、何度も手を振り返しながらバスの方へと向かった。でも……小さな塚田さんは、すぐに人波に紛(まぎ)れて見えなくなってしまった。
僕は、帰って来たとき、もし塚田さんがまた迎えに来てくれたな

ら、どんなに恥ずかしくても、『僕のを飲んでくれますか？』って絶対に聞いてみようという気持ちになっていた。（注１）

―――

「カードの裏側の色のバスに向かって下さい！！・・・カードの裏側の色は、３０色あります！・・・繰り返します・・・カードの裏側の色のバスに向かって下さい！！」

係の人が声を枯らして、拡声器で叫んでいる。これだけを持ってくるようにと言われた2枚のカード、表側には、識別番号が中央に大きく書かれたものと、ブランクで番号が隅に小さく書かれたものの2枚で、裏側は僕の場合、両方とも水色だった。
バスそのものは全部同じライトグレーの塗装だけど、前後の窓と乗り口の部分に大きな色紙が掲げてあり、水色のバスは左から3台目だった。バスに乗るとき、乗り口の横に立っている係のお姉さんにカードを見せて、そのまま乗り込む。お姉さんはタブレットに僕のカードをかざして、チェックをしているようだった。
１０分程で、僕たちのバスは全員が乗ったらしく、ドアを締めてそのまま数分待機していた。やがて駐車場の前のほうにいた係員が黄色い旗をさっと振ると、バスは順番に動き出した。見ると、広場に残っているのは見送りの人ばかりで、牧場役に行くような雰囲気の若い男性は、全員乗り込んだんだろう、もう一人も残っていなかった。

「皆さん、本日は牧場役にご参加頂き、ありがとうございます。全女性を代表して、心からお礼を申し上げます。」
「これから2年間、皆さんは精液牧場に配属となり、精液の生産に従事して頂きます。今更ではありますが、皆さんの尊い奉仕により、

私たち女性はこのようにして普通の生活を送ることができているのです。私は今年で２８歳になりますが、もし精液を毎日飲み続けなかったら、私の身体年齢は１４０歳となってしまいます。つまり、どう考えても、もう私がここに生きていることはできないでしょう。私が普通の２８歳として、皆さんの前にこうして生きていられるのは、すべて皆さんの提供してくださった精液を、毎日、安価で安定して飲める環境があるからこそなのです。どれほど感謝しても、感謝しきれるものではありません。」

「そのような、男性の皆さんにしかできない崇高な奉仕活動を、これから皆さんにやって頂くことになるわけです。」

「これは憲法にも書かれた、成人男性の皆さんの義務ですが、仮にやらなくても罰則規定はありません。つまり、精神論としては義務であっても、法律論としてはボランタリーな奉仕活動という位置付けです。そのボランタリーな奉仕活動に、誰に強制された訳でもなく、自らの意志として参加して頂く皆さんには、本当に頭が下がります。」

「牧場役では、精液を安価で安定的に生産するために、いろいろな決まりがありますので、皆さんの自由を制限させて頂くことになるかもしれませんし、何より皆さんが良質な精液を少しでも沢山生産して頂くために、皆さんの身体に負担をかけるようなこともあるかと思います。しかし、ボランタリーな奉仕活動である牧場役に、自らの意志によって参加することを決意して頂いた皆さんであれば、必ずや頑張って耐えて頂けると確信しています。」

「皆さんは同じ日に、同じ地区から同じ牧場に配属になったグループですので、丁度2年後に、またこの同じメンバーで、この同じ水色バスに乗って、先程の区民ホールまで戻ることになります。どうか皆さん、その日まで、2年間の牧場役を頑張ってきて下さい。２年間は他のことを一切考えることなく、精液を提供することだけを考えて過ごして下さい。皆さんの健康を心からお祈り申し上げます。

・・・ありがとうございました。」

バスが走り出すと、一緒に乗り込んできたお姉さんが型通りと思われる挨拶をした。月並みな挨拶だけど、こういう話を聞かされると、『よし、辛くても頑張るんだ！』・・・という気力が漲ってくるから不思議だ。バスは３０人位乗れるマイクロバスで、空席が何席かあったから、乗っているのは２５名位だろうか。きっと、それぞれの牡牧場に、あちこちから・・・東京だけでなく、近県も含めて・・・バスが集まって来るんだろう。

僕たちのバスは、高速に乗って、環状線から向かったのは、どうやら常磐道らしかった。とすると、茨城県の牧場だろうか。

「では、ここで休憩と、お昼を取ることにします。カードを見せると、レストランでも軽食でも、全部無料で何でも食べられますので、お好きなものをお好きなだけどうぞ。・・・牧場に行くとゼリー状の合成食となります。栄養価は高くとも、味の保障はありませんし、飽きてしまうかもしれません。皆さんが普通の食事を採れるのは、ここが最期になりますので、サービスエリアのレストラン程度で申し訳ありませんが、心ゆくまでお食事を堪能してきて下さい。なお、出発は1時間後の１２時丁度となります。遅れないようにバスに戻って下さい。」

「売店も無料ですか？」

「売店も全品無料ですが、ここを出発すると1時間程度で到着です。牧場には何も持ち込めませんので、今ここで食べる分か、バスの中で食べきれる分しか購入しないで下さい。」

２時間弱でサービスエリアに立ち寄った。ここでトイレ休憩かと思ったら、昼食らしい。でも、今、初めて聞いたけど、そうか、牧場では食事は合成食なのか。きっとウィ●ー・ｉｎ・ゼリーのようなものなんだろう。２年間、ゼリーしか食べられないのは、ちょっとガッカリだな。でも食べたことはないけど、最先端の宇宙食がそ

んなものだって聞いたことがある。きっと栄養的な配慮とか、保存とかを考えると、チューブ入りの流動食は仕方がないのかもしれない。火星に行く宇宙飛行士にでもなったつもりで我慢するとして、ここで沢山食べておこう。（注2）

そんなことを考えながら、食べ盛りの僕はレストランで、酢豚の中華A定食とタンメン、それにいちごパフェを注文した。隣のテーブルからは、『これがシャバで最後の食事かよ~。』、といった会話が聞こえてきて、僕もしっかり味わって食べようと、ちょっとだけ感傷的になって来た・・・・・。

第2話　出発（後書き）

（注1）この時代、「僕の精液を飲んでくれますか」「僕の精液を飲んで下さい」または「あなたの精液を飲ませて下さい」「あなたの精液が飲みたい」といった言葉は、男女どちらからであってもお付き合いを告白する言葉として一般的に定着しており、シチュエーションによってはプロポーズの言葉として用いられることもあるようです。（「あなたの精液を一生飲みたい・・・。」「一生、僕の精液を飲ませてあげる。」等々）

（注2）この時代、既に人類を火星に送り込むことには成功しています。大出力のイオンロケットエンジンを組み合わせ、片道2年弱の宇宙航行により火星に着陸し、さまざまな調査活動を行って、また2年かかって地球に戻って来る「火星エックス計画」（Ｍａｒｓ　Ｘ　Ｐｒｏｊｅｃｔ）は、２０年前に亡くなった天才的カリスマ経営者Ｅ．Ｍ氏の遺志を継いで、彼が築いた世界一の電気自動車メーカーによって、既に第２３号まで成功していました。

第3話　牧場到着（前書き）

ようやく牧場に到着しました。
ここからは主人公の一人称視点で話が進むことになります。

第３話　牧場到着

　バスはサービスエリアからさらに１５分程走ると、高速を降りて一般道を少し走り、次第にクネクネした細い林道のようなところを登って行った。対向車はまったく来ない。いつの間にか、気がつくと僕たちのバスの前後に、同じようなバスが何台も連なって走っている。他の地区や学区から集まってきたバスが、だいたい同じ時間に到着するように組まれているんだろう。

　やがて、係の人がさっき話していたとおり、小一時間でフェンスが延々と連なる目的地らしき施設に到着した。フェンスは金網にプラスチック板で目隠しをした簡易なもので、5メートル程度の間隔で2重になっているようだけど、刑務所のような高いコンクリートフェンスじゃなかったことに、ちょっと安堵した。でも、入り口にある門は何トンもありそうな金属製で、モーターでスライドさせて開け閉めするらしく、これを閉めてしまうと戦車でも持ってこない限り、門を破ることは難しそうだ。まあ、このバスに乗っている限り、門の出入りはフリーパスみたいだし、どのみち僕らはこれから2年間、この施設から出ることはないらしいけど・・・。やっぱり、「牧場役」という言葉からして、兵役とか懲役のようなものなのかな・・・。ただでさえ心細いのに、不安が次第に広がってくる。

　そもそも、ここはどこなんだろう。フェンスにも建物にも案内標識の類が何もついていない。唯一、門のところにＩＨＬＥＦＥＳＣと刻まれたプレートが嵌めてあった。さっきの昼食を摂ったＳＡは友部と書いてあった。友部っていうのは、確か水戸の少し手前の筈だから、そこからさらに北に走ったここは、日立の近くなんだろうか？・・・バスが門を通過するとき、一瞬だけプレートの下段に、英文で小さく記載されていた文字が見えた。Ｉｂａｒａｋｉ　ｂｕｒｅａｕ　Ｈｉｔａｃｈｉ　Ｌｉｖｅｓｔｏｃｋ　Ｅｘｐｅｒｉｍ

ental Farm for Ejaculation and Semen Collection これが正式名称らしい。やっぱり茨城県北部の日立の辺りみたいだ。・・・随分、遠くに連れてこられちゃった。ま、八丈島とかに連れて行かれるよりはマシか・・・。

　門を入ったところは大きな駐車場で、広大な敷地が背の高いフェンスで覆われていることが分かる。その中に建っているのは白い壁のこれまた巨大な建物だ。ざっと見ると、平屋建てで、ごく一部のみ2階部分がついている。ただ不思議なことに、窓があるのは2階部分だけで、1階部分には窓が一切ない。学校や病院とは異なる外観で、いろいろと考えていたら、これは工場なんかの外見とそっくりなことに気付いた。確かにここは飲用精液という健康食品（医薬品？・・・サプリメント？）を生産する工場だから、このような外見になるのかな・・・。

　そんなことを考えながら、少しそのまま待機させられていたら、やがて全部のバスが揃ったのか、門がゆっくりと閉まり、そこで初めてバスがエンジンを切ってドアを開けた。ざっと見るに同じようなバスが、出発したときと同程度の、３０台程も並んでいた。きっと、あちこちから集まってきたに違いない。バスからは僕たちと同じような年齢か、または少し年上（多分だけど高卒組）と見える年齢の男子がぞろぞろと降りてくる。このバスは３０人程度が乗れるようなので、単純計算で約８５０人程度が集まったということだろうか。これが1日の受け入れ人数とすると、集合は6日間に分けて行われるので、受け入れ人数合計で約5千人ちょっと、これが1年分だから、この牧場の合計収容人数は2倍の1万人程度となる。なるほど巨大な敷地が必要な訳だ。

　ぞろぞろと入り口へと移動させられると、ここでようやく「茨城搾精局　日立搾精畜実験射精牧場」という立派なプレートがはまっているのが目に入った。こうして目にすると更に実感が湧いてくる。牧場役は本来、自分が所属する県の牧場に配属されるのが原則だと

前に聞いたけど、広大な敷地が必要になる精液牧場において、特に首都圏とか関西圏の人口を考えると、東京や大阪は隣どころか２つ隣の県まで配属先があり得るという噂は、やはり事実だった。
　といっても、都内でも奥多摩とか青梅とか、あるいは神奈川や千葉でも丹沢とか外房とかだったら、距離的にもアクセスという意味でも、ここと大差ないか。
　関西圏だと、どういったところに連れて行かれるんだろう・・・。紀伊半島とか四国とかなんだろうか・・・。

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーー

白いビルの入り口を入ると、中は巨大な病院のような見た目をしていた。白い壁や、リノリュームの床などはとても病院ぽかった。指示に従い、靴は入り口でビニール袋に入れて、各自で持って上がる。
　入り口ホール右手の渡り廊下を進むと、やや大きな部屋にずらっとベンチが並んでいて、前から順番に腰掛けている。正面と右手の壁には、牡畜登録室と書かれた部屋がたくさん並んでいた。係の女の人が「前のドアが開いたら、どこでも良いので登録室に入ってくださーい。」「入ってきた順番で、どんどんお願いしまーす。」と大きな声で指示を繰り返している。
　係員は見たところ全員女の人のようだった。全員が同じ制服を着ている。半袖の薄い水色をした、作業着のような服で、やたらとポケットが多い。下半身も同じ生地の、ややゆったり目のズボンで、こちらもポケットが多い作業着のようだ。全員が茶色い革のベルトをしていて、そのベルトには、何やら警棒のようなものとか、その他にも用途のわからない道具のようなものがぶら下がっている。工場で働く人の作業着、と、言えなくもないけど、雰囲気とすれば装備を身につけた自衛隊員や警察官、または駅員さんや警備員さんに

近い。
僕はおもわずガン見してしまったけど、別に拳銃とかスタンガンとか、そういった武器を持っている訳ではなさそうだ。でも、あの腰に下げた警棒のような、・・・いや、あれは警棒よりは、しなやかな・・・、繊維を編んだように見えるものは、いったい何だろう。縄にも見えるけど、ちょっと太いし短いし・・・。
それにしても……ここに働いているお姉さんたち、全員僕より少し年齢が上の、18歳位から、20台前半位の人ばかりだけど、皆、揃ってゆったり目の制服でも隠しきれない立派な胸をしている。顔も美人揃いで、少しキツい目をした人も中にはいるけど、意地悪とか冷たいという雰囲気ではなく、むしろクールで仕事ができるキャリアウーマンという感じだ。身分は公務員の筈なんだけど、こういうところで働くのって、看護師のような資格が要るんだろうか？
いずれ、あの人たちに、射精した精液を渡すのかな・・・。あの人たちの見ている前で射精しなきゃいけないんだろうか・・・。ちょっと（いや、かなり）恥ずかしいな・・・。それとも、まさか、あの人たちが射精を手伝ってくれるとか・・・。
悲しいかな、こんな状況にあっても僕の男としての本能は、周囲の女性係員さんを目で追ってしまっていた。

入ってきた順番に、前からベンチに詰めて腰掛けていた同期（？）の人たちが、次々と開いたドアに消えていき、とうとう自分の番がやってきた。どこでも良いと言われたことからして、同じ部屋がいくつも並んでいて、同時並行で受付をしているんだろう。ドアには、「牡畜登録室」と書いてあった。
中に入ると簡素な長机とパイプ椅子が置いてあり、向かい合わせになってPCを載せたもう一つの長机には、僕と向き合う位置に、また別の女性係員さんが座っていた。この係員さんは、他の人と同じような制服だけど、上に濃紺のジャケットを羽織っていて、ジャケットの胸には何やらバッジのようなものもついている。映画で見

た軍人さんみたいな派手なものではないけど、やっぱり何か威厳を感じる。この人は上司（上官？）のような立場の係員さんなのだろう。前下がりに切りそろえられたショートカットの黒い髪の毛と、キリッとした美しい顔がさらにその印象を強めていた。そういう眼で見ると、年齢も少し上みたいだ。２０台後半といったところだろうか？

それ以外に、さっき外で案内していた係員さんと同じ雰囲気で、同じ制服を着た若い係員さんが2名、座っている年配の係員さんの両側に立っている。この2人もかなりの美人で、仕事のできるキャリアウーマンといった雰囲気だけど、そう感じるのは制服の所為なのかもしれない。（ゆったりした制服なので、あまり目立たないけど、胸もかなり大きそうだ、などと、僕はまだそんなことを考えていた。）

「送られてきたカードを2枚ともこちらに出して下さい。」

パイプ椅子に座ると、そのように告げられたのでカードを渡すと、それを非接触式読取機の上に置いて、ノートＰＣの画面を見ながら1枚の紙を印刷して僕の前に置いた。

「この書類を読んで、名前など間違いがないことを確認したら、裏側の最期の部分に署名をして、その横に拇印を押捺してください。」

それだけ言うと、上官っぽい係員さんは、ただじっと黙ってこちらを見ている。

『人権返納同意書』　紙にはそう書かれていた。

『この牧場の中にあっては、下記搾精対象者（以下、「牡畜」という。）は日本国及び各地方自治体の定める法令・条例・その他法規範の一切から対象外となり、精液牧場役法のみが適用される。これにより牡畜は、・・・人権を始めとする個人の権利一切を一時的に放棄する。・・・これらの権利は、別に定める退役の日まで、・・・所属搾精局及び局員に・・・委任預託される。これに伴い、牡畜は・

・・精液牧場役法以外の犯罪を適用されず、・・・その他、法令違反による刑罰等も課されない。』

『牡畜にはプライバシーを認めない。牧場内における牡畜の行動は・・・24時間常に監視され、記録される。また、記録された牡畜の身体データ等（数値データ、映像データ、その他一切の個人データを含む）は・・・すべて公開され、今後の各種改善等に利用される。牡畜には、・・・。』

『牡畜は、高品質の精液を、可能な限り大量に射精する義務がある。このため、精液牧場役法の定めるところに従い、牧場内の規則に従うとともに、この義務を全うするために必要なあらゆる身体処置を受けることを承諾する。この処置には非可逆的なものが含まれるが、牡畜はこの身体処置について、何ら補償あるいは賠償を求めることはできない。また牡畜は・・・牧場役終了後に必ずカウンセリングを受け、・・・影響調査に協力することとし、必要に応じて追加処置を受けることに同意する。ただし・・・。』

　同意書には恐ろしい文字が沢山並んでいた。事前学習で漠然とは教わっていたけど、実際にその字面を見ると怖くなってくる。……というか、事前学習でぼんやりとしか学習しなかったのは、僕たちに恐怖心や拒否感を与えないためだったんじゃないだろうか、とすら思えてくる。・・・騙（だま）された、とは思いたくないけど、やはり大きい声では言えないような、辛い強制とかもあるんだろう・・・。ざっと目を走らせただけでも、不安がむくむくと湧いてくる。

　特に下のほうに書いてある『身体処置』とか『非可逆的』とか、怖そうな文字は何を指すんだろう？・・・クラスの奴らが話していたとおり、身体改造手術とかされちゃうんだろうか。それとも単に、クラスで誰かが話していた、チンポを大きくする薬とかのことなのかな・・・。僕はチンポのサイズが小さめだから、コンプレックスがある。もし、それが少しでも大きくなれるなら・・・。

　そんなことを考えながら、目の前の上官っぽい係員さんを見たけ

ど、無表情に僕のことをじっと見ているだけで、とても何かを質問できる雰囲気ではない。いや、そもそも、この状況で女性の係員さんに、チンポのサイズの話なんて、できるわけがない。しかも、僕が書類を読んでいる間に、脇に立っていた二人の係員さんが、いつの間にか僕の後側に回り込んで、僕の肩の両隣に立っていた。
僕は3人の女性係員さんに囲まれて、言いようのない威圧感をひしひしと感じた。

でも、いくら考えたところで、ここで僕が取れる選択肢はひとつだけだ。牧場役に来ると決めた時点で――いや、男として日本に生まれた時点で、この同意書に署名することは確定なんだ。署名なんて、単なる法律上の形式でしかない。
それと、この紙には僕の住所氏名などが既に印刷されていて、察するにあのカードに予め登録されているものが印刷されただけなんだろう。つまり、もう僕には逃げ道がない。そう考えれば、これはしょせん、決まっていることを追認するための手続なんだ。僕は牧場役を受けると決心して、どんなに辛くても2年間、男子の義務を果たすと自分で決めたんだ。だったら、もう何も迷うことも悩むこともない。男なら誰だってやっていることなんだ・・・。そう覚悟を決めて、机のペンを取った。

ペンを置き、右手の親指を朱肉につけ、署名の右側に押しつけた。すると、右側の係員さんが同意書を回収し、・・・そして、署名と拇印を確認した瞬間、空気が変わった気がした。
「貴重品と、眼鏡やコンタクト、腕時計、指輪、アクセサリー、入れ歯、その他身につけているものは、すべて外してカゴの中のビニール袋に入れなさい。」
左側の係員さんが、斜め後ろに重ねてあった、使い古しの買い物カゴのようなものを、長机の上に粗雑に置いた。
僕は健眼だし、アクセサリーなどもつけていないので、帰りのバ

ス代と思ってポケットに入れてきた小銭入れと腕時計を外して、透明のビニール袋に入れた。
「では、衣服をすべて脱ぎ、同じカゴに入れなさい。靴も袋ごと一緒に入れなさい。」
「えっ？……」
「聞こえなかったのか？・・・着ているものをすべて脱衣するんだ。早くしろ！」
「あの……ここでですか？」
「おいっ！……いきなり命令違反か？・・・今オマエがサインしたものはなんだ？・・・人権返納同意書って、そう書いてあったよな？・・・もうオマエは搾精用の牡畜（オスちく）になったんだ。プライバシーは一切存在しないし、全裸になっても公然わいせつ罪も適用されない。家畜が裸で性器を晒（さら）しているのは普通のことだ。さっさとやれ。」
「あっ……あのっ・・・・・・そのっ……いやっ、そのーっ・・・。」
　あまりのことに僕が混乱したままでいると、係員さんが急に不機嫌で面倒臭そうな顔になり、脇に待機していた部下のような係員さん二人に声を掛けた。
「おい、まただ。やれ！」
　僕の両脇に控えていた二人が僕の両腕を掴（つか）んで無理やりパイプ椅子から立たせた。僕は突然の事態に、頭が考えることを拒否してしまい、全然別のこと・・・両方の二の腕に当たる二人の係員さんの胸の感触に驚いたりしていた。
　上官の係員さんは、椅子に座ったまま僕を睨（にら）みつけている。さっき部屋に入ったときとは完全に別人に感じる――目つきが全く変わってしまった。

　さすがに暴れたりはしなかった。いや、できなかった。・・・ただただ、為す術もないまま一瞬でシャツが引き剥がされ、靴下を外され、一切の躊躇（ちゅうちょ）や感情などないままズボンとトランクスを一緒に、

一気に引き下ろされた。力任せに引き下ろされるとき、トランクスのウエストのゴムに弾かれて、ペニスが大きく揺れ、半勃（はんだ）ちになった。が、三人とも、そんなことはまったく意に介していないように見えた。

「まったく……今日はオマエで二人目だ。年々質が落ちてる。脱衣ぐらい一人で出来ないのか？・・・ここは保育園じゃないんだぞ。お着替えから教えるなんていい加減にしろ！」
組んだ足の上に頬杖（ほおづえ）をついて、上官係員の人が凄い目つきで睨みつけていた。
「す、すみません……。」
「主任。仕方ありませんよ。こいつらは搾精用の牡畜（オスちく）なんです。一応、言葉はわかるにしても、家畜相手に指示に従わないと怒るのは、ちょっと無理があるんじゃないですか？」
「むっ。・・・そう言えばそうだな。私が間違っていた。お前たちはもう人間じゃない。家畜なんだ。家畜を躾（しつ）けるには、これが一番だ。」
バシッ！
「ひっ！」
主任と呼ばれた上官が、腰に付けていた警棒くらいの長さの、先が少し大きな楕円に編んだ革製の鞭（むち）（今わかった！・・・あれは鞭（むち）だったんだ！！）で長机の端を叩くと、長机の表面が削れて、細かい木片が少し飛び散った。あんなので叩かれたら、きっと皮膚が裂けちゃう。
もともと反抗する気はなかったけど、この一撃で心がポッキリと折れてしまった。僕が全裸で呆然と立ち尽くしていると、どこか廊下の向こうのほうから、微（かす）かな声で、悲鳴が聞こえた。遠くなのか、近くなのかは、さっぱりわからない。けど、今、机を叩いた音よりは甲高い、ピシーっというような、まさに鞭（むち）で皮膚を叩くような音と被って、ギャーッというような悲鳴が聞こえ、それが少し間を置

いて、また違った方角からもう一度聞こえた。

「どこか別の部屋で逆らった牡畜（オスちく）が出たようですね。」

「……そのようだな。・・・まあいい。こいつも反抗したら直ちに鞭（むち）をくれてやれ。なんだったら、その股間の貧相なモノを打ち据えても構わないぞ。そうすればこいつも、自分の立場を一発で思い知ることだろう。最初が肝心だからな、手加減なんかするなよ。・・・・・・じゃ、連れて行け。」

僕は係員さん二人に両腕を掴（つか）まれたまま、入ってきた方とは逆──上官の人のさらに後ろにあったドアから次の部屋へと移動させられた。僕はここに来てしまったことを深く後悔しつつ、とにかく絶対に逆らったり反抗したりしないようにしようと、心底思うのだった。

第3話　牧場到着（後書き）

まだまだ牧場の全容は見えませんが、それでも主人公にとっては驚天動地の体験が次々に襲ってきます。
それなりの覚悟はしてきた筈なのですが、その遥か上を行く家畜としての現実を受け入れられず、ショックで錯乱する主人公の様子をお楽しみ下さい。

第４話　牡畜検査（1）脱毛・排泄（前書き）

ここから３話程度、入所検査の描写になります。

この段階では、まだ単なる羞恥プレイですが、主人公の精神をゴリゴリと削り取るような発言と検査行為がしばらく続きます。

第４話　牡畜検査（１）脱毛・排泄

「あらあら、またひとりでお着替えできなかった子？」
連れて行かれた部屋には、いかにも女医さんという風貌の人が座っていた。
ウェーブ掛かった少しだけ明るい肩下までの髪の毛。さっきの係員さんたちと同じ制服の上から、白衣を纏（まと）っている。これを着ているだけで医者という雰囲気だから不思議だ。

僕を連れてきた二人の係員さんは、僕を押さえつけるように椅子に座らせると早々に立ち去った。先ほどの部屋に戻ったのだろう。
さっきの部屋からこの部屋に来るまで、少しだけど廊下を歩かされた。その間、僕のように両腕を掴（つか）まれて連行されているヤツがもう１名居たけど、他に出会った４名は皆、自分一人で歩いて次の開いているドアに入って行った。勿論、誰もが全裸だった。

座らされた椅子は、どことなく歯医者の電動椅子をイメージさせるような構造で、緑色をしたツルツルのビニールレザー仕上げになっている。横についているスイッチ類とかから察するに、モーターで高さを変えたりすることができて、リクライニングとか、足の部分とかが動くようになっているみたいだ。
僕が椅子に座ると、女医さんは座ったまま、椅子の足についているローラーを転がらせて近づいて来た。
「はーい、えーと、８７４９号君ね。これからずっとここでは裸ん坊で過ごすんだから、そのつもりでね。まあ、直ぐ慣れるよ。運動で放牧の時間は別だけど、畜舎内は温度管理されているから、暑くも寒くもない筈だよ。」
女医さんの口調は優しかったけど、僕の絶望はより深くなった。

さっきの偉そうな係員さんが特別厳しかったわけじゃないんだ。ここではこれが普通なんだ！！
　そのことを僕は否応なしに納得させられた。何より女医さんが僕のことを「８７４９号」と数字で呼んだことがそれを決定づけている気がした。さっきサインした「人権返納同意書」の文書が頭に浮かんだ。もう僕は人間扱いされなくなっちゃったんだ。牡畜（オスちく）として、家畜の扱いになるんだ・・・。

「メグちゃんお願い。」
　女医さんが声を掛けると僕が入ってきたのとは別の扉が開いて、今度は看護師さん然とした女の人が２名入ってきた。こちらは、やはり同じ制服を着て、その上から白いエプロンをしている。この白いエプロン１枚で、こちらも看護師という雰囲気を醸（かも）しだしていた。
　当然のことだけど精液牧場の仕事に従事できるのは女性だけだ。一般の病院には男性の看護師が何割か居るけど、ここには僕たち搾精対象者以外の男性はいない。いや、僕はもう男性じゃないんだ。牡（オス）なんだ。この牧場には、牡（オス）は沢山居るけど、男性は一人もいないんだ・・・。

　メグちゃんと呼ばれた看護師さんの手には、注射器とか薬ビンとかバリカンとか、それ以外にもペンチのようなものとかビニールパックされたチューブのようなものとか、用途のわからない道具のようなものがいろいろと並べられたステンレス製のトレイがあった。
「はい、じゃあ、まずは毛の処理からだね。頭と身体と、順番にやっちゃいまーす。」
　そう言いながら、一人の看護婦さんは僕の頭にバリカンを当てると、一気に髪の毛を全部丸刈りにし始めた。電動バリカンは実に強力で、ほんの１分か２分で、僕の頭は完全な丸坊主（１ミリか２ミリ程度）になった。

一人が頭にかかっている間に、もう一人の看護婦さんは僕の腕を取ると、まず静脈から採血をした。採血した血液は、僕のカードを機械にかざして印刷したQRコードを貼り付けたアンプルに入れられて、横の箱に無造作に入れられた。確かにこの方法なら、本人のカードをもって、その場でQRコードを印刷するので、取り違いは起きようがない。

アンプルに3本ほど採血を終えると、針はそのままで採血用アンプルを外したところに薬液の入った注射器を取り付け、それを今度は僕の腕に注入して行った。今、血を抜いた分よりも、注入された薬液のほうがずっと量が多い。これは何の注射なんだろう・・・？

採血と注射が終わり、腕から針を抜かれると、そこには透明のどろっとした液体がちょんと塗布された。絆創膏(ばんそうこう)はつかわないのかな？と思っていたら、疑問が顔に出たのか、看護師さんが説明してくれた。

「ふふっ、これはなんだろうって顔をしてるね？・・・このジェルは万能傷薬で、皮膚麻酔剤と、細胞活性化剤を混ぜたものなんだよ。しかも強力な医療用接着剤も配合されていてね。ちょっとした怪我とか傷に塗ると、翌日にはもう傷が癒着して殆ど直ってるんだ。こういった注射の止血のときもよく効くんだよ。これからしょっちゅう、お世話になると思うよ。」

「じゃあ、次は検尿と検便だね。」

看護師さんはなんのためらいもなく僕の目の前にひざまずくと、僕の両方の膝をガバッと開いた。

当然看護師さんの目の前には僕のペニスがある。見たところ、この看護師さんと僕の年齢はそんなに変わらなさそうだ。確か精液牧場で働くためには、普通の看護師や歯科助手なんかと一緒で、高校を卒業した後で、専門学校や短大で資格を取るのが一般的だったはずだから、僕より4～5歳上ということなんだろう。ということは、

二十歳位か。これが高卒組だったら、自分とは2～3歳しか年が変わらない女の子に性器を晒すことになるんだ。それはそれで、かなり恥ずかしいかも・・・。前に読んだマンガで、入院した病院で偶然にも同級生が看護師をしていて、その看護師に下の世話なんかをされる大学生の話があったけど、それに近い状態だ。

　看護師さんは、僕のQRコードをもう1枚印刷して紙コップに貼り付け、それを左手で持ったまま、右手で僕のペニスを摘むように持ち、紙コップをそこに当てて言った。

「はい、おしっこしてね。・・・ほら、シー、シー。」

　若い看護師さんが僕のペニスを右手に持ち、左手に紙コップを持って、僕のおしっこを取ろうとしている。確かに寝たきりの患者さんが、尿瓶でおしっこを取って貰っているような雰囲気で、これは医療行為なんだって、必死になって考えるんだけど、どうしてもペニスが反応してしまい、僕の意志とは反対にどんどん元気になっていく。

「あれー？・・・おしっこ出ないのかな？・・・出ないと、おちんちんにカテーテルを入れることになるけど、そうする？」

「ちょっ、ちょっとっ、・・・一寸待って下さい！」

　必死になってお願いした。尿道カテーテルって、確かペニスに管を入れることだった筈だ。そうだ、あのステンレスのトレイには、ビニールパックに入ったゴムのチューブのようなものが入っていた気がする。そんなの突っ込まれるのは絶対嫌だ。怖すぎる！・・・何とか、おしっこしないと・・・。

　チョロッ。チョロッ。チョロロッ。チョロロロロロローッ。

「あ、出た出た！・・・はい、もうそれで充分だよ。よく出来ました～。」

「じゃあ、次は検便するよ。」

「検便？！」

「そだよ。検尿と検便はセットだからね。」
そう言いながら、看護師さんは椅子を操作して、お尻のところのクッションをパコっと外すと、そこにステンレスの丸い容器をセットした。
「はい、ここにウンチしてね。少しでも構わないよ。トイレトレーニングはできるかな～。」
「そっ、そんなっ！・・・そんなの無理ですっ！！」
「うーん、やっぱりウンチはいきなり言われても難しいか・・・。じゃ、ちょっと椅子を倒すね。」
勿論、急にしろと言われても、したくもないのに出る訳もない。でも、そんなこと以前に、看護師さんとはいえ、若いお姉さんの見ている前で排便するなんて、そんなの絶対にできっこない。入院患者がトイレに行けないときに介護して貰うのとは、訳が違う。
そんな僕の羞恥心を知ってか知らずか、看護師さんは電動椅子のスイッチを操作すると、上半身がゆるやかにリクライニングして斜めになる一方、下半身は持ち上がりながら足の部分が左右に大きく開いて行き、膝(ひざ)の裏側が持ち上がってきて、M字開脚姿勢にされてしまった。・・・そうか、歯医者の椅子みたいだと思っていたけど、これが噂の産婦人科にある内診台なんだ。
足を大きくM字型に広げて、ペニスからキンタマ、そしてお尻の穴まで、股間を完全にさらけ出す姿勢にされたところで、足首と膝の部分をベルトで固定されてしまった。もう僕は、大事なところをすっかり差し出した、まな板の鯉状態だ。また、リクライニングされたけど、股間が良く見えている。普通、こういった内診のときには、お腹のあたりに目隠しのカーテンを下げるものだと思っていたけど、何故か丸見えで、股の間に座った看護師さんとは目がしっかり合うのが羞恥心を煽(あお)っている。
「はい、じゃ、ちょっと冷たいけど我慢してね～。」
そう言いながら、いきなり、肛門に何か差し込まれ、お腹の中に冷たい液体が注入された。見ると、イチジク浣腸をされたようだ。

「はい、これで少し我慢していてね。その間に、ここの毛を処理しちゃおうね。」
　そう言うと、薄い茶色をした、どろっとした液体が入っている容器を取り出した。そして、刷毛筆で僕のあそこに塗りだした。
「ちょっとヒリヒリするかもしれないけど、少しだけ我慢してね。これ、とっても良く効くんだよ～。」

　まずペニス（竿）の付け根から真ん中辺りまで塗ると、キンタマも皺を伸ばすように左手で皮を引っ張りながら塗り残しがないように満遍なく塗り広げられた。次に肛門からお尻の膨らみのほうまで、毛が生えているところはすべて、液体を毛に塗り込めるようにしてタップリと塗っていく。ヒリヒリすると言われたけど、ヒリヒリというよりは、スースーするメントールを塗られたような感覚で、少しするとそこがカッカと熱くなってきた。
　ＶＩＯゾーンを全部塗り終わると、
「あ、こっちもモジャモジャだね。ここもやっちゃおうか。」

　看護師さんは僕の腕をぐっと持ち上げて腋を確認し、その姿勢で手首を頭の上にある把手のようなところにベルトで固定してから、左右の脇の下にも同じ液体を塗り付けた。
「このお薬はね、まず毛根に作用して、毛が根っこから抜け落ちちゃうんだ。それだけじゃなくて、毛根にある毛乳頭ってところも完全に破壊しちゃうんで、そこからはもう二度と毛が生えてこなくなるんだよ。」
「えっ！・・・じゃ、僕はもう、一生・・・。」
「大丈夫。毛には毛周期というのがあってね、普段生えているのは全体の２割程度なんだ。この薬で、今の毛は完全になくなっちゃうけど、今は休眠している毛乳頭が、半年もするとまた活性化して、新しい毛が生えてくるんだよ。・・・ただ、ここに居る間は、毛が生えちゃうと邪魔なんで、毛乳頭の活性化を妨害するお薬を投与す

るの。・・・さっき、採血のときお注射もしたでしょ？・・・あれ、精液の製造を活発にするホルモンとかなんだけど、同時に毛乳頭の活性化を抑える薬も入っていたのよ。」

「そのお薬は、これからも定期的にお注射するんだけど、注射するのを止めれば、半年くらいでまた生えてくる筈なんだ。でも、人によっては、お休みしている毛乳頭も全部ダメになっちゃって、もう二度と生えなくなっちゃうこともあるんだって。・・・ま、そんときはそんときだよね。ツルツルも悪くはないよ。健康には何の問題もないし、衛生的だし、心配しても仕方がないしね～。」

そっ、そんなっ、ツルツルなんて、女性ならまだしも男性だと変じゃないか！！・・・しかも脇ならともかく、男の局部がパイパンなんて！！

・・・そっ、そう言えばバスの中で、前に座った二人がそんなことを話していた気がする。牧場では剃られちゃうとか言ってたけど、剃るんじゃなくて、脱毛されてツルツルになっちゃうんだ！

最近は男でもあそこをツルツルにするのが流行ってきたなんて話もしていたけど、まさか、生えてこなくなっちゃった人が誤魔化すためにファッション化してるんじゃないだろうか・・・。

「あのね、今のこういうお話、普通は牡畜には一切説明しないんだけどさ、ここは実験牧場ってところでね、普通の量産牧場とは少し違って、精液をたくさん搾るには、どうすれば良いか、精液の味とか質を良くするためには、どうすれば良いか、そういったことをいろいろと実験する特別な牧場なの。関東に3箇所しかないのよ。」

後ろでパソコンに何かを入力していた女医さんが、また椅子とともに僕のM字開脚した股間にやってきて、説明をしてくれた。

「それでね、牡畜に何も説明しないでいろいろな処置をするのと、こうして処置の説明をするのでは、説明を聞いたほうが、その処置の効果がずっと高いっていうデータが出ているのよ。つまり、自分の身体に何をされているのか、何を目的にその処置をされているの

か、きちんと理解したほうが、効果が大きくなるらしいのね。だから、この実験牧場では、これから君たちの身体に行う処置とか、投与する薬の意味とか、そういったものを、簡単に教えることが多いと思うわ。すぐには理解できないかもしれないけど、雰囲気だけでも良いから、とにかく聞いていてね。」
　そんな話を丁寧（ていねい）にしてくれるけど、僕はそれどころではない緊急事態になりつつあった。
「あっ、あのっ、・・・とっ、トイレにっ、・・・トイレに行かせて下さいっ！」
「お、そろそろ浣腸が効いてきたかな？・・・そのまま、そこでしちゃいなさい。さっき、お尻の下におまるを入れたから。」
「いっ、いえっ、・・・そっ、そのっ、・・・おっ、お願いですっ！・・・こっ、ここではっ、・・・そのっ。」
　こっ、こんなっ、こんなところで、女医さんと若い看護師さん二人に出すところを見られているなんて、そんなの死んでも嫌だ！・・・さっきも、今は出ないって言ったけど、あれはしたくないというだけじゃなくて、見られている状態でするのが無理って言ったつもりだったんだ。しかも、さっきと違って、いまはM字開脚姿勢で、おしりの穴まですっかり晒（さら）している状態だ。この姿勢で出しちゃったら、出てくるところをバッチリ見られちゃう。・・・でも、もう本当に限界に近い。急いでトイレに行かないと、漏らしちゃう。
「気にしないで大丈夫だよ。牡畜は排泄も射精も、必ず見られている状態ですることになるから、キミも早く慣れようね。これも大事なトイレトレーニングなんだよ。・・・メグちゃん、リエちゃん、マッサージしてあげてよ。」
「はい。子猫もマッサージしないとウンチでないんですよね。」
　そう言うと、僕の両側に立っている二人が、力を入れてお腹をグイグイと押すようにマッサージをはじめた。
「やっ、やめっ、やめてっ、・・・だめっ、それっ、ひっ、いやっ、

やめてっ、お願いっ、お願いですっ！！」
「早く出してスッキリしちゃおうね～。」
「やめっ、やめて下さいっ！・・・ひっ、あっ、ぐっ、あぁっ、もっ、もうっ、あーっ！！」
「脇腹はどうかな～。おっ、もう直ぐだね。お腹がゴロゴロ鳴って、お尻の穴がひくひくして広がってきたよ。」
「だめっ、だめっ、・・・だめですっ！・・・みっ、見ないでっ、見ないでーーっ、あっ、あっ、あっ、やだっ、いやだーっ、ひっ、あぁっ、ぐっ、あっ、あぁーーーっ！！」
　ブッ、ブッ、ブリブリブリッ。
　ブリッ、ブリッ、ブッ、ブリッ。
「うっ、うぐっ、だっ、だめ一っ、うぐっ、ぐすっ、うっ・・・。」
「まだ出るかな～。」
　プッ、ブブッ、プーッ、ブリブリッ、ブピーッ。
「もう終わりかな。いっぱい出たね～。偉い偉い。」
「うっ、ひぐっ、うっ、うぅっ、ぐっ、ぐすっ、ぐすっ、うっ、うわーーんっ、あんっ、あんっ、ああーんっ・・・、ぐすっ・・・、うわーんっ、ぁあーーんっ、ひっ、ひぐっ、ひぐっ、ぅあーーんっ、あぁーーん、ひっ、ひぐっ、ぐすっ、あーんっ・・・。」
　僕は泣いた。・・・思いっきり泣いた。あまりのショックに涙が止まらなかった・・・。女性３人に見守られながら、排泄してしまった・・・。それもお尻の穴から出てくる瞬間をバッチリ見られちゃったんだ・・・。なんだか、ウンチと一緒に、僕の尊厳がすべて排泄されてしまったようだった。メグちゃんと呼ばれた看護師さんが、僕の目をガーゼで拭ってくれた。
　泣きじゃくる僕を見つめる３人の眼は、自分の子供のおむつを換える母親のように優しかった。でも、僕の目からはしばらく涙が溢れ続けた。
「じゃ、これは検便に回して、それと、そろそろ毛が抜けるころだから。」

僕のお尻の下に入れられていた、ステンレス製の「おまる」が、新しいものに取り替えられ、細いチューブの先に小さなシャワーヘッドが付いたようなもので、排便したばかりのお尻から薬を塗られたＶＩＯゾーンまで、洗い流してくれた。すると、驚くことに、陰毛がすべて、スルッと抜けてしまった。それも除毛剤で毛を溶かすのではなく、どの毛も毛根からきれいに抜けているのがわかる。それが済むと、両脇の下にも小さいステンレス製の器を持ってきて、同じようにシャワーで洗い流してくれた。・・・ほんの5分程度で僕は股間も腋も、すっかりツルツルにされてしまった。

第5話　牡畜検査（2）計測

（先程の登録／脱衣室にて）

「ちょっと前が詰まっているみたいなんで、次を入れるのは少し待って欲しいそうです。」

　牡畜を連れて行った二人が戻ってきた。少しペースを落とすようにと言われたようだ。

「わかった。なら次のを入れるのは5分後として、少し休憩しよう。今日の午後だけで我々3名が５０匹の牡畜を担当しなければならないんだから、本当に大変だな。１２時から5時まで、１時間で１０匹という計算だ。１匹あたり6分しかないじゃないか。」

「仕方ありませんよ。どこも人手不足ですから・・・。といっても、本当のボトルネックは牡畜検査ですよね。・・・なにせ獣医師の数が限られているので、獣医師チームは飼育員の補助があるといっても、３０分程度で、測定から問診、検査射精や最後の身体処置など、すべてをこなさないといけないんですよ。獣医師の数、つまり検査室の数は、登録室の4倍以上あるのですが、どうしても詰まってしまうようですね。・・・我々が愚痴を述べてはダメでしょう。」

「まあそれはそうだ。・・・それよりも、私の役目だということで、毎年あの鞭打ちのパフォーマンスをやっているが、あれは本当に意味があるのか？・・・単に、ここで時間を潰して待ち時間を解消するための寸劇じゃないか？・・・しかも、ご丁寧に遠くの部屋で悲鳴が上がるようなＳＥを隠しスピーカから聞かせたりするし、そもそも私が机を叩いた鞭は本当の皮を使ったもので、あれで叩いたら机も削れるし、皮膚を叩いたら間違いなく皮膚が裂けて出血するだろう。だから脅す効果が抜群なのはわかるが、皆が実際に牡畜を躾けるための鞭は柔らかいポリエステルを緩く編んだものだから、叩かれても少し赤くなる程度じゃないか。そりゃ少しは痛いだろうが、

幅の広い輪ゴムでパッチンするのと同程度で、そんなに恐れ慄くようなものじゃない。第一、この鞭は本来、叩くものじゃなくて、競走馬なんかに指示を出すための「見せ鞭」なんだろう？・・・こうやって、ことさら恐怖で縛るのが、本当に正しいやり方なんだろうか？」

「主任がそんなこと言っちゃダメですよ。ここでの主任の役割というか役柄は、鬼より怖い絶対者として短時間で最高の恐怖を植えつける役目なんですから。それによって、牡畜は従順になり、決して逆らわないように躾けられていくんです。いや、もっと進んで、牡畜が自らどのような処置でも喜んで受け入れ、我々からの指示や処置を積極的に待ち望むようになるんです。牡畜に甘い顔をしてみても、牧場の運営にはまったく寄与しないし、それどころかマイナスにしかならないというのは、これまでのデータで明らかなんですから。」

「まあ、それで運営がスムーズになるなら私は構わないが・・・。聞いた話だが、まだSEのスピーカとかを取り入れる前は、反抗的な牡畜を一匹か二匹、生贄に仕立て上げて、皆の前でそいつをこの鞭で肌が裂けるまで打ち据えるということまでやったそうだから、それに比べれば随分ソフトに合理化はされてきているんだろうな。」

「そりゃ、我々だって、別に牡畜に恨みがある訳じゃないんですから・・・。単に牡畜がきちんと躾けられて、従順に管理されてくれることだけを願ってやっているんですよ。」

「確かに、我々とすれば、指示通りに射精し、指示通りに禁欲させるのが最大の目的ですよね。」

「でも牡畜はどれもかわいいと思いませんか！・・・何かを訴えかけるような目つきであたしたちのことをじっと見つめられたり、手搾り畜に至っては、おちんちんを振り勃てながら、必死にちんちんのポーズをとって射精をおねだりするんですよ。思わず抱きしめたくなっちゃいます。」

「・・・お、・・・どうやら前が空いたみたいだな。じゃ、次のやつを入れてくれ。」
　アヤ君が、ドアを開けて声をかけた。
「次どうぞー！」
　－－－
　－－－
「はい、綺麗になりましたねー。・・・じゃ、すっきりしたところで、検査始めようね。」
「？？？」
「これからキミたちには毎日健康な精液をいっぱい出してもらわなきゃいけないからね。そのために精液を増やすお薬とか、性感を増すお薬とかを使っていくんだけど、前提として今のキミのおちんちんやたまたまの性能はどの位なのか、精液はどんな具合なのかを全部調べるの。一般牧場では、こんなことしないんだけど、ここではこれからも定期的にあるからね。がんばろうねー。」
　女医さんの言葉に合わせるように、それぞれの作業をしていて二人の看護師さんも集まってきて、僕のツルツルになった股間を覗き込みながら準備を開始した。・・・いったい何をされるんだろう・・・。でも、今の僕には、何もできない。両手はバンザイの姿勢のまま、両足は思い切りM字開脚姿勢で、内診台にベルトで固定されていて、びくとも動かすことができない。さっきまでは恥ずかしさが勝っていたけど、こうして股間をすべて差し出したポーズで動けないというのは、恐怖が次第につのってきた。クラスで聞いた身体改造手術という単語が頭を過った。
「そんなに緊張しなくても大丈夫。まずは計測だよ。」
　そんな僕の心の中を知ってか知らずか、女医さんと看護師さんの3名は、さっきからやたらと優しい言葉をかけてくる。ただ、何となく、その雰囲気というか態度は、ペットに対するものと似ているような気がする。

ふと、何の脈絡もないのだけど、前にＶｉｅｗＴｕｂｅで見た動画を思いだした。確かあれは、ペットが飼い主に連れられて外出する話で、最初はお出かけだと喜んでいたワンちゃんが、連れて行かれたのは大嫌いな動物病院で、病院の玄関で身体を強張らせて恐怖に絶望した表情をしているというものだった。・・・あれは、予防接種だったのか、それともまさか、去勢手術だったんだろうか・・・。

こんなことを思いだしたのは、こうして身動きできない状態で股間をすべて曝け出している姿勢が、やはり羞恥心とともに恐怖心も強く刺激するからだろう。身動きできない状態で、股間を他人の自由にされるということが、こんなに不安だとは思わなかった。

「キミのおちんちんは包茎だね。」
「そう言いながら、僕のペニスを掴（つか）んだ手を根元にグッと引き下げた。」
「あ、一応、剥けるには剥けるんだ。・・・んー、でも、勃起してるのに、手を離すと先端まで皮が戻っちゃうよね。これって、皮が余っている証拠だよ。もしかして、普段から皮オナニーとかばっかりやっていなかった？」
「・・・・・はぃ・・・・・・。」
僕は恥ずかしくて、消え入りそうな声で答えた。
「あちゃー。やっぱりそうか。皮オナニーばっかかしてると、皮が剥けてこなくて、それどころか皮が伸びちゃって、いつまでたっても皮被りのままになっちゃうんだよ。」
「えっ？」
「包茎だと、亀頭の発育も悪くなっちゃうし、臭くて不潔だし、良いこと何もないよね。・・・キミのおちんちんは、一応、手で剥けるから、ギリギリで真性包茎ではないけど、仮性度は・・・９ってところかな。中卒組だと、まだ剥けてないのが普通だけど、いくらなんでもこれじゃねー。」

この一言により、僕は男としての尊厳をすべて否定されたような気分になり、うちひしがれてしまった。さっきウンチとともに尊厳を排泄してしまったのに、まだ残っていたんだ・・・。

「そんな情けない顔をしなくても大丈夫。あとで処置してあげるから。それに、ここで毎日鍛えれば、あっというまに亀頭も発育するからさ。」

そうか、知らなかった。確かにクラスのヤツで、もうムケたヤツは記憶にないけど、温泉なんかで見た大人は全員、一人の例外もなくズルムケだった気がする。だからてっきり、大学生位になれば、誰でも必ずムケてくるものだと信じていたけど、牧場役に来ないで皮オナニーばかりしていたら、包茎のままだったのかもしれない。僕はこの点だけでも、牧場役に来たことは、間違いじゃなかったと考えることにした。・・・でも、処置って何だろう？・・・それに亀頭を鍛えるって、どうやるんだろう・・・？

僕がそんなことを考えていると、看護師さんはメジャーを取り出した。工具箱に入っているような硬いヤツではない。服の採寸に使うような柔らかいヤツだ。

……嫌な予感がした。看護師さんは当たり前の顔をして、メジャーを僕の勃起したペニスに這(は)わせた。ペニスの付け根の下腹部に端をぎゅっと押し付け、ペニスの反りに沿うようにメジャーをあてる。

「んー、かなり小さいねー？　もうちょっと頑張れるかなー？」

看護師さんはいともかんたんに僕のプライドをこれでもかとズタズタにするセリフを吐くと、手コキを開始した。

「うーん……これ以上は大きくならないかなー。……そうだよねぇ、さっき脱毛処理してる時にお汁まで垂らしてたもんねー。これで精一杯かー。かなりミニサイズだねー。」

もうこれ以上の傷はあるまいと思うそばから、さらに強烈な言葉の暴力が僕のプライドを次々に打ち砕き、傷口に塩どころかタバス

コを塗り込められる。
「もうちょっと……んっ……亀頭に血液を、っと……」
看護師さんが何事かつぶやきながら、握力を強めてペニスの中ほどをしごいた。亀頭には手を触れない。
どうやら血液を亀頭へ送っているようである。確かに根元から先端に向かって力を入れるしごき方によって、亀頭の膨らみが僅（わず）かに増した気がした。

「んー……よしっ、と。じゃ、もう一度……。……あー。それでも平均にはまったく届かないかぁ〜。ま、ミニサイズの子も中にはいるさ。」
看護師さんが残念そうというか……少し憐れむような表情をした。もちろんそれは侮辱するようなものではなく、でんぐりがえしに失敗した幼稚園児を慰めるような優しげなものであった。けど、僕の心はもう回復不能なまでに傷ついていた。
しかし、そんな僕の暗い感情など一切お構いなしに、二人の看護師さんは僕のプライドや尊厳をわざと削り取るような軽口を言い合いながら、てきぱきと計測し、悲しい数字をＰＣの前に移った女医さんに伝え、女医さんはそれをきっちりと僕のデータとして打ち込んでいく。
「で、太さは、っと」
看護師さんが今度はペニスの太さを測り始めた。カリのすぐ下でメジャーを一周させる。
「うん、こっちも平均よりは結構細め、っと」
再び絶望の沼に沈められた。せめて太さは多少マシかと一瞬期待したけど、冷静に考えてみれば、長さがミニサイズで太さだけ太いというのは、かなり不自然だ。「チンコは長さよりも太さ」などという言葉をネットで見た気がしたけど、そんなの単なる願望なんだ・・・。

最初にプライドを折られてからここまで、最期に縋ろうと思っていた希望の砦も、あっけなく落城してしまった。
「まあ、ここでは大きさはあまり関係ないから、そんなに気にすることもないよ。牡畜の価値はサイズじゃなくて、射精量なんだよ。それと精液の質も大事なんだ。質の良い精液をドピュドピュ沢山射精できるのが、ここでは一番上なんだからね。」
それはそうかもしれないけど、でもやっぱり僕の心はもうボロボロだ。
「ふふっ、だーいじょーぶ。そんな見るからに悲しい顔しないでーっ。キミはまだ若いんだし、発育する余地があるから、ここで訓練すればおちんちんもおっきくなるからねっ！」
女医さんが極めて明るい調子で言ってくる。「女のアナタに僕の気持ちなんて分からないんですよ！（泣）」と叫びたいところだったが、さすがに口には出さなかった。自分の立場は、わかって来ていたし、万一にも鞭で叩かれちゃ堪らない。白衣やエプロンで隠れているけど、どうやら先生も看護師さんも、同じ制服を着ていて、腰のベルトにはちゃんと、あの鞭が吊るされているのが見えちゃったんだ。
僕が最大級の精神的拷問を受けている間に、女医さんはノギスのような器具を取り出した。確かあれはものの厚さを図る工具だったと思ったけど――。
「はーい、動かないでねー。」
僕の理解は正しかった。女医さんはその専用のノギスで亀頭の直径を測りだした。僕の場合、先ほどのカリ首の下のくびれた部分の直径と、殆ど同じだろうと思われたけど、どうやら亀頭の一番太いところの直径とくびれた部分の直径の差も大事なことらしかった。
なんだろう……もしかしたら女性のバストの「トップとアンダーの差でカップ数が決まる」みたいなことなのかもしれない。
僕は、ペニスにアルファベットでサイズをつけられたら泣いてし

まう自信があるな、と身構えていたところ、想像のはるか上を行く冷酷な宣言があった。
「あー、Ａトップにもならないかー。Ａマイナスってところかな？やっぱり包茎君だと、亀頭の発育が悪いよねー。」

とうとう、我慢できなくなって僕の眼からは涙がこぼれだした。このままだと、さっきのように、また声を上げて泣きだしてしまいそうだったんで、何とか気を紛らわせるために聞いてみた。
「ふっ、普通はっ、・・・普通はどの位なんですか？」
「うーん、普通っていうのがある訳じゃないんだけど、一番多いのはＣトップかなー？・・・ＢとＤもときどき居るよ。でもＥとかＡは、めったに居ないね。差が５ミリ以下だとＡで、５ミリから７．５ミリがＢ、一番多いのは７．５ミリから１０ミリの差があるＣなんだ。・・・キミのおちんちんは差が３ミリ位で、亀頭があと０．５ミリ細かったら、Ａの下のカテゴリーで、発育不良のよわよわおちんちんってことになっちゃうところだったんだよー。」
「うっ、ぐすっ、ひぐっ、・・・やっぱりっ、僕のペニスはっ！・・・・・・うっ、ううっ・・・。」

僕のコンプレックスの中心部分をピンポイントで刺し貫くセリフ・・・。もう僕は何も言えず、またしても涙が止め処なく流れるようにポタポタと垂れてきた。しかし内診台に手足すべて固定されているので、俯（うつむ）くことも拭（ぬぐ）うこともできない。今度はリエちゃんと呼ばれた看護師さんが、やはり僕の眼をガーゼで拭（ぬぐ）いながら、話しかけてくれた。
「そんなに泣かないの。この実験牧場に配属されたってことは、キミはエリートなんだよ。おちんちんのサイズが小さくても、精液の質と量は偏差値７０以上で、上位１％には間違いなく入っているんだからね。」
「？？・・・そっ、それって？？？」

「申請のとき、精液サンプルを提出したでしょ？・・・あれでチェックして、本当に優秀な子だけが、この実験牧場に配属になるんだよ。だから心配せず、もっと自信を持ちなさい。上手くすれば、手搾り牡畜になれるかもしれないんだよ。」
「それと、キミはおちんちんが小さくても、たまたまは結構大きそうだよね。これ、キミの射精能力が優秀な証拠なんだよ。今からたまたまも測るからね。」
そう言うと、いきなりキンタマを、ぐっと握られた。
「おっ、やっぱり大きいね〜。左側がーっと、・・・うん、この位かな。２１ｃｃってとこだね。・・・で、右側がっと・・・こっちは２３ｃｃはあるよね。素晴らしいよ、キミ！！・・・普通は１５ｃｃか１６ｃｃ位なんだから。」
女医さんは、プラスチックでできた、いろいろなサイズのキンタマの模型を出してきて、それと僕のキンタマとを交互に握っては、一番近いサイズのものの数値を読み上げていた。あんなキンタマの模型があるなんて、知らなかった・・・。
「じゃあ、最後に、おちんちんの固さを測りますよ〜。まずは勃起力ね。最大に勃起させているかな〜。」
そう言うと、小さなハンカチのようなものを僕のペニスに引っ掛けた。これ、ただの布ではなくて、中に砂のようなものが入っていて、かなり重い。それをビンビンのガチガチになっているペニスに、ひとつ、二つとかけていく。
「お、３つ、４つ目も行けるか、５つ目はどうかな。・・・凄い！！５つも持ったよ〜。キミのおちんちん、小さいけどやっぱり優秀だね。６つ目はっ・・・と、さすがにこれは無理か。」
僕のペニスは、６つ目の布重りで、ついに耐えきれなくなってヘニャッとなり、下に落としてしまった。
「でも、５つだから1キロだよ。立派立派。これなら将来、女の子はメロメロだね。あとはっと・・・。」
次にカゴから出したのは、アルファベットのＧのような形をした

器具だった。Gのカギの部分がネジになっていて、そこに小さなメーターがある。この器具で僕のペニスの、まずカリの部分、次に竿の真ん中の辺り、そして最後に付け根のところをはさんで、ネジをクルクルと回すと、鉄の棒のようなものがペニスをだんだん押し潰してくる。結構力を入れて潰されるような圧迫感がして、これ以上されると、ちょっと痛いと感じる直前で止められて、そのときの数字をメーターで読んでいた。

「はーい、硬さもちゃーんと測れましたよー。測定はこれで終わりだからね。」

どうやら最後にやったのは硬さの測定だったらしい。そんなことまで管理されるのか。

これで、僕自身ですら知らなかった僕の一番大切な秘密の数字が全部知られてしまった。

勿論、僕なんて数多く来る牧場役の対象者のひとり。いちいち覚えてる筈はないだろう。でも、やっぱり恥ずかしさはひとしおだった。

第5話　牡畜検査（2）計測（後書き）

主人公の視点だけでなく、係員（？）の視点が出てきましたが、これからも飼育する側の視点が少しずつ出てきます。
ただ元の原稿では、これらは本編とは独立して、幕間のような扱いにしていました。今回は、文字数の関係と、牡畜側の視点との対比が際立つかと考えて、元の原稿から少し構成をかえて、ここに入れ込んでみました。うまくはまって、違和感がなければ良いのですが・・・。
原稿を書くときは勢いに任せて、思いつくまま書きなぐりますが、いざアップするとなると、文字数とか流れ（話と話のつながりや展開の「間」など）を考えて、いろいろと編集しなければならないので、原稿があるからといって、そんなに簡単に進むものではありませんね。

第6話　牡畜検査（3）問診

「さ、じゃ次は、キミのことについて、詳しく教えて貰うからね。キミの身体の様子や第二次性徴の発育具合、それからどんな経験があって、普段どんな射精をしているのか、キミの性癖とか普段の性行動について、いろいろ質問するから全部正確に答えてね。細かいところまで聞くけど、隠してもダメだからね。」

「他の牧場だと、こんな質問どころか、そもそも今やった計測なんかもしないんだ。到着して受付を済ませたら、裸になって牡畜処置をするだけなんだけど、ここは実験牧場なんで、キミたちは特例なんだよ。・・・これからキミに良質の精液を沢山ドピュドピュして貰うために必要なデータを集めないといけないんで、正確に記録しないと効果が薄いんだ。普通、他の牧場では受付で服を脱いだ瞬間から、牡畜の会話は禁止になって、違反すると厳しく躾けられるんだけど、ここでは調査のために問診が必要になるんで、こうしてあたしたちも話しかけているんだよ。だから、全部正直に答えてよ？・・・これがキミとお話できる最初で最期になるんだからね。」

「はぃ・・・。」

「まずは、おちんちんに毛が生えたのはいつ頃からだった？」

「・・・中1になった春休みでした・・・。」

「それは気がついたときかな？・・・つまり1本2本と生えてきたとき？それとも濃くなってきて、遠目にも毛が生えてきたってわかるようになったとき？・・・最初はどんなふうだったの？」

「・・・最初に気付いたときです・・・。そのっ、産毛みたいなのが何本か、少し色が濃くなってきて、何となく太くなったような気がして・・・。」

「じゃあ、はっきりわかるようになったときと、これで今と同じように、完全に生え揃ったと感じたとき、または自分で大人の身体と

あまり変わらないと考えるようになったのはいつかな？」
「・・・はっきり生えてきたと思ったのは中1の夏休みが終わった頃で、友達と見せあったのを覚えています。今と変わらない位になったのは、多分、1年後の中2の秋頃です。」
「腋毛はいつ頃？・・・処理しちゃったけど、今のキミは腋毛もほぼほぼ完全に生え揃っていたよね？」
「そっちは確か、中2から中3になる春休みに、最初に生えてきたのに気がつきました。」
「そっかー。すると陰毛は中1の夏休み、腋毛は中3の春休みで生え始めて、それぞれ1年で概ね生え揃ったということね。・・・ごく平均的な発育だわね。でも毛の量としては、結構モジャモジャなほうなのかな？・・・ま、もう処理しちゃったから関係ないんだけどね・・・。」
「次に、精通はいつだった？最初の精通はどういう風だったか覚えているわよね？・・・キミの最初は夢精？オナニー？それとも偶然かな？」
「中1の夏休みに初めて夢精しました。・・・そのっ・・・朝、起きたらパンツが・・・。」
「ベトベトだったのね？・・・どの位出たかなんて、わからないわよね？そのパンツはどうしたの？」
「こっそり洗おうとしてたら、お母さんに見つかっちゃって、お母さんとお父さん、それに妹もやってきて、パンツの前を広げられて、立派な射精だって褒められて、これでようやく男になったって、皆でお祝いしてくれました。」
「そっかー。家族に見られて褒めて貰えたんだ。良かったじゃない。」
「でも、そのときは死にそうな位、恥ずかしかったです。」
「なんで～？キミが一人前の男になった証拠じゃない？大人になるのを恥ずかしがるのは変だよ？・・・それにここでは毎日、皆の前で射精するんだよ。恥ずかしいなんて言ってられないよ～？」

「えぇ、それはまぁ・・・。」
「ま、いいや。直ぐ慣れると良いね。で、さっきの話に戻るけど、家族に褒めて貰ったってことは、かなりたっぷり射精したのかな。・・どんな夢を見たのか覚えている？」
「実はその前日、夏休み最初のプール教室があって、最初の日だったんで、皆、スクール水着じゃなくて自由な水着を着てきて構わないとなったんです。全員ではなかったですけど、クラスの半数位の女の子が思い思いの水着を着てきて、結構大胆な、きわどいのを着ている子も居ましたんで、そういう子の姿が目に焼きついていたんだと思います。・・・で、その日は家に帰って、あまり夜更かしもせずに寝て、そうしたらなんだかまたプールで遊んでいる夢を見たんです。といっても、学校のプールだってことと、女の子が皆、ビキニとか、カラフルな水着を着ていたということしか覚えていません。それで気がついたら・・・。」
「なるほど。同級生の女の子の、普段とは違う水着に興奮したみたいね。・・・で、その後はどんな感じだったの。つまり、次の射精はいつで、その後はどんな間隔で射精するようになって行ったわけ？」
「ええっと・・・、その3週間位後に、また夢精しました。そのときは、どんな夢だったか覚えていないんです。・・・いや、夢を見たのかどうかもはっきりとわからないんですが・・・。そのときは、家族には知られずにパンツを洗うことができました。その後も、やっぱり2週間か3週間後にまた夢精しちゃって、それで夏休みが終わって2学期になって、友達と夢精について、皆どんなふうにしているかって話をしてみたんです。」
「なるほど、友達に相談を持ちかけた・・・、っていうことで間違いないわね？」
「はい、こういうことに詳しそうな、いつもエロいことばかり話す友達2人に聞いたところ、そりゃオナニーをしなきゃ無理だって言われて、オナニーのやり方を教わりました。・・・っていうか、そ

のうちの1人の家に3人で行って、そこで皆で揃ってオナニーをしたんです。」

「最初のオナニーはどうだった？・・・気持ち良かったかしら？」
「はじめはうまく出来なかったんです。それで、友達が手を添えて一緒に扱いてくれて、それでようやく・・・。」
「射精できたのね。最初の射精は気持ち良かったでしょう？」
「はい。もうペニスから腰にかけて、痺れるような、突き抜けるような電気が走ったみたいで、身体の中、とくにペニスからキンタマ、そして腰の中の、何か大事な部分が溶けて流れ出ていっちゃうんじゃないかって感じて、かなり怖かった気がします。」
「オカズは何を使ったの？」
「そのときは、その友達のＰＣでエッチなサイトを幾つか見ていて、それで・・・。」
「なるほど。それでオナニーを覚えて、それからはどのくらいの頻度でオナニーをしているの？・・・普段はどんなオカズを使って、どうやってオナニーしているのかしら？」
「ええっと、そのっ、・・・最初は2~3日に1回だったんですけど、中1の冬休みのころには、大体毎日になっていました。・・・オカズは友達同士で回されているエロ本を借りてきたり、ネットでそういうサイトを見つけたりしています。やり方は・・・。」
「さっき聞いたけど、皮オナニーばっかりしていたのよね？」
「・・・・・はぃ・・・・・。」
「もしかして、床オナニーなんかもしていたのかしら？」
「・・・・・はぃ・・・・・。」
「あちゃーっ。やっぱりこっちもか！！・・・床オナニーも、やっちゃダメなオナニーのひとつなんだよね・・・。」
「そっ、そうなんですかっ？！」
「うーん、ま、個人差はあるんだけど、床オナニーは将来セックスするとき、うまく射精できなくなったりすることもあるんだよ。」

「ええっ！！・・・そっ、そんなっ！」
「うん。でも心配することないよ？・・・ここでは床オナニーをするような環境にはないから、少なくとも2年間は心配ないし、皮オナニーは、もう二度とできなくなるから。」
「？？？」
「まあ、ここを卒業するまでは、どっちにせよ自分でオナニーは禁止だからね。・・・っていうか、毎日たっぷり射精して貰うから、オナニーなんてする気も起きなくなるんじゃないかな？」
「そんなに何度も射精させられるんですか？」
「んー。・・・回数というより、絶対量かなー。一応ノルマもあるしね・・・。でも若いから大丈夫だよ。」
「はぃ・・・。頑張ります・・・。」
「良い返事だ！！・・・で、話の続きだけどさ、今はどのくらいの頻度でやってるの？」
「だいたい、毎日です。」
「1日1回？」
「たまに2回とか・・・。」
「連続でやることは？」
「オカズが特によかったとか、興奮する何かがあったときは、2回とか、3回ってことも・・・。」
「夢精はしていないの？」
「オナニーするようになってからは、一度もしていません。」
「よくする場所は？」
「風呂とかトイレとか・・・。夜遅くだと、皆が寝静まったことを確認できれば、自分の部屋ですることも多いです。」
「家の外ですることは？・・・学校とか公園とか？」
「ありません。でも、友達の家に行って、そこで何人かと一緒にすることはたまに・・・。」
「友達がキミの家に来ることは？
「うちは妹が居るんで、難しくて・・・。」

「どうやってやるのが多いの？・・・つまり、オナニーするときは、どこを中心に刺激するの？」
「そのっ、・・・普段は皮オナニーなんで、皮を滑らすようにして前後にしごくというか・・・。」
「床オナニーはどのくらい？」
「3回か4回に1回くらい・・・。そのっ、自分の部屋でやるときに、ベッドにうつ伏せになってしたりとか・・・。」
「射精するまでの時間はどれくらいかかるの？」
「そのときの気分にもよりますが、普通はだいたい2分から3分位かと・・・。あ、でも、すごくしたいと思ったときだと、1分かからずに射精しちゃうこともあります。」
「射精したときの精液の量はどれくらい？・・・これはわからないか・・・。ティッシュは何枚位使うの？」
「飛び散り方にもよりますけど、いつもだと7枚か8枚くらい・・・。」
「おっ！・・・それはかなり多いほうだと思うよ？・・・連続で射精したときの2回目はどの位かな？」
「そっちはだいたい5枚か6枚くらいです。」
「へぇ。連続射精の2回目でもティッシュ5枚とか6枚っていうのは、かなり期待が持てるね。」
「その他にどんなオナニーをしたことがある？・・・秘密にしている性癖とか？・・・ゲイとかじゃないよね？」
「・・・いぇ、・・・特に・・・。」
「器具とか使ったことはある？」
「一度、友達の家で押さえつけられて、電動マッサージ機で電気アンマをされたことが・・・。」
「どんな感じだった？」
「何度も強制的にイカされて、辛くて・・・。」
「キミは自分のどこが性感帯だと思う？」
「ペニスの、それも先のほうかなって・・・。」

「皮を剥いて亀頭を直接刺激するオナニーをしたことは？」
「友達に教わって一度だけ・・・。でも痛くて気持ち良くなくて、途中で止めてしまいました。」
「ローション使わなかったのかな？・・・亀頭オナニーは慣れないと、どうしても最初、ヒリヒリしちゃったりするんだよね。」
「ローションは持っていなかったので・・・。・・・友達は、お風呂で石鹸を使うとか、唾を付けると良いとか言ってましたけど・・・。」
「石鹸は、亀頭の皮膚が鍛えられていないと、あとで刺激が強すぎて、やっぱりヒリヒリしちゃうから気をつけないとね。」
「そうなんですか？！」
「ま、慣れればどうってこともないけどね。・・・おちんちん以外では、性感帯はない？・・・勿論、自分で気がついているところだけど？」
「前に友達とオナニーしているとき、そいつが乳首を触っていたんで、自分も真似したことがあったんですけど、なんだかくすぐったいだけで、あまり気持ちよくはありませんでした。」
「牡畜も乳首は立派な性感帯なんだよ？・・・ただ性感帯というのは、ある程度開発しないと気持ち良くならないからね。くすぐったいというのは、潜在的な性感帯になる可能性があるところなんだ。牡畜は乳首が刺激されるんで、すぐに気持ち良くなると思うよ。・・・他には？」
「いえ、特に・・・？」
「お尻なんてどう？」
「いえ、触ったこともありません。」
「お尻の中にある前立腺は、最高の性感帯のひとつなんだよ。それと、前立腺は射精をコントロールする大事な器官なんで、キミたちもこれから鍛えて貰うんだ。そうすると、精液が沢山ドピュドピュ射精できるようになるんだよ。・・・まあ、それ以外にも、射精ノルマに届かない子に電気刺激で強制的に射精させるときにも使うん

だけどね。」
　何だかまた、さりげなく怖いことをさらっと言われた気がする。クラスで噂されていた前立腺の電気刺激って、本当にされることがあるんだ・・・。家畜だと確かに普通なのかもしれないけど、そんなのされたくない。弱音を吐かないようにしないと・・・。

「念のため聞くけど、童貞だよね？・・・セックスした経験は？」
「ありません。」
「彼女はいるの？」
「いえっ・・・。そのっ・・・。いません。」
「今、言いよどんだよね？・・・ということは？・・・もしかして、片思いとか、恋人未満とか？」
「・・・ちょっと、気になる子はいます。」
「その子とはどんな関係なの？・・・二人だけで出かけたりするとか？」
「・・・今日、出発するとき見送りに来てくれました・・・。」
「おっ！・・・それは見込みがあるね？・・・まだどっちからも告ったりはしていないの？」
「はい、それはまだ・・・。というか、僕が片思いしているだけなのかと思っていたら、今日いきなり見送りに来てくれて、それで驚いたって言うか・・・。」
「それはもう確定だよ。よかったじゃない、両思いになれて！・・・帰ったら是非、キミの精液を飲ませてあげなさいね？」
「ええ、できれば、そうしたいと・・・。」
「何か問題でもあるの？・・・それとも単に不安なのかな？」
「・・・そのっ、・・・2年もしたら忘れられちゃうんじゃないかって・・・。」
「彼女は何か話していた？」
「・・・『待ってるから。』って言ってくれました・・・。」

「じゃあ大丈夫だよ。性格にもよるけど、女の子がそういう言い方をしたら、まず待っていてくれるよ？・・・これでキミも2年間、辛くても頑張る張り合いができたじゃない？」
「はい！」
「ここでしっかり鍛えて、卒業したらその子に美味しい精液をたくさん飲ませてあげようね？」
「はいっ！！」

「さて、聞くべきことはだいたい終わったかな？・・・じゃ、いよいよ精液の検査に移るよ。リエちゃんよろしくね。」

そう言いながら、天井から下がっている歯医者のようなライトの位置を少し修正した。僕は何となしに、それに目をやったところ、ライトの横にカメラがついているのを発見した。

「あっ、あのーっ、・・・あれ、もしかしてカメラですか？」
「そうだよ。キミの様子は、最初からずっと撮影しているんだ。特に問診と回答は、牡畜それぞれの大切な記録だからね、全部永久保存されるんだよ。それと、キミにもコピーをあげるからね。」
「そっ、そんなっ？・・・僕の一番恥ずかしいところを全部っ！！・・・あのっ、検便とか、計測とかもですか？？！」
「勿論だよ。ここは実験牧場なんだから、家畜の記録は全部だよ。それがどうかしたの？」
「そっ、それってっ・・・、絶対に外には出ないのでしょうね？」
「そんなことないさー。家畜の様子は学会にも発表されるし、上層部とか政府関係者への報告にも当然載せるわよ。特にこういった写真は、様子が一発でわかるんで、とても大事だし好評なんだよ。うんちが出てくるところも撮影したし、これからキミがアヘ顔になって、快感に蕩(とろ)けながら射精するところも撮影するんだよ。キミみたいにかわいくてイケメンだと、見ていても楽しいから、顔もバッチ

リ出してあげるからね。」
「そっ、そんなっ！」
「キミは家畜なんだから、恥ずかしいって思う方が変だよね？・・・家畜の交尾のビデオなんか、普通に教材として売られているし、パンダの人工授精の様子なんて、今後のためにも完璧に記録されているのは知ってるでしょ？・・・牛や馬やパンダが恥ずかしがるって話は聞かないよね？」
「そうだよ〜。飼ってる猫や犬のことを動画サイトにアップしてる人は沢山居るでしょ〜？・・・でも、ペットの個人情報保護なんて、聞いたこともないよね〜？」

僕はもう何も言えなくなり、ただ黙って聞くしかなかった・・・。
そうだ、さっきサインした承諾書には、人権の停止と並んで、プライバシーは一切なくなるということが書いてあったっけ。あのときは、よく意味がわからなかったけど、あれは、こういうことだったんだ・・・。

第6話　牡畜検査（3）問診（後書き）

冒頭のところで、他の一般牧場では、脱衣した瞬間から会話が禁止され、違反すると厳しく躾けられる（鞭打ち？）というセリフが出てきます。当初、そちら（他の牧場に連れて行かれたクラスメートの西田君の体験）も書き込んで、対比させようと思ったのですが、少し考えてみたところ、セリフがない状態で一方的に鞭で打たれるだけという描写になってしまい、物語の広がりがあまり出せそうもないし、牡畜として精神的に追い込まれて行く様子（その先に精神の強制的M化がある）というのが、うまく書けそうもなかったので、そちらはサイドストーリーのような扱いで、幕間にでもしようかと思い、書きかけのまま放置してあります。第一部が完了した後、多少なりとも余裕があれば、それだけで1話か2話分、書いてみるかもしれません。

第７話　検査搾精

「さってと、いよいよ本番ねー。リエちゃんメグちゃん、よろしくー。」
　測定に使った道具を片付けながら、女医さんが改めてこちらに向き直ってそう言った。すると、そばで控えていた看護師さん達もまた近づいてきた。
「はい、じゃあ、検査搾精をしますねー。」

　三人が僕の股間をぐるりと取り囲むようにスタンバイした。女医さんは測定時と同様に椅子に座ったまま、僕のＭ字開脚された両足の間に入ってきて、ペニスを本当に間近に見る特等席にいる。このままペニスを口に銜(くわ)えて、フェラチオでもできる位、顔の位置が近い。
　女医さんは座ったまま。――つまり僕の勃起したままのペニスは今度こそ本当に女医さんの目と鼻の先に突き出された形になった。
　二人の看護師さんは、僕の身体の両側に立ち、メグちゃんと呼ばれた方は、大きな透明の皿のような特大シャーレ・・・理科の実験などでお馴染みの形だけど、直径が３０㎝程度の巨大なものを僕のペニスのすぐ側に持ってきた。これはどうやら、僕が射精した精液を受け止めるためのものに違いない。あれだけ大きい上に、僕のペニスの先に斜めにして掲げられている。これなら多少勢いが強くても、逆に勢いが弱くてすぐ下に垂れてしまっても、どちらも無事に受け止めることができるだろう。しかも、シャーレの形状なので、端っこは垂直に曲がっていて、中に命中した精液が滑り落ちても外に溢れることはない。今から僕は、この三人の女性に手扱きされ、見ている前であの容器に射精させられるんだ・・・。

――何だか、あまりにも非現実的な光景に、僕の脳は変に冷静になってしまい、そんなことに感心したりしていた。
けど、その冷静な思考を弾け飛ばすように、僕の股間に座った女医さんが左手でペニスをぐっと握ると、皮を一気に下まで剥きあげた。

「うっ……！」
思わず声が出た。そんな僕の様子などお構いなしに、リエちゃんが宣言した。
「まずはボディマッサージで感覚を高めまーす！」
僕の身体の表面を、触れるか触れないかという微かなタッチで、なで回し始めた。それも腋から脇腹、乳首、お臍、太股、そしてVゾーン・・・。いずれも、性感帯とされる場所ばかりである。
一方、ペニスをつかんで皮を剥いた女医さんは、亀頭にローションをタップリとかけると、反対の手で亀頭を軽く握って、クチュクチュシコシコと刺激を開始した。左手は、皮が被らないように、皮をペニスの根元でしっかり押さえたままである。
「あっ、ぁあっ、ぅひっ、はぅっ、ぁっ、あぁっ、うくっ、ぅぅーっ・・・。」

必死になって声を我慢するけど、あまりの快感に恥ずかしい声が漏れてしまう。
ローションでヌルヌルになった手で亀頭を直接刺激するのって、こんなに気持ちが良いんだ。・・・これまでやったことがなかったけど、知らなかった。自分の右手とは、異次元の快感だ・・・。
「あらぁ〜、そんなに気持ち良い？・・・まだ本格的に扱いてもないよー？」
女医さんがほんの少しだけ意地悪な目でそう言うと、ゆっくりと見せつけるように、亀頭からペニス全体を握りしめて、いよいよ本格的にズリュッ、ズリュッと扱きだした。こっ、このっ、この刺激

と快感はっ、・・・がっ、我慢できないっ！！
「先生！・・・この子、もう息が上がっちゃってますよ！！・・・それにたまたまも完全に上がってきちゃってます。ちょっと手を止めないと・・・。」
「いくらなんでも、まだ早いでしょ？・・・一応、見てはいるつもりよ。」
「でも、この子、ローションオナニーは初体験みたいですし、亀頭を直接刺激されるのは皮オナニーと比べて、かなり刺激が強い筈ですよね？」
　そっ、そのとおりだっ。・・・亀頭を剥き出しにされて、ローションでヌルヌルに扱かれる快感は、もう頭がバカになりそうだっ。それに女医さんの手扱きの上手さといったらっ・・・。
「っつっ、ぅうっ、はっ、はひっ、ぃひっ、あっ、ああっ。」
　ここに来るまでの私生活で女の子とそういう仲になったことなどなかったので、他の人と比べることなど出来ないけど、それでも女医さんの手扱きが上手すぎることは理解できた。
　長年慣れ親しんだはずの自分の右手など一瞬で置いてきぼりにする、恐ろしい快感だった。しかも、リエちゃんと呼ばれる看護師さんが、これも絶妙なボディタッチで全身を撫で回して来る。最初はちょっとくすぐったいかな、という程度だったのに、いつの間にか脇とか乳首とかを触られる度に、ペニスの刺激とはまた異なる、ゾクゾクとするような刺激が全身を駆け巡るようになってきた。
　女医さんがペニスを扱く速度をかなり落として、ゆっくりクチュッ、クチュッというように搾るような動作になってきたけど、それを補って余りある快感が身体全体から押し寄せてきて、もう僕は頭がバカになってきた。とにかく射精したい、今すぐ思い切り射精させて欲しい。そんな僕の縋るような顔を見ながら・・・。
「ふふっ、ホントに大丈夫ぅ？　そんなに感じちゃうとちょっと心

配ねぇ。長く刺激に耐えて、一度の射精量を増やすのは、牧場の訓練の基本だよ？　あんまり〝早い〟子は困っちゃうねぇ。」
女医さんはクスクス笑いながら、そのゆっくりの手扱（てこ）きを続けた。
……そして、ショックなことに、その様子を見ていた看護師さんまでもが首を横に向けて、隠れるようにして少し笑った気がした。早漏を笑われているんだ！！・・・そう思った瞬間、どうしようもない悲しさと、今すぐ逃げ出したくなるような恥ずかしさで、またしても涙がぽろっとこぼれ落ちた。

「女の子にこういうことされるのは始めて？」
「……はっ、あっ、はひっ、・・・はいっ！」
「あらー、そうなの？　最近の子は進んでるからぁ、牧場役に来る前から、プライベートで直接精液を飲ませて上げてる子も多いって聞いたけど……」
「ぼっ、僕はっ……あぅっ！　……そっ、そういうのはっ・・・ぁひっ！」
言葉を出そうとすると、どうやってもその間に、恥ずかしい声が混じってしまう。僕が快感に飲まれてしまい、我慢できずにいることは明白だ。
「そうよねー。キミは童貞で、彼女いない歴＝年齢だったみたいだから、仕方がないかしら？・・・ふふふっ。」
またしても僕の心はガリガリと削り取られ、タバスコを塗り込められる。

「んー、やっぱり皮オナばかりしていると、我慢ができないのね。サイズを気にする女の子はあまりいないけど、早すぎるのはちょっとねー。・・・そんな包茎のよわよわおちんちんじゃ、せっかくできた彼女に振られちゃうよ。それでも良いの？・・・もう少し頑張ってよー。」
女医さんのあまりに辛辣な言葉に、僕は涙を堪え、赤くなって小

さくうなずくことしかできなかった。

「ま、でも、その心配も今日までね。これからはもう皮オナなんてできないし、いつも亀頭を直接刺激されていると、あっと言う間におちんちんも大きく発育して、早漏も解消されるからね～。」

『早漏！！』・・・ついにそう宣言されちゃった！

この一言で、とうとう僕の心は陥落し、声は出さなかったものの、涙がポロポロと止め処なく溢れだした。それと同時に、お臍に付く位ガチガチでビンビンに勃起していたペニスが、しおれたようにヘニョッとなって、うなだれてしまった。

「あらあら。また泣いちゃったの？・・・ごめんなさいねー。でも大丈夫。早漏なんて、あっと言う間に解消されるから。・・・ほら、現に今も、あんなに射精寸前だったのが、少し持ち直したわよね。」

女医さんがそう言うと、リエちゃんという看護師さんが僕の目をガーゼで拭いてくれた。

「じゃあ、また続きを頑張ろうね？！」

「あぁぅっ！」

突然、女医さんの手の動きが早まった。亀頭を――特にエラからくびれ部分を中心に高速で扱いてくる。

これが……本気のローション手扱きか。

女医さんに指摘された通り、僕はいつも皮オナニーしかしてこなかったので、剥き上げられた亀頭に直接与えられる刺激は大きすぎて、腰が逃げてしまった。

「こーら、ダメでしょっ。・・・ちゃんと、おちんちん前に突き出してっ！」

女医さんに言われてどうにか姿勢を正す。

あっという間に射精感は限界まで高まった。背中側、腰の上辺りに発生した巨大快感が、ペニスの方に降りてきて、そしてさらにペ

ニスを伝って出口――鈴口のすぐ手前まで来るような感覚を覚えた。
イクッ！・・・そう口から出そうになった直前。女医さんの手が止まる。
そして、きゅーっと上に上がったキンタマの根本を軽く握り、下にぎゅっと引っ張られた。
「ふぇっ？」
僕は思わず情けない声を出してしまった。爆発寸前だった快感が無理やり後退を余儀なくされたからだ。
「まーだダメー。いくらなんでも早すぎぃ。検査とはいえちゃんと出してもらわないと。それに、ちゃんと我慢に慣れてもらわないと。これから牧場でちゃんとやっていけないよー。」
女医さんの言葉はあくまで優しく、笑顔で語り掛けられたけど、絶望は大きかった。
「そんな悲しそうな顔してー。仕方ないなー、また行くよー？」
言うが早いか女医さんは再び手を動かし始めた。しかし、今度は先ほどと違って、まったく亀頭に触れてくれない。竿の根本から中ほどまでを、強めの握力で本当にゆっくりしごくだけだ。
計測の時に見せた動きと同じものであった。
最初の方こそもどかしく感じた、「遅くて強い手扱き」だったが、すぐにその感想は間違いだったと分かった。
ものすごい快感だ。ペニスの中の血管一本一本、凹凸のひとつひとつを探り出されるような感触。ペニスの形や快感をすごくハッキリと意識させられる。
女医さんの適度に強い握力によって、ペニスの形があぶり出されるかのようだ。

すごく気持ち良い。すごく気持ち良いけど・・・、ゆっくりすぎて、射精には至らない。

と、そこに、またリエちゃんのボディマッサージが加わった。脇の下から乳首にかけて、さわさわと撫でるようなタッチ。そして、両手で乳首を軽く摘むと、クリクリと刺激を加えてきた。

さっきは、ちょっとくすぐったいだけだと感じた乳首への刺激は、ペニスを扱(しご)かれながら、クリクリとされると、ゾクゾクとした感覚に替わり、ついにペニスの神経とつながったように感じた瞬間、身体全体を痺(しび)れるような快感が襲ってきた。

「あっ、ぁひっ、ああーっ！」

またしても、『もうイクっ！！』と思った瞬間、女医さんがまるで僕の感覚と完全にリンクしているかのように、射精のタイミングをピンポイントで読み、手を止めてしまった。

「あっ、あっ、はひっ、はひっ。」

僕は必死に腰をガクガクさせ、何とか射精しようと必死になるけど、開脚椅子に固定されていては何もできない。三人は、優しい笑顔で僕が必死にペニスを突き出しているのを眺めているだけだ。

そして、約1分程度たって、射精感が少し収まってくると、またローションを付けなおした手で竿から亀頭にかけて、ゆっくりズリュッ、ズリュッという手扱(てこ)きを開始する。これを、さっきから7回された？・・・いや、8回か？・・・回数すらわからないほど繰り返され、僕はもう何も考えることができなくなって、精神が壊れてきた。

「あっ、あっ、ひっ、ひぃーっ、イキたいっ、イキたいですーっ。おっ、お願いっ、お願いしますっ。・・・ぁひっ、ぃひっ、射精っ、射精っ、・・・させて下さいっ、何でもしますっ、たっ、頼みますっ、何でもっ、お願いっ、あっ、ぁぁーっ、イカせて、イカせて下さいーーっ！！」

「もういいかしら？」
「もう少し頑張れるんじゃないですか？」
「でも、こんなにおちんちんを前に突き出して、眼が泳いじゃってるし、そろそろ意識がないんじゃないでしょうか？」
「イカせてーっ、イカせてーっ、ひっ、ぁひっ、イッ、イキたいっ、イキたいですーっ、ひーっ、イカせてーっ、ぃひっ、あっ、あっ、ああーっ、あーん、あーん、イキたいよーーっっ！！」
「あらあら、とうとう泣きだしちゃったわね。それに腰もガクガクと痙攣（けいれん）はじめちゃったわ。」
「おねがいっ！！・・・おねがいっ！！・・・あっ、あふっ、ああーんっ、ぁあーんっ、イカせてーっ！！・・・はっ、早くっ、あーんっ、あーんっ、ひぐっ、イキたいーっ、ああーんっ！！」
「これなら良さそうですね。」
「じゃあ・・・。」
　ぴしーっ。
「あひーっ！！」
　ぺっ、ペニスを鞭打たれたっ！！・・・かっ、快感がっ！・・・きっ、気持ちいいっっっ！！・・・ばっ、バカになるぅぅぅーー！！！
「もうひとつ。」
　ぱしーっ。
「ひーっ、ぃひーっ、ぃっ、イクっ、イクーっ、イックーーーぅぅっ。」

　びゅるるるっるれっつつっ。ぴゅるるるっるっるっ。どぴゅるっ、どぴゅーっ、どぴゅるっ、どぴゅっ、どぴゅっ！！！！
　今まで見たことのない勢いで精液がペニスの先から吹き出した。恐ろしい快感でもう何も考えられない。眼の端では、メグちゃんが巨大シャーレを動かして、一滴も漏らさず受け止めているのが見える。

びゅくっ、びゅくっ、びゅっ、どぴゅっ、どぴゅっ・・・。
「たっ、たすっ、助けてっ、とっ、止まらないっ、ひっ、ぃひっ、死ぬっ、死ぬーっ！」
吐精の脈動が何度も繰り返し襲ってくる。いつもは４回位の「ドピュッ」は、もう１０回位になる。
ぴしーっ。
「ひっ、ひーっ、ひーっ、きーっ、きひーっ。」
射精している最中にまたペニスを鞭打たれ、それが信じられないような快感となって全身を貫き、甘美な痙攣（けいれん）とともにキンタマの中身が全部出てしまう感覚が脳天を沸騰させた瞬間、とうとう僕は意識を手放した。

―――――――――――――――
―――――

「先生ー。この子、白目剥いちゃいましたー。」
「でも、おちんちんの鞭打ちだけで射精できたわね。この子、見込みあるわよ。初日でこれなら、少しすれば鞭打ちだけで簡単に射精するようになるかもしれないわね。・・・じゃ、起こすから、アヤちゃんは計測してちょうだい。」

―――――――――――――――
―――――

「目が覚めたようね。・・・どうだった、おちんちんを鞭で打たれて、気持ち良かったでしょう？・・・痛くはなかったんじゃないかしら？」

そうだ・・・。思い出した・・・。最後の瞬間、ペニスを鞭で打たれて、それが最後のトドメになって、一気に射精したんだ・・・。確かに、痛かったという記憶はない。それより、打たれた瞬間、ものすごい快感がペニスから全身に走ったような気がする・・・。僕

はどうなっちゃったんだろう？・・・鞭を打たれるって、あんなに気持ちが良いんだ。・・・またペニスを鞭打ちされたら、射精しちゃうかもしれない・・・。自分でも知らなかったけど、もしかすると、僕はペニスを鞭打ちされて射精するようなヘンタイだったんだろうか・・・。こんな性癖がバレたら、きっと塚田さんにも愛想を尽かされちゃう・・・。

「いっぱい出たよねー。えらいえらい。おちんちんの小ささの割に沢山お射精できたんじゃない？・・・うんうん、ここで一番大切なのは精液量だからね。どのくらいイッたのかしら？」

「8．1ｍｇです！」

メグちゃんが僕の精液の入ったシャーレを、そのまま計量器に載せて、全体の重量を計測した。

「やっぱり！・・・さすがだわね。6ｍｇ出す子はときどきいるけど、7ｍｇを超える子は、めったにいないのよ。8749号クン、キミはこのエリートが集まる実験牧場にあっても、トップクラスの成績だよ。これなら手搾り牡畜どころか、ブランド牡畜も夢じゃないかもしれないわ！・・・これからも是非、その調子で良質の精液をドピュドピュ射精し続けてね。」

そういうとおもむろに女医の先生はシャーレに人差し指を突っ込んで精液をすくい上げ、それを自分の口の中へと持っていった。

「うーん！・・・これは凄い！・・・中卒組なのに味も濃くて、素晴らしいわよ！？・・・ほら、リエちゃんもメグちゃんも味見してみてっ！」

「良いのですか？」

「大丈夫よー、これは検査用だからね、製品にする訳じゃないんだからー。射精した量はもう計測しているし、検査には、この半分も要らないのよー。」

「じゃあ・・・。」

看護師さん二人もシャーレから空いた右手の人差し指で僕の精液

をすくい取ってひと舐めした。

「あっ……ホントだ。味濃い。……凄くおいしい！」

「これは本当に今後に期待だね。ぜひブランド牡畜を目指して頑張ろうね～。」

僕はまったく整わない荒い息を吐きながら、椅子の上でぐったりとしつつ、三人が自分の精液を舐め、味の感想を言い合うのを聞いていた。

「気持ち良かったかな～？でも、こんなに気持ちの良い射精ができるのは、これが最初で最期だからね？・・・今日は検査だから、手で丁寧にやってあげたけど、これから毎日、搾精するときは機械で搾ることになるんで、かなり違った感覚になるんだよ～。」

「？？？？？」

「こんなに気持ちが良い射精は、明日からはできないからね～。おわかるけどさ～。キミも早く慣れて頑張ってね～。・・・ま、直ぐに仕事の射精は大変だよー。覚悟しておいてね～。」

「キミの場合は多分大丈夫だと思うけど、射精量がノルマに満たないと、規定量になるまで強制的に射精させられるんで、かなり辛いだろうしね～。」

「そうだね。でも、キミの場合だと、電気刺激が必要になることはないんじゃないかな？・・・それよりも鞭で打たれる快感を先に覚えるかもだねー？」

「うん。いずれ訓練が進むと、手扱きなんかしなくても、おちんちんを鞭で打たれただけでドピュって出ちゃうようになると思うよ。幸せだよ～。」

この最期の一言で、何故か僕のペニスは僕の意志に反して反応し、力強く上を向いてしまった。

第7話　検査搾精（後書き）

早くもMの資質を見せ始めた主人公ですが、このあとはどうなるのでしょうか。

第8話　歯科検査、そして・・・

「あとは虫歯の検査ねー。はい、あーんして。」
口を大きく開けると、歯科で使う小さな鏡がついた器具を左手に持ち、右手にはやはり歯科で良く使う、先端が曲がった爪楊枝のような器具を持って、女医さんが僕の顔を覗き込んだ。この人、普通の医師だけでなく、歯科医師の資格も持ってるんだろうか？
そんな僕の疑問を察したのか、女医さんが話しだした。
「ふふっ、あたしが虫歯の検査もするのが不思議なのかしら？・・・人間だと、確かに医師免許と歯科医師免許は別なのよね。でも、獣医の免許はひとつなのよ。あたしは人間の医師の免許は持っていないけど、獣医師の免許を持ってるんで、牡畜は身体から歯まで、全部を診ることができるの。・・・ちなみに飼育員の免許も、人間の看護師の免許とは違うのよ。チエちゃんとメグちゃんは、飼育員の免許を持ってるけど、看護師の免許は持っていないわよね？」
これを聞いて、またしても僕は大きなショックを受けた。てっきり医者だと信じていた女医さんは、実は獣医さんだったんだ！！・・しかも、看護師さんだと思っていた二人は、飼育員なんだ！・・・僕はもう人間ではなくなってしまい、家畜扱いなんだということを、これでもかと再確認させられた。
そんな僕の心の中など、まるで関係ないというような口調で、獣医さんが聞いてきた。
「今、どこか痛いところとか、沁(し)みたりするところはあるかな～。」
口を開けていて、話ができないので、首をフルフルと微(かす)かに横に振って否定する。
「そっかー、じゃあ見せてね。・・・あ、・・・左下7番と、右上6番、・・・と、それに前歯にも・・・えーっと、左上1番もそうか・・・。全部で3箇所虫食ってる。」

「ちょっと簡単な処置だけしておくわね。」
そう言うと、何やら液体の薬のようなものを3本の歯に塗って、それからピストルのような形の器具で光（？）を当てるということを、それぞれの歯に対して行った。
「はい、これでもう、虫歯は進行しなくなったからね。でも、これは虫歯治療・・・つまりきちんと削って、そこを埋めた訳じゃあないんだ。」
「？？？」
「つまり、これ以上の虫歯の進行を止めただけで、正式な治療にはなっていないの。だから、固いものを噛むと、虫歯のところから割れたり欠けたりしちゃうんだけど、この牧場内では食べ物はゼリーしかないんで、噛むことがないし、それ以前に虫歯になる要素が一切ないんだよ。」
よくわからないけど、要するに応急処置ということなのか・・・。
「だから、この簡易処置・・・虫歯菌を全部殺菌死滅させて、これ以上虫歯が進行するのを止めただけでも、2年間は問題ないけど、ここを出たら必ず自分で歯医者に行きなさいね。わかった？」
今度は、僕は首を縦にフルフルと振って頷（うなず）いた。

「じゃあ、これで歯の検査はおしまいよ。キミがお話するのも、これでおしまいだから。これをつけてね。」
そう言うと、プラスチックでできたゴルフボールを少し細長くしたような形状の、マウスピース（？）を口に入れられた。ゴルフボールというよりは、小さめの洋梨の左右に、奥歯を受け止めるマウスピースがついているといった見た目で、上下の歯の間にきっちりとはまり込み、口を軽く開けた状態で固定され、完全に口を閉じることができない。真ん中の洋梨みたいな部分は、中心に穴が開いていて、それは洋梨の中心を貫通して、前歯の部分から喉（のど）の奥側（洋梨の細くなったほうが喉の奥まで入ってきている）まで、直径1.5センチ程度の穴となっている。これって何をするものなんだろう？

このマウスピース付き洋梨（？）は、そんなに大きいものではないので、苦しいということはないけど、前歯のすぐ裏側の、口の入り口付近から喉（のど）のほうまで続いていて、しかも入り口のほうは大きく膨らんでいるので、舌全体を先端から付け根まで、ぐっと押しつけられている感じがして、舌がまったく動かせない。医者で喉（のど）を診察するのに、スプーンのようなもので舌を押さえつけられたときに感覚が似ている。また唇はかろうじて閉じることができるけど、歯を閉じることができないため、しゃべることができない。

　このマウスピースは、両側からプラスチックの細いベルトのようなものが出ていて、それを頭の後に回して、そこでマジックテープで固定された。なんでこんなものをわざわざつけるんだろう・・・。

「これでキミは、もうお話をすることができなくなったよ～。家畜が話をしちゃ、やっぱり変だよね？・・・でも、聞くことはできるから、飼育員の指示には従ってね。言うことを聞かないと、どうなるかは、もうわかってるよね～。キミも痛い目には会いたくないでしょ？」

　えっ？！・・・これをずっとつけてるんですか？

　そう言おうとしたけど、口から出たのは言葉にはなっていなかった。

「えっ？！・・・ぉえおぅうぉうぇえぅんぇうぁー？」

「ごめんね～。何を言っているのか全然わからないな～。家畜の鳴き声がわかる飼育員は一人もいないんだよね～。ま、生活には何の問題もない筈だからさ、安心してね。・・・君たちは2年間、射精することだけを考えていれば良いんだよ～。」

　またしても愕然（がくぜん）とした。これから2年もの間、僕は話を一切させて貰えないんだ！・・・それも飼育員さんだけじゃなくて、他の牡畜とも話ができないなんて！！・・・忙しい飼育員さんはともかく、同期で入った他の牡畜とは、いろいろと話をして情報交換とか、寂しさを紛らわせたり仲良くしようと思っていたのに、それも出来ないんだ！・・・ここでは、家畜と同じ扱いになるっていうだけじゃ

なくて、家畜と同じ生活を強制されるんだ。だから裸にされたし、話もできなくされちゃったんだ！！

この口枷は、馬の轡（くつわ）のようなものなんだろう。でも、これをつけたままで食事はどうするんだろう？・・・ゼリー状の食事だって言ってたから、この状態でもすすって食べられるってことなんだろうか？・・・今の言い方だと、食事の度に外してはくれなさそうなんだけど、なんだか食べにくそうで、却（かえ）って効率が悪いんじゃないだろうか・・・。

この様子だと、次はいったい何をされるんだろう？・・・まさか、鼻輪とかつけられたり、焼き鏝（ごて）でも当てられたりするんだろうか。それとも、あの識別番号をどこかに入れ墨でもされるんだろうか。何をされるにせよ、今の僕は電動椅子にM字開脚姿勢で固定されていて、大事なところを全部差し出すようなポーズをしている。両手はバンザイで頭の上に固定されていて、ビクとも動かない。それこそ、このまま去勢しますと言われても、何もできない。

そんな僕の不安をよそに、獣医さんが優しい顔で話しかけてきた。

「さ、時間もあまりないことだし、どんどん済ませちゃおうね。もうすぐ全部終わりだからね。」

そういうと、次のステンレスパッドを出してきた。なんだかわからないけど、ペンチの先にマッチ箱程度の装置のようなものがついたものが2つあって、それ以外にもガラスのスポイトのようなものとか、薬ビンとか、脱脂綿やピンセットなんかが乗っている。

獣医さんがてきぱきと、薬ビンを手にとると、ピンセットで脱脂綿をひとつ取り、薬ビンに浸して、僕の左右の乳首を拭（ぬぐ）うように塗り始めた。ちょっとスースーするこの感じと、アルコール臭からすると、消毒薬か何かだろうか？

次いで、先生が、僕の乳首を摘んでクリクリと刺激したり、引っ張ったり始めた。何だかちょっとくすぐったいような、変な感じだ

けど、何をしてるんだろう？
「うーん、まだちょっと足りないかな～。やっぱりこれ、使ってみるね？」
ガラスの小さいパイプに、ゴムのスポイトがついたようなものを出してきて、僕の乳首にそれを吸いつけた。まず左側、そして右側。
結構、強力なスポイトで、乳首をキューッと吸い出している。ガラスの中で、乳首が思い切り吸い出されて、大きく肥大してきた。といっても、そもそも男の乳首なんて小さいものだから、どんなに吸われてもせいぜい直径6ミリ位、高さも同様に6ミリ位になってきただけなんだけど、でも半分皮膚に埋まっていた乳首が硬くなって、胸から突き出すようになった。まるで乳首がしこって勃起しているようだ。
「よし、この段階じゃ、こんなものかな～。」
そう言いながら、スポイトを引っ張って、キュポンッと外すと、乳首をちょっと摘(つま)んでみてから、ペンチの先端にマッチ箱がついたような器具を取り出してきた。あのマッチ箱の中には、何か仕掛けがあるんだろうか？・・・そんなことを漠然と考えていたら、僕の乳首を挟むようにその先端部分を当てると、把手(とって)の部分をぎゅっと握りしめた。
ガチャンッ！！
「うぁあああぁぁんぁぁああーーー！＄％＆'＝＊＋＼＿＜！！・・・ぃあぃあぁいぁいぁいあいあいあぃぁーぃぁーーー！！！！！」
(痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！！！！！！！！！！！！)
キュポンッ。
「うん、片方は終わったからね。反対側もやっちゃおうね～。」
(嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ助けて助けて助けて助けて嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ助けて助けて助けて助けて嫌だ嫌だダメーッ！！！！！！！！！

！！）

ガチャンッ！！

「うあぁぁあぁぁあぁぁーーーーー！＄％＆'＝＊＋＼＿＜！！・・・ぃあぃあぁいぁいぁいあいあいあぃぁーぃぁーーー！！！！！」

（痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！！！！！！！！！！！！）

「はい、できたよ〜。薬つけて上げるからね〜。」

透明のジェルのような薬を両方の乳首に塗られると、痛みが少しだけ和らいだ。けど、まだジンジンと痺（しび）れるような痛みが両方の乳首から襲ってくる。

「これね、認識票をつけるんで、パイプピアスをつけたんだ。ほら、見てごらん。」

おそるおそる自分の胸を見ると、両乳首に細いバーベルのようなものが貫通していた。バーベルの両端は、金属の丸い玉のような形になっていて、パッと見た目には両方の乳首とも、まるで乳首が三つ並んでいるような見た目となってしまった。ただ血はもう殆ど出ていない。

「これは直径3ミリのパイプピアスでね、・・・ほら、わかるかな〜、真ん中に穴があいているでしょう。それでね〜、このペンチみたいな器具はね〜、装着するときピアッサーでパイプを通してから、同時に両端を自動的に折り返し加工しちゃうんだ。・・・ほら、両端がハトメみたく金属を折り返してあって、丸くなっているでしょう〜。その部分の直径は6ミリ以上あるんで、もう絶対に抜けないんだよ。」

「それと、今塗ったお薬だけど、これはさっきも使った特製傷薬でね、消毒成分と麻酔成分と細胞活性化成分が混ぜてあるんだ。だから痛みが緩和されるし・・・といっても、そっちはせいぜい数時間しか効果がないんだけど、でも細胞活性化成分によって、傷ついた細胞がみるみる修復されるから、麻酔が切れてくる頃には、だいぶ

痛みも和らいでいると思うんだ。」
「しかも、医療用接着剤が入っているんで、一日もすると傷が殆ど直っちゃうんだよ〜。」
「ただ、接着剤が強力なんで、ピアスが皮膚に完全に癒着しちゃうんだよね。だから、ピアスを外すのは、もう無理だけど、まあ、小さいものだから、直ぐに慣れると思うよ。それにね、今は乳首が三つあるみたいだけど、このあと乳首がどんどん育ってきて、ピアスは殆ど目立たなくなるから、そんなに気にすることもないんだよ。しかもこれ、最高級の医療用チタンパイプなんで、金属アレルギーは出ないから心配いらないよ〜。」
そう言いながら、左のパイプピアスには白いカードが、右のパイプピアスには、登録番号が大きく記載されたカードが、それぞれカードの上の部分にある穴に小さなボルトを通して装着された。
僕はもう、眼から涙をポロポロ零(こぼ)していたけど、麻酔が効いてきた所為(せい)か、最初ピアスをされたときみたいに、ズッキンズッキンする我慢できない痛みではなくなってきて、何とか息を整えることができる程度になってきた。といっても、乳首はまだジンジンと痺(しび)れるような痛みが続いている。これ、いつになったら痛みが和らぐんだろう・・・。今ならギリギリ我慢できるけど、あと数時間で本当に痛みが退(ひ)いてくれるんだろうか・・・。

「今つけたカードだけど、これから何かするときは、必ず内部データを書き換えるようになるんだ。といっても、キミたちが何かやる必要はないけどね。すべてこっちの操作で、自動的にダウンロードで書き換えが行われる筈だから、そのカードをいつも胸に付けているだけで良いんだよ〜。そのために、外せないようにピアスで付けたんだから。・・・これから2年間、ここに居る間は常にそれを胸に付けておいてね？・・・最初は邪魔かもだけど、直ぐに乳首の感度が上がって、刺激が気持ち良くなると思うよ〜。」

そんな話をしていたら、いつの間にか真っ白だった筈のカードに、僕の股間を正面からとバックから、それぞれアップで撮影した写真が浮かび上がってきた。驚いてガン見していると、飼育員さんが教えてくれた。

「それ、さっき射精する直前の一番大きくなったところで撮影した写真を転送したのよ。そのカードは転送された画像データを自動的に表面に表示するようになっているの。牲畜の識別は顔じゃなくっておちんちんとたまたまだから、それがキミを識別するための画像として、そこに表示されたのよ。」

「それと、今後キミのおちんちんやたまたまが発育したり、発達したり、とにかく形やサイズが変わったときは、その都度写真を撮るんだけど、そうすると自動的にその画像は書き換えられて、最新のものに更新されるの。それによって、パッと見たときでも一目でキミという牲畜を識別できるようになっているのよ。・・・まあ、このあと直ぐ、最初の更新がある筈なんだけどね～。」

そうか、どうやらここでは、僕たちの識別アイコンは、顔ではなく股間だということか・・・。

一から十まで、僕のこれまでの常識というか考え方が次々とひっくり返されて行く。その度に、もう何も驚くことはないと思うのに、次の瞬間に自分の考えがまるで違っていたことを思い知らされることの繰り返しだ。

ようやく、痛みが和らいできた。・・・一日目からこんなに辛いなんて、どこにも情報がなかったし、誰も教えてくれなかった。でも、あれだけテレビで人権侵害がどうのこうのと、毎年話題になっているということは、要するにこういうことだったんだ。こんなに酷い目にあうとわかっていたら、誰も来たがらないだろう。でも、これは男性の義務なんだ。どんなに辛くても、とにかく2年間のお務めを果たさないと、一人前にはなれないんだ。そう考えるようにしないと、とても耐えられない。

それにしても、胸にぶら下がったカードを見ながら、ふと思ったのは、よもや自分がピアスをされて、それもファーストピアスが乳首などとは、夢にも思わなかったことだ。勿論、クラスメートでも、ピアスをしている子は何名か知っているし、男子でもピアスしているヤツがいるのも事実だ。でも、皆、普通に耳にしていて、・・・というか、ボディピアスなんて、特殊な性癖の奴らが変な趣味でするものだと思っていた。こんなところにピアスをされてしまい、しかも、聞き間違いじゃなければ、もう二度と外すことはできないと言われた気がする。クラスメートでピアスしている奴らも、学校などでは外していたから、単に小さな穴があるだけで、言われなければ気がつかない程度だったけど、こんなに目立つものをされちゃったら、人前では裸になれない。これでもし、あそこの毛が生えてこなかったら、僕はもうツルツルで乳首にピアスをあけたドMのヘンタイにしか見えなくなる。他の牧場役修了者は皆、どうしているんだろう・・・。

父さんみたいに兵役に行った人は、こんな目には会っていない筈だけど、大多数の男性は牧場役に行っている筈だ。でも、大人の男性で、胸にピアスをつけた人なんて、まったく記憶がないんだけど・・・。（父さんの年代では、隣国との情勢が緊迫化したことから、兵役に志願する人も今よりは多かったみたいだけど、それでも牧場役のほうがずっと多い筈だし・・・。）

「さ、じゃ、あとひとつ、残ったところをやっちゃおうか。・・・これで最後だから、もう少しだけ我慢してね～？」

ようやく麻酔が効いてきて、痛みもかなり少なくなったので、そんなことを何となく考えていたら、獣医さんが、またしても不気味なことを言い出した。

今度はどこに何をされるんだろうか。「不可逆的な身体改造」・・

・あの承諾書の文字が、頭の中で不気味に反復し、不安と恐怖が否応もなく高まってくるけど、手足を拘束されている状態では、僕には何もできないし、どうしようもない。僕はひたすら身を硬くして、次にされるであろう「何か」を待ち構えた。

第8話　歯科検査、そして・・・（後書き）

いよいよ家畜として扱われだしました。主人公の意識は、まだついて行けていませんが、もう少しで家畜化が完成して、牧場での生活が始まります。（まもなく第１部終了となります。）

第9話　家畜化の完成

次は何をされるんだろう？不安になっていると、新しいステンレスの四角いパッドが出てきた。今度は、また少し違った器具がいくつか載っている。ピンセットとか脱脂綿とかガーゼとか、何か薬品が入っている小瓶もある。でも、一番ヤバそうなのは、またしても用途不明のペンチのような形をしたプラスチック製の器具だ。この器具、握る部分はさっきのピアスをされた器具と同様に、ペンチのような把手（とって）になっているんだけど、先端の挟む部分は半球を少し細長くしたような筒になっていて、ペンチのように何かを挟んだりするようには見えない。

さっきからのいろいろで、羞恥心はもうあまり感じなくなったけど、今の僕は手足を椅子に固定され、しかも大きくM字開脚姿勢を取らされているので、股間から肛門まで、一切合切をすべて晒（さら）した態勢で、どこも何も隠すことができない。しかも口枷を嵌（は）められて、話をすることもできない。アーウーという程度の声が出せるだけで、それも舌を押さえられてしまっているため、小さな音量で、意味のある言葉はまったく出せない。

僕が不安に怯（おび）え、体を硬くしていると、またしてもペニスの皮をグイッと剥かれた。さっきの身体測定のときも、ペニスの皮を剥かれたけど、あのときはまだ椅子に固定されていなかったし、話をすることもできた。でも、今度は、されるがままだ。自分が何をされるのかわからない家畜が、獣医さんのことを恐れる気持ちがよくわかる。いきなり乳首にピアスを開けられたりしたし、動くことも話すこともできないのは怖い。

・・・と、ペニスの皮を剥いた飼育員さんが、ピンセットで脱脂綿を摘（つま）むと、小瓶の中の黒っぽい液体に浸して、タップリ脱脂綿に

しみ込ませて、僕のペニスを拭きだした。特に亀頭からカリ首の下、尿道口、それに竿の根元のほうまで、しっかり塗って、恥垢などが残らないように拭き取っている。この色と臭い、それにピリピリして沁みる感覚からして、ペニスを消毒しているみたいだ。さっき、乳首にピアスを開けられたときも、同じものをまず塗られた・・・。嫌な予感しかしない・・・。まさか、ペニスにピアスをされるんだろうか・・・。

そんな絶望的な表情の僕のことなど、一切お構いなく、飼育員さんがペニスの消毒を入念に行うと、獣医先生は、あの謎の器具を取り上げた。
まず、把手の間にあるノブをくるくると回して外すと、先端の筒の部分から、半球状のプラスチックのカップの先端に、ネジを切った棒がついたものが出てきた。どうやら、あの棒をさっきのノブで固定しているらしい。

僕が不安そうな顔をしていたためか、飼育員のお姉さんが話しかけてきた。
「キミは仮性包茎だよね。しかも仮性度は9、これはかなり重症だよ。一応、手で剥くことはできるみたいだから、真性包茎ではないけど、仮性度9って、勃起しても先端が剥けてこないってことだからね。やっぱり、包茎だとおちんちんがちゃんと発育しないよね。それとも逆に、ミニサイズだから包茎になっちゃうのかな。」
またしても僕の精神をパキパキとへし折るようなことを、平気で口にする。
「まあ、ここでは仮に仮性度1でも、搾精する都合で処置が必要なんだから、皆一緒だよ。完全露茎って認定されるおちんちんなんて、100匹に1匹か2匹くらいしかいないんだよ。」
「そうね、完全露茎ってことは、勃起していない状態でも、亀頭が常に完全露出していて、しかも手で皮を被せてみても、手を離すと

ひとりでに皮が剥けた状態に戻っちゃうおちんちんのことだから、めったに見かけないわよね～。」
「そうだよね。搾精筒にせよ手搾りにせよ、皮かむりだと上手くできないから、包茎はちゃんと解消しちゃわないとね。ここは実験牧場だから、獣医の先生がやってくれるんだけど、一般の牧場じゃあ飼育員がやるんで、キミたちは恵まれているんだよ。光栄に思ってね？」

そんな話をしていると、先生が僕のペニスをまたしてもグイッと剥き上げて、外した棒つきのプラスチックカップを亀頭に被せてサイズを確認し出した。
「もっと小さいカップでなくて大丈夫ですか？・・・下のサイズも出してみましょうか？」
「これで大丈夫じゃないかしら？・・・ほら、丁度ぴったりよ。」
そう言いながら、亀頭にピッタリ嵌まるようにカップを当て、その上から包皮を元に戻すと、包皮の口の部分をカップの上の棒に届くまで引っ張り上げ、そこに結紮バンドで包皮口をキュッと締めて固定されてしまった。ちょっと痛かったけど、痛みは別に我慢できないほどじゃない。ただ、包皮が強く引っ張られたような違和感があり、包皮と亀頭との間にはめ込まれたカップのせいで、ペニスはそこだけプクッと膨らんだようになっている。
と、先程外したペンチのような器具を持ってきて、ペニスの亀頭部分がペンチの先端の筒のような部分に入れられ、最初の状態のように把手の間のノブを回して、カップがついた棒をペンチにしっかり固定された。ノブのネジが締まってくると、亀頭の部分全体が強く圧迫されるというか、筒の中に引っ張られるように感じて、何だか物凄くマズい状況に感じてきた。何かとんでもないことをされるんじゃないだろうか。僕の不安と恐怖がピークに達した、まさにそのとき・・・。

「はい、全部ＯＫね。じゃ、割礼いっきまーす！」

カシャン！

「んゃあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁーーんあぁーーーーんあぁぁあぁーーー！＄％＆'＝＊＋＼＿＜！！ぃあぃぃあぃぃあぃぃあぃいあーぃいぁーいぁいあぃあぃ・・・。」

（痛い痛い痛い死んじゃう死んじゃう死んじゃう痛い痛い痛い痛い死んじゃう死んじゃう死んじゃう痛い痛い痛い痛い！！！！！！！！！！！！！）

「はい、これでキミも一皮ムケた完全な成体になれたよ〜。ほら、見てごらん。おちんちん、カッコいいでしょ〜。・・・綺麗に切り取れてよかったね〜。」

筒からペニスを抜くと、僕のペニスは見事に包皮を失って、亀頭がピンク色の顔を出していた。包皮を切り取ったラインは、丁度カリ首から少し根元に下がったあたり、くびれの部分からは１センチくらい根元に近い部分で、そこにはペニスをぐるりと一周するように、小さなプラスチック片がたくさん見えていた。眼を凝らして見ると、なんだか小さなホチキスの針を連続させたような形のものだ・・・。ひとつひとつのホチキス針は、独立しているみたいだ・・・。血はまったく出ていない。けど、物凄い痛みで、息もできない。ペニス全体がズッキンズッキンと痛み、どこが痛むのかすら、わからない。もし目隠しをされていたら、ペニスを切り取ったと言われても信じちゃっただろう。それくらいの激痛だった。（実際、カシャンってなったとき、僕はてっきりペニスを切り取られたと思った位だ。）

「はっ、はっ、はぁっ、あはっ、ぁはっ、ぁひっ、はっ、はっ。」

「じゃ、またこの薬を塗っておこうね？・・・これ、結構よく効くでしょ。胸の痛みは、かなり治まってきたんじゃないかな〜。この痛み止め成分と細胞活性化剤によって、１日程度でキズの部分に薄皮ができてくるんだよ。しかも医療用接着剤は強力だから、傷は一

瞬で癒着して、まず開くことはないし。」
そう言いながら薬を塗られると、確かに少しずつ痛みが退いてきたようだ。切り取られたときは、あまりの激痛に息も絶え絶えだったけど、次第に息が整ってきて、胸のピアスは、もう殆ど痛みがない。とすると、ペニスの傷も夜までにはかなり和らいでくれるのかもしれない。（そうなって欲しい。）
先生から器具を受け取った飼育員さんが、ネジノブを緩めて、さっきのカップ状のものを筒から取り出すと、切り取られた包皮が出てきた。こっちは血だらけで、僕のペニスから切り取ったという証拠が残っていた。看護師さんは、それを器具から外すと、床にあったバケツのようなごみ入れに、ぽいっと投げ捨てて言った。
「さ、これで全部おしまいだよ。よく頑張ったね～。これからもその調子で2年間頑張ろうね～。」
「足にプロテクターをつけてあげるから、そうしたらあのドアから出て、次の大広間に行って待っていてね。人数が揃ったら、別の飼育員がキミたちを連れて放牧地を回って、その後キミたちの畜舎に連れて行ってくれる筈だからね。」

そう言いながら、飼育員さん二人が両側から僕の両手それぞれのベルトを外して、ボクシンググローブのような形をしたプラスチック製のものを手にはめられた。中はミトン形状の手袋のような作りで、わりと余裕があるけど、外側は丸いただの球体で、まるで国民的人気マンガの青い狸猫に見える。このグローブ（？）、手首のところでマジックテープで留めてあるだけなんだけど、今の僕は両手が使えず口も使えないため、自分では絶対に外せなさそうだ。
次に二人は僕の足の拘束を外すと、紐サンダルのようなものを履かせた。これもプラスチック製で、ベルトで足に固定するようになっているだけなんだけど、なぜか裏側のところに、直径１０センチ程度の半球状のボールがついている。土踏まずよりは少し前で、普通に立ち上がったとき、一番体重がかかる部分だ。

そして最期に、膝の拘束を外すと、スポーツで使う膝プロテクターのようなものを、やはりベルトで装着された。これもプラスチック製で、膝の前側だけじゃなくて裏側までしっかりと覆ってあって、膝の動きが制限されるみたいだ。

「じゃ、簡単に説明するね。その前足につけたものは、前足枷といって、前足の指を保護するための、いわばウマの蹄鉄のようなものだね。・・・歩くときには必ず前足を使うから、指を保護するものだよ。次に後ろ足につけたのは、裏側にゴムボールを半分に切ったようなものがついているでしょ？・・・これは一応、肉球のつもりなんだけど、そうは見えないかな？・・・そして、膝につけたもの、これも歩くときに膝を保護するためのものなんだ。それをつけると、膝を曲げるほうは普通にできるし、お座りもできるけど、膝を真っ直ぐに伸ばすことができなくなるんだよ。」

そう言いながら、スイッチを操作すると、M字開脚姿勢が閉じて、普通の椅子のような形状になり、どんどん下がって腰が床面に近い位置まで下りてきた。僕はようやくこれで開放されるという安堵感から、飼育員さんが話したことを軽く聞き流していたけど、直ぐにこれが極めて重大な意味を持っているということを、嫌でも思い知らされることになるとは・・・。

「さ、椅子から下りてね。自分で歩けるかな？・・・もう痛みはほとんどないでしょ？」

そう言われて気がついた。乳首はもうほとんど痛みが退いていて、何だか邪魔なものがぶら下がっている違和感だけだ。ペニスも、少し痛みが残っているけど、充分に我慢することができる。さっきのズキズキという痛みではなく、動かすと鈍痛がある程度になっていた。

僕は身体をずらして床に下りると、普通に立ち上がろうとして、いきなりバランスを崩してひっくり返った。

「あ、ダメだよ～。キミは牡畜なんだから、後ろ足だけで立ち上がることはできないんだ。足の裏の肉球があるんで、バランスが難しいよね？・・・しかも膝が曲がったままで伸びないんで、どうやっても後ろ足だけで立ち上がるには重心が保てない筈だよ？」

「そうだよ。牡畜は必ず四つん這(ば)いで歩かなきゃ・・・。そのための前足と膝のプロテクターなんだよ～。」

　またしても愕然とした。僕にはもう手がなくなって、前足になっちゃったんだ。しかも、その前足は、まるい拳骨状態で、ものを掴(つか)むことはできない。本当に四つん這(ば)いで歩くことしかできないみたいだ。

「これで牡畜登録はすべて完了だからね。立派な牡畜になれて良かったね。これをつけてあげるよ。」

　そう言うと、僕の首に黒い革製の首輪をつけてくれた。首輪には縦横ともに１０センチ位の、わりと大きめのベルがぶら下がっていた。

「可愛いでしょ？・・・やっぱり牡畜には首輪がなくっちゃね？・・・このベル、昔は実際に牡畜が広い放牧場のどこに居るのかを知るために利用していたらしいけど、今はその胸のカードでキミたちの場所が常に把握できてるんで、意味はないんだよね～。ま、昔からの名残なんだけどさ、でもファッションとして最高だよね？・・・卒業するときには、記念にあげるから、是非持って帰ってね。」

「うん、この首輪、卒業しても着用する人はわりと多いみたいだよ。」

　本当にそんなもの、外で着けている人は居るんだろうか？・・・少なくとも僕は見たことない。けど、ここで逆らう意味はないし、

せっかく飼育員さんがつけてくれたのを拒否するのは、申し訳なかったんで、ちょっとニコッと微笑んだら、飼育員さんも嬉しそうな顔をして、頭とキンタマを撫でてくれた。

「じゃ、そのドアから出て向こうの大部屋に移動してね。取り敢えず、今はここでお別れだよ。でも、キミはあたしたちが飼育することになるらしいから、またあとでね～。」

　僕を担当してくれるって、もう決まってるんだろうか？・・・カード番号にそんなことが書いてあったのかな・・・。よくわからないけど、言われたとおり、ドアから出ようとして、ふとドアノブを開けることができないと気がついた。高さについては、膝立ちすれば充分に手が届く。でも、ノブが丸い形状をしているので、握ることができない。僕がドアの前で四つん這いのままノブを見上げていると、メグちゃんが気がついてくれた。
「あ、ごめん、キミはもうドアを開けられないんだよね。ここのドアは全部、この丸いノブを回す必要があるんで、人間は普通に出入りできるけど、牡畜は自分ではドアが開けられなくって、出入りできないようになってるんだ。キミの前足は指で何かものを掴んだりする動作ができない筈だから・・・。ほら、動物の前足は、せいぜい獲物を押さえる程度でしょ？・・・キミも牡畜の生活に早く慣れようよね。」
「ここのドアは全部これなんだよ。あたしたちは普通にドアを開けられるけど、キミ達は絶対に出られないんで、すごく便利なんだよ～。」
　今、飼育員のお姉さんは僕のことを「前足」と呼んだ。つまり、さっきも思ったとおり、家畜にされちゃった僕には、もう手はなくなっちゃって、前足になっちゃったんだ・・・。この言葉ひとつを取ってみても、もう僕は家畜なんだということが、強く意識させられ、何となく、もの悲しくなってきた。

「この後は畜舎の説明と、あとこの牧場での生活について教えて貰えるんだ。・・・で、その後、今日はもう予定が入っていないから、夜の給餌まで自分のケージでゆっくり休むと良いよ。朝からいろいろあって疲れたでしょー？」

そんな声に送られて部屋を出たけど、廊下には誰もいなかった。そこで、気になっていたペニスの包茎手術の様子を見てみたかったけど、手が使えないんじゃ、ペニスを持って確認することができない。上側はよく見えているけど、横とか裏側がどうなっているのか心配で、何とかペニスを裏返そうと努力してみた。でも、げんこつグローブじゃあどうやっても上手くいかない。僕が膝立ちでペニスを裏返してみようと悪戦苦闘していると、前のドアと後のドアが開いて、そこから四つん這いになった他の牡畜が出てきた。皆、全裸で四つん這いになり、胸にはピアスでカードが下げられている。話すことができないんで、三人（いや、もう三匹と数えるべきなんだろう）でアイコンタクトして、一列になって廊下を四つん這いで進んで行くと、途中のドアからも牡畜が出てきて、広間に着くときには、七匹か八匹になっていた。

広間には、既に二十匹以上の牡畜が居て、やはり皆、四つん這いで待っていた。どの牡畜も股間からケツの穴まで完璧にツルツルで、脇の下も毛がある牡畜はいない。全員、同じように、胸につけられたカードには、正面とケツ側からアップで撮影した性器が表示されている。

お尻の後から観察すると、他の牡畜のペニスの裏側がよく見えて、皆、手術の痕を示すプラスチックのホチキスのような留め具が、カリ首の下の辺りの竿をぐるっと一周していた。全員ズルムケで、どうやら割礼をされなかったヤツはいないみたいだ。

乳首のピアスは記憶にないけど、僕が知っている大人は全員ズル

ムケだった。だから根拠はないんだけど、大人になれば、誰でも必ず自然と剥けてくるものだと、何となく思っていたんだ。でも、そうじゃなくて、この牧場役で必ず手術をされて切り取られちゃうってことだったんだ。・・・うちは父さんが牧場役には行っていないから、そういった情報も伝わっていないけど、他のヤツらは父親から聞いてるんだろうか・・・。

それと、もう一つ気付いたんだけど、ざっと見ただけでも、身体に鞭で打たれた跡のある牡畜が多い。というか、多分、どの牡畜も、どこか鞭で打たれているような気がした。僕のようにペニスを鞭で打たれた跡がある牡畜も、2～3匹見つけることができた。とすると、あれは特別なことじゃないのかもしれない。やっぱり家畜は基本的に鞭で躾けるものなんだ・・・。これから毎日、鞭で打たれる生活が始まるんだ・・・。でも、ペニスを鞭で打たれて射精しちゃったなんて、あんな性癖は僕だけに違いない。そんなことを考えていたら、またペニスが元気になってきて、手術の跡が引き攣れるように痛みだした・・・。

5分位すると、大部屋には四つん這いの牡畜が五十四位になった。みな、しゃべることができないし、そもそも自分の身に起きたことを、まだ完全に受け入れられていない所為か、無口で俯いたまま、シーンとしている。

と、部屋の奥側のドアが開いて、そこから三人の係員が出てきた。全員、やはり制服を着ているんだけど、三人とも鞭を腰ベルトから外して、手に持っている。いよいよ家畜としての生活が始まるのかと身構えると、周りの牡畜にも緊張が走ったようだった・・・。

第９話　家畜化の完成（後書き）

主人公が受けた特殊な器具による割礼手術ですが、以下のＵＲＬで施術動画がアップされていますので、よろしかったら見て下さい。（血は殆ど出ませんが、それでもスプラッターが苦手な方は自己責任でお願いします。）

このＺＳＲ方式という割礼手術方法は、包皮を機械で圧縮切断する専用器具を用いるもので、傷口は特殊な医療用ホチキスで切断と同時に留めてしまうものです。出血もなく安全な（少なくともペニス本体や亀頭に傷をつけることが絶対にない）処置方法であり、インドなどを中心に、東南アジアで広く普及しているようです。説明を聞くと、安全であるというメリットに加えて、誰がやっても同じような仕上がりになること（医師の腕の差が出ないこと）も大きな特徴だそうです。

デメリットは、あまり紹介されていないので、よくわかりませんが、器具が使い捨てなので、どうしても高くつくというようなことを述べていました。日本のように包茎手術が自費で２０万円とかなら、たいした差にはならないのでしょうが、東南アジア等では割礼手術はせいぜい数千円程度だそうです。となると、この器具はどうみても１万円位はするでしょうから、使い捨てるには（彼らの感覚からすると）割高なのかもしれません。

ｈｔｔｐｓ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｗａｔｃｈ？ｖ＝ＮＦｆＣ４ｆＸ０７ＥＭ＆ｔ＝４ｓ

ｈｔｔｐｓ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｗａｔｃｈ？ｖ＝ＷＸｕ７ｏｆＦＤＰ１Ｑ

https://www.youtube.com/watch?v=9xXog01OiQY

https://www.youtube.com/watch?v=6d26olu2yNo

第１０話　畜舎（前書き）

前回アップしたものを読み返していて、何年も前にここを書いたときのことを少し思いだしました。

当初、一連の処置は目隠しをされた状態で行われて、主人公は自分が何をされるのかわからないまま、いきなりピアスとか割礼をされてしまい、激痛にのたうち回るというものを考えました。動物では、何か処置のときは大抵、目隠しをしますし（そのほうが暴れない）、獣医は必ず保定といって身体を固定して動けないようにしてから処置をします。

これを人間に適用すると、多分ですが恐怖心は増すでしょうし、自分が家畜になったということを思い知らされることになると考えたのですが、小説として書いてみると、目から入ってくる情報がない状態では、文章の広がりが極めて乏しくなってしまい、どうやっても臨場感溢れる描写ができませんでした。これは私の文章力が足りないからなのかもしれませんが、自分が普段、いかに眼（視界）からの情報に基づき生活しているかを思い知らされ、これではうまく行かないと悟った結果、今の文章表現になったところです。

当初は目隠しされた主人公がペニスを器具にセットされ、獣医や飼育員が、「キミのかわいいおちんちんとも、これでお別れね」とか囁いて（勿論、これは包茎を卒業して、大人のペニスになるという比喩なのですが、この言い方を聞いた主人公の疑心暗鬼）、少し前の飼育員の言葉（「ここで大事なのはたまたまであって、おちんちんは関係ないのよね」）に思い至った主人公が「まさか？！」と絶望したところで割礼を施され、ペニスを切り取られてしまったと勘違いした主人公が泡を吹いて気絶するシーンとかも考えたのですが、主人公が目隠しされていると、主人公の眼からの情報がないので、想像だけになってしまい、満足の行く描写ができませんでした。（

ただ、これについては、前の書きかけの原稿も残っていて、何かに使えないかと、ちょっと思案中です。続きを書くことがあれば、幕間か何かで活用できるかもしれません。）

何を書きたいか、どういうシチュエーションか、というのは、頭の中にあるのですが、状況（場面／シーン）の説明と、登場人物の心の内面の説明、この両者を違和感なく盛り込んで、読み手に伝えるのは本当に難しいです。文章力のなさを痛感します。

第１０話　畜舎

「主任、５０匹揃いました。」
「よし。じゃこのグループは出発だ。」
「これからお前たちの飼育環境を教えるから、ついてくるように。・・・別に一気に覚えられなくても、その場その場で調教してやるから、心配するな。なに、鞭で打たれれば、嫌でもすぐ覚えるさ。」
　主任と呼ばれた真ん中の飼育員さんが、鞭を右手に掲げて宣言した。他の二人の飼育員さんも、同じように鞭を握って、僕たちの周囲を取り囲んでいる。といっても、僕たち５０匹に対して、たった３人だけなんだけど、あの鞭を見せられたことで、僕たちは震え上がってしまい、誰も逆らう素振りは見せず、従順に俯きつつ、耳を必死に欹てた。（そもそも逆らう気はないけど・・・。）背中やお尻を打たれるのも嫌だけど、もしペニスとかキンタマを鞭打たれたら、たまったもんじゃない。全裸ということが、特に鞭で打たれるという恐怖と相まって、こんなにも心細く、不安に感じるとは思わなかった。自分の立場を覚え込ませるには、これ以上の方法はないのかもしれない。
　それと、気の所為かもしれないけど、ここの３名の飼育員さんたちは、受付にいた人たちと雰囲気が似ている。皆、同じ制服を着ていて、若い二人が二十歳前後、一人はかなり胸が大きくて大人の女性という雰囲気だけど、もう一人は僕たちと同年代と言っても良い位、若いというか幼い体型をしている。また主任と呼ばれる人が二十台後半というのも一緒だけど、この人は全身が筋肉の固まりのように鍛えられていて、腕や胸、それに太股など、ゆったりめの制服でも隠せないほど、筋肉ムキムキの身体をしている。
　比較するとよくわかるけど、さっきの処置室にいた獣医さんと飼育員さんは、今思うと本当に僕のことを心配してくれて、言葉遣い

も親切だった。ペニスを鞭で打たれたのも、今にして思えば別に躾けをしようとかいうんじゃなくて、僕の状態を見て、あそこで鞭で打つのが一番気持ち良いって考えたのかもしれない。

一方、この3名は、最初の受付のときの3名と一緒で、主任という上官？が若い飼育員を軍隊のように統制して、その3名で僕たちをまさに羊の群れか何かのように扱うのに慣れているようだ。集団行動を統制するなら、こういった軍隊みたいな雰囲気と口調になるのも当然かもしれないけど、ちょっと（いや、かなり）怖い感じだ。でも、確かさっき、あの獣医さんのところに居た優しい飼育員さん（リエちゃんとメグちゃんって言ってたっけ）が、僕の飼育員になってくれるんだって話していたような気がする。もしそうなら嬉しいな。あの二人にだったら、ぜひ管理されて飼育されてみたいな。もう僕の一番恥ずかしいところは、全部見られてしまったんだし・・・。

「この建物は、受付と退役のときだけ使われるもので、お前たちがここに再び入ることができるのは、２年後に卒業するときだ。まあ、別に見納めというほどのことじゃないし、万一病気になったり健康に問題が発生したら、ここに連れてこられるから、あまり気にせずついてこい。まずは放牧地だな。そのドアから外に出るぞ。」

言われたとおり、部屋の前にあるドアを開けて外に出た飼育員に続いて、ぞろぞろとついていく。勿論、全員、四つん這いで、羊の群れのようだ。外に出ると、広大な芝生が広がっていて、あちこちには枝振りの良い大きな木もポツンポツンと生えている。３月末の気温は、全裸で出歩くにはまだ少しヒヤッとしたけど、興奮して気が張っている所為か、寒くて震えるという感じはしなかった。

「ここが放牧地になる。お前たちが運動と日光浴のために使うところだ。毎日２回、午前と午後に夏は１時間ずつ、冬は３０分ずつ、ここで散歩をすることになる。極端に暑かったり寒かったりする日じゃない限り、これは必ずやらなければならない。雪やみぞれが降

れば中止になるが、よほどの嵐じゃない限り雨天は関係ないから、そのつもりで。」
「胸のカードにはセンサーが入っているから、どのくらい歩いたか判別できる。概算だがこの放牧場を2周程度はしないと鞭が飛ぶから、頑張って歩き回ってこいよ。もし時間が余ればだが、夏は日陰で休んでも構わない。ただ、冬はチンタラしてると寒くて凍えるから、自分で調整しろ。」
　そんな話を聞きながら、放牧地をぐるっと回って歩いて行く。この放牧地、ざっと見てもサッカー場が6面程度は余裕で入る位の広さがあり、その中を僕たちのように飼育員に連れられて歩く集団が、他にも7つか8つはあった。ひとつの集団が50匹らしいから、それだけで400匹程度の牡蓄がいることになる。放牧地の周囲は、普通の金網によるフェンスがぐるっと取り囲んである。コンクリートの壁でもないし、鉄条網でもないのは安心したけど、バスから見たとおりフェンスが二重になっていて、最初のフェンスと次のフェンスは、5メートル程度の間隔がある。しかも、近くを歩いてみて気付いたけど、二つのフェンスの間は深さが2メートル程度のコンクリートの空堀のようになっていて、とても越えられるものではない。第一、フェンスの高さが優に3メートルはあるので、仮に手を使えるとしても、中からも外からも越えるのは難しかろう。
「この施設は、実験牧場なのでセキュリティが特に厳重だ。牡畜は国の宝だが、ここに集められている牡畜は特に優秀な個体ばかりだから、万が一にも外部から侵入を許すようなことがあってはならない。人間というのは、悪知恵もあれば、いろいろと企むことも多い。牡畜を盗み出したり、危害を加えたりされるような間違いが絶対に起きないように、これだけ厳重な管理になっているんだ。以前、侵入した部外者が、牡畜から精液を搾り取って盗んだという事件もあった位だ。そんなことがないように、万全の態勢を取っているから、お前たちは何も心配せず、安心して射精することだけを考えていれ

ば良い。」

放牧地には、あちこちに噴水のようなものがあった。キノコ型のコンクリートの柱のようなものから、直径1センチ程度のホースというか透明ビニールチューブが6本、コンクリートから30センチ程度垂れ下がっている。好奇心溢れるヤツが覗き込んでいると、主任の飼育員がそこで止まって皆を見渡しながら言った。

「これは水飲み場だ。あちこちに点在してるだろう。畜舎のケージにも、同じものがあるから、自由に水を飲んでよい。ただ、これで水を飲むのは、ちょっとコツが要るんだ。といっても、極めて簡単なんだが、今、教えてやるからよく見ておけよ?・・・こうして、このチューブを口枷の穴にあてがい・・・。」

そう言いながら、今覗き込んでいた牡畜の首輪を掴むと、水飲み場の方向に力一杯引っ張った。

「うあっ、ぁんがっ、うぁあぐっ、んげっ、がぁっ。」

「こうやって、チューブの根本まで勢いよく口を近付ける。」

僕たちは皆、ハッとして眼を疑った。あのチューブ、確か30センチ位はあった筈だ。それが完全に口の中に消えてしまった。口枷に穴が開いているので、顔を近付ければ簡単に全部口の中に挿入できてしまうけど、これって長さからして食道を通って胃まで達しているに違いない。胃カメラを挿入したのと同じ状態だ。やられた牡畜は、いきなりとんでもない拷問を受けたみたいな顔で、えづきながら涙をポロポロ零している。胃カメラは経験がないけど、これってかなりの苦痛なんじゃないだろうか。

「いいか、中途半端な挿入だと、水が気管に入ってしまうから、必ずこのチューブの根本まで口に全部挿入するんだぞ。そうすればチューブの先端は胃の中にまで届いて、食道と気管の分岐点を超えているから、噎せたりすることはない。・・・ま、何度かやってみれば、直ぐ慣れる筈だ。コツは思い切りグッと身体を前に出すことだ。そうすれば、口枷の穴を通して、何の抵抗もなく、一気にチューブ

が胃まで到達する。これから毎日、給餌でも同じようにするから、数日で慣れるだろう。」
「そうして、口をこのチューブの根本まで近付けると、口枷にある突起が、ここに付いているセンサースイッチと反応して、水がコップ半分ほど出てくる。結構勢いがあるから、本当に一瞬で胃の中に約１００ｃｃの水が直接入ってくるんだ。」
「要するに、気管に入るのを防ぐために、チューブを完全に根本まで挿入しないと水がでない仕組みなのよね。」
　そう言ったのは、若くて幼い雰囲気の飼育員さんだった。この人、あどけない顔つきなのに、恐ろしいことを平然と言うんだって、僕たちは震え上がった。食事がゼリーだっていうのは、さっきバスの中で聞いたけど、こういうことだったんだ！・・・これから毎日、何かを食べたり飲んだりするのは、全部、チューブを胃まで挿入して、胃の中に直接入れるしかないんだ。そのために、この口枷に穴が開いていて、チューブを簡単に胃まで挿入できるようになっているんだ！！
「・・・キミ、えーっと、８７４９号、試してみなさい。」
　眼が合っちゃった所為か、いきなりご指名をされた。あれを自分で胃まで飲み込むなんて、そんなのできるわけがない。でも、僕が躊躇（ちゅうちょ）していると、今の飼育員さんと、主任という飼育員さんの二人が鞭を構えるのが見えちゃった。この裸の状態で鞭打ちされたら堪（たま）らない。
　それに、どのみちこれから毎日何度もやらなければならないことなんだ。仕方がないから、清水の舞台から飛び下りる覚悟で、やってみることにして、一歩前に進み出た。
「おっ、勇気があって偉いわね。最初だから、特別にサポートしてあげるよ。まずここに来て、このチューブの下の端を口枷の穴に合わせてね。・・・そう、その角度を覚えておいて。」
「次に、一気に膝立ちになるようにして、立ち上がるの。いい？・・・さん、に、いち、それっ！」

僕は自棄になって、一気に立ち上がるように顔を上に上げた。すると、その瞬間に、主任さんが僕の首輪を持って、一緒にチューブの付け根方向に顔を引っ張った。
「んんっ、ぅぐっ、んぐっ、んがはっ、ぐげっ。」
しっ、死ぬっ、死ぬっ、げぼっ、あぁっ・・・。
「そう、それで良いんだ。簡単だろう？・・・水も一気に胃に入った筈だ。」
これを毎食、いや、水を飲むだけでも毎日何度も繰り返すの？・・・拷問だ・・・。
「最初は辛いかもしれないけど、案外直ぐ慣れるものよ？・・・大丈夫。毎日何度もやっていれば、簡単にできるようになるわよ。頑張ってね。」

この話を聞いて、本当にとんでもないところに来ちゃったんだって、改めて思い知らさせた。そんな思いをしていたら、急に鳥肌が立ってきた。別に寒くなったわけじゃないんだけど、周囲の牡畜も同じように鳥肌を立てているのがいる。多分、恐怖によるものみたいだ。・・・鞭で打たれるのも怖ければ、このような拷問を毎日何度も受けるということも、信じられない。
僕たちが恐怖に慄(おのの)きながら、放牧場を半周ほど歩くと、その先には平屋建てのカマボコのような形をした建物が見えてきた。それぞれのドアの前には大きく番号が書いてあり、どうやら1番から５０番まであるらしい。
「いいか、ここがお前たちの畜舎だ。自分の識別番号を見てみろ。最後の４桁が固体識別番号で、その前の2桁が０１番から５０番になっている筈だ。それがお前たちの畜舎番号だから、その番号の畜舎に移動しろ。」
「畜舎の入り口ドアは、中に入るほうはスプリングで閉まるだけだから、外から身体で押せば入ることができる。ただ中からはノブの把手を掴んで引っ張らないと開かないので、お前たちでは開けて出

てくることができないようになっている。ま、自分でやってみればわかることだ。・・・畜舎の中には、また別の飼育員がいるから、あとはそれぞれの畜舎に居る飼育員の指示に従え。では、ここで解散！」

僕たちは、自分の胸のカードに記載された番号の、下から５桁と６桁目の数字を確認して、それぞれの畜舎に向かった。こんなところでグズグズしていたら、また鞭で打たれてしまうかもしれない。とにかく皆、必死になって自分の番号の畜舎に向かって四つん這いで急いだ。

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーー

ギギッ、キィーッ。

僕の畜舎番号、４３号畜舎の入り口のドアを頭で押して建物に入ると、中はかなり暑かった。入口横の壁にある温度計は、２７℃を示している。この温度は、裸でも特に寒くは感じず、ちょうど良い具合だ。
「あ、ようこそ。ここがこれから2年間過ごす場所になるんだよ。キミは何番かな？」
入口を入ったところの横に居た飼育員さんが、ニコッと微笑んで迎えてくれた。
「ここ入ったら、まずはシャワーで身体を清めようね。外から戻ったら、必ずそうするようにしてね。」
「このトンネルをずっと通っていくと、中で自動的にシャワーが出て、身体が洗い流されるから、それでもっと進むと、今度は風で乾かしてくれるんで、その工程を全部済ませて向こう側の出口から出てきてね。」

「それで、出たら、この右側が００番から４９番まで、左側が５０番から９９番までのケージになってるんで、自分の番号、・・・キミの番号の最後の2桁なんだけど、その2桁の番号と同じケージに入って休んでいて。そこがキミの部屋だから。」

「キミはっと・・・。８７４９号クンだね。とすると、キミはこの右側の一番奥のケージだね。」

「じゃあ、また後でね。」

そう言われた僕は、そのまま透明なプラスチックかアクリルででき たトンネルに入って進んで行った。この畜舎は、全部で１００匹の牡蓄を収容するようになっているらしい。とすると、ここには全部で５０の畜舎があるみたいだから、これだけで５０００匹となる。多分、これが1年分で、施設全体としては1万匹の収容ということなんだろう。

畜舎は、左右にケージと称する個室のような小部屋が並んでいた。ケージという名称からして、鉄格子の檻かと思ったけど、そうではなくて分厚い透明なアクリルの小部屋みたいだ。きっと衛生的な意味とか、温度管理とか、そういった理由かもしれない。部屋の中はすべて丸見えで、中には小さめのプラスチック（これも透明）のベッドのようなものがひとつ置いてあり、特に布団とかは見当たらない。よく見るとケージの入口は、さっきの畜舎の入口と同様に、入るときは押せばドアが開くようになっていて、ということは中からは僕たちには開けられないようだ。勿論、このドアも透明なアクリル板だ。

よくわからないけど、これが生活の場ということは、排泄も射精も、すべてこの中でしなければならないんだろう。プライバシーなど、どこにもない。

言われたとおりアクリルトンネルを少し進むと、床が水を排水するような格子状のグレーチングになっている部分にさしかかった。すると、腹側と背中側の双方から、やや強めの水流でシャワーが吹

き出した。湯温はちょっと熱めだけど、外を歩いてきて少し冷えた身体には心地よい。そのまま前に歩いて行くと、次々にいろいろな角度からシャワーの水流が身体に当たってきて、ブラシこそないけど、まるで自動洗車機の中を歩いているみたいだ。最後のほうには、頭と股間、そしてケツの穴の部分に集中的に強めのシャワーが当たって、それで終了となったみたいだ。というのは、そのまま前に進んだら、次はトンネルの中を一気に温風が駆け抜けるエリアとなった。その温風の中を歩いて行くと、概ね20メートル程度を歩く間に、身体はすっかり乾燥した。確かにこれは外から帰って来たとき、身体もさっぱりして、衛生的にも優れたものだと感心した。

トンネルを抜けると、言われたとおり右側の一番奥のケージに向かった。そこには、僕の番号が書かれたプラスチックのプレートが嵌（は）まったドアがあり、僕はそこを頭で押して中に入ると、とにかくベッドにごろんと寝っころがって一息ついた。

第１０話　畜舎（後書き）

現在、書いてある部分は、あと1話ですべてです。畜舎の説明（追加）から給餌風景、就寝前の処置、そしてようやく長い1日が終わったところで、第1部終了となります。

第１１話　一日の終わり（前書き）

ここまでが、入営編となります。

第１１話　一日の終わり

ベッドに寝転がっていたところ、よほど疲れていたのか、いつのまにかうたた寝をしていたようだ。身体的にそんなに疲れるようなことはしていないけど、精神的に相当負担が大きかったのだろう。
　寝ている間に、周囲のケージにも、他の牡畜が入居（？）していた。透明な壁なので、ずっと遠くのケージまで見通せる。僕みたいにベッドに寝転がっているヤツも居れば、ベッドの上に座って胸や股間を見つめているヤツも居る。隣のケージのヤツは、雰囲気からして自分と同じ中卒組に見えたんで、アイコンタクトしようとしたんだけど、眼を合わせたらプイッと視線を逸（そ）らされてしまった。また通路を挟んで向かい側のケージのヤツも、やはり中卒組ではないかと思うんだけど、こっちは自分の身に起きたことを受け入れられていないのか、まだ泣いているようだ。その他の牡畜たちも、泣いているようなヤツも多く、・・・というか、ほぼ全員が泣きはらしたような顔をしている。きっと僕の顔も、同じように見えているに違いない。
　改めてケージの中を見渡すと、まずドアの横の通路側の壁（？）には、地面から５０センチ位の場所に直径が３０センチ程度の丸い穴が開いている。下のところには小さな文字で、「給餌窓：チャイムが鳴ったら首を出す」と書いてある。そう言われて見ると、この穴は四つん這いになったとき、丁度頭を入れるのにピッタリだ。多分、ここから首を出して、例のチューブを突っ込まれるに違いない。また、水を飲むためのチューブは、ケージの奥の隅の方に下がっていた。それ以外では、やはりケージの奥の反対側の隅のほうの床に、直径２０センチ程度の穴が開いていて、中は暗くてよく見えないけど、なんだか水が流れているような音がしている。
　この穴の横の壁？（さっきから壁と呼んでいるけど、床以外は全

部透明のアクリル板なので、あまり壁という感じはしない。）には、やはり小さな文字で「排泄孔」という文字と、牡畜が穴の上に、犬か猫がお座りするような姿勢の絵というかCG写真が張り付けてあった。これから察するに、これはトイレであり、この穴の上でお座りして排泄しろということのようだ。周りを見ていたら遠くのほうで、この穴に女の子座りをしている牡畜が見えた。なるほど、ああすれば良いのか・・・。

排泄孔のところには、もう一つ小さい文字で注意書きが表示されていた。「利用禁止時間１８００－１９００」

はて、何でこの1時間だけ、トイレの使用ができないんだろう。何か処理側の都合とか、水が流れないとか、そんなことだろうか。理由は何であれ、言われたことを守れないと酷い目に会うのは証明されているから、とにかくその時間は使わないようにしよう。でも、時計がないのに、どうやって時間を知るんだろう・・・。

そんなことを何となく考えていたら、いきなりゴーン、ゴーンと鐘が５回鳴った。なるほど、これが時報替わりなんだ。とすれば、あと1時間はトイレを使える筈だ、そう考えて、とにかく穴の上でお座りをして小用を足した。（大きい方はさっきの浣腸で全部出してしまったので、もうしたいとは思わなかった。）

用を足しているとき気付いたんだけど、乳首もペニスも、もう殆ど痛みは退いていた。というか、傷はすっかり直ってしまったのではないかと思えるような感じで、ピアスをされたり皮を切り取られたりしたのが嘘のようだ。あの万能傷薬とかは、本当に優れものなんだ・・・。

用を足してしまうと、もうやることは何もない。家畜って、本当に暇なんだ。こんなに暇だと、退屈で頭が変になりそうだ。・・・少なくとも、このときの僕は、そう考えていた・・・。

キーン・コーン・カーン・コーン・・・。ベッドでうとうとしていたら、ゴーン、ゴーンという鐘が7回鳴ったのに続いて、お馴染みのチャイムが鳴った。学校なんかでも、よく使われる音色なんで、間違えようがない。それで、書いてあるとおり、通路側に顔を出すように頭を入れて見ていると、各ケージから次々に頭が出てきて、皆、周りをキョロキョロと見回している。

カチャン！

いきなり乾いた音とともに、穴の上の部分から、ギロチンの刃のように、半円状の切欠きがあるプラスチック板が落ちてきて、僕の首を固定してしまった。この板、別にどうということもないものだけど、頭を出している壁の穴よりは一回り小さい切欠きなので、もう僕は首を引っ込めることができず、四つん這いのまま壁に首を挟まれた状態だ。すると、厩舎の両端から2台ずつ、合計4台のタンクのようなものが載った台車を押しながら、４人の飼育員さんが現れた。僕のいるケージのところには、あのメグちゃんという飼育員さんだった。

「また会ったねー。おなか空いたでしょ？・・・今から餌を上げるからねー。」

そう言うと、タンクから出ているチューブを僕の口枷に開いた穴にセットして、約30センチはあろうかというそれを、一気に僕の口に押し込んだ。

「ぅぐっ、ぐぁっ、んぐっ、んんっ、ぁがっ、んがー。」

またしても死にそうな拷問で、喉から胃までチューブを突っ込まれた。話すことも、それどころか声を出すこともできず、涙をポロポロと零しながらえずいていると、メグちゃんがタンクの横のレバーをクイッと操作した。その瞬間、胃が破裂するんじゃないかと思うほどの勢いで、一気に胃の中に冷たいものが流れ込んできた。その間、約15秒。

「はい、ごちそうさまだねー。おなか一杯になったでしょー。たくさん食べて、明後日からはたくさんドピュドピュ射精しようねー。」

そう言いながら、チューブをぐっと引いて、口から抜き取った。
「げっ、げぼっ、んぐっ、ごぼっ、うぐっ、ぅげっ。」
僕が涙を流しながらえずいて苦しんでいるうちに、もうメグちゃんは僕の次の牡畜への給餌も終わり、三匹目の牡畜に取りかかるところだった。
苦しかった。またしても死ぬかと思った。でもこの程度なら、少し慣れれば一瞬の我慢で、何とかなりそうな気がしてきた。

そんなことを考えていたら、ケージのドアが開いて、リエちゃんという飼育員さんが入ってきた。
「はーい、また会えたね。じゃ、寝る前の処置をしちゃうからね。まずは、これにおしっこしてね。」
そう言うと、四つん這いの姿勢のペニスの下にバケツを差し出した。
「これからキミたちに投与するホルモン剤とか、いろいろなお薬をつくるのに、キミたちのおしっこから抽出する必要があるんだ。だから、毎日、夜に1回、こうしておしっこを集めて回るんだ。それでね、おしっこが出るように、６時から7時の一時間だけなんだけど、おしっこを我慢して貰うの。」
そうか、それがあの表示だったのか。直前にしちゃったら、それはなかなか出ないだろうし・・・。
「協力してくれない子には、尿道カテーテルで導尿することになるから、そのつもりでね。」
チョロッ、チョロロロッ。
「お、出たね。それでＯＫだよ。」
良かった。さっき、といっても2時間前だけど、おしっこしたばかりだから、あまり出ないかと心配したけど、何とか合格ラインに達したみたいだ。さっき放牧地で水を飲んだのが良かったのかもしれない。あの拷問も無駄じゃなかった訳だ。

「じゃ次はっと。・・・ちょっとちくっとするよ。」
いっ、痛っ！・・・キンタマに注射された！！
「これは副腎皮質ホルモンの一種でコルチゾール。強力な性腺刺激剤なんだ。たまたまの機能が何倍にも増強されるんだよ。それにたまたまもどんどん大きくなって、それに伴いおちんちんもみるみる大きくなるんだ。これから毎日、左右のたまたまに交互にお注射して上げるからね。ビックリする位、良く効くよ。」

そっ、そんなの効かなくても良いのに！・・・でもペニスが大きくなるのは、ちょっとだけ魅力的だったりするかな・・・？
「まあ、ここではたまたまが大きくなるのは大歓迎だけど、おちんちんのサイズはあまり関係ないんだ。でも、キミみたいにミニミニサイズのおちんちんだと、搾精するのにやりにくいんで、おちんちんのサイズが大きくなるのも歓迎だよ。」
またしても、僕の精神を削り取る一言。でも、慣れた所為か、あまり気にならなくなった。
「じゃ、最後のひとつをやっちゃおうか。」
注射の後も、まだ何かをしようとしている。でも首を回せない僕には下半身が見えない。さっきも、これで最後と言われて割礼手術をされたんだ。・・・嫌な予感しかしない・・・。
「大丈夫だよ、これはそんなに痛いものじゃないから。」
そう言うとともに、ペニスにいきなり何かを突っ込まれた。見えないんで感覚だけだけど、何か濡らした綿棒の大きいヤツ、といったもののようだ。
「ほら、そんなに痛くはないでしょ？・・・ま、慣れるまでは違和感があるかもだけどね。」
(とっ、取って、取って下さい！！・・・お願いです！)
確かに痛みはそれほどない。でもこの違和感！・・・尿道からペニスにものを突っ込まれる、それもどれだけ深いのか、見えていないけど、この雰囲気だと膀胱まで届くんじゃないだろうか。さっき

も胃に届くまでチューブを突っ込まれたし、この違和感からすると・・・。

「じゃあ、これも簡単に説明しておくね。これ、プロクラチンっていう乳汁ホルモンなんだ。もともとお乳の出を良くするホルモンで、妊娠したりすると分泌が盛んになるものなんだけど、これを牡畜に投与すると、何故か射精の間隔を短くできるんだ。賢者タイムって知ってるかな？牡畜は射精すると、その後しばらくは刺激を受けても勃起もしないし射精もしない時間があるんだけど、これを賢者タイムって呼ぶんだよね。」

「で、その賢者タイムは、ここでは邪魔なんだけど、このプロクラチンを牡畜に投与すると、何故か賢者タイムがなくなっちゃって、連続で勃起して射精ができるようになるんだ。牡畜としては、とても理想的なホルモン剤で、これは前立腺に作用して効果を発揮するものなんで、こうやって前立腺に中側から直接塗れるように、長い綿棒をおちんちんに挿入して、前立腺まで届いたところで、綿棒を固定するんだ。」

　そう言いながら、ペニスの先端の部分に絆創膏のようなものを貼られた感触があった。

「ほら、これでもう抜けないから、このまま明日の朝まで入れて置こうね。キミの前立腺にたっぷり薬が染み込むだろうから、良く効くよ。」

「あ、それと、このお薬、ちょっとした副作用があってね、といっても牡畜には必ずしも悪いことじゃぁないんだけどさ、まず発情すると言うか、性欲が亢進するんだ。つまりたくさん射精したくなる。まあ、毎日何度も射精していれば、気がつかないだろうけど、少しでも射精の間隔が開くと、もう射精したくてしたくて我慢できなくなるんだ。大変なんだよ。・・・次に、乳首が大きく育ってくる。これは多分、牡畜だと、さすがにお乳は出ないんで、その代わりに乳首が大きくなるんだと思うよ。」

「乳首が肥大すると、ピアスが目立たなくなるから、これも決して悪いことじゃない。卒業するまでには、授乳中のお母さんと大差ない大きさになるんじゃないかな。それに伴って乳首の感度が抜群に良くなるんだ。乳首を刺激されただけで射精しちゃうようになる牡畜も結構居るんだよ。」

これを聞いて、ひとつ納得したことがある。僕が知っている大人の男性は、ペニスがズル剥けだったことと合わせて、皆一様に女性と同じ位のサイズの乳首だった。これも大人になると、男女ともに乳首が大きくなって、同じくらいのサイズになるんだと思っていたけど、男性の場合はこの牧場役で大きくされちゃったんだ。（父さんは乳首が小さくて、随分かわいい子供みたいな乳首だなって、何となく思っていたんだけど、きっとあれが本来の男性の乳首のサイズだったんだ・・・。）

「さ、これで今日はお終いだよ。そのおちんちんの綿棒は、明日の朝までそのままにしておいてね。それと、明日は割礼手術の傷が完全に直るのを待つんで、搾精はないから、完全休養だよ。午前中と午後の運動はあるけど、それ以外はずっとケージでのんびりすると良いよ。」

「じゃあ、またね。おやすみなさい。」

そういうと、リエちゃんという飼育員さんが出て行った。

こうして、８７４９号という名前の牡畜になった僕の牧場生活１日目が終わった。僕はピアスをされてしまった両乳首と割礼をされたペニスを見ながら、自分はこれからどうなるんだろう、何をされてしまうんだろうという恐怖に慄（おのの）いていた。見ると両隣の牡蓄も、同じように不安そうな顔をしている。あの同意書によれば、この後も何か身体改造をされてしまうのかもしれないし、さっきのキンタマへの注射と、この尿道に挿入された前立腺刺激剤によって、ペニスもキンタマも、これからどんどん大きく肥大してくるんだと言わ

れた。ペニスが大きくなるのは嬉しいけど、それも程度問題だ。AV俳優も超えるような大きさになる奴もいると聞くと、不安しかないし、キンタマに至っては、そんなに狸みたく巨大になって欲しくはない。

それより何より、前立腺に届くまで深く尿道に挿入された綿棒の違和感・異物感は、何とかして欲しい。ピアスや割礼は、もう全然痛くなくなった。ただ違和感があるのみ。ペニスは剥き出しとなった亀頭がスースーピリピリして不思議な感覚。

尿道に入れられた薬は、副作用で乳首が肥大するって言われた。それによってピアスが目立たなくなるってことらしいけど、そもそも男の乳首が肥大して、誰得なんだろう・・・。でも、あのメグちゃんとリエちゃんという二人の飼育員さんに当たったのは良かったな。あの二人なら、是非僕のことをすべて管理して欲しい。あの二人に搾精されるんなら、大歓迎だ。

リエちゃんという飼育員さんは、出て行くときに僕の首の固定板を上に上げて、外してくれた。それでベッドに横になると、肉体的にも精神的にもヘトヘトになっていたためか、いつの間にか、そのまま寝台の上で泥のように眠りこけたのだった。

第11話　一日の終わり（後書き）

一応、現在書いてある部分はこれですべてです。

ようやく初日が終わり、明日からの家畜生活を想像するところで、第1部（完）となります。

この後、書きかけの話の断片（使わなかったもの）がいくつかありますので、それらを少しお化粧して、幕間として1話か2話、掲載（多分ですが、これらは来週か再来週で何とかできるでしょう）しますが、その後、この話の続きを書くかどうかは、実はまだ未定です。

読者の皆様から、是非続きを読みたいという声が強いようでしたら、ボチボチと書いてみようとは考えていますが、もう片方（杉田家）の執筆も滞っている状況で、二正面作戦に手を広げる躊躇があります。（そもそもニッチな作品なので、あまり多くの方に支持されないのは覚悟の上です。）

以前にもお伝えしたとおり、一応のプロットは完成しているので、全体のストーリーはあるのですが、やはり文章を起こすのは、かなりの気合と時間が必要ですね。

第12話　スタッフ大食堂にて（幕間）（前書き）

お伝えしたとおり、幕間をアップします。
　これは、主人公の到着の日の出来事なのですが、主人公はおろか、牡畜がまったく出てきません。なので、本編に入れるのはちょっと躊躇があり、幕間といたしました。
　牡畜の側の視点ではなく、管理する女性側が何を考えているのか、どう感じているのかを、お楽しみ下さい。
　ここでは、飼育員の女性たちが、スタッフ同士での会話のときには普通の話し方をしていて、牡畜に接するときに使う話し方（まるでペットか小さな子供に話しかけるときのように、赤ちゃん言葉を多用する）と、雰囲気がまるで異なっていることを意識してみたのですが、上手く意図が伝わったなら幸いです。（こういう書き分けは、書き手として一番楽しめる部分ですが、あとで読み返してみると、どうも不自然なところが目立ったりして、なかなか難しいところです。）

なお、この予定ですが、年内に幕間をもう1本、アップできればと考えています。書きかけて放置した文章の断片が、まだ数千文字程度あるので、それらで幕間にできれば良いのですが、ただ全体をひとつの話に纏められるかどうか、あまり期待はしないで下さい。
　第2部については、今のところ、あまり読者の皆さんからの要望は多くないのですが、この作品は極めて狭いニッチ狙いですので、そもそも興味を持って下さる方は、限られるでしょう。年末年始に、少し落ち着いて、続きを書くかどうか（書けるかどうか、気力があるかどうか）を考えたいと思います。
　ただ、もし年末年始に時間がとれた場合には、このところ滞っている「杉田家〜」のほうを書き進めたいと考えており、悩ましいと

ころです。

第１２話　スタッフ大食堂にて（幕間）

（２１：３０、仕事を終えた飼育員が三々五々集まって夕食中）

「ねえ、今日も５０匹程度の牡畜を処置したけど、ピアスとか割礼とか、あれ痛いわよね。去年もそう思ったんだけどさ、皆、四肢を固定されているけど身体を極限まで突っ張らせて、涙を零しながら呻いているの、なんかちょっと可哀相じゃない？」

「え？・・・まさか、麻酔でもかけろっていうの？・・・いったいどんだけの手間がかかると思ってるのよ？・・・それ、やるのはあたしたちなんだよ？・・・今でさえ、１日の処理数としてはもう限界に近いのに、人手は簡単に増やせない中でこれ以上時間をかけたら、夜中までかかっても終わらないよ？」

「それはわかってるつもりだけどさ、あたし、他人が苦しがっているのを見るのが、どうも苦手なのよね。・・・いや、勿論、あたし達が扱っているのは人間じゃないんだけどさ・・・。」

「普通、家畜に何か処置するときは、麻酔なんてしないわよね？・・・ほら、牛に鼻輪とか耳輪とかをつけたり、豚の耳の先端を三角とか四角とかにカットして管理するんだって、普通にそのままパチンってやっちゃうじゃない？・・・焼きゴテだってそうよ。豚にせよ羊にせよ、お尻とか肩とかに、真っ赤に焼けた鉄でジューッってやるじゃない？・・・それどころか、去勢だって、麻酔なしで押さえつけたまま、専用の器具で玉を抜いちゃうのよ。あなたも研修で見たことあるでしょ？・・・馬や牛が鳴こうが暴れようが、そんなのお構いなしじゃない？」

「そうね。麻酔もせずに、たまたまを袋から引っ張りだして、針金のフックみたいな器具でグリグリ回して引きちぎっちゃったでしょ。たまたまは血があまり出ない器官らしいけど、それでも最初に見るとびっくりするわよね。」

「あたしたちには感覚がよくわからないけどさ、あれ、男性が見たら、多分気絶するレベルよ。麻酔もなしに袋を切り開いて、たまたまを引き出して、力任せに引っこ抜いてねじ切っちゃうんだから。・・・牡畜に見せたら、どんな反応をするのかしら・・・。」（注１）
「牡畜を苛(いじ)めちゃだめよ。そんなのストレスになっちゃうでしょ！・・・貴重なたまたまなんだから。・・・まあ確かに、一部の動物愛護団体が残酷だって批判しているのは事実だけどさ。・・・でも家畜って、そういうものじゃない？・・・あたしたち人間のために存在しているんだから、飼い主である人間は、家畜をどう扱っても良いのよ。牡畜だって一緒でしょ？・・・健康を害するようなことはダメだけどさ、効率よく搾精するためには、少しくらい痛くても、そんなの一瞬のことよ。それに昔の宦官なんて、人間でも麻酔なしで、たまたまだけじゃなくて、おちんちんも切り取っちゃったりしたんだからね？」
「馬とか牛とかって、痛みは感じるんだよね？」
「勿論よ。昆虫とか魚類とかだと痛覚はないらしいけど、哺乳類は神経系が一緒だから、人間と同じように痛みを感じるみたいよ。でも、処置はどうせ一瞬でしょう？・・・去勢するならともかく、ここでやっている方法の場合、痛いのはパチンってやる瞬間だけじゃない。あたしも耳にピアスしてるけど、痛かったのは一瞬だけだったわよ。予防注射みたいなものよ。あの万能傷薬、あたしも使ったんだけど、痛みはさっと退いたわ。それと割礼は、世界各地で宗教行事とか一人前の大人になるための通過儀礼として行われているらしいけど、麻酔なんて聞いたことはないわよ。」
「そうよ。途上国での割礼なんて、いまだに石でつくった伝統的なナイフで切り取ったりするのよ。それに比べれば、どうってこともないわよ。実際、その後、どの牡畜も普通に歩いて畜舎まで移動してるでしょ？」
「そうそう。明日になれば、痛みなんて忘れちゃってるわよ。」
「うーん・・・。多分だけどさ、あたし的にはペットを可愛がるよ

うな感覚なのかな？」

「確かに中卒組の中には、かなりかわいい子も混じってるから、その気持ちは少しわかるわ。でも、自分の趣味で可愛がるのは自由だけど、それをやってても、あまり意味はなくってよ。牡畜に懐(なつ)かれても、別に精液の質が向上したり、射精量が増えたりすることはないっていう結果は確立しているし、牡畜を管理するには、優しくして懐(なつ)かれるよりは、恐怖を与えて厳しく躾(しつ)けるほうが従順で管理し易くなるっていうのは常識よ。」

「やっぱりそうなるのかな・・・。」

「聞いた話だけど、牡畜にやさしく接した飼育員に、卒業してから会いに来た子が居たらしいわ。その後、どういった展開になったのか、そこまでは聞かなかったけど、まさか、付き合ったとかなのかしらね？」

「それ、ちょっと興味ある話だわ。・・・ペットを彼氏にしたような感覚なのかしら？」

「どうなんだろう？・・・牡畜時代の関係が継続しているとすると、むしろご主人様とか女王様と性奴隷というのが近いんじゃないかしら。でも、そういう男女関係って、案外長続きするらしいわね・・・。」

「確かに、ここでの生活は、まるでMになるための調教(訓練)を受けているようなものかもしれないわ。元からそういう性癖を持っていたり、あるいはそういう性癖になるよう調教(訓練)されちゃった子が、自分を調教(訓練)してくれた飼育員に一生管理されたがる気持ちも、何となく理解できるかも・・・。」

「だから、苛(いじ)めちゃダメだけど、ある程度は厳しく躾(しつ)けるほうが良いとされているのよ。」

「それとさ、研修で習ったと思うんだけど、あたしたちが持っている鞭は、ポリエステルを柔らかく編んだもので、あれ、叩かれてもそんなに痛くはないのよ。ただ、見せ鞭は本当の皮で出来ていて、あれでさんざん脅すから、牡畜はポリエステル鞭で叩かれても、も

のすごく痛いと感じるように意識に刷り込まれているのよ。」
「先生方が読んでいる獣医の専門誌に、牡畜の躾(しつ)け方がいろいろと出ているんだけど、ある獣医の先生の研究論文で、あたしたちの持っているポリエステル製の鞭で叩かれても、太めの輪ゴムでパッチンされた程度の痛みだって書いてあったわ。これ、ちゃんと目隠しした、人間の被験者を使った比較実験らしいから、客観的には正しいと思うわよ。」
「そうよ、ここでは牡畜の身体には、なるべく負担をかけないように最大限の配慮がなされているのよ。あたしたちのマニュアルにも、身体の負担は最小限にして、精神への刷り込みというのかしら、意識の改造が躾(しつ)けの中心だって書いてあるじゃない。」
「それでもやっぱり、あたしは牡畜を鞭で叩くのは、何となく気が引けちゃうのよね。」
「最初は誰でもそんなものよ。その試練を乗り越えて、はじめて一人前の飼育員にな
れるんだから。あなたはまだ2年目じゃない。まだこれからよ。」
「そうよ。特にここは実験牧場だから、飼育員と牡畜の関係も濃いけど、あたしが前に居た一般の牧場だと、もっと機械的で、本当にブロイラーとか、そういった家畜を沢山飼っている牧場の雰囲気が色濃く出ていたわよ。よかったらあたしの経験を話そうか？」
「わかったわ。今度詳しく聞かせて・・・。あたしも、そこまで吹っ切れるように頑張る。」
「そうね。鞭で叩くのは、躾(しつ)けのためであって、別に意地悪したり苛(いじ)めているわけじゃないんだから。・・・確か英語の諺(ことわざ)だったと思うけど「鞭を惜しめば家畜はダメになる。」とかいうのがあった筈だわ。」（注2）
「うん、私もこれから、もっとしっかり鞭を使うようにしようっと。
」
「是非そうして。あたしがやっているみたく、おちんちんを鞭で打ち据えるのは、とても効果的よ。あそこを鞭で叩かれて、それでも

反抗する牡畜は見たことがないわ。あと、性癖とか個体差もあるんだけど、これを続けていると、そのうち鞭で打たれただけで射精しちゃうようになったりするんだから・・・。」
「そっか。罰であると同時に、ご褒美（ほうび）にもなり得るのね？」
「そこまで行くのは全部じゃないし、普通だと長い調教（訓練）も必要なんだけどね。でも、調教（訓練）が進んだ牡畜だと、最後はおちんちんを鞭で打たれることを期待して、わざと失敗したりするようになったりするんだから。・・・今年入った新入りはまだだけど、去年のグループには、そろそろそうなってきた牡畜も居るわよ。そうやって、しっかり躾（しつ）けられた牡畜は、将来結婚しても、配偶者にすべてを管理される生活を好むんで、一生幸せに暮らすことが多いんだって。実際、多くの女性は結婚すると、この牧場で使っているのと同じ鞭を購入するそうよ。」
「その話、あたしも聞いたことがある。もう退職した先輩が、結婚したら、家では旦那さんが裸で、ここでお土産に貰った首輪をつけたまま生活しているんだって。・・・子供ができるまでだろうって言ってたけど、幸せそうだったわ。」

「そう言えば、あの４３畜舎の牡畜、確か最初の検査搾精で鞭打たれて、射精しちゃったんじゃない？」
「そう！・・・あの子、見込みあるわよ。だから先生が、射精している瞬間に、おちんちんを繰り返し鞭打ちしていたわ。」
「それってどういう？」
「イッている瞬間、つまり射精が続いているときに刺激を受けると、それがどんな刺激でも・・・たとえ痛みであっても、それが快感と感じるようになってきちゃうのよ。もっとも、あの子は多分、痛みとは感じていなかったみたいだけどね。」
「あ、それ知ってる！・・・オーガズムの瞬間に鞭で打たれたり、罵倒されたり、そういった刺激を受けると、逆にそれがオーガズムを呼ぶトリガーになるんでしょ？」

「そうよ。Ｍを調教するのによく使われるテクニックだって話ね。・・・勿論、牡畜は別にＭの必要はないんだけどさ。でも、Ｍになっちゃうかどうかはともかくとして、調教（訓練）が早く進んで、指示に逆らわないというだけじゃなくって、より積極的に指示をされることを待ち受けるようになってくれれば、あたしたちの手間も負担も随分と減るのは事実よ。搾精だけじゃなくて、排泄にせよ給餌にせよ、あたしたちが指示する前から、自分で準備したり、態勢を整えてくれれば、ずっとスムーズになるじゃない？」

「そうだな。自分から進んでおちんちんを突き出したり、給餌チューブの前に口を持ってきたり、何も言わずとも阿吽（あうん）の呼吸で我々の行動を先回りするようになった牡畜は、本当に可愛いものだぞ。」

　鈴元主任が会話に参加してきたわ。この人、すごい美人で胸も大きいんだけど、１８０センチ近い身長と、趣味で鍛えた筋骨隆々とした身体、それにクールで強い目力があるんで、多くの牡畜から鬼のように恐れられているんだ。でも、本当はやさしい人で、いつもさりげなく牡畜の負担を少なくするように、気遣っているんだけどね。

「今日で三日目か。三千人ほどを受け入れたわけだが、今年の牡畜はどうかな。」

「まだわかりませんよ。あ、でも、単なる印象なんですが、今年は優秀な子が多そうですね。今日も８．１ｍｇも射精した子がいましたし、昨日も７．３ｍｇ射精した子がいましたよ。味もすごくコクがあってこってりとして美味しかったですよ。それにヨーグルトみたいに濃くてどろっとしていて、これは期待が持てるんじゃないでしょうか。」

「あたしもさっき、これまでの累計データを確認してびっくりしたわ。今年は当たり年ね！・・・特にあの８７４９号君、あの子は凄いわよ。なにせ、おちんちんは小さいくせにたまたまが２３ｍｇもあるのよ。鍛えれば、本当に狸クラスになるだろうし、ブランド牡畜間違いなしね！！」

今日、検査でチームを組んでいた佐藤先生がトレイに鍋焼きうどんとサラダを載せてやってきた。きっと、あたしたちが給餌と夜の投薬なんかを処理している間に、これまでの牡畜検査結果データベースを確認していたんでしょうね。
「普通の成体牡畜だと、精巣のサイズは15mgか16mg程度なの。でも、あの子、まだ中卒で、何もしなくてももっと発育する余地が大きいのに、既に23mgもあるのよ。これでしっかり薬を投与して鍛えていけば、最終的には60mgを超えてくるんじゃないかしら。Lサイズの鶏卵位にはなるわね。それが二つはいっているなんて、本当に立派だわ。」
「将来、結婚するには理想的な相手ですね?!・・・あ、でも、あの子はもう恋人が待ってるような話をしていましたよね?」
「あの子は1カ月程度、搾精筒で様子をみて、ここの生活に慣れてきたら連休明け頃にでも手搾りに切り換えるべきよ。そうしていろいろなパターンを試してみて、調教(訓練)をみっちり積んだら、半年以内にブランド牡畜にできるんじゃないかしら。」
「そうですね。多分ですが、その頃にはたまたまも何倍かになっているでしょうし、期待できますよ。」
「連休が明けた頃に、手搾り牡畜にするための処置を予定に組んでおくわ。是非、エリート教育をして、来年度の稼ぎ頭になって貰いましょう。」

「ところで、話は変わるんだが、今年のバスで読み上げた挨拶文、あれは近年にない良作で、出来が良いと評判らしいぞ。たかが1分程度の挨拶文と思うが、あれの出来不出来で、受け付けに入ってくる牡畜の眼付きというか覚悟が違ってくるようだな。私も今年、3日ほど受け付けを担当してみて、例年にない手応えがある。」
「それはそうでしょう。あれは全国で共通して使われる挨拶原稿ですから、女性(ほんしょう)救災省のキャリアのお偉いさんが作文するんでしょうしね。」

「私もそう感じたぞ。あれを聞けば、牡畜がどれほど崇高な存在であるのか、いかに女性のために奉仕してくれているのか、そう感じさせるものがある。さすがだと思うな。」
「でも、あの挨拶文は、論理の飛躍があるでしょう。・・・例えばだけど、母乳がでない母親の子供がミルクで育ったとして、その子、または母親や父親は乳牛に恩を感じるのかしら？・・・実は、あたしの母も母乳の出が悪くて、あたしはほとんど粉ミルクで育ったんだって。でも、だからといって、乳牛があたしの命の恩人だ、と言うのは、何か違う気がするのよ。つまり家畜が居れば便利で助かるけど、家畜はあくまで家畜であって、人間のために飼われている存在なわけでしょう？・・・牡畜だって一緒じゃないかしら。獣医のあたしが診察をするのも、牡畜は人間じゃなくて、家畜だからなんでしょ。そのために、憲法上も一時的に人権が停止されるし、それは国民全体の合意と納得の上で決められていて、牡畜になるときにも納得してサインしているんじゃないかしら。誰も強制されたわけじゃないんだし、皆、自分で望んで牡畜になった筈よね？」
「多分だけど、理屈としては先生の言うとおりなんでしょうね。でも、そう言っちゃうと、誰も牡畜になりたがらないだろうし、牡畜の待遇改善といった議論になっちゃうんじゃないかしら。・・・まあ、これは因果関係が逆なのかもしれないし、そもそも効率を優先して家畜扱いにするということの是非とか、いろいろな議論があるんだと思いますよ。」
「現状では、人間のためになるように、という大義名分で、搾精効率が最大になるよう、いろんな処置があって、牡畜にはそれなりの負担がかかっている。身体的改造はごく一部だけど、それでも不可逆的で一生残ってしまうものもいくつかある。ピアスや割礼は勿論だし、性器や乳首などが肥大してしまえば、もうどうやっても元には戻らない。さらに射精を強制した結果、電気刺激でしか射精できなくなってしまい、最終的にリモコン電極埋め込み手術を施される個体も一定数居る。また殆どの牡畜において、精神的な改造は、お

そらく全人格的なものに及び、牧場役を機に、完全に性格や性癖が変わってしまう個体も多い。しかし、それらを含めても、国民の大多数が老若男女問わず受け入れているんだろう。その根底にあるのは、この牧場役が、何も女性のために男性が奉仕する、ということではないからだ。女性が老衰死してしまえば、人類そのものが消滅する。その冷徹な事実の前には、男性が牡畜となって人類を支えて行かなければならない。そのためには、この程度の不利益を受けても仕方がないと皆が認めているからだろう。」

「そもそも牡畜は日本全体の貴重な資産であり、健康管理を万全にしなくては国富を棄損してしまうことになるので、大事にされなければならない。皆も、そして君たちも、それは見てわかっているだろう。決して虐待などされてはいない。多少鞭を打たれることはあっても、それは結局、牡畜たちを適切に管理し、最大限の搾精を得るための手段であって、広い視点では牡畜の幸せのためにもなっている。それどころか、なかには鞭で打たれることを望んでいる牡畜だって居る位だ。いったい何を問題視しているんだろうか？」

「そんなことより、聞いて下さいよ。あたしは、あの例の・・・。」

・・・話はますます盛り上がってきて、まだまだ話題は尽きないわね。でも、ここにいるメンバーは、全員、明日は完全休養に近いのよね。今日入った牡畜は、割礼の傷が完全にふさがるまで、明日1日は搾精がないんで、朝と夜の給餌と、あとは放牧の監視程度で、あたしたちは夜の処置までフリーだから、今夜は皆、遅くまで雑談をしてるんじゃないかしら。・・・あっちのテーブルでは、誰かがアルコールも出してきたみたいだし、これは長くなりそうだわ・・・。こっちもビールと缶チューハイでも買ってこようかしら・・・。

第１２話　スタッフ大食堂にて（幕間）（後書き）

（注１）
会話に出てくる家畜の去勢についてですが、ネットで検索すると、幾つも出てきます。以下にいくつかリンクを貼っておきますが、特にグロいわけではないものの、男性にとってはトラウマものの映像です。男性読者の方は覚悟して御覧下さい。（私も思わず股間を押さえてガードしたくなりました。）

ｈｔｔｐｓ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｗａｔｃｈ？
ｖ＝ＨＤｒ９ｌｍｓＳＭｓＥ
ｈｔｔｐｓ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｗａｔｃｈ？
ｖ＝ＰＭｃＷＥＸｊ１ＵｋＵ
ｈｔｔｐｓ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｗａｔｃｈ？
ｖ＝ｘａｘＳｋＹＳＳ３７０

他方、人間の去勢（睾丸摘出）手術の映像というのも見つけました。自分に置き換えて、手術室のベッドに固定され、これから睾丸を摘出すると宣言されるところを想像すると、激しく興奮します。（もっとも、これは内容的に「杉田家〜」のほうの守備範囲でしょうね。よろしければ、是非そちらも覗いてみて下さい。）

ｈｔｔｐｓ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｗａｔｃｈ？
ｖ＝ｇ６Ｂ８ｖＹＥｕ９ｏＭ
ｈｔｔｐｓ：／／ｗｗｗ．ｙｏｕｔｕｂｅ．ｃｏｍ／ｗａｔｃｈ？

v＝IDbliWPx－uc

https：／／www．youtube．com／watch？
v＝2qNL4oi－dvk

（注2）

これは勿論、あの有名な「家畜人ヤプー」のオマージュです。Spare the whip, spoils the Yap. から転用させて頂きました。

この諺ですが、もともとの英語では、Spare the rod, spoils the child. となっていて、躾け棒（rod：靴べらのような木製の薄い棒で、子供の手とか尻を叩くために19世紀までヨーロッパで用いられていたもの）を惜しむと子供をダメにする、というものでした。この rod と child とで韻を踏んでいるのを、沼正三先生が whip（鞭）と yap（ヤプー）とに換えて、同じく韻を踏むようにしたものです。

第１３話　（幕間）一般牧場の様子（１）　（牡畜２０７９０１２５ＴＹＯ２８３６ＹＡＬＦＥＳＣ１７６２２３８号：西田馨の入営）（前書き）

今回はまた別の視点で、一般牧場に配属となった西田君の様子をまとめてみました。今回まとめるにあたり、これを本編に入れ込むかどうか、少し悩んだのですが、主人公が一切出てこない、いわばサイドストーリーですので、これも幕間の扱いです。

この話は、本編を書き進めるとき、主人公を想定していろいろなケースというか可能性を書いてみたものの、結局使わなかった文章を、一般牧場のことをクラスメートの視点で捉えるということで、活用できるかと考えて再構築したものです。

前にもお伝えしたとおり、西田君は飼育員達とは一切話をさせて貰えず、それどころか処置の途中で目隠しをされてしまいます。彼の眼から入る情報は、極端に限られてしまうので、ほとんど全部が彼の脳内推理で描かれてしまい、かなり舌足らずな描写になってしまいました。（それでお蔵入りになっていたものです。）

しかし、読者の皆様には既に磯部君の体験を通じて、牡牧場の様子がかなり詳細に伝わっていますし、そのときの牡畜がどう感じるか（感じるに違いないか）、逆に牧場運営側の意図としては、どのような意味があって、牡畜をどうしたいのか、何を期待するのか、といった周辺情報が、ある程度は蓄積されているという前提がありますので、この程度の限定された描写でも伝わるのではないかと考えながら纏めたものです。どうか読者の皆様も、二つの牧場の違いを思い描いて頂き、どちらが好ましいか、どちらの牧場が、より興奮するか、感想をお聞かせ下さい。

なお、牡畜は口枷をされていて、話すことができませんので、もしこの話の続きを書くとすると、主人公の磯部君についても、この話で示されたような、脳内推理のみで話が進むことになります。（

飼育員の会話は、それなりにあります。なお、飼育員の会話についても、一般牧場は飼育員同士の会話が中心ですが、実験牧場では飼育員が積極的に牡畜に話しかけてきます。これが大きな違いです。）
今回の、この幕間のような書き方と視点で、話が楽しめるか、というのは、少し不安がありますが、読んでみてどのように感じたか、教えて頂けると幸いです。

この西田君の幕間は、実際に書いてみたら、それなりの長さになったので、3分割して、第14話を本日（12／24）午前8時に、第15話を本日（12／24）午後4時に、それぞれ予約投稿することにしてあります。
お楽しみ下さい。

第１３話　（幕間）一般牧場の様子（１）　（牡畜２０７９０１２５ＴＹＯ２８３６ＹＡＬＦＥＳＣ１７６２２３８号：西田馨の入営）

いよいよ今日は牧場役に出発する日だ。集合は１０時なんだけど、興奮している所為か、いつも学校に行く時間よりも少し早く目が覚めた。

最初、家族全員で見送りに来てくれるような話もあったんだけど、もう子供じゃないんだし、恥ずかしいから一人で行くって断ったんだ。母さんや姉さんは、ついてくるって最後まで頑張っていたな。・・・なんだかんだで、結局父さんだけが見送りに来てくれることになった。父さんは牧場役経験者だから、実は少しだけ心強かったりしたのはナイショだ。（でも、「もう２５年も前のことなんで、全部忘れちゃったよ。」と言われて、何も教えてはくれない。几帳面な父さんの性格からすると、ちょっと不思議な気もする。）

この地区は集合場所が公民館となっている。ただ日時は３月末の１週間のどこかで、時間も６時半から１１時まで、３０分刻みで毎日１０組あるみたいだ。クラスで聞いて回ったけど、皆見事にバラバラで、唯一、磯部のヤツが今日の９時だって言っていた。何か配慮があるのか、それとも単に申込順なんだろうか。

公民館はゆっくり歩いても１５分位なんで、余裕を見て父さんと二人で９時半に家を出た。持ち物は送られてきたカード２枚のみ。他は何も要らないし、邪魔になるだけだって父さんがアドバイスしてくれたから、素直に従った。服装も普段着で良いそうなんで、いつも家で着ているジャージの上下だ。

『２０７９０１２５ＴＹＯ２８３６ＹＡＬＦＥＳＣ１７６２２３８』。これが僕の登録番号だ。最初の部分は僕の生年月日で、次は東京地区という意味だろう。その後の番号は、きっとこの地区とか学区とかに違いない。すると、ＹＡＬＦＳＣというのが、僕の配属され

る牧場じゃないかな。もっとも、規格が決まっているんで、牧場による差は、ほとんどないって話だけど・・・。
久しぶりに父さんと二人きりで出かけたので、牧場役について少しでも教えて貰おうと考えていたんだけど、普段はわりと饒舌（じょうぜつ）な父さんが、ほとんど話そうとしない。というか、牧場役について話題になることを、明らかに避けているフシがある。これも父さんとしては、かなり珍しい。

ーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーー

公民館の駐車場に着いたら、前の時間のグループが出発した直後だったらしく、まだあまり人はいない。丁度、僕たち10時のグループが三々五々集まりだしたというところだった。ざっと見た限りでは、一人で来ているやつと、誰かが見送りに来ているやつが、概ね半々というところだろうか。・・・いや、気のせいかもしれないけど、見送りが居るほうが、ちょっと少ないようにも見える。
まだ時間があると見たのか、父さんがはじめてここで口を開いた。
「二つほど、心構えを述べておく。・・・まず、羞恥心は一切捨てろ。それからプライバシーはどこにもない。・・・お前は沢山居る牡畜のうちの一匹に過ぎない。飼育員は決して意地悪ではないが、モブに手をかけてくれるほどヒマでもない。機械的な対応をされるだろう。それだけは忘れるなよ・・・。」
「わかってるよ。集団生活ってのは、そういうもんだろう？」
僕は、いつもの口調で、軽く父さんの言葉を遮（さえぎ）った。でも、父さんは次の言葉を継ぐことができず、さらに重い、お通夜のような雰囲気で言った。
「どんなに辛くとも、とにかく2年間、ひたすら耐えて頑張って来い。お前の想像のはるか上を行く、辛いことばかりの筈だ。いや、身体的には、そんなに苦しかったりすることはないんだが、心が折れてしまい、精神が耐えられなくなるやつもかなりいる。・・・と

にかく、これは人生の試練だと心しろ。２年後に、笑顔で家に戻って来れるよう祈っているからな。」
「そんな、脅さなくても大丈夫。皆、他のやつもやっているんだろう？・・・僕だけじゃないんだから・・・。それに、きっと友達だってできるさ。」
　それには答えず、父さんは悲しそうな顔をして、僕の肩に手を置くと、僕の眼をまっすぐ見つめ、腹から絞り出すように言った。
「心を強く持て・・・。飼育員にすべてを委(ゆだ)ねろ・・・。頑張るんだぞ・・・。」
　まるで今生の別れのような父さんのセリフに多少の違和感を覚えつつも、この段階の僕は、まだ父さんの話にあった「飼育員」とか「牡畜の一匹」といった単語を気にすることはなかった。

――――――――――――――――――

―――――――――――――――

　僕が乗ったオレンジ色のバスは、環八から高井戸で中央道に乗ると、山梨方面を目指した。車内では、係員のお姉さんが型通りの挨拶などをしていたが、正直どうでも良いと思って、あまり聞いていなかった。やがてバスは談合坂サービスエリアで昼食休憩をとった。
　牧場では、普通の食事ではなくなるんで、ここで心行くまで好きなものを食べておけと言われ、なかなかしゃれたことをすると思ったりした。でも、牧場ではゼリーのような流動食だっていうのは、ちょっとガッカリだな。数日ならともかく、２年間もの長丁場なんだから、食べることは数少ない楽しみの筈なのに、配慮できないんだろうか？
　保存とか配膳といった管理の都合なのかもしれないけど、こういうところが「牧場〝役〟」などと言われて、人権無視とか批判の対象になるんだろう。まあ、２年間だけなんだから我慢しろということなんだろうな。
　ゲン担ぎというつもりじゃないけど、カツ丼にプリンアラモード

を食べて、その後、売店で団子と甲州ぶどうのソフトクリームを食べ、ここからは時間がないとのことだったけど、きっと甘いものとかお菓子なんかは、食べられなくなるだろうからと考え、有名な桔梗信玄餅と、ぶどうゼリーを買い込んで、バスの中で最後のおやつを豪遊食いをした。

――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

バスは大月インターで分岐して富士山方面に向かった。母さんの実家が河口湖の湖畔にあり、この道は家族でよく通るところなんで、見慣れた景色を見ながら、この感じだと富士山周辺の牧場になるのかなと、何となく考えた。どうせ出られないから関係ないんだけど、僕は河口湖周辺には多少の土地勘があるんで、見慣れた風景にちょっと安心したりもした。ただ、この辺り、結構寒い場所なんだよな、夏は快適で良いけど、冬は冷え込むかなーっと、そんなことを考えてるうちに、河口湖インターチェンジで高速を下りて、西湖から精進湖を回り込み、青木ヶ原の樹海の中に入って行って、そこに目指す牧場があった。・・・そうか、つまり、脱走などしたら、樹海で迷って死んでしまうぞというジョークに違いない。・・・ま、そもそも脱走するつもりは毛頭ないけど・・・。

到着した牧場のイメージは、何だか巨大な工場のような建物だった。噂で、監獄のようなところを想像していたけど、確かにフェンスや門がしっかりしているものの、普通の民間企業の工場でも、この程度のセキュリティはあるだろうというレベルで、別に違和感はなかった。中に入ると、警備員のような制服を着たお姉さん達が、少し待ってから、順番に牡畜登録室という部屋に入ると、三人の係員のお姉さん（一人は上司のようで、制服の上にジャケットを纏い会議机の前に座ってＰＣを操作しており、あとの二人は側に控えている）に囲まれて、登録受付を行った。といっても、持参したカード

を用いて印刷した1枚の書類にサインして、拇印を捺印するだけだ。この紙、『人権返納同意書』とか書いてあり、下のほうには身体改造がどうとか、非可逆的処置がどうとか、なんだか怖そうな文字が並んでいた。噂どおり、本当に改造手術なんてされるのかなぁ・・・。でも、そんなのいちいち読んでみても、どうせよくわからないし、嫌だからと拒否できるわけでもない。こんなところで国の機関が詐欺をするとは思えないから、自分の住所氏名が間違いないかどうかだけを確認して、一瞬でサインをして拇印を押捺した。

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーー

「貴重品と、眼鏡やコンタクト、腕時計、指輪、アクセサリー、入れ歯、その他身につけているものは、すべて外してカゴの中のビニール袋に入れなさい。」

係員さんの座ってる斜め後ろに重ねてあった、使い古しの買い物カゴのようなものが、長机の上に無造作に置かれる。

「貴重品はありません。」

そう言いながら、眼鏡を外して透明のビニール袋に入れた。この眼鏡、預けなければいけないとすると、ちょっと不便だ。でも幸いにも、僕はそんなに眼が悪いということではなく、黒板が見えにくいから眼鏡をかけているだけで、日常生活には眼鏡がなくても、何とかなる程度なので、特に抵抗するようなこともせず、素直に従った。

「では、衣服をすべて脱ぎ、同じカゴに入れなさい。靴も袋ごと一緒に入れなさい。」

「えっ？……」

「聞こえなかったのか？・・・すべて脱衣するんだ。早くしろ！」

バシンッ！！

「ひっ！」

物凄い音とともに、座っていたお姉さんが勢いよく立ち上がると、

短い鞭のようなもので机を思い切り叩いた。木製の会議机は、表面が少し削れて、破片がこっちまで飛んできた。

　なんだか訳がわからないけど、とにかく物凄く怖かったんで、急いで服を脱いだ。さすがにボクサーパンツを脱ぐときは、一瞬の躊躇（ちゅうちょ）があったけど、僕の手が少し止まりかけると、横に控えていた二人の係員のお姉さんが、それぞれ制服のベルトに吊ってある鞭を外して構える姿勢を見せたんで、あわててパンツも脱いで全裸になった。このときは恥ずかしさよりも恐怖が勝っていた。

「ピシーッ。」「ギャーッ。」

　遠くから、鞭で打たれて悲鳴を上げる声が聞こえてきた。それも何回も。・・・急いで脱いで良かった。そんなことを考えていたら・・・。

「この服は、卒業の日まで預かっておく。・・・では、そのドアから出て、廊下を右に行ったところにある処置室に行きなさい。複数あるから、ドアが開いている部屋ならどこでも構わない。」

　そう言われて、部屋を出て行こうとしたんだけど、何となく無意識に手で前を押さえるようなしぐさをしたら、いきなり二人の係員に、一人は腕を、もう一人は尻を鞭打たれた。

「ひーっ！！」

「隠すな！！・・・性器を隠す家畜なんて聞いたこともないぞ！・・・それと静かにしろ！」

　あわてて股間から手を離した。ドアから出るところで、さらに怖い声が聞こえてきた。

「もっと思い切り叩かないとダメだ。随分手加減しただろう。・・・ま、最初だから少しソフトにしてやっても構わないが、牡畜を付け上がらせないように力を込めるんだぞ。」

「申し訳ありません。次からもっと強く叩くことにします。」

　僕は震え上がった。といっても、勿論、寒かったわけじゃない。そもそも今日はかなり温かかったし、建物の中は裸でも汗ばむほど暖房が効いていた。・・・牧場役では、逆らうと鞭打ちされるんだ。

しかも、さっきのは相当優しく手加減してくれていたみたいで、本気の鞭は、あの主任と呼ばれていたお姉さんが机を叩いたみたいに、肌が裂けちゃうくらい強く叩かれるんだ！！・・・そう思ったら、鳥肌が立ってきた。

　そんなことを考えながら、前の廊下に出て右手に歩いていくと、廊下に面したドアから、他の牡畜が何人か出てきた。皆、全裸で、前を隠そうともしていない。隠そうとしたら叩かれるというのは、他の牡畜も経験しているのかもしれない。・・・でも、何の都合かは知らないけど、はやく制服を支給してくれないかな。いくらプライバシーはないと言っても、全裸はやっぱり恥ずかしい。第一、ここに居るのは牡畜だけじゃなくて、係員は全員、お姉さんみたいだから、こうしてブラブラさせているのは、いくらなんでもないだろう。多分、身体検査かなにかの効率を考えてのことなんだろうな。まるで囚人のようだ。・・・そう言えば、前に歴史の本で読んだ記憶があるけど、多くの国では第二次世界大戦の頃までは、徴兵検査というのがあって、そこでは全員、素っ裸になって身体検査を受けたそうだ。これはちゃんとした理由があって、性器の検査（性病に罹（かか）っていないか、真性包茎でないか、等）とか、肛門の検査（寄生虫や痔の検査等）を効率よく行うためだったらしい。ましてここは、精液を搾り取るための牧場なんだ。とすると、僕たちも性器の検査とか、肛門の検査とか、されちゃうんだろうか？・・・あのお姉さんたちに？・・・確かに、あの係員のお姉さんたち、僕の裸を見ても表情ひとつ変えなかった。きっと毎日、何人もの男の子の裸を見慣れているに違いない。ここは僕も意識を変えて、女医さんとか看護婦さんに裸を見せるのと同じに考えるようにしよう。

　・・・マズい、そんなことを考えていたら、少し勃（た）ってきちゃった・・・。

　気を紛（まぎ）らわせるために、前を歩く同期（？）の牡畜に話しかけようかとも思ったけど、静かにしろと言われているのに、私語で鞭を

打たれるなんて、真っ平だ。多分、他の皆も同じ考えなんだろう。黙って黙々と歩いていくと、処置室と書かれたドアがいくつも並んでいて、開いているドアのところでは、やはり同じ制服を着た係員のお姉さんが一人ずつ立っていて、手招きしていた。

それぞれ手近な部屋に分かれて入ると、部屋の中には、あと二人の係員のお姉さんが居て、やはり全員同じ制服だった。これまで、あまり真剣に見ていなかったけど、この制服、ポケットが沢山付いていて、作業着という雰囲気も多少あるけど、とっさに思い浮かべたのは自衛隊の人が普段着ているようなものだった。といっても、別に迷彩色ではなく、薄い水色の、わりとしっかりした生地で、全員が茶色い皮ベルトを腰と、肩から斜めにつけている。ベルトにはいろいろな装備が付いていて、その辺りも警察官とか自衛隊員に似ているけど、なかでも腰に下げた短い鞭が、ひときわ眼につく。最初に見たときは警棒みたいなものかと思ったけど、お姉さんたちは皆、その鞭を手に持って、僕たちにあれこれ指図している。わかったことは、ここのお姉さんたち、皆、何の躊躇もなく僕たちをあの鞭で打ち据えるんだ。こうしている間にも、どこかで鞭を打たれる声とか悲鳴とかが聞こえてきて、その度に僕はビクッとなって嫌が上にも恐怖が高まった。

第１４話　（幕間）一般牧場の様子（２）　（牡畜２０７９０１２５ＴＹＯ２８３６ＹＡＬＦＥＳＣ１７６２２３８号：西田馨の入営）

部屋の真ん中には、歯医者の電動椅子のようなものが置いてあった。そこに座るように、鞭で指し示されたので、そのとおりにすると、二人のお姉さんがいろいろと道具の入ったステンレスのトレイとかを準備している間に、さっき手招きしていたお姉さんが電動バリカンを持ってきて、僕の頭を一気に丸刈りにしてしまった。まるで羊の毛を刈り取っているように、本当に手慣れていて機械的な動作だ。きっと毎日、何回もやっているに違いない。

　あっと言う間に丸刈りにされると、今度は本当に歯医者のように、口をあけて中に何か液体を噴霧された。そのまま、コードがついたピストルのようなもので、口の中に光を照射された。これは、虫歯を診てるんだろうか。それとも何かの治療なんだろうか。・・・よくわからないけど、雰囲気としては口の中を消毒しているように感じる。

　それが終わると、口に洋梨を少し平たくしたようなプラスチック製のマウスピースを入れられた。丁度、前歯の裏側から喉の手前のところまで、ぴったりと嵌まり、横についている突起が奥歯の間に挟まって、口をうまく閉じることができない。しかもこれ、喉のほうは、苦しくならない程度に奥まで伸びていて、全体として舌を押さえつけられている感覚がある。これじゃ、しゃべることができない。多分、小さい声でアーウーと呻く位しかできないだろう・・・。

　いったい何の目的なのか、よくわからないまま、このプラスチック製の洋梨を、両側に出ているテープというか、細いベルトをつかって、丸刈りにしたばかりの頭の後側でしっかり固定された。

　次に、二人のお姉さんが両側から僕の腕を持ち上げると、バンザイの姿勢で頭の上のところにベルトで固定された。また、両足を膝

と足首のところで、同じく椅子に固定され、椅子のスイッチを操作した。すると、僕の身体は少しリクライニングして４５度程度に倒されるとともに、両足が膝を上に持ち上げるように思い切り開脚して、完全なＭ字開脚姿勢にされた。これでは股間が丸見えだ。大事なところをすべて差し出していて、物凄く恥ずかしい。いくらお姉さんたちが気にしないといっても、こっちはギンギンに意識してしまう。僕のチンポは発育がずっと遅かったんだけど、ここ1年で急に大きくなってきて、ようやく毛もしっかり生え揃ったんだ。今では、小柄な身体にしては、結構大きめじゃないかと、密かに誇りに思えるほどにまで成長したし、腋毛もそれなりに生えてきた。でも、まだ仮性人なんだ。僕たちの年齢で、完全なムケチンになってるやつなんて、クラスに1名もいないだろう。とはいえ、皮かむりのそれをばっちり見られちゃうのは、相当に恥ずかしい。

　そんなことを意識すると、チンポが少し元気になって、半勃(だ)ちになってきた。これはちょっとまずい。必死になって、他のことを考えるようにする。

　それにしても、何でこんな姿勢にされるんだろう・・・。疑問は沢山あるんだけど、聞くことができない。仕方がないから黙って見ていると、椅子に座ったお姉さんが、座ったまま椅子のキャスターを使って股間に入ってきて、お尻の下の部分のクッションを取り外し、そこにステンレスのトレイのようなものを設置した。その間、両側に立っている二人のお姉さんは、両脇に茶色いどろっとした液体を塗り付けている。

　股間のお姉さんは、突然、僕の肛門に何か冷たい液体を注入した。見ると、どうやらイチジク浣腸のようなものだ。僕は混乱して、何をされているのかよく理解できないでいると、脇の下に塗ったのと同じ液体を股間にも塗り付けられた。それも、お臍(へそ)の周りからＶゾーン、チンポの付け根、さらにキンタマの袋は皺(しわ)を伸ばすようにして、塗り残しがないようにタップリと塗られた。それどころか、腰を持ち上げたＭ字開脚姿勢ですっかり露(あらわ)になった肛門周辺も、きっ

ち塗り込められた。
　その間に、両脇に立つお姉さん二人は、まず僕の手にプラスチック製のグローブのようなものをはめた。中はスポンジの効いた普通の手袋のようだけど、周りはプラスチックの丸い玉になっていて、まるで子供に人気の未来から来た万能ロボットみたいだ。これを手首のところのマジックテープで固定された。
　次に、膝にやはりプラスチック製のプロテクターのようなものを装着され、足にはサンダルのようなものを履かされた。いずれもベルトとかマジックテープで簡単に固定されているだけなんだけど、手も口も使えない状態では、自分で取り外すのは無理だろう。
　そんなことをしている間に、僕はのっぴきならない状況になってきた。おなかがゴロゴロと鳴り出して、便意がどんどん高まってきた。・・・まさか、ここで、このお尻の穴まですっかり晒(さら)している状態で、お姉さん３人に見られながらウンチするの？・・・
　僕は小１のとき、入院したことがある。しばらく寝たきりだったんで、看護婦さんにベッドで浣腸されて、見てる前でウンチしたこともある。あのときも、子供心にも、ものすごく恥ずかしかった。でも、今のこの状況は、それ以上だ。父さんがさっき、「羞恥心は一切捨てろ」と言っていたのが、今わかった。きっとこれからも、こういうことがあるんだろう。あと、確か父さんは、「飼育員にすべてを委ねろ」とも言っていたっけ。つまり、こういうことをされるときは、逆らわず、お姉さんたちに自由にやらせるようにという意味なんだ。いや、どっちみち僕は動けないんだから、あれは行動のことを言ったのではなく、心の持ち方、つまり精神のレベルでお姉さんのやることを受け入れろという意味なんだろう。何も話してくれないと思っていたけど、あの短い一言で、父さんは僕に必要な情報を全部教えてくれていたんだ。かくなる上は、僕ももう、お姉さんたちに全面的に服従して、何をされても進んで受け入れるように努力しよう。多分、それがこの牧場役を乗り切るコツに違いない・・・。

「ねえ、この浣腸と採便はどんな意味があるの？」

「これね。昔の検便は、潜血反応とか寄生虫くらいしか調べられなかったんだけど、最近の医学の進歩で、消化器系臓器の状態はほとんどわかるようになったのよ。便は食べたものが出てくるって誤解があるけど、それは嘘(うそ)で、食べ滓(かす)は1割もないのよ。便の大部分は、消化管の細胞がはがれたものと、腸内細菌が集まったものだっていうのは知ってるでしょ？・・・だから、それらを調べることで、消化管の状態が、かなり良くわかるし、隠れている病気もよくわかるのよ。」

「ただ、こういった腸内細菌とか腸壁細胞は、排便した直後じゃないと状態が変わっちゃって、使い物にならなくなっちゃうのよ。それで、どの牡畜も一律で、この入営処置のときに浣腸して排便させるようにしたって聞いているわ。」

「血液検査とか検尿はしないのかしら？」

「昔はやっていたこともあるらしいわね。結構、大変だったみたいよ。でも牡畜の年齢だと、まだ成人病とか、そういった血液や尿に異常が出るような病気になることは、めったにないのよ。だから、全体の効率を考えて、こうなっているって聞いた記憶があるわ。・・・ただ、あたしがここに来る前に働いていた実験牧場では、いろいろと先進的な調査をするし、牡畜の全身状態を把握する関係で、血液検査と尿検査もするのよ。これは特に、体内の各種ホルモン濃度を調べるのに欠かせないからじゃないかな・・・。」

「それだけじゃなくってね、実験牧場だと、おちんちんやたまたまの綿密な計測もするし、検査射精をして貰って、射精量を調べたりもするのよ？・・・ま、そういう一部のエリート牡畜というのも居るということを、覚えておくと良いわ。」

「ふぅーん？・・・あたしも将来、そういう実験牧場に異動になったりするのかな・・・？」

「希望を出しておくと、勤務地については、かなりの高確率で聞いてくれるみたいだから、そういう希望があれば、出しとくと良いわ

よ。でも、前に居たらかわかるけど、実験牧場は仕事が忙しいわよ。なにせ、一部の牡畜に対しては、手搾りもやってる位だから・・・。」

お姉さんたちの会話から、必死になって情報を読み取って行く。検便の理由はわかったし、ここではやらないけど、牧場によっては検尿と血液検査もあるみたいだ。あと、実験牧場というところだと、噂にあったとおり、お姉さんが手で射精させてくれるみたいだ。

でも、そのかわりチンポとかキンタマのサイズなんかを計測されるとすると、それはそれで恥ずかしいな。・・・いや、ここではそんなことを恥ずかしがったりしていてはダメなんだ。

こうなったら、もう僕も覚悟を決めるしかない。顔から火が出るほど恥ずかしいけど、ここでウンチをすることにしよう。お姉さんたちは仕事で、毎日これを見慣れているんだ・・・。

「あっ、うっ、んぁっ！！」

ブッ、ブッ、ブリブリブリッ。

「おっ、偉い偉い！・・・マッサージしなくても自分からしているね！」

ブリッ、ブリッ、ブッ、ブリッ。

は、恥ずかしい！・・・でも、この一瞬の我慢だ！！

プッ、ブブッ、プーッ、ブリブリッ、ブピーッ。

「この子、立派ね！！・・・恥ずかしそうな顔はしているけど、泣き喚いたりせず、自分からウンチして堂々としているじゃない。」

「本当だね。あ、こら、眼を瞑（つぶ）っちゃダメ！」

ピシーッ。

「んんーっ。」

「せっかく凛々（りり）しい立派なところを撮影できたのに、台無しになるじゃない！！」

「本当に。殆どの牡畜は泣き叫んだりして、使い物にならないんだけど、この子は教科書のお手本みたいな撮影ができたから、この映像は全国の牧場で教材として利用されることになる可能性が高いの

に、眼を瞑っちゃったら顔の表情が見れなくなっちゃうもんね。」
え？・・・撮影って、なっ、何の話？？！！・・・僕は焦って眼を大きく見開いた。
「この子、まだあどけない顔つきでかわいいし、それでいておちんちんはもう大人と同じに発育しているから、ギャップ萌えが際立ってるじゃない？・・・そんな子が恥ずかしさで真っ赤になりながら、ウンチするところを顔と一緒にバッチリ撮影できたんだから、絶対に飼育員の教育ビデオに採用されるわよ。・・・そうしたら、あたしたちの勤務評価も上がるじゃない？」
「そうね、採用されると良いわね。勤務評価はともかく、全国の牧場に一斉配信されるなんて、あたしたちも鼻高々だわ。」
そっ、それってっ、・・・二度と消せないデジタルタトゥーされちゃうってこと？！？！
「この子も、あの教材に映っているのは僕だって、一生の誇りになるでしょうね。頑張った子には、そのくらいのご褒美がなくっちゃね。」
「ん、んぁー、んがぁー、ぁえーっ、ぃあーあー、あぇえーえーっ。・・・うぅいぇーっ、おえあぃーーっ。」
だめーっ、いやーだーっ、やめてーっ。・・・ゆるしてーっ、おねがいーーっ！！
「静かにしなさい！」
ピシーッ。
痛ーいっ。・・・チンポ鞭打たれた！！
「あら、この子、今頃になって泣きだしたわ。どうしちゃったのかしら。」
「変ね。・・・そんなに強く鞭打ちしたつもりはないわよ。かなり手加減したつもりなんだけど。・・・っていうか、痛くて泣いているようには見えないじゃない・・・。」
「でも、牡畜の鳴き声がわかる飼育員はいないんだし、そもそも家畜が何を考えているかなんて、あたしたちの仕事には影響はないわ

よね。」
「まあそうね。先を急ぎましょう。・・・じゃ、これは検便に回して、それと、そろそろ毛が抜けるころだから。」
　三人目のお姉さんも会話に加わった。話しながら、股間のお姉さんが、チューブの先に小さなシャワーのついたものを椅子の横から引っ張りだしてきて、僕の股間にお湯をかけ出した。ウンチのあとの肛門もきれいに洗ってくれて、恥ずかしかったけど気持ちよいなと思ったら、何とさっき茶色い液体を塗られたところの毛が、全部スルッと抜けちゃった。家で姉さんが使っている脱毛剤みたいに、毛を溶かすんじゃなくて、一本一本の毛が根元からきれいに抜けていて、毛には毛根部分がついていた。つまり毛根からすっぽり抜けてしまっているんだ。
「この脱毛剤、本当に良く効くわよね。」
「そうよ、２０年前にこれができて、本当に楽になったわ。というか、これができてから、街の脱毛サロンが次々に倒産に追い込まれたって話よ。」
「これは毛根に直接作用して、毛根の細胞を完全に破壊しちゃうのよ。だから、もうそこからはもう二度と毛が生えてこなくなって、実に簡単なの。」
　えっ！！・・・僕、永久脱毛されちゃったんだ！！・・・それも股間と腋毛まで・・・。せっかく生え揃ったのに・・・。これが、あの同意書にあった、非可逆的身体改造なんだ・・・。このあと、もっと何かされちゃうんだろうか・・・。怖くなってきた。こんなの、噂にも聞いていなかった。・・・キンタマやチンポを大きくするというだけじゃないんだ・・・。もっと他にも身体改造されちゃうんだ！！
　思い出すんだ。・・・父さんは他に何かされていたんだろうか・・・。身体改造の痕跡とか・・・。　父さんと最後に一緒にお風呂に入ったのは、確か一昨年、家族で箱根に旅行したときだ。あのときは、温泉で見た父さんも、周囲の他の大人の男性も、別に陰毛も腋

毛も普通に生えていて、永久脱毛なんてされてはいなかった。（当時の僕は、中2になったのに、まだ小児体型で、あそこはツルツル、チンポもつくしんぼだったけど・・・。）

ダメだ！・・・覚えていない。・・・あまり気に止めてはいなかったんで、記憶が曖昧だ。・・・でも、皆、普通にズル剥けのチンポで、サイズは当時の僕とは比べ物にならなかったけど、それは大人として当然だと思える程度だった筈だ。今の僕と比較したら、どうなんだろう。・・・確か、乳首も大人の普通サイズだった筈だし・・・。僕はまだ、大人サイズの乳首にはなっていないけど・・・。

（注1）

あそこと脇の下の毛を全部永久脱毛されて、ツルツルになると、お姉さんの一人が僕の顔にタオルをかけた。まさか、僕はもう死人扱いだ、ということでもないだろうし、とするとこれは目隠しの意味なんだろうか。でも、この姿勢で目隠しされるのは、物凄く怖い。だって椅子というかベッドというか、とにかく僕はバンザイをした状態で、両手は上に固定され、足は思い切り股を開いたM字開脚のまま、あそこをすべて曝け出している。最初は羞恥で一杯だったけど、今は恐怖しかない。・・・まさか、焼きゴテでも押されちゃうんだろうか・・・。

タオルで何も見えないんで、係のお姉さんたちの会話と、それから実際に自分の身体に触られる感触しかわからないのって、こんなに恐怖なんだ。・・・そういえば、前にロンが具合悪くなって動物病院に連れて行ったとき、看護婦さんと先生がロンをしっかり押さえて、顔をタオルでくるんでいたっけ。あのとき、ロンはいつも行っている獣医さんだったのに、ずっとブルブル震えていたのは、きっと恐怖で一杯だったのかもしれない。

さっきから、乳首とチンポに何かされている。目隠しされてるんで、何をされているのか、感触でしかないんだけど、どうも消毒を

しているような雰囲気だ。特にチンポは、皮を剥いて亀頭から、下の竿の部分まで、丹念に拭き取っているみたいだ。昨晩、僕もお風呂で皮を剥いて、しっかり石鹸で洗っておいたから、多分、恥垢なんかついていないと思うけど、ちょっと心配だ。

「この子、まだ身体も小さいし、顔もあどけなくて可愛いのに、おちんちんは大きくて立派ね。もう完全に成体のサイズだわ。・・・さすがに、まだ剥けてはいないけど・・・。」
「まあ、ここではおちんちんのサイズは関係ないのよね。・・・たまたまは普通みたいだけど・・・。」
「実験牧場だと、そういうところもきっちり計るのよ。やっぱり射精量とたまたまのサイズには、相関関係があるからさ。・・・おちんちんのサイズは関係ないと思われてるけど、実はそうでもないのよ。何故かというと、たまたまが大きくなると、おちんちんも大きくなるっていうデータがあるの。」
「それは因果関係が逆じゃない。おちんちんが大きいから射精量が多いんじゃなくて、射精量が多い牡畜はおちんちんのサイズも大きくなるっていうことよね？」

お姉さんたちが僕のチンポのサイズを品評しながら、精神をガリガリと削るようなことを口にしている。男のプライド、というほどのものは僕にはないけど、父さんが言うとおり、羞恥心が残っていたら心がへし折られて、本当に自殺したくなるような拷問だ。でも、顔にタオルをかけてあるので、少しは恥ずかしさが緩和されるし、それ以前に撮影されているのに、僕の顔が写らないという安心感もある。（さっきのあれ、本当に教材にされちゃうんだろうか。そうしたら、もう僕は一生、デジタルタトゥーをされちゃうんだ・・・顔もばっちり撮影されちゃったし・・・。）
「このかわいいおちんちんとも、これでおさらばなのね。ちょっと惜しい気もするわ。」

「仕方ないでしょ。牡畜は搾精筒をセットする関係で、処置が必要なんだから、いくらかわいくても、もう見納めよ。規格にあってないと、うまく搾精できないのよ。」
「それはわかってるけどさ、あたし、かわいいおちんちん大好きなのよね。・・・もったいないなー。」
いっ、今の話は何?！！・・・チンポとおさらばって、どういうこと?！！・・・見納めとか、もったいないって??！！・・・それに、搾精筒の規格って何のこと?！?！・・・まっ、まさかっ、・・・チンポを切られちゃうとか???
・・・さっきから、チンポの皮を剥いたり戻したり、皮と亀頭との間に何かを入れられたり、よくわからないことをされている。これって、何をしてるんだろう。・・・チンポの長さを短くする身体改造の準備なんかじゃないよねっ?・・・お願いっ、違うって言ってっ・・・。

カチャン。・・・カチャン。
「ぃあー!！・・・ぃぁいいぃぁいいぃぁいあーーっ。」
痛いっ、痛いっ、痛いっ、ちっ、乳首っ、乳首がっ、乳首が痛いっ、痛いっ、痛いっ!！!
もうやだーっ、助けてーっ、お父さーんっ、お母さーんっ、もう僕、家に帰してよーっ、嫌だよーっ。
ガシャン。
「ひっ、ひーっ、ひーっ、あぁーっ。」
ちっ、チンポも切り取られちゃったーっ!！!
「あら、この子も泡を吹いて気絶しちゃいましたよ?」
「本当だ。今日は何故か気絶する子が多いわね。・・・ま、とにかく傷跡にその万能傷薬を塗って、それから起こしましょう。」

第１４話　（幕間）一般牧場の様子（２）　（牡畜２０７９０１２５ＴＹＯ２８３６ＹＡＬＦＥＳＣ１７６２２３８号：西田馨の入営）（後書き）

（注１）

西田君は大人になると男性でも乳首が大きくなると誤解していま す。この時代、普通の成人男性だと、牧場役の結果、乳首が授乳期の女性程度まで肥大させられてしまっているのですが、それが普通だと信じています。従って、自分の乳首は、まだ子供サイズで小さいんだと考えています。

この誤解は、本編主人公の磯部君も同じでしたが、彼は牧場役の最初の日に、どうやらそれが誤解ではないかと思い至ったようです。

（第１１話）

第１５話　（幕間）一般牧場の様子（３）　（牡畜２０７９０１２５ＴＹＯ２８３６ＹＡＬＦＥＳＣ１７６２２３８号：西田馨の入営）（前書き）

感想で、カテーテルによる導尿シーンが見たいとの要望がありましたので、追加してみました。このシーン、最初に書くときも、何とか入れ込もうとしたものの、全員に強制でないと、カテーテル導尿の必然がうまく説明できないのです。しかしながら、全員強制となると、今度は処理人数的に時間が厳しくなり、リアリティが出なくなってしまいます。

それで、誰か一人（例えば主人公）を、そうならざるを得ない状況にすることができるかと、散々考えていたのですが、今回、この幕間を考えるに際して、これなら行けそうかと閃いたものがあり、それを文章にしてみました。

不自然でなく、楽しんで頂けたなら幸いです。

第１５話　（幕間）一般牧場の様子（３）　（牡畜２０７９０１２５ＴＹＯ２８３６ＹＡＬＦＥＳＣ１７６２２３８号：西田馨の入営）

ピシッ、ピシッ。
太股の辺りを軽く鞭で叩かれる感触で眼が覚めた。乳首とチンポが、ジンジンと痺れるように痛い。・・・僕は・・・、僕は・・・。そっ、そうだっ、僕っ、チンポを切り取られちゃったんだ！！・・・でも、それにしては、痛みはそれほどでもない。痺れるような痛さは残っているけど、鈍痛というのか、充分に我慢できる程度だ。
お姉さんたちが、どうやら僕の手足の拘束を外してくれているみたいだ。・・・と、顔にかけられたタオルが取り払われた。
ちっ、チンポはっ？！・・・切られちゃったチンポはっ、どうっ？？！！
あわてて顔を下に向けると、乳首には、僕が持ってきたカードが、それぞれ付けられていた。それも乳首をピンが貫通して・・・。これは、ピアスをされたということなのかな。
肝心のチンポは、ズル剥けのムケチンとなっていて、亀頭が綺麗に剥き出しとなっていた。覆っていた包皮はなくなっていて、その代わりというか、亀頭の下、約１センチ位のところに小さなプラスチック片がぐるっと竿を一周していて、良く見ると、そこで傷口を固定しているみたいに見えた。・・・あれは、チンポを切り取ったんじゃなくて、包皮を切り取ったんだ。つまり僕は、包茎手術をされたに違いない・・・。良かった・・・。そう思ったら、気の所為か、痛みも随分楽になってきたみたいだ。何かして貰ったのか、それとも気持ちの問題なんだろうか・・・。
「よし、これで全部お終いだ。そのドアを出て、右の奥にあるホールに行け。これからは、常に四つん這いで歩くように。あとはホー

ルの飼育員の指示に従え。」
そう言いながら、もう一人のお姉さんが、小さなカウベルの付いた首輪をつけてくれた。
改めて思ったんだけど、この人たちは「飼育員」さんなんだ。つまり、これから僕たちのお世話をしてくれる人ということなんだろう。でも、あの鞭は恐怖だ。お世話というより、僕たちを管理するというのが近いのかな。だって、僕たちはもう家畜になっちゃって、ここで飼われている状態なんだから・・・。

電動椅子はベッドのように平らになって下がって行き、地面とあまり差のない高さになった。それで、ゴロンと転がるように下りて、言われたとおり、四つん這いでドアのほうに行くと、もう一人の飼育員さんがドアを開けてくれた。
廊下に出ると、そこには他の牡畜が3匹（もう3人とは数えちゃいけないんだ・・・）居て、それぞれ立ち上がろうとしていたが、見ていると足のプロテクターによって、うまく立てないみたいだ。へっぴり腰でよろよろと立ち上がりかけても、まるで犬か猫がちんちんの姿勢をしているみたいに、直ぐ倒れて四つん這いに戻ってしまう。そんな奴らを横目に、言われたとおり右奥のホールへと向かった。途中、他のドアからも何匹かの牡畜が出てきて、ホールに着く頃には7匹か8匹が列をなしていた。
ホールには、既に20匹位が集まっていた。皆、言うまでもなく全裸で、手足にプラスチックの器具を装着され、四つん這いでいる。全員、股間も脇の下もツルツルだ。眼を凝らしてみると、全員のチンポがズル剥けで、僕のチンポと同じようにプラスチック片がチンポをぐるっと取り巻いているのがわかる。・・・そうか、僕が知ってる大人の男性は、皆、ズル剥けだったんで、大人になると、誰でも皮が剥けてくると、なんとなく思っていたんだけど、皆、この牧場役で切り取られちゃっていたんだ。父さんも見事なムケチンだったけど、きっとあれも牧場役での結果なんだろう・・・。

「主任、50匹になりました。」
「よし、これから放牧場をぐるっと見て回って、それぞれの畜舎に向かう。ついてこい。」
　言われた通り、全員で四つん這いのまま、ぞろぞろと飼育員の後に続いて屋外に出た。広い芝生の場所で、ちょっとゴルフ場に似ている雰囲気だ。近くには寄らなかったけど、フェンスがずっと続いていて、あれを超えて逃げ出すというのは、ちょっとなさそうだな。そもそも、この裸で手足に変なものを付けた状態では、とても逃げられるものではない。

「この放牧場は、お前たちが散歩して運動する場所だ。毎日、午前と午後にここを二周程度、歩くことになっているから、覚えておくように。」
　そんな説明を半分聞き流しながら歩いていくと、木陰というか、あまり目立たない場所にウンチが落ちていた。見た感じ、してから1日か2日たったもの、という雰囲気なんだけど、不思議なのはここ、野生動物が入ってこれそうもない場所なんだよね。あのフェンスを見るに、ネズミ程度の小動物なら、あるいはヘビとかならまだしも、あとは空を飛べるものでないと、ここには入れない筈だ。・・・なのにこのサイズ、これ、どうみても人間のウンチに見える。・・・そう言えば、この牧場、入ってからここまで、どこにもトイレが見当たらなかった。ということは、これはやはり人間のウンチということなんだろうか。家畜は外で、好きなときに好きなようにウンチをしろということなんだろうか。・・・あの処置室での浣腸とかを考えると、その可能性は高いけど・・・。
　四つん這いで歩いていると、少しおしっこがしたくなってきた。多分、その辺で適当にしても良いんだろうけど、犬みたいに片足をあげておしっこするのは、何となく（いや、かなり）躊躇(ちゅうちょ)があったんで、そのまま我慢して皆と一緒に歩いていった。途中、水飲み場というものを教えられたけど、使い方は、自分のケージ（ケージっ

て、何だろう？・・・カゴっていう意味だけど、自分の部屋のことなんだろうか？）に使い方が書いてあるから、よく読んでおくように、と言われた。
しばらく歩くと、カマボコ型の建物が沢山並んでいる場所にやってきた。そこで、自分の胸の識別番号に従い、該当する建物に行くように指示され、解散となった。

胸のカードを確認すると、僕の番号は７６番となっている。言われたとおり、７６と大きく書かれた建物に向かうと、入り口で別の飼育員のお姉さんが立っていた。
「ドアは押せば入れるから。入ったらトンネルでシャワーを浴びて、それから自分の番号の最後の二桁と同じケージに入りなさい。夜の給餌までは自由時間だから、好きに休んでいて構わない。」
そう言われて、建物に入ると、中はとても温かかった。入り口の目の前に、透明のプラスチックでできたトンネルがあり、その中を歩いていくと、周囲から強いお湯のシャワーが出て、さらに進むと強い温風で乾燥された。まるでガソリンスタンドの自動洗車機みたいだ。
トンネルを抜けるまでには、身体も完全に渇き、言われたとおり、自分の番号のケージを探して、そこに入った。このドア、入るときは押すと開くんだけど、中からは開けられないみたいだ。ケージというから、檻のようなものかと思ったけど、要するに透明のパネルで仕切られた、個室と考えれば良いのかな。でも透明なんで、ずっと先まで見渡せるし、上側は開いているから、音や声（といっても僕たちは、口にマウスピースを入れられているんで、話は一切できないけど・・・）は筒抜けだ。これでは確かに、プライバシーなどどこにもない。
部屋の中を確認しようかと思ったんだけど、もう僕の精神は限界に来ていて、へとへとだったんで、やはり透明のプラスチックで出来たベッドにごろんと横になると、そのまま寝入ってしまった。

―――――――――――――――
―――――――――――――

キーン・コーン・カーン・コーン・・・。

チャイムの音で眼が覚めた。目覚めて直ぐ、物凄くおしっこがしたいと思った。さっき、放牧場でおしっこをしたかったのに、ここに来たら疲れ果てて、そのまま寝ちゃったんで、もうかなり限界に近い。

どこでおしっこをすれば良いんだろうと、ケージの中を見回すと、奥の隅のほうに２０センチ程度の穴が開いている。そして壁には、この穴の上に犬のお座りの姿勢の牡畜のＣＧが貼ってあった。これがトイレらしい。そう咄嗟（とっさ）に判断して、僕もＣＧのように穴の上にお座りの姿勢となり、おしっこをした。

穴の中は水が流れているみたいで、やはりこれがトイレで良かったらしい。ほっとして、他の注意書きをいろいろと読んでみた。（部屋にある使い方をよく読むようにと言われていたしね。）

すると、後にある水飲みの使い方とか、チャイムが鳴ったら搾精または給餌の時間なので、入り口横の穴から首を出すようにとか（ここにもＣＧのピクトグラムが書かれていた）、いろいろ注意書きがあるんだけど、その下のほうに、「排泄口使用禁止時間：１８時〜１９時」と書いてあった。今、チャイムが鳴る前に、鐘が７回鳴ってるから、するとこの禁止時間にトイレを使っちゃったんだろうか。・・・ギリギリで、鐘が鳴った後に使ったことにして貰えないかな。また鞭で打たれたら堪らない。しかも、今度は禁止と書かれていることをやっちゃったんだ。思い切り鞭で打たれても仕方がないような大きな違反なんだろうか・・・。ばれないと良いんだけど・・・。

急に凄く不安になってきたんだけど、悩んでも仕方がないので、図に書かれているとおり、ドアの横の穴から首を出した。周囲のケ

ージの牡畜たちも、同様に穴から首を出して、キョロキョロと見回している。
カチャン！
穴の上から、何かが落ちてきて、僕はギロチンのように首を挟まれてしまった。
すると、タンクを載せたカートのようなものを押しながら、飼育員のお姉さんが入ってきて、端から順番に、タンクから出たゴムホースみたいなものを牡畜の口に突っ込んでいる。見ていると、口に開いた穴に、無造作にグッと押し込んでいるんだけど、あれ、３０センチ以上も口の中に挿入しているみたいだ。あれだけ入るということは、多分、胃に届いているんじゃないか。
入れられた牡畜は、死にそうな顔をしてえずいているけど、首を固定されているんで、どうしようもない。グゲッ、ウグッと、くぐもった声で泣き喚くだけで、ほとんどのヤツは涙をポロポロ零している。でも、挿入されている時間は、せいぜい１５秒から２０秒位で、挿入するときちょっと手こずることがあっても、全部で３０秒程度と、あっと言う間に突っ込んだホースを抜いて、次の牡畜に取りかかっている。
端からどんどん迫ってきて、とうとう僕の番になった。じたばたしても仕方がないし、父さんの訓示もあるんで、覚悟を決めて飼育員のお姉さんのほうを向いてじっとしていたら、お姉さんもニコッと笑って、僕のマウスピースに開いた穴にホースをあてがうと、一気に押し込んだ。
「ングッ、グェッ、ンガーッ、あぁぅっ。」
しっ、死ぬっ、いっ、息がっ、息がっ、のっ、喉もっ・・・。たっ、助けてっ。
本当に死ぬかと思った。こんな拷問、これから毎日あるんだろうか。
しかし、他の牡畜と同様、ホースを突っ込まれていた時間は、せいぜい１５秒もなかった。その間に、胃が破裂するんじゃないかと

思う位の勢いで、胃の中に何か冷たいものが流れ込んできた。多分、これがゼリー状の食事（もう「エサ」なのかもしれない）なんだろう。

拷問のような一瞬が終わると、別の飼育員が、やはり端から順番に部屋に入ってきて、股の下にバケツを置いた。

「ここにオシッコをしなさい。」

他のケージの牡畜は、言われたとおりバケツにおしっこをしているんだけど、僕はつい今さっき、給餌の直前におしっこをしてしまったので、まったく出ない。

ピシーッ。

痛─っ！！

「早くしろ！・・・もう一発欲しいのか？」

思い切り鞭で打たれた。でも、出ないものは出ない。僕はどうして良いかわからず、涙が出てきた。

「泣いたって何も起きないぞ。・・・お前、禁止時間にオシッコしちゃったのか？」

僕は涙をポロポロ零（こぼ）しながら、コクコクと首を縦に振った。

「注意書きは良く読んでおけ。・・・出ないものは仕方がないから、これを付けてやろう。他の牡畜が終わったら、回収に来るからな。」

そういうと、鞄から何かを取り出し、ぼくのチンポを握りしめた。僕は首を固定されているので、何をされるのか見えず、べそをかきながらじっとしていると、いきなりチンポに何かをぐぐーっと挿入された。

ひっ、ひーっ、いっ、痛いっ、痛いっ、ひーっ、何っ、何っ、何を挿れられたの？

見えないからわからない。けど、チンポの奥まで、何かをどんどん挿入され、それは身体の中の中まで達したように感じた。我慢できないほどではないけど、かなり痛い。特にチンポの中程から、奥のところまで、何かが入って来る不快感と、その何かによって無理

やり広げられる痛さで、僕はまた涙を盛大に流した。
「じゃ、また後で来るから。」
お姉さんは、その挿入したものの先についているビニールの袋みたいなものを、僕の左の太股に絆創膏で張り付けると、チンポに挿入したまま、そう言い残して出て行ってしまった。僕の様子は、近くの牡畜（もう自分たちは全部終わったらしい）が、興味津々で透明な壁に近づいてガン見している。でも僕はそれどころじゃない。首はまだ固定されたままで、チンポは痛いし、そもそも何かを挿入されている違和感は耐えがたい。この拷問は、いつまで続くんだろう。

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーー

小一時間位で、お姉さんが二人、戻ってきてくれた。
「あ、結構溜まっているじゃない。これでならＯＫだわ。」
「やっぱり、留置カテーテルは効果があるわね。でも、挿れるのは、結構難しいのよね。」
そんな話をしながら、僕のチンポに挿入されていた何かを、ぐいーっと引っ張りだす感覚があり、アイタタタタッと思った瞬間、チンポに挿入されていたものが抜き出された。
すると、飼育員の一人が、僕の後から股間にアクセスしてきて、キンタマを何かで拭くように思ったら、次の瞬間チクっとした。
キンタマに注射された！！・・・そう思った僕はこれが噂（うわさ）に聞いた、キンタマを肥大させる注射なんだと、直感的に理解した。・・・そうだ、そう言えば父さんは、ムケチンだったというだけじゃなくって、キンタマもでかかったっけ。チンポのサイズは、もう僕も父さんに負けない程度には大きくなってきたと思っていたけど、キンタマはまだずっと小さいと感じていた。きっと牧場役が終わるころには、僕も父さんみたいなでっかいキンタマになっているに違いな

い・・・。

ひっ、こっ、今度は何？・・・何を挿れられたの？

せっかくチンポから管を抜いて貰ったと思ったら、今度は何か濡らした綿のようなものを挿入された。今回も、さっきの管ほどじゃないにしても、かなり奥まで挿入されているのは間違いない。

管を、一番奥（多分、あれはおしっこを取るためだったんで、膀胱まで挿れられていたんだろう）まで挿れられたのと比べると、もっと浅いところ（といっても、チンポの部分は超えて、その奥の、多分これは前立腺のところまで達しているようだ）で止まっている。これはこれで、かなりの違和感で、一刻も早く抜いて欲しい。でも、二人の飼育員さんは、持ち込んだものを片付けると、そのまま出て行ってしまった。

「それは明日までそのままにしておいてね。それから壁の注意書きは、よく読みなさい。じゃあまた、明日。」

出て行くとき、僕の首のギロチン板を上にあげて、首を開放してくれた。

僕は、鞭を打たれちゃ敵わないので、壁にある注意書きを全部、必死になって読んだ。一日のだいたいのスケジュールなんかも書いてあって、それによると僕たちは毎日、午前中に2回、午後に2回の搾精があるらしい。また、さっきも聞いたけど、午前中と午後に、それぞれ外に出て運動（散歩とか）をするらしい。それ以外だと、給餌は朝と夜の2回のみ、例のタンクから胃の中に直接入れられる拷問が、毎食繰り返されるようだ。それと、水の飲み方も書いてあって、基本的には給餌と一緒で、ゴムホースを胃まで挿入すると、根元のセンサーが反応して水が飲めるみたいだ。でも、自分であのホースを胃まで突っ込むなんて、絶対にできるわけがない。それとも、いつかは慣れてくるんだろうか・・・。

最後に、確信したことがひとつある。僕たちは、ここでは常に裸で過ごすことになるんだ。何か制服のようなものを支給されるのかと思ってたんだけど、壁に貼ってあるCGのピクトグラムは、牡畜

がすべて、全裸で描かれていた。それにこの建物の中の温かさ、というか裸でも暑い位の温度、これを考えると、これから2年間は、僕たちはもう服を着ることはないに違いない。確かに動物を飼うとき、服を着せるというのはなくって、裸でも過ごせるように温度管理をするものだ。この暑さが、その答えなんだろう。

やがて、チャイムで鐘が9つ鳴った。9時になったということらしい。スケジュール表によると、9時が消灯・就寝となっている。チャイム終了とともに、「一日の終わり」という、僕も知ってる有名な曲が流れて、それとともに照明が暗くなった。僕はチンポの違和感が悪化していたけど、とにかくプラスチックのベッドに横になった。

照明が暗くなると、今日一日、あったことがいろいろと頭を過り、また涙が出てきた。ふとみると、隣のケージでも、その隣のケージでも、ベッドに横になった牡畜たちが、皆、肩を小刻みに震わせていて、多分あれは泣いているんだろう。僕だって涙が止まらない。自分の身に起きたことが信じられず、明日以降、どうなってしまうのかと、ひたすら怯えながら、それでも精神的にも肉体的にもヘトヘトになっていた所為か、いつの間にか寝入っていた。

第１５話　（幕間）一般牧場の様子（３）　（牡畜２０７９０１２５ＴＹＯ２８３６ＹＡＬＦＥＳＣ１７６２２３８号：西田馨の入営）（後書き）

これで、このお話に関して、手元にあるものはすべてアップ致しました。お伝えしたとおり、年末年始に少しまとまった時間が取れれば、この話を今後書き続けるかどうか、考えてみます。是非書いてみたいという気持ちは勿論ありますが、もう片方も進めなければならないので、仮に続けるとすると、おそらく月１回程度の更新が精一杯だと思います。どうすべきか、じっくり考えさせて下さい。

ということで、取り敢えず、ここでいったん、筆を置きます。９月から３カ月間、短期間でしたがおつきあい頂き、ありがとうございました。（再開するときには、活動報告でお知らせ致します。）

第16話　お仕事開始（前書き）

ちょうど1年間のブランクとなってしまいましたが、まず牡牧場の続きを再開します。
いよいよ搾精というお仕事が開始された主人公が、どのように順応して行くのか、訓練（調教？）の成果をお楽しみ下さい。

第16話　お仕事開始

　言われたとおり、昨日は完全休日らしくて、終日何もなかった。
朝の給餌の前に、ペニスに突っ込まれていた綿棒を抜いてくれてオシッコを回収されたけど、それ以外では午前中と午後に、それぞれ1時間ちょっと、運動の時間だといって蓄舎を追い出されて、外で放牧場を最低でも2周以上歩き回ってくるように言われただけだ。
(勿論、裸で四つん這いだ。)
　鞭で打たれるのは嫌だし、放牧場の様子も知りたかったんで、あちこちせっせと歩き回ったら、最初は少し肌寒かったのに最後は汗ばむほどで、蓄舎に戻ったときのシャワートンネルが心地よかった。
これならよほど寒い日でない限り、真冬でも動き回っていれば大丈夫だろう。
　わかったことは、敷地全体が高さ3メートル程度の黄緑色の金網のフェンスで囲われていること、その外に深さ2メートル、幅3メートル程度のコンクリートの空堀があること、その空堀の外側に同じ金網のフェンスがあり、フェンスは両方とも半透明の板が取り付けてあって、視線を遮(さえぎ)る目隠しの役目も兼ねているようだ。そしてその外側に道路が周回していて、この道路は定期的に黄色い作業車のような車が巡回しているみたいだった。(目隠しのフェンスといっても、継ぎ目に数ミリの隙間はあるんで、そこに目を近づければ多少は覗(のぞ)くことができる。まあ撮影防止といった程度なんだろう。でも、ドローンとか飛ばされたら意味がないけど、それを防ぐための巡回なんだろうな。)
　裸で、しかもこの手足では、こんなに厳重にしなくても脱走はできないから(そもそも逃げようとは考えていない)、このフェンスにせよ空堀にせよ、脱走防止ではなく外部からの侵入を防ぐためじゃないかな。僕たちは国の財産として、貴重な精液を生産する大事

な牡畜なんだから、万一のことがあったらマズいと気をつけてくれているんだろう。
　四つん這いになって放牧場を歩いていると、動物の糞のようなものが転がっていた。でも、あのフェンスを見てもわかるけど、外部から動物が入ってくるのは、まず不可能だ。鳥とかヘビ、せいぜいネズミ程度なら可能かもしれないけど、この糞のサイズというか見た目は、どう考えても人間のものだ。いや、人間じゃなくて牡畜か・・・。
　自分のケージには、排泄穴があったけど、それ以外にここではトイレらしきものは一切見当たらない。そう考えて気をつけていたら、他の放牧されている牡畜で、かなり慣れた様子のヤツが、犬のように片足を上げてオシッコしていたり、犬のお座りの姿勢（ケージで排泄穴の上にお座りするのと同じ）でオシッコしていたりするのを見かけた。中には四つん這いで歩きながら、いきなりオシッコしているヤツもいた。あいつらは多分、去年入った2年目の先輩牡畜なんだろう。全身が見事に日焼けしているのと、遠目にもよく目立つ程度にキンタマや乳首が大きい。僕たちも1年後には、あそこまで肥大するんだろうか・・・。彼らを見ていると、羞恥心というものが、まったくなくなってしまったようで、僕がガン観していても一切気にせず、普通に動物が排泄するのと同じように自然体だ。さすがに大きいほうをしているのは見かけなかったけど、これは単に、今は大きいほうをもよおしていないからであって、したくなれば誰が見ていても気にせずその辺で排泄するに違いない。
　彼らは、放牧場のあちこちに設置された水飲みから、何の躊躇（ちゅうちょ）もなく水を飲んでいる。昨日来、給餌の度に死ぬかと思わされる胃カメラのような拷問も、慣れた様子でいとも容易く自ら管を胃まで突っ込んでいる。長さが３０センチ程もある管を一瞬にして根元まで飲み込んでしまうのを見ていたら、昔何かで見た剣を飲み込む大道芸を思い出した。
　放牧時間が終了するときには、スピーカーから有名な「家路」と

いう曲が流れていた。これも下校のときの曲なんかで、よく耳にするものだ。ただ、午前中の放牧終了の合図としては、ちょっと違和感があるかな・・・。この曲には夕日が似合うイメージだ。

夜には、初日と同様に、まずチューブによる給餌があり、それと並行してキンタマへの注射（前日とは反対側のキンタマだった。どうやら毎日、交互にされるようだ。）、そしておしっこを集められ、全部終わるとまたペニスに薬を染み込ませた綿棒を挿されて、ようやく首のギロチンから開放された。どうも、僕たちに何かをするときは、必ずこのギロチンで固定されるものらしい。きっと四つん這いで首を固定される姿勢は、飼育員さんがバックから股間にアクセスするのに都合が良いんだろう。

―――――――――――――――

―――――――――――――

明けて到着三日目。朝、7時のチャイムとともに飼育員さんたちが一斉に入ってきた。

「さ、今日からお仕事開始だからね。濃い精液をドピュドピュたっぷり出してね。今日だけは朝の給餌はその後になるからね。明日からは先に給餌があって、その後に1回目の搾精だからね。」

昨日も思ったんだけど、僕たちが何かするときは、必ず通路側に首を出して、ギロチン板で固定される。これは貼ってある説明にもピクトグラム入りで描かれているんで、これが僕たちの標準スタンバイポジションらしい。逆らうと鞭を打たれそうだし、そもそも逆らうつもりもないから、黙って首を穴に入れて待っていると、全員揃った頃合いで飼育員さんが何か操作したのか、一斉にギロチン板が落ちてきて首が固定された。

と同時に、後ろのドアから飼育員さんたちが入ってきて、昨日と同じようにペニスから綿棒を抜き、おしっこしてね、とバケツを置いた。夜の間は綿棒が挿さっていてオシッコできないから、一晩たつと、かなり尿意をもよおしている。それで飼育員さんの見ている

前で、おしっこをした。羞恥心はもう殆どなかった。・・・僕もこの生活に、少しは慣れてきたのかもしれない。いずれ、昨日見た1年先輩の牡蓄のように、誰が見ていようとそんなの関係なく、どこででも排泄するようになるんだろう。きっと、大きいほうも含めて・・・。

　おしっこのバケツを回収すると、飼育員さんはペニスを掴み、ちょっと力を入れて数回ゴシゴシと扱（しご）くような動作をした。一瞬、ちょっと痛みがあったけど、たいしたことはなくて、この動作でペニスにぐるっと付いていたプラスチックのホチキス針のようなものが取れたようだ。これは包皮を切り取った傷を固定していたものだから、多分これで傷も癒（い）えたんだろう。

　すると、床にある蓋を開けて、そこからなにやら引き出すように取り出すと、ペニスにぐっとはめ込むような感触があった。といっても、首を固定されていているので、自分の股間に何をされているのか、自分で見ることはできない。ただ通路の反対側のケージは、壁が透明なんで良く見えるから、そこにいる牡蓄が何をされているかは見ることができる。多分、僕にされたのも同じだろうから、それでわかることは、床から引き出したものは透明のチューブの先端に透明の筒のようなものが付いているホースのようなものだ。見た目は牛の乳を搾る機械に似ている。チューブは何本かを束ねたようになっていて、ペニスにはめ込むときに、何かを尿道に挿（さ）される感覚があったから、してみるとあの束ねたチューブのうち1本は先端が筒の中にまで伸びていて、それを尿道に挿入するようにしてるんだろう。綿棒みたいに奥深くまで挿（さ）されてはいないし、反対側の様子でも筒からそんなに突き出してはいないから、せいぜいペニスの長さの半分程度（多分7～8センチ？）のチューブを挿入されたに違いない。きっとこれは精液が漏れたり飛び散ったりしないように、効率よく回収するためなんだろう。（痛くはないけど、尿道の違和感はかなりある。この状態でペニスを扱（しご）かれたら、痛いんじゃないかな・・・。ちょっと怖い・・・。）

ほんの5分程度で、畜舎の全員の準備が整ったようで、ピピピッという電子音とともに、グゥイィーンというモーターが回転するような音と、シューッという空気が漏れるような音が響きだした。それと同時に、ペニスにはめ込まれた筒の中の空気が抜けて、ゴムのようなグニグニした感触のものがペニスにぴったり吸いつくように締めつけてきた。特にペニスの根元の部分（筒としては先端のほう）は、少し強く締めつけるような感じで、ペニスをしっかり締めつけて、絶対に抜けないような感触だ。

僕はまだ童貞で、セックスの経験はないから、これが女性の膣の中と同じなのか異なるのか判断はつかない。でも見た眼というか雰囲気からすると、高性能な電動オナホが近いんじゃないかな・・・。冬休みに西田がオナホを貸してくれるって言ってたけど、オナホとはいえ西田と穴兄弟になるのはちょっと気が引けたんで、断っちゃったんだ・・・。あれ、やっぱり借りて試してみればよかったかなぁ・・・。

そんなことを考えていたら、突然モーターの音が少し甲高くなったと同時に、カシャポン、カシャポンという音とリズムで筒の中が前後に動き出した。根元はしっかり固定していて動かないようになっており、竿の途中の部分と亀頭の部分が独立してペニスを扱いている。前後に扱く動作とシンクロして、筒の内部がキュッ、キュッと締めつけるような動きもする。特に亀頭の部分は、皮を切り取られて剥き出しにされた所為か、これまでの皮オナニーとは比較にならない圧倒的な快感で、グニグニと締めつけながら前後に扱かれる気持ちよさは、とても耐えられるものではない。尿道にチューブが差し込まれている違和感で、射精できないかと思ったけど、そんなことはない。逆にこの圧倒的な刺激と快感の前に、尿道に挿さっているチューブの刺激も、ちょっと気持ち良い気がしてきたりする・・・。ピストンは次第に早くなり、音も変わってシャポシャポシャポシャポというように高速になってきた・・・。こっ、これはっ、もう耐えられないっ・・・。

さらに早くなって、シャッシャッシャッとなってきたのにつられて・・・。

「あっ、あぁっ、あぅっ、ぁふっ、あああっ、ぁがが っ、いっ、ぃひぃひっ、ぃっ、いふっ、いふっ、いぁあぁーー！」

　びゅるるるるるるーーーっ。

　イった！！・・・1分と経たずに射精した！・・・あまりの快感に、僕は瞼（まぶた）の裏に火花が飛んで、気絶しそうになった。これを毎日4回もされるんじゃ、あっと言う間にメス落ちさせられちゃうに違いない！・・・そうか、これって、要するに快感を求め続けて、それ以外のことは考えられなくする効果があるに違いない。これから2年間、ここに居る間、僕たちは射精することだけしか考えちゃいけない、いや、他のことは一切考えることができなくされちゃうんだ・・・。

　周りのケージの様子を見てみたところ、周囲のヤツらも、皆一瞬で射精して、惚けたような顔をしている。遠くてよくわからないけど、どうやら気絶してしまったヤツもいるみたいだ。そいつらを見ていたら、ふと気がついたんだけど、ケージの頭の上の部分にランプがあって、殆どのケージでは緑のランプが点いている。遠くまで見回すと、赤いランプが点いているヤツも2~3匹居たけど、それも間もなく緑に変わった。自分の上はよく見えないけど、反対側のケージのアクリル板に映ったものを見たら、どうやら緑のランプが点いているようだ。あれは無事射精したというサインなんだろうか。・・・赤ランプはいったいなんだろう？

　搾精が終わったら、飼育員さんたちが次々にケージに入ってきて、ペニスの筒を外してくれた。それと並行して、例の給餌のためのタンクが乗った手押し車が畜舎の両端から入ってきた。僕のケージは端っこなんで、トップバッターだ。担当はまたメグちゃんだった。

「初仕事お疲れさまー。朝御飯にしようねー。」

　そう言いながら、口枷の穴にチューブをあてがうと、一気にぐっ

と力を込めた。
「ぅぐっ、ぐぁっ、んぐっ、んんっ、ぁがっ、んがー。」
　またしても死にそうな拷問で、喉から胃までチューブを突っ込まれた。こんなの、本当に慣れるんだろうか。でも、さっきの先輩たちは、いとも簡単に自分でチューブを飲み込んでいた。何かコツがあれば、教えて欲しい・・・。そんなことを考える余裕もないうちに、チューブがぐいっと引っ張られて、口から抜き取られた。
「はい、ごちそうさまねー。少し慣れてきたかなー？」
「げっ、げぼっ、んぐっ、ごぼっ、うぐっ、ぅげっ。」
　そんなバカな、と思ったけど、そういわれると、最初より2日目、そして3日目と、拷問の時間がどんどん短くなっているように感じる。これは慣れた所為(せい)で簡単にできるようになり、実際の時間そのものが短くなっているのか、それとも実際の時間は変わらないけど、慣れた所為(せい)で僕の体感時間が短く感じられるようになったのか、よくわからない。けど、確かに拷問の時間が少し短く感じるのは間違いない。こうして次第に家畜の生活に慣れていけば、やがてあの先輩たちのように、何の苦労もなくチューブを自分で飲み込めるようになるんだろう。そう言えば、毎晩ペニスに挿(さ)されている綿棒は、向かい側のケージの牡蓄を遠目に見ていると、多分20センチ位の長さがある。自分に挿入されるときは首を固定された姿勢のため一切見えないけど、見えていたら怖くて耐えられないかもしれない。前立腺に届くまでというと、こんなに深くまで挿(さ)されるのか・・・。
　最初はものすごい異物感で死にそうだった。でも、たった2回されて、さらにこの搾精筒を装着するときにもチューブを挿入されたりしているうちに、さほど気にならなくなってきた。きっと今なら、自分に挿入されるところを見ても、そんなに恐怖はないだろう。これも牡蓄として慣れてきたということなんだろうか。どうやら牡蓄というのは、身体のあらゆる穴にいろいろなものを突っ込まれるのが仕事なのかもしれない・・・。まだお尻には何もされていないけど、そのうち浣腸とかされちゃうんだろうか・・・。

好むと好まざるとにかかわらず、身体も心も、みるみるうちに、ここの生活に慣れていくのがわかる。最初は辛かったことも、繰り返し経験するたびにキツさが減ってくる。この調子だと、あの先輩牡蓄たちみたいに、自分でホースを胃まで簡単に飲み込めるようになるのも案外直ぐなのかもしれない。とにかく今の僕は牡蓄、つまり家畜なんだから、この生活に一日も早く慣れる必要があるんだ。辛いなんて感じていたら搾精に影響が出ちゃう。どんなことでも、何をされても辛いなんて感じずに気持ちよくなって、射精できるようにならなきゃいけないんだ・・・。

結局、この日は壁に貼ってあったスケジュール表どおり、1日4回の搾精があった。7時、11時、15時、そして19時と、4時間毎にこの搾精筒で射精させられた。それ以外では、朝と夜の給餌、そして午前中と午後に、それぞれ1時間程度の運動の時間があり、運動を終えてケージに戻ってくると、その途中でシャワートンネルを潜るというルーチンで1日が終わった。夜の給餌のときに、おしっこを回収するのと、キンタマの注射（やはり毎日左右交互だった）があり、最後は薬をたっぷり染み込ませた長い綿棒をペニスに突っ込まれて、前立腺に薬を吸収させるために綿棒を突っ込んだまま絆創膏で固定されて1日が終わった。これがこの牡牧場での毎日ということらしかった。

夜、プラスチックの寝台の上に横になると、この生活も案外悪くないと考えている自分に気がついた。勿論、そう考えるしかないんだけど、周囲の牡蓄も同じような顔をしている。これって身体よりも精神が慣れたんだろう。僕はいつのまにか心安らかに寝落ちしていた。

第１６話　お仕事開始（後書き）

主人公は、まだ戸惑っているばかりですが、やがてこのエリート？牡
が集まる牡牧場でも屈指の実績を挙げて頂点まで登り詰めます。牡
蓄の頂点とはどういうものなのか、どんな生活が待っているのか、
是非気長に見守っていて下さい。

なお、文章に合う画像を探してみたところ、こんなものを見つけま
した。空気ポンプで搾精される様子がよくわかると思います。
ｈｔｔｐｓ：／／ｊｐ．ｐｏｒｎｈｕｂ．ｃｏｍ／ｖｉｅｗ＿ｖｉ
ｄｅｏ．ｐｈｐ？ｖｉｅｗｋｅｙ＝ｐｈ６３６０ｂａｄ１９６ａ６ｂ
ｈｔｔｐｓ：／／ｊｐ．ｐｏｒｎｈｕｂ．ｃｏｍ／ｖｉｅｗ＿ｖｉ
ｄｅｏ．ｐｈｐ？ｖｉｅｗｋｅｙ＝ｐｈ６２６７３０ｄ５９５３５３
ｈｔｔｐｓ：／／ｊｐ．ｐｏｒｎｈｕｂ．ｃｏｍ／ｖｉｅｗ＿ｖｉ
ｄｅｏ．ｐｈｐ？ｖｉｅｗｋｅｙ＝ｐｈ６１５３ｂａ０８４６８ｃ２
これらの動画は、いずれも手作りの搾精筒らしいのですが、米国で
は、この手のものが通販にて販売されています。
ただ、普通の機械式がせいぜい数千円～1万円程度（日本のアマゾ
ン等）で中華製が販売されているのに対して、空気圧駆動のものは
米国でも2種類か3種類程度しかありませんし、価格は1千ドル近
くします。今のレートだと、１５万円位になってしまいます。（日
本では販売されていないようです。ただ米国のサイトでは、海外発
送もするというところもあります。）
ｈｔｔｐｓ：／／ｊｐ．ｐｏｒｎｈｕｂ．ｃｏｍ／ｖｉｅｗ＿ｖｉ
ｄｅｏ．ｐｈｐ？ｖｉｅｗｋｅｙ＝ｐｈ５ｆｄ５３３ｅｆｄ９１ｄａ
ｈｔｔｐｓ：／／ｊｐ．ｐｏｒｎｈｕｂ．ｃｏｍ／ｖｉｅｗ＿ｖｉ
ｄｅｏ．ｐｈｐ？ｖｉｅｗｋｅｙ＝６６５ｃｃ５５９ｃｆｅｃ
ｈｔｔｐｓ：／／ａｕｔｏｂｌｏｗｄｅｍｏｖｉｄｅｏｓ．ｃｏｍ

／ｖｉｄｅｏ／３４４７４ｄ８ｆ－８９ｃｆ－４３３ｆ－８ｂａ９－１ｃｃ２ｆａ７ｂｂｄ６８

他方、牧場のイメージとしては、このコミックスの絵柄が近いと思います。

あわせてお楽しみ下さい。

ｈｔｔｐｓ：／／ｗｗｗ．ｄｍｍ．ｃｏ．ｊｐ／ｄｃ／ｄｏｕｊｉｎ／－／ｄｅｔａｉｌ／＝／ｃｉｄ＝ｄ＿３４５６０９／

第１７話　心の変化と最初の見学者

　僕たちがここに到着してから、何日が経ったんだろう？・・・毎日が同じルーティーンスケジュールの繰り返しで、他には何の刺激もない。１日４回の搾精があって、それ以外は朝晩の給餌と午前・午後の2回の運動だけだ。午前の運動は8時から10時、午後の運動は12時から14時、ただし気温によって冬は午前を省略したり、夏は午後を省略することもあるらしい。(壁の説明に書いてあった。)

　最初、10日位は日にちを数えていたんだけど、同じ日常の繰り返しで、今が何月何日なのか時間の感覚がわからなくなった。というか、世間から切り離されて、射精するだけの生活に慣れてきたら、そんなことはどうでも良い気がしてきた。でも、外に出ても寒さは感じなくなったし、それどころかちょっと動くと汗ばむほどになってきたから、もうGWは終わって5月に入った頃なんだろうか？・・・昨日は、ここに来て初めての雨降りだった。少し肌寒くて、まだ梅雨には入っていないみたいだ。言われたとおり、雨でも変わらず放牧があった。

　身体はずいぶん日に焼けてきた。それと四つん這いで歩き回ることにも慣れてきた。また栄養バランスが良いのか、特に激しい運動をしている訳ではないのに、身体が引き締まってきた気がする。これは他の牡畜にも共通しているみたいだ。規則正しい生活は、健康にも良いのだろう。

　あれから体毛はまったく生えてこない。確か薬で抑えているような話だったけど、このまま一生ツルツルだったらどうしよう・・・。でも、これはこれでさっぱりして楽ちんだと思う気持ちが少し出てきている。そもそもチン毛も腋毛も、何のために生えているのか、何故大人になると生えてくるのか、よくわからないものだし・・・。

別になくても困らないし、最近ではハイジニーナとか言って、男子でも毛を処理するのも流行ってるみたいだし・・・。
　他方、頭髪は体毛とは別らしくて普通に伸びたので、既に２回バリカンでカットされた。そんなに伸びたというほどじゃなかったんだけど、頭髪もクリクリの坊主にしておく必要があるみたいで、放牧の前に畜舎の出口で、一匹ずつ３０秒もかからずに流れ作業を受ける。雰囲気としては羊の毛をカットするような感じだった。あと、全裸の生活というのも、気温さえ適切なら悪くないという気がしてきた。なにせ、着替えの手間もなければ、服を汚す心配（注１）もない。ここの生活に慣れきっちゃうと、卒業後に家で裸族になる牡蓄卒業生も出たりするんだろうか・・・。
　最初は死ぬかと思った給餌の拷問でさえも、かなり慣れてきて、挿入される瞬間に自分から喉（のど）を開くコツが少しわかってきた。今ではそんなに身構えずとも胃までスルッとチューブを飲み込めるようになって、給餌はそこまで酷い拷問とは感じなくなった。といっても、あくまで飼育員さんに挿れて貰う場合であって、水飲み場で見た先輩牡蓄のように、自分一人（自分一匹？）で飲み水チューブを自由に胃まで挿れられるようには、まだならない。どうやっても「オェッ」となってしまう。きっとこれは、優しい飼育員さん（特に僕のお世話をしてくれることが多いメグちゃん）にして貰うと、苦しい拷問も耐えられるからなんだろう。いや、耐えられるというより、飼育員さんに僕の身体を自由にされることが、たとえ身体的には辛くても精神的にはとても心地良いと感じるようになってきたからに違いない。この前なんか、メグちゃんに「キミは慣れるのが早くて優秀だね〜。この調子でもっともっと訓練が進むと助かるよ〜。」と言われたときは、この飼育員さんで本当に良かった、この飼育員さんなら僕の身体をいくらでも好きにして貰いたい、もっと辛いことでも、どんどんやって貰いたいという気分になったりする。
　キンタマ注射とペニスへ綿棒を挿入して前立腺への投薬を毎日続けている所為か、キンタマと乳首がぐんぐん大きくなってきたのが

はっきりわかる。とはいえ、狸のような先輩牡蓄とは、まだ比べるべくもない。ただ、キンタマにつられてペニスもぐっと大きくなってきたように感じる。特に亀頭のカリの部分が、気の所為ではなく、あきらかに一回り以上大きくなったみたいだ。これは薬の効果なのか、それとも割礼で剥き出しになった亀頭を、毎日4回の搾精で扱(しご)かれ続けているためなのかは、よくわからない。

　まあ、どのような理由にせよ、ペニスが少しでも大きくなることは嬉しい。それだけでも、牧場役に来た甲斐があったと言える。

　乳首も、放牧場で見た先輩みたく大粒のぶどうには遠く及ばないけど、元からすると直径で倍以上、つまりそろそろ1センチ程度で、種なしぶどう程度にはなってきた。それに伴い、ピアスの両端を折り返した部分が、その大きくなった乳首の中に埋没してきて、殆ど目立たなくなった。直径で倍というと、体積では立体だから3乗で8倍になったということで、かなり大きく見える。

　娯楽がまったくない所為(せい)か、いつのまにか搾精を心待ちするようになった。1日4回も射精するので、射精したくてたまらないという欲求は特にないんだけど、射精に伴う快感が欲しくて、搾精の時間がくるとペニスが元気になってくる。搾精筒を装着されると、もう期待感でギンギンに勃起した状態になるのがよくわかる。これって、以前読んだラノベに出てきた主人公の勇者が、魔物に捕まって性奴隷に落とされてしまい、調教を受けた結果、仲間の前で射精をお強請(ねだ)りする様になっちゃうシチュエーションに、よく似ている。でも、あれは主人公がメス落ちさせられて、嫌なのに泣きながら射精を強請(ねだ)る状況に追い込まれて行く物語だけど、僕の射精は自分の意志で、男子の崇高な義務を果たすという大事な意味があるんだから、見た目は似てるけど意義は大きく違う。できるだけ沢山の射精をすることが、僕の義務であり仕事であり、ここでは射精を心待ちする状態こそが、あるべき姿なんだ。

―――――――――――――――

ーーーーーーーーーーーーー

今日は放牧場で、見慣れない学生服の女子学生が10名程度、3名の飼育員さんに引率されて歩いているのを遠くから見た。雰囲気的に中学生っぽいグループと、高校生っぽいグループが半々位に見えた。あれはいったい何なんだろう？

　僕は丁度そのとき、片足を上げてオシッコをしていたところだったんで、思わず伏せの姿勢で隠れようとしちゃったんだけど、結構遠くだったし、特にこっちを注視していたようには見えなかったから、多分僕が何をしていたのかは見えていないと思う。女子学生の集団の側には、先輩とおぼしき牡蓄が何匹か居て、そのうちの1匹は中腰になって大きいほうをしている最中だったけど、女子学生がそこに居ることなんて気にもしていない雰囲気で、悠々と出し終わると、そのまま続いてオシッコもしていたから、そっちに注目していたみたいだ。あの先輩たちは、女子学生たちからは、せいぜい10メートルもない距離に居たんで、すべてバッチリ見えてしまっている筈だけど、もうあの先輩たちには羞恥心というものが完全になくなっているんだろう。まあ、家畜なんだから当然か・・・。

　それにしても、あの女子学生は、ここでいったい何をしているんだろう？・・・そもそも、この施設は部外者が簡単に入ってきて良いんだろうか？

　頭の中に疑問と不安が広がり、少しパニックになりながら、それでも眼が離せなくて女子学生のグループと先輩牡蓄たちの様子をそっと見ていたら、何となく、遠目で確信は持てないんだけど、あの女子中学生が着ている制服は、僕の出身中学の制服に、ちょっと似ているような気がしてきた。公立中学の制服なんて、どれも似たようなデザインが多いし、見間違いかもしれないけど、もし万一、あの制服の女子中学生が、僕の卒業した中学の後輩だったらどうしよう。知ってる女の子に見られちゃうかもしれない。・・・そう思い至ったら、一気に不安と羞恥心が沸き上がり、どうしようもない位、

恥ずかしくなってきた。
一刻も早くこの場から逃げ出したい衝動に駆られつつ、それでも好奇心に釣られて、物陰に何とか身体を隠しながら少しずつ近づいて行くと、断片的な単語しかわからなかったけど、微かに会話が聞こえてきた。そこでは、飼育員さんが、女子学生たちに向かって、「・・・牡蓄には触れないでください・・・」とか「・・・見学者の皆さんには、これから搾精の現場をご案内するので・・・」というような注意を与える声のようだった。
知らなかった！！・・・この施設、見学することができたんだ！・・・。これまで、誰からも教えて貰ったことはないし、そんな情報はどこにも見当たらなかった？！？！（注２）
でも、ということは、これからもちょくちょく、見学者がやってくるということか。僕たちの様子がすっかり見られてしまう！・・・あまりのショックに、僕はまたしても牧場役に来たことを後悔した。
でも、そこで必死に思いなおした。
まず、僕たちは何も恥ずかしいことをしているんじゃない。女性が死に絶えて、人類が滅亡してしまわないように、精液生産という崇高な役目を果たしているんだし、これは男に生まれたからには、誰でも絶対に行わなければならない義務なんだ。その義務を、恥ずかしがるのは間違っている。それに僕たちが頑張っているところを見て貰うのは、とても名誉なことなんだ。だから、特に女性には、どんどん見て貰うべきなんだ。
この考え方は、これまで幼稚園から中学まで、繰り返し教え込まれてきたことであり、それは女子も一緒だ。だから、僕たちが裸で性器を晒（さら）していても、いや、牡蓄としての生活すべてを見られることは、何も恥ずかしがることじゃないんだ。
猫は自分の股間を、誰が見ていようとなめて綺麗にしているし、家畜が裸を恥ずかしがるというのも聞いたことはない。これが牡蓄としての自然な状態なんだ。
そうやって、無理やり自分を納得させようとする思考が頭に浮か

んできた。けど、理屈はともかくとして、やはりこの状態を見られるのは、どうしても羞恥心がなくならない。僕は牡蓄として、まだまだなんだ。あの先輩たちのように、誰が見ていようとも、その前でどうどうと排泄さえできるようにならないといけないんだ・・・。

僕は思考がまとまらず、心が嵐のようにかき乱されて精神がバラバラになりそうな状況になっているのが自分でもよくわかる。でも、女子学生たちは、そんな僕の意識など知る由もなく、引率の飼育員さんと一緒に、近くの畜舎に入って行った。・・・もうすぐ放牧時間も終わり、牡蓄が全員ケージに揃ったら、午後3時の搾精がある。時間的にそれを女子学生に見せるんだろうか。確かにサインした同意書には、牡蓄にはプライバシーがないって書いてあったし、実際、女子学生たちは放牧されていた先輩牡蓄たちの様子をスマホでバシバシ撮影していた。きっと排泄しているところや、これから畜舎内で搾精される様子なんかも、動画を撮られちゃうんだろうな。まだ僕にはかなり恥ずかしい気持ちがあるけど、いずれ僕たちもあの先輩たちのように、女子学生に見られても気にならないようにならなくっちゃ・・・。本当にそんな日が来るんだろうか・・・。いや、それとも、単なる慣れの問題で、案外はやくそうなるんだろうか・・・。

ただ、牧場役のことをネット等にアップするのは禁止されているんで、ここで撮影されたものは、彼女たちの仲間うちだけで共有されるんだろうな・・・。それに、全国に牡牧場は沢山あるんだから、茨城の北のほうまで、知り合いが見に来る可能性は低いだろう・・・。

そんなことを考えながら、「家路」の曲に急かされて畜舎に急いだ。

朝と夜の搾精は、給餌もあるし投薬とかもあったりして、忙しなくって気が逸（そ）れるんで気付かなかったけど、昼の2回の搾精は搾精筒を付けられて機械が動き出すと、1分もしないうちに射精してし

まい、それだけで終わりになるんで、時間的にも精神的にも、かなり余裕がある。それでなにげに他の牡蓄の様子とか、いろいろ見回していたら、最初の日にも気がついて気になっていたケージのランプ、少し様子がわかってきた。

　このランプ、射精すると緑色が点く。これは自分の場合で確認している。だけど、一部に赤色ランプが点いているケージがある。何となく気になって、毎回注意して見ていると、赤色が点くケージはランダムに見えるけど、どれも数分以内に緑色に変化する。そして全部のランプが緑色になると、モーター（空気ポンプ？）の動作音が止まって、全員の搾精が終了する。・・・あと気の所為かもしれないんだけど、赤色のランプが点くのは、何となく夕方とか夜、つまり1日の搾精のうち、3回目とか4回目とかの搾精時が多いように感じる。さらに注意していると、赤色ランプが点くケージは、わりと固定していて、特定のケージに集中しているようにも見える。僕はまだ1度も赤色ランプが点いたことはない。だから、赤色ランプがどんなときに点くのか、赤色ランプになると、どうなるのかは、経験がない。でも、皆、最終的には緑色ランプになって搾精が終わるから、少なくとも緑色ランプが点いている状態が正しくて、全員がそうなって無事終わっているということなんだろう。・・・あれ、赤色ランプのままだったら、どうされるんだろう？・・・鞭で打たれるとか？

　こんな単調な生活で、しかもたった1カ月程度で、もう日付の感覚がなくなってくるような、繰り返しの毎日なのに、まだまだわからないことが幾つもあるし、今日は女学生の見学なんていう、想像もしていなかったこともあった。この様子だと、2年間の間に、新しいことや、もっと驚くようなことが待っているんだろうか・・・。それに、急速に肥大しているキンタマと乳首も気になる。この調子で2年もすると、どこまで大きくなっちゃうんだろう・・・。確かに大人になると、どの男性も乳首やキンタマが子供の何倍もデカく

なると思っていたけど、自分がそうなる未来というのは、これまであまり実感がなかった。漠然と、大人になれば誰でも大きくなると思っていたんだ。でも僕の考え違いだったみたいだ。・・・勿論、個人差はあるにしても、大人の乳首やキンタマが大きいのは、すべてこの牧場役で肥大してしまった結果なんだろう。そう考えると、牧場役に行かなかった父さんは、確かに小さな乳首と小さなキンタマだった。ずいぶんかわいい乳首とキンタマだと、いつも思っていたし、僕のペニスが小さいのも、その遺伝なのかと諦めていたけど、そういう訳じゃなかったみたいだ。牧場役に来た僕は、これからどんどん乳首やキンタマが大きくなってくるんだろう。それに伴い、ペニスも大きく育ってくれると嬉しいな。

　でも、今後さらに追加の身体改造とかされちゃうんだろうか・・・。確か誓約書には、非可逆的身体改造とか書いてあったような気がするけど・・・。ダメだ。父さん以外の大人の男性の裸なんて、殆ど見たことがないから、どんな身体改造を受けているのかなんて、さっぱり頭に浮かんでこない。でも、記憶にないということは、そんなに変な身体改造はないということなんだろう。それにここでの身体改造は、すべてこの牧場役で沢山の精液を効率的に射精するために必要な処置に違いない。だとすれば、この程度なら、もっとされてみたいかも。・・・なんてったって、これは僕の勲章なんだから、見せびらかすつもりはないにしても、いずれ他人に見られたら誇れるだろうし、むしろ嬉しいかな・・・。

第１７話　心の変化と最初の見学者（後書き）

主人公の心の変化が、うまく描けていれば幸いです。

牡蓄としての生活（日常）が、しばらく続く予定です。

（注１）

そもそも牡蓄が全裸なのは、家畜だからということではなく、そのほうが管理する上で楽だったからです。（人数分の衣服を揃え、それを定期的に交換して洗濯する手間は膨大です。それより温度管理して全裸で過ごすほうが、ずっと好都合なのです。）

ただ、全裸を強制することは、結果的に羞恥心を奪い、家畜の立場を植えつける上で極めて有効に働くため、今ではそちらの効果が主として期待されています。（鞭に対する恐怖を植えつけるためにも、全裸が大きな意味を持っています。）

（注２）

牧場役の様子を広く国民に知らしめる必要がある、という建前がある一方、牧場役のマイナスな部分は隠したいという本音もあるため、見学の申し込みは極めて複雑になっています。

まず女性救災省のホームページから、「もっと知りたい方は」というリンクで、各牧場の連絡先が出ていて、そこに電話をすると、各牧場から、電話をかけた人の個人ナンバーを確認され、その上で見学の案内がなされるというような運用になっています。つまりネットでどう検索しても、絶対に引っかからないような仕組みとなっています。（ただ、問い合わせれば教えて貰えるので、ネットで検索するだけでなく、その先まで自分の意志で調べようとすれば、誰でもたどり着けるようにはなっています。）

第１８話　夕食時のスタッフ大食堂にて（幕間）（前書き）

今回も、牡蓄はまったく出てきません。
これからも、このようにスタッフ同士の会話という形で、やや説明的な内容を書くことがありますので、ご了承下さい。
主人公の視点は、どうしても情報が限られているので様々なことが推察になります。そのような牡蓄側の視点と、管理飼育する側の内情とを対比させて読んで頂ければ幸いです。

第１８話　夕食時のスタッフ大食堂にて（幕間）

「丁度1カ月が過ぎたところだけど、牡蓄たちは慣れてきたかしら？・・・あたしのところには、データが集まってくるけど、ＰＣのディスプレイ上で数字を見ているだけじゃ、どうしても感覚的な把握に欠けるのよね。」

「そうですね。先生は最初に到着したときの登録検査で短時間診ただけで、それ以降は特に牡蓄と直に接触することはないですからね。」

「そうなの。まあ、獣医がヒマというのは、牧場全体とすれば良いことよ。あたしが忙しかったら、それは牡蓄に何らかの病気とか怪我があったり、とにかく拙（マズ）いことが発生している訳だから問題だわ。こうして集まってくるデータを調べ、報告書をまとめたり、今後の方針なんかを考えることができるのは、文句を言うような話じゃないわ。」

「あたしたちは、データの比較とかしている訳じゃないんで、あくまでお世話している感覚的なものなんですけど、今年の牡蓄は一匹残らず優秀ですね。当たり年ですよ。」

「そうね、そもそもここは実験牧場なんで、最初から優秀な牡蓄を選別して集めているんだけど、それを差し引いても粒が揃っているわ。今年入った牡蓄で、規定の５㎎を出せない子は、一番条件がキツい夜の搾精まで入れても一匹もいないでしょ。なかには第一搾精稼働だけでは足りない子も少し居るみたいだけど、その子たちも一匹残らず、３分後の第二搾精稼働で緑ランプに変わってるんじゃない？・・・普通の牡蓄だと、最初の射精から3分後にまた刺激しても、なかなか連続射精はできるものじゃないのよ。毎日、賢者タイムをカットするホルモン剤を前立腺に直接塗布しているけど、あれもそこまで大きな効果はないんだから・・・。」

「でも、どの牡蓄も、朝、おちんちんに挿入した綿棒を抜くときには、もうギンギンに勃ってていて、前日あれだけ射精したのにまだ足りなさそうな雰囲気ですよ。」
「それは薬の効果というより、環境に慣れて来たからなんじゃない？・・・というか、これから搾精されるという生活のリズムが身体や精神に刷り込まれて、条件反射になってきたのよ。大昔の研究だけど、パブロフの犬という名前は聞いたことがないかしら？」
「あ、それ飼育員の研修で聞いたことあります。確か犬にベルを鳴らしながら餌を与えていると、ベルの音を聞いただけで餌がなくても涎が出てくるっていうやつですよね？」
「そう、パブロフ博士という人が発見した有名な条件反射で、これから搾精されると思うと、意識せずともおちんちんが勃ってくるということですね。」
「つまり、牡蓄たちは毎日決まった時間に搾精される生活が続いているんで、これは調教の一種ね。家畜を飼育するときは、よく使われるテクニックで、ここでも取り入れているのよ。」
「そう。そして一度そう刷り込まれちゃうと、その条件反射は多くの場合、一生続くらしいわよ。」
「それは素晴らしいですね。ここの牡蓄たちも、いずれそうなるんでしょうか？」
「そういうデータは特に取っていないみたいね。そのうち、射精衝動による勃起と、条件反射による勃起の違いと射精量の関係なんていう論文でも書いてみようかしら。他の牧場でも参考にできるような論文なら、獣医師学会誌で発表して業績にできるかもしれないわ。」
「そうですね。牧場役の卒業生は、家で裸族になったり首輪をしているのも多いっていう話を聞いたことがあるんで、そういったものも条件反射と関係があるのかもしれませんね。」
「鞭で打たれたら射精しちゃうようになるのも、条件反射なんでしょうか？」

「そうね。訓練（調教）が進んだ牡蓄には、そうなっちゃうのも多いわよね。だからときどき鞭で打つのは大事なのよ。それも、できたら射精しているときとか・・・。」
「ところでさっきの話に戻りますが、ここが実験牧場だから優秀だとのお話でしたけど、他の牧場だと、具体的にどんな様子なんですか？」
「あたしのＰＣだと、他の牧場のデータがオンラインで見られるんだけど、それによると、第一搾精稼働で５㎎を出せない牡蓄は、昨日時点で全国平均が１３．２％となっているわ。あ、勿論、この数字は朝の搾精から夜の搾精までの全体平均だから、一般牧場でも朝は殆どの牡蓄がクリアできているし、夜の搾精になれば赤ランプが増えてくるのは当然よね。うちの牧場だって夜の搾精では第一搾精稼働で赤ランプになる子が多少居るんだし・・・。ちなみに、例年この時期の全国平均は、だいたい１０％から１５％の間になるみたいだから、まあ一般牧場に関しては、データを見る限りだと例年並みと言えるわね。・・・でも、うちの牧場の実績だと、第一搾精稼働で赤ランプになるのは、朝の搾精時だと、まず居ないし、夜の搾精であっても、畜舎毎でせいぜい一匹か二匹でしょ？・・・つまり１％か２％しか居ないのよ。」
「そうですね。数えてはいませんけど、そんな感じです。」
「射精量そのものは、薬でたまたまの機能を強制的に強化しているんで、どの牡蓄も順調に増えてきているから、一般牧場でもだんだん増えてくるんだけど、・・・まあ、その副作用でたまたまがどんどん肥大化するのは仕方がないとして・・・、それよりも大きな違いは、一般牧場だと、第二搾精稼働とか、第三搾精稼働になっても、連続射精ができない牡蓄が一定数居るのよね。ここだと、そんなことはまずないでしょ？」
「そういう子はどうするんですか？」
「どうしようもないわよ。しばらくは様子を見て、たまたまの機能が強化されるのを待つしかないし、実際、たまたまが肥大化してく

れば改善されて、第一搾精稼働で緑ランプになる子も多いんだけど、どうしてもダメな子も中には残るのよね。そういった改善が見られない子は、お尻からプラグを挿れて、前立腺電気刺激に切り換えるの。これは牛とか豚とかの繁殖や、パンダの繁殖なんかでも一般的な方法で、前立腺に電気を流されると、強烈な射精衝動と射精反射が発生して、強制的に射精が始まっちゃうの。勿論、牡蓄も一緒よ。これを使えば、電気を流し続けてる間は射精が止まらないから、それこそ毎回１０㎎だって採取できるんじゃないかしら。だけど副作用も大きくて、何回も繰り返していると、本当に電気刺激でしか射精できなくなっちゃうのよね。」
「それはなぜですか？」
「電気刺激での射精は、通常のドピューッていう射精じゃなくて、電気が通っている間はずっと、だらだらと漏れるように射精が継続するの。で、その状態を１０分とか１５分とか、とにかく精液が規定量に達するまで維持するんで、その間射精つまり絶頂がずっと連続するような不自然な射精を毎回させられていると、もう普通の射精は二度とできなくなっちゃうの・・・。つまり、搾精筒も含めて、おちんちんへの物理的刺激じゃ、一切反応しなくなっちゃうみたいね。こうなると手でも機械でも無理なの。薬でおちんちんを硬くすることはできても、神経が麻痺してダメになっちゃうんで、どうやっても射精には至らないのよ。勿論、その前に、たまたまへのお注射を交互じゃなくて、毎日両側にするといった手立ては講じてるんだけど、あの薬は量を倍にしても、効果は倍にはならないのよね。それでいて副作用は投与量に比例しちゃうんで、たまたまの肥大化ばかりが進むのよ。」
「そういう牡蓄は、卒業してから困らないんですか？」
「それは大丈夫。そうなったら卒業前に前立腺にリモコン電極を埋め込む手術をするから。・・・この手術をされると、スイッチを入れればいくらでも射精しちゃうの。リモコンでいつでもどこでも射精させられるし、リモコンを操作しなければ一切射精できないんで、

完璧な射精管理が可能だから、結婚相手として簡単便利で理想的だって人気があるのよ。」

「あ、それならあたしも、そういう相手と結婚しようかしら・・・。あたしがリモコンを常に管理すれば、射精させるもさせないも、あたしの望むとおりに管理することができる・・・。でも、どうやって見分けるのかしら・・・。」

「そうね。最初に付き合うとき、聞いてみたらどう？・・・牡蓄の卒業生なら、飼育員だったって言うと、それだけで逆らえなくなるのも多いみたいだし、牡蓄に話しかけるような態度で接すれば、従順になると思うわよ。何だったら、その鞭でも見せてみたら？・・・それこそ条件反射で、とたんに牡蓄に戻って絶対服従しちゃうかもしれないわね。」

「それって、飼育員の役得ですね。」

「ただ問題もあってね。・・・電気刺激は射精の絶頂感が違うのよ。今説明したとおり、リモコン射精は射精する瞬間の何者にも代えがたい瞬間的な絶頂感、・・・いわゆる『イクッ』ていう至福の感覚がなくなっちゃって、電気刺激で、たらたらと滲（にじ）むような射精が延々続く・・・これは精液をお漏らしするような感覚じゃないかしら・・・しかもその間、ずっと鈍（にぶ）くイッている感覚が連続して、リモコンをオフにされるまで逃れられないことになるから、性的な満足感というか射精本来の快感は、もう二度と味わえないと言われているの。」

「それって、この牧場の延長線上で、精液を搾り取られたり、逆に射精させて貰えなかったりということですよね？・・・快楽じゃなく苦痛じゃないんですか？・・・それが一生だなんて・・・。」

「そうなっちゃった卒業生からはクレームって来ないんでしょうか？」

「ないわよ。だって、最初に同意書にサインさせているじゃない。牡蓄でいる間は、どんな非可逆的な身体改造をされても国は保障しないって。今では裁判所も門前払いしているし、それを言うなら、

そもそも性器が肥大化しちゃうのもクレーム案件よね？・・・でも、巨峰のような乳首になっちゃったとか、狸のたまたまになっちゃったって嘆(なげ)く子はたまに居るけど、およそ牡蓄でおちんちんが大きくなっちゃったって嘆(なげ)く子は、見たことないわ。まあ、変な人権団体とか知識人とやらが、たまに思い出したように批判することはあるんだけどね。」

「私は女性だから、射精の快感や絶頂感がどういうものなのか、教科書の知識しかないけど、絶頂が途切れることなく延々と続くのは、実際かなり苦しいって話も聞くわ。ほら、女性でも連続イキ状態を続けると、『もう死ぬ！』ってなるじゃない。でも、ここで2年間訓練(調教)されると、殆どの牡蓄は、その苦しさが逆に精神的な快感になっちゃうらしくて、手術を施された牡蓄の卒業半年後と1年後のアンケート結果によると、手術されて良かった、射精管理して貰えると、性生活が充実していて幸せだっていう回答は７０％を超えているのよ。もう以前のようなドピューッて射精する絶頂のピークができないことについても、ちょっと残念って感じる卒業生が少し居る程度で、それを悲しい不幸なことだと感じている卒業生は、殆ど居ないのよ。だから、多少のカウンセリングで対応できてるの。制度としても良くできているけど、それ以上に精神的な訓練(調教)のたまものなのよ。」

「それと、電気刺激でしか射精できなくなった牡蓄でも、鞭で打たれるとドピューッて射精しちゃう子もわりと居るの。そういう子は自分から進んで鞭で打たれたがるようになるみたいね。」

「だからあたしたちは、牡蓄をうまく訓練(調教)して、あたしたちから強制されることは、苦しくても気持ちが良いものだと感じるように条件反射をしっかり刷り込んで、卒業までに躾ける必要があるの。」

「まあ、どちらにせよ、そういった話は2年目に入ってからのことよ。それにここは実験牧場で、特に優秀な牡蓄が揃っているし、まして今年は当たり年みたいだから、そんな手術が必要となる牡蓄は、牧場全体でも1匹か2匹、出るかどうかじゃないかしら？・・・一

般牧場みたく、１０％以上の牡蓄が最終的に手術を施されるようには、ならないわよ。これは統計的予測でもそうなっているし、実績としても例年数匹程度しかいないわ。」
「わかりました。赤ランプが続くような牡蓄がいたら、なるべく射精中に鞭で打つようにします。」
「そうだ、それで思い出した。あの８７４９号は素晴らしい実績ですね。もう手搾りに移行しても良いんじゃないでしょうか。」
「８７４９号って、確か初日の検査のとき、おちんちんは小さいのに射精量で歴代１位の記録をつくったあの子よね。確か、たまたまも普通の牡蓄が１５ミリリットルから１６ミリリットル程度が標準なのに、あの子は左が２３ミリリットルで、右は２５ミリリットルもあったのよ。」
「そうね。私もずっと気にかけているんだけど、その後のデータでも、あの子は抜きんでているわ。ここでの生活にも慣れただろうし、投薬の効果も出てきたのかしら、毎回９㎎程度は余裕で射精しているの。昨日なんか、朝一番の搾精で１０．６㎎も射精したのよ。当然だけど、第一搾精稼働だけでこの数字なんだから、驚いちゃうわよね。しかもそれが、夜の搾精までほとんど減少しないんだから。これって凄いことよ！」
「たまたまも、凄い勢いで大きくなっていますね。正式に測ったわけではないですけど、この前、あの子のたまたまを握ってみたら驚いちゃいました。両側とも、もうＳサイズの鶏卵位はありますね。多分、既に４０ミリリットル近いと思いますよ。わずか１カ月でこの成績なら、いずれは６０ミリリットルを超えて肥大化するでしょうね。Ｌサイズ鶏卵が６４ミリリットル以上なんだけど、うまくすれば、それくらいは行くんじゃないでしょうか。」
「そうね。あの子は、そこまで伸びる可能性が高いわ。手搾り牡蓄すら超えて、いずれブランド牡蓄に登り詰めるようになると思うわ。そうすれば、ここの牧場の経営を支えてくれるエースに成長するでしょうね。」

「そんなに凄ければ、1年目から品評会に出してみては如何でしょうか？」
「それも一案よね。これからの伸び代にも依るけど、1年目でも良いところまで行くかもしれないわ。来年に優勝を狙うためにも、今年からエントリーできると良いわね・・・。」
「ま、とにかく、当初の予定どおり、8749号クンは明日から手搾りに移行しましょう。明朝、他の牡蓄が1回目の搾精している間に、私が行って手搾り牡蓄への準備を整えるわ。追加のピアスとかあるでしょ。それで、手搾り牡蓄は1日2回の搾精になるから、あの子は明日からは、比較的手の空く11時と15時に搾精を手搾りでお願いします。」
「わかりました。よろしくお願いします。」
「主担当はこれまであの子をよく面倒みていてくれたメグちゃんで良いかしら。」
「わ〜。とうとう、憧れの手搾り牡蓄担当になれるんですね！・・・あたし手搾り牡蓄の担当は、はじめてなんです。わくわくしちゃうな〜。」
「あ、はじめてなの？・・・とすると、ルーインド・オーガズムの経験はあるかしら？」
「大丈夫です。ちょっと興味があったのと、そのうち必要になるかもって考えて、この牧場に異動になったとき研修を受けて、ビデオでばっちり勉強しました。」
「そう、それなら安心ね。・・・まあ、毎日何回もやってれば、直ぐ慣れるわよ。もし射精がはじまっちゃってからでも根元をぎゅっと強く握ることで、ルーインド・オーガズムに近い感じになるから、最初はそれでも良いかもね。副担当は去年も経験があるエリちゃんお願いね。」
「わかりました。よろしくお願いします。」
「エリちゃんはメグちゃんにいろいろと教えてあげてね。」
「どうぞよろしくお願いします。」

「あたしも昨年がはじめてだったけど、そんなに難しいことはないわ。１週間もすれば射精する瞬間なんて簡単にわかるようになるわよ。もっとも、ルーインド・オーガズムで大事なのは射精する瞬間じゃなくて、その直前、寸止めで射精を止められるポイントと、もう限界を超えちゃって、何をしても射精が始まっちゃうその分岐点をピンポイントで把握できるかどうかなの。・・・ま、これも毎日やっていれば、案外簡単にわかるようになるわ。本当は、息づかいとか表情なんかがわかると簡単らしいけど、後ろから手で刺激していても、おちんちんの固さとか、たまたまの上がり具合、それに鼠蹊部から股太の筋肉が痙攣する様子なんかで、直ぐにわかるものよ。」

「そうね。それに８７４９号クンは優秀だから、ルーインド・オーガズムが失敗したとしても、問題ない位の射精量は充分に確保できるんじゃないかしら。あれは本来は連続射精をさせるとき、２回目とか３回目でも、１回目と変わらない沢山の射精量を確保するための方法のひとつなんだから、あの子には不要かもしれないわよ。」

「ルーインド・オーガズムって、射精量が増えるんですか？」

「そういうわけじゃなくってね、あれをされると、絶頂感が途中で打ち切られちゃって、ドピューッて射精したっていう感覚・・・『イクッ』ていう一番気持ちの良い瞬間の感覚ね・・・それが中途半端になっちゃうんで、一度射精をしても、すぐ連続して次の射精をしたくてたまらなくなるのよ。つまり、きちんと射精したい、思い切りドピューッとして、絶頂感を最後まで味わいたいって、脳が麻薬を求めるみたいに強く求めるようになるの。・・・まあ、毎日おちんちんの中に塗っている薬と同じで、連続射精を容易にするための手段なの。これは、手搾り牡蓄になると、人手の関係もあるんだけど搾精が１日２回だけになるんで、その１回の搾精では連続３回程度は射精して貰わなきゃならないからよ。」

「そうね、あたしが去年、手搾り担当だった子は、勿論優秀だったからなんだろうけど、これをやると１回の搾精時に、せいぜい３分

程度のインターバルで３連続射精くらいは普通にできて、その３回目でも常に６㎎は超えていたわね。」

「すると、１１時と１５時の２回だけでも、それぞれが３連続射精で合計２０㎎程度として、１日に４０㎎も搾精できるんですか！・・・それって、普通の牡蓄が１日４回の射精で合計２０㎎から、せいぜい３０㎎程度しか出せないのに比べて、ずっと多いですね！！」

「そうよ。しかも手搾り牡蓄になるような子は、量だけじゃなくて精液の質も極上で、濃厚でこってりしているんで、とても高く売れるのよ。牡牧場は公営だけど、補助金とか運営費交付金は殆ど出ていなくて、予算の９９％は自分で稼がなきゃならないから、そういう牡蓄は本当に貴重で大事なのよ。」

第１８話　夕食時のスタッフ大食堂にて（幕間）（後書き）

牡牧場の裏側というか、制度を運営する側の内実が次第に明らかになってきました。
といっても、合理性は追求されていても、牡畜を虐げるような意識はまったくありません。
ただ、家畜として飼育するということは、結果的にMとしての調教と重なるものが多いというだけです。

第１９話　手搾り牡畜へ昇格

日付の感覚が完全になくなって、どの位経つんだろう。まだ数日のような気もするるし、そろそろ2カ月位になるような気もする。でも、まだ梅雨に入ったようには見えないし、ときどき肌寒い日もあるから、実は案外、まだＧＷが明けてないのかもしれない。・・・まあ、もうそんなことはどうでも良くなってきた。この生活を、これから2年間、ずっと続けると思うと、退屈な毎日で惚(ぼ)けちゃわないかな。でもきっと、そんなことを考えちゃいけないんだ。もう僕は牡蓄なんだから、ただ飼育員さんに言われたとおり与えられた餌を飲み込み、排泄して射精して、とにかく飼育員さんの指示をすべて無条件に受け入れていれば幸せなんだ・・・。

今朝は僕だけ、ちょっと変わった扱いになった。普通だと、朝の給餌と並行して、もう一人の飼育員さんがケージに入ってきて、ペニスの綿棒を抜いてくれて、その後オシッコをバケツで回収し、ペニスに搾精筒を取り付けるという作業をする。

それなのに、僕のケージに入ってきたのは、確か最初の登録検査で診察をしていた獣医の先生だった。・・・隣のケージから先は、飼育員さんがいつもの作業をどんどん進めているんで、僕だけ何か別のことをされるんだろうか・・・。

いつものとおり、胃にチューブを突っ込まれて、一瞬で給餌が終わると、獣医先生が話しかけてきた。

「久しぶりだね、８７４９号クン、元気にしていたかな～。キミはここまで実績がとっても優秀でね、名誉ある手搾り牡蓄に昇格することになったんだよ。」

「これは、エリートが揃っているこの実験牧場にあっても、特に優秀れた上位２～３％位にしかなれない特別な牡蓄でね、これからキミ

の搾精は、機械式の搾精筒じゃなくって飼育員の手で刺激して射精して貰うことになったから、そのつもりでね。」

「それに伴って、搾精も１日に２回、１１時の回と１５時の回の２回だけになるからね。朝７時と夜７時はお休みだよ～。」

ぇえっ?!!・・・とすると、これから僕は、飼育員のお姉さんたちに手でペニスを扱(しご)いて貰えるの?!?!・・・やったぁ!!・・・物凄いご褒美(ほうび)だ!・・・あの噂は本当だったんだ。やっぱり牧場役に来てよかった!!

僕は嬉しさを爆発させて、喜びに打ち震えた。もし僕に尻尾があったなら、力一杯ブンブン振り回していただろう。その代わり、というつもりはないんだけど、僕のペニスはギンギンに硬くなり、知らず知らず腰を振ってぶるんぶるんとさせていた。

獣医の先生は、僕のペニスに挿入されていた綿棒を抜くと、ペニスの下にバケツをセットしながら言った。

「あらあら、そんなに嬉しかったの?・・・でも、まずはオシッコしてね。ギンギンで大丈夫かな?・・・それが終わったら、手搾り牡蓄になるための準備をしようか。」

先生の言葉は、あまり頭に入ってこなかったけど、僕はいつもの条件反射で、まずオシッコをたっぷりすると、ペニスを臍(へそ)に付くほど滾(たぎ)らせて待ち構えた。

「あ、期待しているところ、ごめんね。・・・手搾り牡蓄になると、搾精は１日に２回になるんだ。だから、朝と夜の搾精はないんだ。・・・せっかくおちんちんが元気になったのに、この状態で我慢して貰うことになって可哀相だけど、あと４時間ほど待っていてね。その代わり、１回の搾精では、３回から５回程度、連続して射精して貰うからね?・・・と、その前に、ひとつだけ、手搾り牡蓄になる

ための処置をしちゃうから。それと、たまたまの計測もしておこうね。」

そう言うと、まずタマをぐっと握られた。そして、鞄から取り出した卵のような計測用偽睾丸とを握り比べながら、キンタマをさわさわと撫でられた。

「やっぱりキミ凄いよね〜。最初から23ミリリットルと25ミリリットルもあったから当然なのかもだけど、もう左右とも40ミリリットルを超えているなんて。・・・普通の牡蓄だと、ここに来た時は15ミリリットルから16ミリリットルが標準で、今の段階ではまだせいぜい25ミリリットル程度が平均なのに、キミはもう2年目の牡蓄の平均値を超えてきているじゃない。投薬の効果とはいえ、これって凄いことなんだよ。もうすぐsサイズの鶏卵位になるのは間違いないね。そうすれば1年目から、牡蓄品評会にエントリーできるよ。」

獣医先生が何を言っているのか、いま一つ僕には理解できない話だったけど、僕のキンタマが他のヤツらと比較して、特に大きく肥大してきて、どうやらsサイズの卵位になったということらしい。キンタマばっかり狸になっちゃうと、ちょっと嫌だな。でも、そのおかげでペニスも大きくなってきているんだとすると、仕方がないことなのかな。実際、剥き出しにされた亀頭は色素が沈着して、黒光りするようになってきたし、カリの部分は、自分のペニスとは信じられないほどエラが張って逞(たくま)しくなってきたし・・・。

そんな僕の意識など、お構いなしに、獣医先生は、また鞄の中からいくつか器具を取り出し、僕のキンタマの真ん中、場所的には丁度ペニスの裏筋に触れる辺りを、アルコールを染み込ませた脱脂綿で拭(ふ)いているみたいだった。といっても、僕は首をギロチン板で固定されているんで、自分の股間を見ることはできない。獣医先生が四つん這いになった僕の股間を、後ろから触ってきても、何をされ

ているのかは想像するしかない。
　キンタマには、毎日交互に注射されていて、そのときには簡単にアルコールの脱脂綿でキンタマを拭(ふ)いて貰っていたから、獣医先生がしていることなど、最初は気にも止めていなかったし、機械オナニーから飼育員さんの手コキにして貰えるっていう話に舞い上がっていたんだけど、ふと、このアルコール消毒されている感覚で、到着日の悪夢が甦(よみがえ)ってきた。もしかして、キンタマに何か手術でもされるんだろうか？
　というのは、注射のときは左右交互で、しかもキンタマに針を刺す関係か、タマがある部分の上を拭(ふ)いているのに、今回はキンタマの丁度中央、左右のタマの間の、袋の皮しかない部分で、裏スジが触るあたりを入念に拭(ふ)いている。・・・と・・・？

「この辺りが良いかしら？」

　タマ袋の袋の丁度中央のあたりを摘まれ、袋の皮の部分をぐいっと引っ張られる感覚があったと思ったら・・・。
　ガチャンッ！！

「うぁああああぁぁんぁぁああーーー！＄％＆'＝＊＋＼＿＜！！・・・ぃあぃあぁいぁいぁいあいあいあぃぁーぃぁーーー！！！！！」
(痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！！！！！！！！！！)
「はい、できたよ～。また薬塗っとくから、すぐ痛みは消えると思うよ。」
「ぃあぃあぁいぁいぁいあいあいあぃぁーぃぁーぅっうぅっ、ぃぅっ、ぃうーーっっ！！！！！」
(痛い痛い痛いっっ、いっ、ぃいっ、クっ、クックっ、・・・イクっ、イクイクっ、イックーっっ！！)

どぴゅるるるるるるーーーーっ、びゅるるっ、びゅくっ、びゅくっ、どぴゅっ、どぴゅっ！

「あっ、痛くてイッちゃったの？・・・やっぱりキミは優秀だね～。・・・でも、もったいない・・・。」

イッた？！！・・・キンタマの袋にピアスの穴を開けられた痛みが走った瞬間、よくわからない快感が全身を駆け巡り、僕は思い切り射精していた。獣医先生があせって掌で僕の精液を受け止めると、それを美味しそうにペロッと舐めた。

「キミ、やっぱり素晴らしいよ。前回もペニスを鞭で打ったら射精したけど、今回はピアスしたら射精したでしょう？・・・もうすぐ、どんな刺激でも射精できるようになるかもね～。」

「それに、この精液の量と質といったら、普通の牡蓄が束になってもかなわないわ。さすがに手搾り牡蓄になるだけのことはあるわね。これは今後に期待が持てるな～。」

「じゃあ、１１時の搾精まで休んでいてね。私はもう来ないけど、キミの搾精をしてくれるのは、いつも担当しているメグちゃんとエリちゃんになったからね。二人ともキミのことをよく知っているし、キミも慣れている飼育員だから、何も心配することはないよね？・・・ま、これからも、ますます頑張ってたっぷり射精してね。」

そういうと、てきぱきと道具を鞄に片付けて、獣医先生は出て行った。出掛けに首のギロチン板を外して行ってくれたんで、急いで股間を見てみると、大きく肥大したキンタマの袋の丁度真ん中辺り、普通だと裏スジが触る辺りのところに、直径３センチくらいで太さは５ミリくらいのリングピアスが縦に取り付けられていた。まるで牛の鼻輪をタマ袋の裏側につけたみたいだ。縦につけたのは、左右のキンタマの丁度中間に、邪魔にならないようにしてあるのかな？

このピアス、サイズはともかく耳なんかにつけるのと構造は一緒

らしくて、リングの一部がネジで外れるようになっているみたいだ。といっても、僕の前足じゃあ摘むことができないから、いずれにせよ自分で外すことはできない。ま、別に外すつもりもないから、構わないんだけどさ・・・。

なににせよ、今回は袋の皮を貫通しているだけだし、そもそもタマ袋は乳首ほど感覚が敏感なところじゃないからか、例の万能傷薬の麻酔効果と相まって、もうあまり痛いという感覚はなくなっていたけど、こんなところにピアスをして、いったいどんな意味があるんだろう？

それより、あのピアスマシンで穴を開けられた瞬間、物凄く痛かったんだけど、同時にこれまで感じたことのない快感が全身を駆け巡って、思わず射精しちゃった。獣医先生（先生は、何て名前なんだろうな？・・・飼育員さんもそうなんだけど、誰も名札をつけていないんで、名前がわからない。獣医先生が飼育員さんを呼ぶときは、メグちゃんとかエリちゃんとか、名前の省略形で呼んでいるみたいだけど・・・。）にも言われたとおり、最初の日にはペニスを鞭で打たれて射精しちゃったし、今度はタマ袋にピアスをされて射精しちゃった。

何だか、牡畜としての生活に慣れてくるに従い、痛い刺激でも射精するようになってきちゃった気がする。・・・それとも、牡畜というのは、皆、そういうふうに訓練（調教）されて、条件反射で直ぐ射精するようになってくるものなのかな・・・。そのうち、背中とかお尻とかを鞭で打たれても射精しちゃうように訓練（調教）されちゃうのかもしれない。（ていうか、僕はもう、そうなってきているみたいだ。）まさか、給餌でチューブを突っ込まれても、射精するようになったりして・・・。いや、あれは逆に、もう慣れてきて、あまり苦しいと感じなくなってきているから、あれで射精しちゃうようにはならないか・・・。

そんなことを考えていると、他の牡畜の搾精が全部終わったらしくて、チャイムと放送によって午前中の放牧へと追い出された。

―――――――――――――――
―――――――――――――

　放牧が終わって自分のケージに戻ってきたら、鐘が１１回鳴って、本日２回目の搾精（僕にとっては、本日最初）になった。首をギロチン板で固定されると、僕以外の他の牡蓄は、これまでどおり飼育員さんたちがケージに入ってきて、次々に搾精筒をペニスに装着して行った。でも、僕のところには、メグちゃんとエリちゃんの二人の飼育員さんが入ってくると、メグちゃんが僕の後側に腰掛けて、天井から下ろしてきたフックのついた紐のようなものを、先程されたピアスに引っかけ、キンタマを肛門のほうにぐっと引き上げた。またエリちゃんは僕の右側に座り、漏斗のようなものがついた透明の入れ物をペニスの下にセットした。・・・そうか、このキンタマのピアスは、後ろからペニスにアクセスするとき、キンタマが邪魔にならないように、上につり上げるための金具なんだ。確かにこうすれば、バックからペニスが見やすくなり、手で握るにしても好都合なんだろう。キンタマはかなり大きくなってきて、今後はもっと大きくなるようだし、そうなるとこの姿勢では、後ろからペニスを扱（しご）くには、キンタマが邪魔になるに違いない。

「じゃあ、はじめて行くからね。キミはどんな方法が好みなのかな～。でも、牧場で手搾りするときには、確立された方法があるんで、是非それに慣れようね？」

　他の牡蓄に装着された搾精筒が動き出すのと殆ど同時に、メグちゃんがローションを塗った手で僕のペニスを後ろからやさしく握って、ゆっくりと上下に扱（しご）きだした。・・・すっ、凄い！・・・物凄く気持ち良い！！・・・搾精筒による機械刺激なんて、到底比較にならない！

最初は普通に竿の部分をシコシコしていたのが、次いで剥き出しになって大きくなり、感度も上がってきた亀頭の部分を、特にカリを中心に緩急をつけながら擦ってくる。僕はこれまで、自分では皮オナニーしかやったことがないんで、剥き出しにされた亀頭を手で扱いた経験がない。到着した日に検査搾精で、はじめて剥き出しにされた亀頭を直接手で擦られ、異次元の気持ちよさだったのを思い出した。その後、割礼手術で剥き出しにされたんで、毎日の搾精筒による機械刺激は、亀頭への直接の刺激だったけど、やっぱり機械による画一的な刺激と異なり、手で緩急をつけて擦られるのは、比較にならないほど気持ちが良い。搾精筒だと最初から凄い勢いでにシュポシュポされて、ゆっくり快感を味わう暇もなく、一気に射精させられてしまうのに、手で刺激されるのは、そういう感じではなく、ゆっくりと焦らすような動きで、少しもどかしい。僕の気の所為かもしれないんだけど、何というか快感が長時間持続するように、意図的にコントロールされているみたいだ。

「んっ、ぁはっ、んぁっ、はぁっ、ぁあっ、ひっ、ぃひっ。」

僕は、まるで楽器になったように、メグちゃんの手によって様々な声を絞り出している。」

と、一転してシコシコするのをやめて、ペニスを根元から握り直し、絶妙な指使いで根元から先端に向けて、親指から小指まで順番に力を入れて絞り出すような動作をする。これって、多分だけど牛の乳を搾るときのテクニックだと思う。これも凄く気持ちよいけど、普通に扱くほうが気持ち良いかな？・・・今じゃなくて射精した瞬間にこれをされたら、たまらない快感かもしれない・・・。

その後も、一気に射精させられるような強い刺激ではなく、さわさわと撫でられるような扱き方とか、鈴口から裏スジにかけて、指一本でスリスリされたり、鈴口をクパアと広げられて、その中を触られたり、でこぼこしたチューブのようなものを入れたり出したりして尿道を刺激されたり（そんなに深くまで挿入されたわけではないけど、最近尿道も凄く感じるようになってきた）と、搾精筒では

絶対にあり得ない快感が次々と続いてくる。
しかもメグちゃんは僕の様子や反応を確認しながら、いろいろと考えて刺激に緩急をつけているらしく、最高の快感が継続するように、それでいて射精には至らないように、コントロールされているみたいだ。

搾精筒の機械的で暴力的な刺激と異なり、あくまでやさしく、しかも僕のすべてを管理してくれる飼育員さんがつきっきりで直接快感を与えてくれる・・・。そんな状況と、ペニスへの継続的な刺激によって、僕はもうまったく何も考えられなくなり、夢見心地の気分のまま、イキそうになる直前の状態をずっとキープされて、しかしながら決してイカせては貰えず、ひたすら緩い快感が連続するという快感の沼に沈められてしまった。そして、いつ果てるとも知れない、この天国のような（いや、それとも地獄なのか？）無限の気持ちよさに脳味噌がグズグズに蕩(とろ)けてしまうのを感じながら、全身が性感帯になってしまったかのような感覚に身を任せ続けるしかなかった。

第１９話　手搾り牡畜へ昇格（後書き）

いよいよエリートとして歩みだした主人公なのですが、エリートにはエリートとしての試練が幾つもあるようです。

第２０話　ルーインド・オーガズム（１）（前書き）

手コキは実は地獄だった、というお話です。
それでもあなたは、手搾り牡蓄になりたいですか？

第２０話　ルーインド・オーガズム（１）

・・・さっきからもう何分経ったんだろう。メグちゃんの手コキは、ゆるゆると亀頭を擦ったかと思うと、竿を根元から先端に向けて絞り出すように順番に握りしめたり、一転してキンタマをさわさわと撫で回して、ケツの穴までこちょこちょしたりする。肛門に何かを突っ込まれるかと身構えたけど、そういうことはなくって、ただ突っ付いてみたりくすぐったりするだけで、それよりも会陰の辺り、いわゆる蟻の戸渡りと言われる部分を、やや強めに押してマッサージのような動きをしている。また、ときどき鈴口から裏スジをそろっと撫でたかと思うと、ペニスにグニグニとしたチューブのようなものをぐっと突っ込まれて、それをクルクルと回すようにされる。このチューブ、見えないんでよくわからないけど、柔らかいのにでこぼこがあるらしくて、中でクルクルまわされると、尿道から言いようのない快感とも不快感とも言えるような異物感が押し寄せてくる。しかも、最初はほんの数センチ程度挿入されてるように感じていたのが、いつのまにか奥深くまで挿入されていて、会陰マッサージと合わせて、前立腺が中と外から刺激されているようだ。

最初に到着したときに受けた手コキは、イキそうになるとキンタマを引っ張られて引き戻されるという、地獄のような体験だった。究極の寸止めだ。あのときは本当に辛くて、僕は泣き叫んでイカせて欲しいと懇願した記憶がある。（挙げ句の果てに、その状態でペニスを鞭打たれて、思い切り射精してしまった。）

でも、この手コキは、そこまで至らない、単に緩い快感がずっと続いているような感じで、夢見心地の中で頭がグズグズに蕩(とろ)けて行ってしまうような感じだ。さっきから僕は本当に何も考えられず、ただ快楽に身を任せてしまっている。まるで麻薬を投与されて、脳味噌がダメになっていくような気分だ。この快楽の沼から出たくな

い、いや、出られない。・・・そんな状態で、もう何かを考えることも放棄して、このままずっと一生この沼に沈んでいたい・・・。
暫(しばら)く快楽の沼に沈んでいると、横からエリちゃんが手を伸ばしてきて、僕の肥大した乳首をクイッと摘んだ。
「ぁ？・・ぁあっ？・・はひっ？・・・ぃひっ？・・・」
エリちゃんが乳首を少し強めに摘んでクリクリしてきた。なんだかジンジンむずむずする。と、今度はピアスで乳首にぶら下がっているＩＤカードをクイクイと引っ張られた。もう痛みはまったくないけど、カードを引っ張られると乳首が引き延ばされて、快感だか不快感だかわからない不思議な感覚が胸から広がってくる。その度に僕は、「んっ、あっ、くっ、はぁっ。」と声が漏れるんだけど、そんなことはまるで関係ないというような刺激を乳首に加え続けられる。
やがて、胸からの刺激が、ペニスからの刺激とシンクロしてきたような気がして、次第に僕は追い詰められてきた。そして、とうとう、ペニスの神経と乳首の神経が腰の上の辺りで繋がったと感じた瞬間、雷に打たれたような、ビビッという電気刺激がペニスから乳首に駆け抜けて、背中側、腰の上辺りに発生した巨大快感が一気に前立腺まで駆け下りてきて、出る(射精す)っ！と思った。と、まさにそのとき！！
「ここですよね？」
「あ、よくわかったわね。ドンピシャよ！」
メグちゃんが急にペニスから手を離してしまった！！
でも、もう僕は限界を超えていて止まれない。ペニスからじわじわたらたらと、漏れるように射精が始まってしまった。
「うっ、ぅうーっ、おっ、ぉおぉーっ。」
（もっ、もっと！！・・・もっと擦って！？・・・おっ、お願いっ、お願いします！！）
「射精が始まったわね。上手い上手い。最初なのに完璧なタイミングだわ。・・・これで良いのよ。」

「ぅぉおーーっ、ぁあーぁあーっ、ぃぅーーっ。」
「そうそう、こんなふうに、たらたらと漏れるような射精がルーインド・オーガズムの特徴よ。刺激を加えるのを止めちゃっているから、ドピューッというように力強い射精にはならないの。っていうか、そういう射精をさせちゃダメなのよ。」
「ぁいーっ、ぉえあぃー、いぃーっ。」
「でも、たまたまを引っ張ったりして射精を止めるようなことはしないから、ほら、このまま、精液がお漏らしみたいにじわじわたらたらと出続けるように、ちょっとだけ刺激をするの。」
　そう言って乳首をクニっと摘まれた。そんな、そんな僅かな刺激じゃなくって、もうペニスを鞭で思い切り打ちつけて下さい！！・・・おっ、お願いっ、・・・お願いしますっ！！
「射精が止まりそうだったら、本当にちょっとだけ、それもおちんちんじゃなくって、こう乳首でも良いし、なんだったらお尻とか太股とか、あるいは脇の下でもよいけど、そっと触ったりくすぐったりして、とにかく精液がこんなふうにじわじわたらたらと漏れ続けるような状態を少しでも長くキープするのがポイントなのよ。」
　もう僕は、ただアーウーと喚（わめ）きながら涙を流すのみで、自分がどんな状態なのか、ペニスはどうなっちゃっているのか、何も考えられない。でもたらたらと射精は続いているようで、射精感と、それに伴う鈍い絶頂感がずっと継続していて、そこから逃れることもできない。
　思い切りイキたい！・・・ドピューッて射精したい！！・・・このままじゃ、僕の精神は壊れちゃう。・・・だっ、ダメッ、ダメッ、・・・たっ、助けて！！
「そろそろ良いんじゃない？・・・一度休憩しましょうよ。この状態は本人にとって、かなり辛いらしいから、あまり長く続けるのもね・・・。」
　エリちゃんが、そんなことを言ったような気がした。さっきから何度も意識が飛んじゃっているんで、どれだけの時間が経っている

のか、感覚がわからないけど、1分か2分位なんだろうか？・・・それとも5分とか10分も経ったんだろうか？・・・いつの間にか、メグちゃんが僕の股間を温かいタオルで拭いてくれていて、エリちゃんはどうやら僕の精液が溜まったガラス容器を外して、計測台に載せているところだった。射精は止まっていたけど、さっぱりイッた感覚がない。ただ欲求不満で、もっともっと射精したいという気持ちが股間から脳味噌まで、渦巻いている。当然だけど、ペニスはまったく収まる気配がなく、ガチガチのギンギンでお臍に付いてしまっている。今すぐにでもまた扱いて貰って、思いっきりドピューッて射精したくてたまらない。
「すごいわ、この子。あんな状況で8．6ミリグラムも射精しているわよ。流石ね。」
「それだけじゃなくって、射精したばかりなのに、このおちんちんの状態見てくださいよ。ガチガチで元気一杯、まだ何度でも連続射精できそうじゃないですか。」
「そうね。じゃ、すぐ次を開始しましょう。この子ならきっといけるわよ。」
　二人でそんな会話をすると、メグちゃんはまた、ローションをつけ直した手で僕のペニスを優しく握って、先程やったのと同じような緩い手コキを開始した。またエリちゃんは、精液を受け止める容器を交換して、新しい容器を僕のペニスの下にセットしたようだ。
　ズリュッ、ズリュッ、ズリュッ。・・・メグちゃんが、僕のペニスを優しく、ゆっくりと扱いている。握る力はごく弱く、微かに触る程度だ。でも、亀頭のカリの部分を中心に扱くその刺激は、到底我慢できるものではない。僕はあっと言う間に、先程と同じ快楽の沼に沈められて、他のことを考えられなくなった。
　きっ、気持ちいい！！・・・もっと！・・・もっと扱いて！
　さっきと少し違うのは、射精したい、ドピューッて、思い切りイキたいっていう感覚が、ずっとずっと強く、我慢できない位、頭からペニスまで充満していることだ。さっきはゆったりとした快感の

ぬるま湯に漬かってまったりとして、ずっとこのままで過ごしたいと思っていたけど、今はとにかく一刻も早く、思いっきりドピューッて射精をしたいという思いで一杯だ。今、射精したら、きっと物凄い量の精液を射精するだろう。まるで全身が性器になってしまったようだ。・・・だから、だからお願い、思い切り射精させてください。お願いします。お願いします。

そんな僕の願いが通じたのか、またしてもエリちゃんが僕の乳首を摘んでクリクリと刺激を始めた。さっきの乳首刺激で、ペニスと乳首の神経が繋がってしまった僕は、乳首クリクリで一気に快感が高まった。ところが、ここでメグちゃんがペニスを扱(しご)くのを止めてしまった。ペニスへの刺激がなくなってしまった僕は、必死になって腰を前に突き出したり、ペニスをフリフリしたりと無駄な努力をしたが、これではドピューッていう射精は望むべくもない。でも、乳首クリクリは続いていて、ペニスと神経が繋がってしまっている僕は、乳首の刺激だけで射精感が次第に高まってきた。

「あっ、あぁっ、いっ、ぃひっ。」

「おっ、早いね～。そろそろまたイクかな～？」

だっ、だめっ！・・・もう限界が近い？！・・・乳首の刺激だけでも、尿道の奥から何かがジワジワと沸き上がってくるのがわかる。

・・・そっ、それっ、・・・ひっ、いやっ、・・・やっ、止めてっ、・・・ダメーッ！！

「はい、ここだね？」（ニコッ）

僕がまさに限界になる瞬間、またしてもエリちゃんが乳首から手を離してしまい、ニコッと微笑みかけた。メグちゃんのペニス扱(しご)きは、もうさっきから止まっていて、ときどき思い出したように鈴口から裏スジのあたりを人指し指の腹でスッと撫でてくれたりするけど、とても射精するような刺激じゃあない。しかも、エリちゃんがニコッと微笑んだタイミングで、メグちゃんも完全に手を離してしまい、僕はまたさっきと同様に、じわじわたらたらと射精を開始した。

「んっ、んんーっ、ぁあーーっ、んぅーっ。」
「今度もタイミングはバッチリですよね？・・・じわじわたらたらと、漏れるような射精が始まったみたいですから。」
「うっ、ぅうーっ、おっ、ぉおぉーっぅぉおーーっ、ぁあーぁあーっ、いぅーーっ。」
（もっ、もっとっ！！・・・もっと擦って！？・・・おっ、お願いっ、お願いします！！）
「そうね。じゃあ、このままじわじわとお漏らし射精が続くのを見ていましょう。」
「ぁいーっ、ぉえあぃー、いぃーっ。」
たっ、助けてーっ、僕、もう壊れちゃうーーっ。
「あらあら、涙をポロポロ零（こぼ）しているわ。でも、じわじわと射精は続いているわね。この子、やっぱり優秀よ。・・・あ、ちょっと精液が垂れてくる量が減ってきたかしら？・・・そういうときは・・・。」
「こうすれば良いんですよね？・・・ほら、これでまた、精液がお漏らしみたいにじわじわたらたらと出続けるようになりました！」
キンタマから会陰にかけて、さわさわっと撫でられた。ぞくぞくっとして、射精感がまたペニスの奥からじんわり湧いてきたけど、そんな、そんな僅かな刺激じゃなくって、もっと強い刺激を、もうペニスを鞭で思い切り打ちつけて下さい！！・・・おっ、お願いっ、・・・お願いしますっ！！
「この子、本当に優秀だわ。まだたらたらと射精が続いているじゃない。普通だと2回目は、直ぐに射精が止まっちゃうものなんだけどね。しかもこれ初めてのルーインド・オーガズムでしょ？・・・訓練なしにこの成果は凄いわよ。またしても8㎎位出してるんじゃないかしら？」
だっ、誰かっ、助けてーっ。そう思いながら、僕はまた意識を手放していた。
「この子、凄いですね。さっきからおちんちんがガチガチで、いく

ら射精しても収まる様子がまったく見られません。」
「そうね、それがルーインド・オーガズムの良いところなのよね。でも、あれだけ多量に射精して、気絶までしてるのに、それでもおちんちんがお臍にくっついたままでいるなんて、さすがに1カ月で手搾り牡蓄に昇進するだけあるわよ。」
そんな会話で僕は目が覚めた。・・・褒められているのは、よくわかる。でも、全然嬉しくない。それより、とにかく思い切りドピュッて射精させて欲しい。これじゃあ生殺しだ。いや、それよりもっと酷い。さっきから、かなり射精しているみたいだけど、ちっとも射精した感じがしない。いや、そうじゃない。射精が続いていた感じはあるけど、開放されたという満足感がまったく感じられない。だから、ペニスはちっとも収まる気配がない。
「あ、気がついたわね。じゃ、三回目行ってみようか。」
またしても、ローションをたっぷりつけ直した手でペニスをゆっくり扱きだした。今度は全体ではなく、亀頭の部分を中心にゴルフボールかクルミを握るようにクリクリとされる。僕はもう何も考えられず、この天国だか地獄だかわからない中途半端な快感の沼に沈められて、どうあがいてももがいても、そこから抜け出せない。そのような状態が何分続いたのか、もう時間の感覚がなくなっている僕にとっては、そもそも頭が沸騰しているので永遠に続く拷問なのか、それともこの状態が実は快楽の極致なのか、まったく判断がつかない。
「かなり高ぶってきたかな？・・・ちょっと目先を変えてみようか？」
そんなことを聞いたような気がする。と、扱くのは止めて、ペニスに何かを突っ込まれた。デコボコのついたゴムのチューブで、感触からすると多分さっき突っ込まれたものと同じだろう。柔らかいものなんで痛くはないけど、瘤がするすると挿入されてくるとペニスを内側から刺激する違和感だけがどんどん奥深くまで侵入してくる。

股間が見えないんでペニスの感触だけしかわからないけど、いよいよ先端の部分が一番奥に到達したと思ったら、そこをぐっと突破され、全身に電気が走ったように感じた。
「ここが前立腺だよね。直接刺激されるのは初めてかな？」
そう言いながら、その瘤（こぶ）のあるデコボコのチューブが膀胱の中まで入ったり出たりするように動かされだした。・・・こっ、これって、まるでペニスを内側から扱（しご）かれているようだ。しかもデコボコの部分が前立腺の部分を特に刺激して、オシッコをしたいような、射精したいような、あるいは射精している最中のような、そんな感じの感覚が混ざり合って、もう気が狂いそうだ。
「さ、じゃ、そろそろイケるかな？」
多分、エリちゃんの声がそんなふうに聞こえた。するとペニスに挿入しているデコボコのチューブが、一気にズリュズリュズリュッと引き抜かれた。
イクッ！！
射精が始まった。しかし、そこでまた一切の刺激を中止されてしまい、今回もまたドピューッという射精ではなく、だらだらと漏れるような射精になってしまった。
「んーっ、んーっ、んぁーっ、ぃあーっ。」
「そうそう。いい感じだねー。」
そのまま、じわじわと射精が続く。
「あーあー、ぃあーー、あぁーんぁーっ。」
(やだーっ、やだーっ、いやーっ、あーっ、もっとーっ。）
「この子、また涙を流してますよ？」
「あ、いけない。射精が止まっちゃいそうだわ。」
まっ、また乳首をキュッと摘まれた。
「そうそう、良い調子よ。射精がじわじわ続いているわ。」
(やだーっ、やだーっ、こんなのやだーっ！！）
「この子、さっきから涙を流し続けているんだけど、でもしっかり射精は継続していているのが凄いですね。」

「そうね、そろそろ良いんじゃないかしら。また８㎎位は射精したでしょ?・・・これで3回合計で２５㎎位は確保できたから、今回はここまでにしましょう。」

「沢山射精できて偉かったね~。次の搾精は１５時だからね。じゃ、またあとでね。」

こっ、これで終わりなの?!?!・・・全然イッた気がしない!・・・まだペニスもギンギンのままだ。・・・まさか、これから僕はこんな中途半端な射精しかさせて貰えないの?・・・そんなのやだよー。これじゃ生殺しだよー。・・・せっかく手で扱いて貰えると思ったのに、こんなの拷問だーっ!!

第２０話　ルーインド・オーガズム（１）（後書き）

この、四つん這いで後から搾精される状況というのを、うまくイメージできる画像がないかと探してみたのですが、ありそうでなかなか見当たらず、近いかもしれないというものを張り付けておきます。
肥大はしていませんが、タマが邪魔になるので、上に釣り上げるなど、雰囲気がわかるでしょう。
ｈｔｔｐｓ：／／ｊｐ．ｐｏｒｎｈｕｂ．ｃｏｍ／ｖｉｅｗ＿ｖｉｄｅｏ．ｐｈｐ？ｖｉｅｗｋｅｙ＝６５７ｂ６１２ｄ９６７２２
ｈｔｔｐｓ：／／ｊｐ．ｐｏｒｎｈｕｂ．ｃｏｍ／ｖｉｅｗ＿ｖｉｄｅｏ．ｐｈｐ？ｖｉｅｗｋｅｙ＝６６８ｂ６ｂ７５９５４ｆ７
ｈｔｔｐｓ：／／ｊｐ．ｐｏｒｎｈｕｂ．ｃｏｍ／ｖｉｅｗ＿ｖｉｄｅｏ．ｐｈｐ？ｖｉｅｗｋｅｙ＝ｐｈ５ｆｄ４ｃｄ０１５３２ｄ９

これらは、ルーインド・オーガズムによる射精の様子がよくわかるシーンです。
ｈｔｔｐｓ：／／ｊｐ．ｐｏｒｎｈｕｂ．ｃｏｍ／ｖｉｅｗ＿ｖｉｄｅｏ．ｐｈｐ？ｖｉｅｗｋｅｙ＝６５０２ｂ３ａｂ３７２４ｄ
ｈｔｔｐｓ：／／ｊｐ．ｐｏｒｎｈｕｂ．ｃｏｍ／ｖｉｅｗ＿ｖｉｄｅｏ．ｐｈｐ？ｖｉｅｗｋｅｙ＝６６０ｅ０２１６４７ｅ６ｃ
ｈｔｔｐｓ：／／ｊｐ．ｐｏｒｎｈｕｂ．ｃｏｍ／ｖｉｅｗ＿ｖｉｄｅｏ．ｐｈｐ？ｖｉｅｗｋｅｙ＝６６０ｅ０２１６４７ｅ６ｃ
ｈｔｔｐｓ：／／ｊｐ．ｐｏｒｎｈｕｂ．ｃｏｍ／ｖｉｅｗ＿ｖｉｄｅｏ．ｐｈｐ？ｖｉｅｗｋｅｙ＝６５８７６３５０ｂ０９９ｅ

申し訳ありませんが、次の週末は確定申告の最後の追い込みになるので、杉田家も牡牧場も、更新できません。１回お休みとさせて頂きます。

（もしかすると、また何か昔の駄文をアップするかもしれませんが、未定です。）

ご了承下さい。

第21話　ルーインド・オーガズム（2）

メグちゃんとエリちゃんは、『また午後にね（ニコッ）。』と言い残して出て行ってしまった。行くときにギロチン首枷は外してくれたけど、そんなの何の慰めにもならない。僕はもう思い切りドピューッと射精がしたくてしたくて、堪らない気持ちだ。

　3回も射精した筈なのに、ペニスはギンギンで一向に納まらない。臍に付いちゃう位だ。四つん這いの姿勢だから、方向としては水平ということになるんだけど、これ普通に立っていたらペニスが真上方向に、垂直に空を向いているということだ。昔、テレビで馬の交尾の様子を見たとき、牡馬のペニスがお腹と並行に、水平に伸びていたけど、まさにあの状態だ。

　早々と搾精が終わった他の牡畜たちは、すました様子でそれぞれ寛いでいる。隣のケージと向かいのケージの牡畜の中には、僕が一匹だけ別行動というか、手搾りをされているので、ちょっと羨ましそうな顔をして興味深げにガン見しているのもいたけど、メグちゃんとエリちゃんが出て行ってしまうと、もう興味を失ったという雰囲気でベッドに横になったりしていた。奴らは思い切りドピューッと気持ち良い射精ができて、スッキリした顔だけど、僕は3回も射精したにもかかわらず、一度もちゃんとイッていない所為か、とにかくきちんと射精したくて堪らない。でも自分ではペニスに触れることもできず、悶々としていたら、チャイムが鳴って午後の放牧の時間となった。

　いつもどおり、飼育員さんたちがケージの扉を次々に開けてくれるので、どの牡畜もぞろぞろと四つん這いで外に出ていく。いつも見慣れた光景だけど、他の牡畜は皆、ペニスがだらんと下に垂れ下がっているのに、僕のペニスだけはギンギンで臍にくっつくほどい

きり立っている。なんか滑稽（こっけい）だ。でも、他の牡畜も飼育員さんも、僕のことなど気にも止めていない。ここでは、そういうものなんだと改めて思って、僕も務めて気にしないようにした。

　午後の放牧が終わり、シャワートンネルを通って自分のケージに戻ると、もう15時の搾精となった。さっきと一緒で、他の牡畜は次々と搾精筒を装着されていったけど、僕だけはまたメグちゃんとエリちゃんが入ってきて、僕の股間の後ろ側にスタンバイした。僕のペニスは期待に打ち震え、午前中からずっと、ギンギンのガチガチに勃起したままだ。

　二人は、さっきと同じように僕のキンタマを上に釣り上げると、ペニスの下に容器をセットして、ローションをつけた手でペニスをゆっくり扱きだした。

　ズリュッ、ズリュッ、ズリュッ、ズリュッ。

「あっ、はぁっ、ぁはっ、っふっ・・・。」

　さっきと一緒で、メグちゃんの手コキは、ゆるゆると亀頭を擦（こす）ったかと思うと、竿を根元から先端に向けて絞り出すように順番に握りしめたり、一転してキンタマをさわさわと撫で回して、ケツの穴までこちょこちょしたりする。

　かと思うと、会陰をぐっと押し込んだり、乳首から脇腹にかけて、スッスッと撫で回したり、午前中と似たようなパターンで刺激を加えて来る。相変わらず、一気に射精するような強い刺激は一切ない。ただただ、脳味噌が次第に蕩（とろ）けて行くような、ぬるま湯に漬かったみたいな刺激が延々と続いている。これだけを見れば、確かに極楽のような快感がゆるゆると永遠に続いている状態で、この沼に嵌（は）まってしまった僕は、二度と抜け出せない快感に全身が支配されてしまっている。麻薬のような快感がペニスから腰、そして全身に回り、

脳味噌がどんどん破壊されて溶けだしてしまっているのが良くわかるけど、どうしようもない。いや、どうせならこのままずっと、死ぬまでこの天国のような状態を続けて欲しいとも思う。
　でも、そんな僕の淡い期待を許してくれるほど、お仕事は甘くはないようだ。メグちゃんは、ゆっくりと扱きながら、朝も使っていたゴムのチューブのようなものをペニスに挿入してきた。これ、単体では違和感があるだけで、特に痛くもないかわりに取り立てて快感はないんだけど、毎日の前立腺への綿棒挿入で尿道が開発されてしまったのか、それとも投薬の所為なのか、股間全体に刺激を加えられている状態で挿入されると、それだけでゾクゾクとした感覚が堪らない快感を呼び覚ます。しかもずんずんと奥深くまで挿入され、一番奥にある前立腺（だと思う）のところを、デコボコで擦るようにズボズボされると、もうそれだけで泣き叫びたくなるほどの快感だ。

「んっ、んんーっ、あーっ、んぁーあーっ。」
「そろそろかしらね。じゃ、これで・・・。」

　そう言いながら、メグちゃんが僕のペニスからボコボコのチューブを一気にズリュリュリュッと引き出すのと、エリちゃんが僕の乳首をキュッと捻るように摘むのが、殆ど同時だった。

「ひっ、ぃひっ、んくっ！」

　と、またしても、まさに射精が始まるというその瞬間に、二人ともパッと手を離してしまい、朝と同じようにじわじわだらだらとした射精が始まってしまった。

「うっ、ぅうーっ、おっ、ぉおぉーっ。」
（もっ、もっとっ！・・・もっと擦って！？・・・おっ、お願い

っ、お願いします！！）
「射精が始まったわね。上手ぃ上手ぃ。今度も上手く行ったわね。・・・この調子で、どんどん行きましょう。」
「ぅぉおーーっ、ぁあーぁあーっ、ぃぅーーっ。」
「ルーインド・オーガズムのお手本みたいな射精ね。またしてもじわじわだらだらと、ゆっくりお漏らしするような射精が続いていて、ドピューッという力強い射精にはならないように気を配るのよ。・・・あ、でも、射精が止まっちゃうと、その後に悪影響があったりするから、そうならないように少しの刺激を加えるタイミングもよく見ていてね。」
「ぁいーっ、ぉえあぃー、いぃーっ。」
「この子、また涙をポロポロ零（こぼ）して何か叫んでいるわ。」
「もどかしくて、お強請（ねだ）りしようとしてるんじゃないかしら？・・・ほら、腰をガクガク振って、おちんちんをブルンブルン振り回しているじゃない。きっと、『もっともっと』って言っているんだと思うわ。」

　そっ、そうです！！・・・こっ、このままじゃっ、・・・このままじゃ僕っ、気が狂っちゃいます！・・・おっ、お願いっ、お願いですっ、もっと、もっと強い刺激をっ、刺激をーーーっっ！・・・ぁあーっ、ぁひーっ、きーーっっ！！！

「あら、この子、またしても白目を剥いちゃったわ。・・・気を失っちゃった上に、全身がガタガタ震えていて、大丈夫かしら？」
「まだ、たらたらと射精が続いているから大丈夫よ。気絶しちゃっても、射精は継続できてるでしょ。これって凄いことなの。・・・普通だと、気を失ってるのに射精が続くというのは、前立腺への電気刺激を加えたときにそうなるんだけど、あれも意識とは無関係の射精反応が起きるの。ただ、強制的に射精をさせられることには変わりないんだけど、電気で神経を無理矢理刺激するんで、射精を制

御する神経がバカになっちゃうことが多いのよね。でも、この子みたく刺激を止めているのに自然と射精が続くのは、脳や脊髄が訓練によって騙されている状態で、神経系に負担を強いている訳じゃないんで、大丈夫らしいの。・・・といっても、まあ本人にとってみれば、似たような感覚なのかもしれないけどさ。」
「この子の様子を見ていると、射精の快感というよりも拷問を受けているような、辛くて苦しいように見えるんですけど・・・。」
「それは、ある程度は仕方ないわよ。つまり、性的快感って、一瞬なら気持ち良いけど、ずっと連続すると、最後は辛くて耐えられなくなるじゃない？・・・あなたも経験があるでしょ？」
「そうですね。こっちはイッてるのに止めてくれない男性って、結構いますよね。・・・あ、そろそろ９㎎も溜まってきたんで、一度ここで中断します。」

・・・ペニスが気持ち良い。鈴口から裏筋を、優しいタッチでズリュッ、ズリュッと刺激されている。まるで全身が性感帯になってしまったような感覚で、ふと気がつくと、いつの間にか2回目の手扱きがはじまっていた。僕が何も考えられない状態になり、快楽の沼に沈んで行くと、やっぱりさっきと同じように、ペニスや乳首、それに今度は肛門の回りまでマッサージのような刺激をされて、2回目の射精に誘導されたけど、今度もまた射精が始まるその瞬間に一切の刺激を中止されて、じわじわたらたらとお漏らしのような射精をさせられた。朝から5回も射精しているのに、ちっともイッた気がしない。もう気が狂いそうだ。
　これはやっぱり、僕はもうあのドピューーッと射精する快感を、二度と味わわせて貰えなくなっちゃったんだ・・・。そう思ったら、悲しくて切なくて、涙が止まらなくなった。
「あら？・・・この子、また泣きだしちゃいましたよ？・・・どうしたんでしょうか？」

「変ね？・・・もう2回目のルーインド・オーガズムも終わって、もどかしかったり辛かったりするような刺激は、一切ない筈なのに？」
「どうしたの？・・・どこか痛いの？・・・それとも、もっと射精したいの？」

　メグちゃんが、僕に優しく問いかけてきた。でも、僕の絶望感はさらに高まった。

「あぁーっ、あーーんっ、おーーんっ、ぅおーん。」

　僕は大声でわんわん号泣してしまった。

「仕方ないわね。手搾り牡蓄に昇格したり、ブランド牡蓄に昇格したりすると、こんな風に泣いちゃう子が一定数居るのよ。何故か精神的に不安定になるのかしらね。」
「こういうときのマニュアルとかはないんですか？」
「うーん、牡蓄の鳴き声とか心理とかについて、あまり詳しく研究されたことはないみたいね。・・・でも、これに限ったことじゃないんだけど、一般的な方法として、牡蓄が泣き喚いたり、飼育員にも原因がわからないことがあった場合の対処方法というのは、あるにはあるのよ。それはね・・・。」

　ピシーッ。

「あっ、あひっ、ぁひーっ、あひーーっ！」
「もう一発。」

　ピシーッ。

「ぃひっ、いっひーっ、っくーーっ！！！」

ドピューーーッ、ドピューッ。

「凄い勢いで射精してますね。」
「まだまだイクわよ。あなたもやってみて。」

ピシーッ。・・・ドピューッ。
パシーン。・・・ドピュピュッ、ドピュッ。
ピシーッ。・・・ドピューッ。
ピシーッ。・・・ドピューッ。
パシーン。・・・ドピュドピュッ、ドピュピュピュピュッ、ドピューーーッ。

「この子、鞭打たれるたびに、凄い勢いで射精していますね。どこまで続くんでしょうか？」
「うまくやれば、何回でも連続射精するんじゃない？・・・でも、商品としての精液の質を考えると、やっぱり１０㎎程度で一度、休ませないとダメよ。」
「ぃひーっ、ぁひーっ、きーっ、きーーっ。」
「ほら、そろそろじゃない。もう完全に白目を剥いて意識を手放しちゃってるし、射精量も１０㎎は超えてきたみたいだし・・・。」
「そうですね。これだと、じわじわだらだらとお漏らしするような射精じゃないから、ルーインド・オーガズムではない普通の射精の快感になるんでしょうね。」
「そうなの。これをすると、どんなに泣いている牡蓄も、まず泣き止んでくれるのよ。明日からも、最後の射精はこれにすると良いかもね。特にこの子は、おちんちんに限らず身体のどこを鞭で打たれても、凄い勢いでドピューッて射精していたでしょ？」
「ようするに、鞭打ちで言うことを聞かせるということですね？・・

・でも、これって躾けなのかな、それともご褒美なのかな、どっちなんだろう。」
「飴と鞭という言葉があるじゃない。あれ、一般的には飴を与えるのと、鞭を与えるのをうまく使い分けて躾けをするという意味に使われているけど、ここでは飴と鞭が同じ意味になっちゃってるケースが多いのよね。」
「そうなんですね。初めて知りました。・・・あ、この子、気がついたみたいですよ。」
「本当だ。・・・よく頑張ったわね。たっぷり射精してくれて偉かったわよ。手搾りはどうだったかな？・・・今日のお仕事はこれで終了だよ。キミは夜の搾精がないから、もうゆっくり休んで、また明日に備えようね。」
「じゃあ、またあとでね。」

・・・凄い！！・・・とにかく凄かった！・・・放心状態から、少しずつ覚めてきた・・・。
まだ全身がビリビリ痺れている。腰からペニスにかけてが、自分のものじゃなくなったみたいだ！
こんなに気持ちの良い射精は生まれて初めてだ。僕の必死のお願いを聞いてくれたんだろうか？・・・いや、お願いを聞いてくれたというより、きっとこれはご褒美だったんだろう。今日一日、ずっと辛くてもどかしくて、気が狂いそうな『お漏らし射精』に耐え、必死で我慢して沢山射精できた僕に対するご褒美だったに違いない。
すると、明日からも、一日あのお漏らし射精で沢山射精すれば、最後にはこんなにすばらしいご褒美をして貰えるんだ。きっとそういうことなんだろう。
それにしてもあの鞭打ち、気持ち良かったなー。明日以降も毎日、いや、時々でも良いから、こうして鞭打ちを貰えるなら、何とか2年間、ここでの生活にも耐えられるに違いない。これを目標に、明日からもっと頑張ってお仕事に励むことにしよう。ご褒美が楽しみ

だ・・・。

―――――――――――――――

―――――――――――――

「あの子、最後は身体のどこを鞭打ちしても、その度に射精していましたね。」

「そうね、多分あの子にしてみれば、もう最高のご褒美を貰っているように感じていたんじゃないかしら。」

「ほら、これを見て！・・・あの子、ペニスからお尻、太股、そして最後は背中にごく軽く鞭を当てるだけだったのに、毎回３㎎程度ずつ射精して、合計では１２㎎も射精しているわ。」

「そうですね。これで１日の射精量はっと、・・・凄い！！・・・５３．８㎎にもなりました！」

「普通の牡蓄の１回の基準射精量は５㎎で、それが１日に４回で２０㎎これが最低ラインなのは知ってるわよね？」（注１）

「ここの牡蓄は優秀なのが揃っているから、殆どは１回６㎎程度は射精していて、牧場全体では平均２５㎎程度になっているそうだけど、あの子、１日の合計で倍以上の射精をしているわ。本当に規格外ね！」

「本当に素晴らしいです！・・・あたしも初めて担当した手搾り牡蓄が、あの子で良かったです。」

「明日からも、この調子で行きましょう。明日からは、あたしが常に同席するとは限らないけど、大丈夫よね？」

「はい、一人でもできると思います。・・・あの、ところで急に疑問に思ったんですが、あの子、最後の鞭打ちで、叩く度にドピュドピュ射精していて、何度でも射精できそうでしたよね？・・・だったら、最初から鞭打ちだけにして、ルーインド・オーガズムをしなくても良いんじゃないですか？」

「その議論は、前からあったみたいね。ただ、統一的なマニュアル

になっていないってことは、まだ結論が出ていないいんじゃないかしら。ほら、あなたも見てのとおり、牡蓄として毎日、代わり映えのない生活をしていると、どんな刺激でも次第に慣れてきちゃうのはわかるでしょう？」
「それはあるでしょうね。」
「最初から鞭打ちばかりだと、鞭打ちされることが当然となってきて、慣れちゃうのよ。その結果、鞭打ちがご褒美として機能しなくなっちゃうんじゃないかしら。」
「そっかぁ・・・。最初に辛いことがないと、ご褒美がご褒美に感じられなくなっちゃうってことですね？」
「冗談よ。牡蓄がいつも気持ち良く射精できて、辛いことや苦しいことがないなら、それが一番よ。あたしたちもハッピーな気分になれるじゃない？」
「じゃ、何故・・・？」
「どんなに気持ちがよくても、同じような刺激の連続だと次第に慣れてきて、というか感覚が鈍くなってきちゃって、射精量が減ってきたり、それどころか射精に至らないという例もあるらしいの。それは鞭打ちが辛いことか、それともご褒美なのかとは別問題なの。でもそれが、あのルーインド・オーガズムで中途半端な射精を何度も繰り返されると、頭の中がもう早く次の射精をしたいという、その一点に塗り込められちゃうのね。つまり、１日の射精量をなるべく多く確保しつつ、それでいて変に慣れちゃって後に悪影響を残さないという、最大効率を追求した結果が、今のやり方なんだって。」
「なるほど。科学的に確立された手法という訳なんですね？」
「でも、そうね。逆に、それを繰り返すことで、条件反射にしちゃうこともできるかもしれないわ。そうすれば、鞭打ちだけで必要な射精量が簡単に確保できるってことになるでしょ？・・・試してみる価値はあるかもしれないわね。一度、先生に相談してみたらどうかしら。案外、手搾り牡蓄からの搾精効率を飛躍的に高める方法を発見したっていうことで、表彰されるかもしれないわよ？」

第２１話　ルーインド・オーガズム（２）（後書き）

（注１）
普通の成人男子（１０台後半～２０台前半の、一番精力が盛んな時期での統計）ですと、１回の射精量は平均で３．５㎎～４㎎程度となっています。勿論、個人差も大きく、それ以上に射精時の状況によって１㎎～５㎎程度まで変動します。ただ、どれほど若くて精力絶倫であっても、１日に可能な射精回数は、せいぜい５回～６回程度と言われていますし、連続射精をすると、後半になればなるほど、射精量は減少してくるものです。しかし牡畜にあっては、投薬の効果と訓練の成果もあり、最低ラインを５㎎として、これを４時間のインターバルで１日４回（このパターンは、牡牧場毎に最適解を求めて、いろいろと試行錯誤しているので、牡牧場によって多少の違いがあるようですが）の搾精で、合計２０㎎以上を射精させるようにしています。
一般牧場では、これを満たすことができない牡畜が、概ね１０％～１５％程度は出てしまうというのですが、標準偏差を考えると、これが平均的な牡畜の射精可能限界ギリギリになります。

＊とうとう鞭打ちをご褒美と期待するようになってしまった主人公ですが、今後どうなって行くのでしょうか。精神と身体の両方に深く刷り込まれつつある条件反射によって、いずれ鞭を見せられただけで・・・。はたしてそれは苦痛なのか、それとも幸せなのか？
＊飴と鞭ではなく、鞭＝飴となるのも、もう直ぐかもしれません。今後はご褒美をおねだりするシーンなど、いろいろと楽しめるところもあるでしょう。
＊基準を満たせない牡畜の末路については、物語の最後のほうで、

多少詳しく述べることとします。また、実際に処置が施される場面や、そうなってしまった牡蓄の、卒業後の心境についても書く予定です。（程度の差はあれど、基本的に全員ハッピーです。虐げられたと感じたり、悲しんだりする牡蓄は登場しません。ただしそれは真正Mに調教されてしまったからで、普通だと虐待と感じるのかもしれません。）

＊途中の飼育員の会話で、エリちゃんとメグちゃんは、どうやら男性経験があるらしいということがわかります。ただ、この時代にあっては、中卒はもう成人ですから、別に不思議でも何でもありません。（なので主人公も特に気に留めていません。）なお、中卒で成人なので、人権返納同意書に保護者（親）のサインが必要ないのは、このためです。

第22話　見学（その1）（前書き）

今回は、塚田さん視点の話になります。ただ、最初の数話のように、牡蓄がまったく出てこない話ですので、ご承知おき下さい。（この後の展開のために必要な説明となります。）

第22話　見学（その1）

磯部君が牧場役に行っちゃってから、1カ月以上経った。勿論、磯部君に限らず、あたしたちの同級生の男の子は、殆どがこのタイミングで牧場役に行ってるんで、そこは誰でも一緒なんだけど、いなくなってわかる、やっぱりあたし、磯部君のことが好きだったんだ。・・・いや、それはもう同じ委員会の委員になって、一緒に活動してきたときからわかっていたけど、いなくなってみると、こんなに会いたくなるなんて、思ってもみなかった。

あの朝、見送りに行って本当によかった。このスマホの待ち受け画面にある、磯部君の顔と標章カードの写真を毎日見て、磯部君から電話とかメールとかSNSとかが来たら、どんなに良かったかと、心をときめかせている。（勿論、そんなことは絶対ないってわかっている。スマホは置いてくって言ってたし・・・。でも、そういう希望？・・・妄想？・・・が止まらない。）

あのときは恥ずかしくてうまく伝えられなかったけど、あたし、磯部君が戻ってきたら、今度こそはっきり、「精液を飲ませて欲しい。」って伝えるんだ。磯部君もあたしのこと、ずっと好意を持ってくれていたのは感じていたし、見送りのときも悪い感触じゃなかった。牧場役で彼女をつくってきたなんて話は聞いたことがないから、あたしが待っているのと同様に、磯部君もきっとあたしのことを2年間思い続けてくれると信じていたい・・・。でも、スタッフの人は全員、若い女性だって聞くし、そういった人に射精するところを毎日見られていたら、目移りしちゃったり、心変わりすることってないのかしら・・・。いや、それ以前に2年間も離れていて、あたしのこと忘れちゃうとは言わないけど、興味が薄れてきて、もうどうでも良くなっちゃったらどうしよう・・・。

若い男の子の好きという感情は、かなりの部分が性欲に支配され

ているって聞いたことがある。だから恋愛関係にある男の子から、付き合いが深まって身体を求められたときどうするかは、女の子が常に悩む永遠のテーマにもなっている。でも毎日射精しているなら、性欲は解消されちゃっている筈だから、そういう感情の爆発というか衝動は起きないのかしら・・・？

　この1カ月、磯部君と会えない毎日で、そんな不安が頭の中を常に過っている。何をどう心配しても、自分じゃどうしようもない。何かできることがないだろうか、そんなことを漠然と考えていたところ・・・。

「よっ、塚田さん。・・・相変わらず、ふさぎ込んでいるの？・・・あなた、いつも黄昏ているわよね。中学校時代もそんなだったの？」
「そんなことないわよ。典子はここずっと大人しいけど、中学校のときはもっと活発というか積極的だったわ。そうよね、典子？」
「ごめん、自分ではそんなつもりはないんだけど、沈んでいるように見えたかしら？」
「うーん、沈んでいるというか、心ここに有らずというか、何か別のことに心を奪われてしまって、周囲のことに気が回っていないという感じなんだな。・・・猫を被っているわけじゃなさそうだし、何か心配事でもあるの？」
「あたしたちの年齢だと、さしずめ『恋煩い』といったところじゃないの？・・・誰か良い人でもできたのかしら？」
「典子は中学のとき、特に付き合っている男の子はいなかったよね？・・・とすると、高校に入って、春が来たということかな？」
「ううん、高校に入って、というんじゃないけど、・・・ちょっとね。」
「わかった、中学のときの男子に、実は恋していて、その子が牧場役に行っちゃったんで、それで失恋傷心しちゃったのか。」
「へー、そんな相手が居たの？・・・あ、そうか、単に憧れていただけで片思いだったから、何も接点がなかったのね？」

「で、その子が牧場役に行っちゃったんで、心に穴が空いちゃったってことか。」

「まあ、そんなところかな。」

「だったらさ、牧場役の見学に行ってみない？・・・勿論、恋人に会える筈はないんだけどさ、どんなところかを知っておくだけでも、随分と気が休まるかもよ？」

「牧場役って見学なんかできるの？」

「これ、知っている人がほとんどいないのと、ネットには情報が上がっていないというか、そもそも牧場役のことをネットに上げる行為はすべて禁止されていて、上げると一瞬で消されちゃうんで、本当に一部の人しか知らないんだけどさ、女性救済省のホームページに問い合わせ先の電話番号ってのがあるのよ。そこには本来の一般的な問い合わせ電話をする番号しか書いていなくて、しかも今は電話をかける人なんてめったに居ないから、誰も注目していないんだけど、そこに電話して牧場役についてもっと知りたいって頼んで、自分のマイナンバーを伝えると、適当に２つか３つの牡牧場を見繕(みつくろ)ってくれて、その牡牧場の電話番号を教えてくれるの。あとは、そこと直接話して日時なんかを決めるらしいわよ。」

「どこの牡牧場も見学を受け付けているけど、多分、住所か何かで決めるのか、あるいはこれは噂なんだけど身内がいないかどうかとか、そんなのを調べてるんじゃないかしら。」

「逆に、どこかの牧場と希望があれば、それを伝えることもできるみたいよ。まあ、希望を容(い)れてくれるかどうかは不明だし、そもそも意味があるかはわからないけどね。」

「市村さん、どうしてそんな情報を知っているの？」

「実は、あたしの叔母さんが厚生労働省に勤めていてね、そこから女性救済省に出向していたことがあるのよ。それで、主として広報関係の仕事をやっていたんだって。なんでも、今はどこも仕事の透明性とかで広報活動が重視される一方で、牡牧場の実態は、やっぱり男性にかなりの負担を強いるものにならざるを得ないんで、政府

としては隠しておきたいこともあるらしくて、そこの兼ね合いが難しいんだってぼやいていたわ。」
「行く。是非見学に行ってみたい！」
「じゃあ、それで決まりね。あたしが電話してみるわ。あまり話を大きくするのもなんだから、行くのは取り敢えず、この３名ということで良いかしら？・・・塚田さんと木村さんのマイナンバーをあとで送っておいてね。」

こうして、中学のときから仲が良かった涼子（木村涼子さん）と、高校に入ってから仲が良くなった市村寿子さんの３人で牧場役の見学に行くことになった。涼子は確か付き合っている男の子が居た筈なんだけど、多分それはあたししか知らない筈だし、市村さんは誰も付き合っている相手がいないって、この前聞いたところだわ。

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

「来週の週末、つまり次の次の日曜日で、富士山の麓の牧場の予約が取れたわ。」
「交通手段はどうするの？」
「河口湖までは自分で電車またはバスで来て下さいって。集合時間に牧場のマイクロバスが迎えに来てくれるそうよ。午後の見学を申し込んだから、１時に河口湖駅前のパーキングに集合だって。時間的にお昼は河口湖駅周辺で軽く済ませる感じかな。」
「わかった。新宿駅からだと、バスでも電車でも2時間位だけど、バスのほうが安かった筈だから、余裕を見て新宿のバスタの入り口エスカレータ前で9時に集合にしましょう。チケットは私が手配しておくから。」

こうして、１０日後の日曜日に、牧場を見学することになった。

牧場が違っても、どこも統一的な基準で運用されているだろうから、磯部君がどんなところで、どんなふうにして暮らしているのか、ある程度のイメージはわかるし、どういったことが辛いのか、そんなことも知っておけば、戻ってきたときに労（ねぎら）ってあげることもできるんじゃないかしら？

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーー

「おはよーっ。」
「おはよーっ。じゃ、三人揃ったから乗り場へ行こうか。９時半のバスだから、余裕だよね。」

あたしたち三人は、出発ターミナルがある４階に上がるため、バスタ入り口の長いエスカレーターへと向かった。日曜日だけど、全員高校の制服を着ている。これは見学のときは制服で来て下さいっていう指示があったんで、そうしたんだけど、何の意味があるのかしら・・・？

２時間ちょっとで河口湖駅に到着し、駅前にあった名物の吉田うどんを出す店で軽く昼食を取って待っていると、見たことのあるグレーのマイクロバスがやってきた。確かこれって、磯部君を見送りに行ったとき、駐車場に整列していたマイクロバスだったわよね・・・。

バスの中には、既に他の学校の制服を着た４人組が乗っていて、それにあたしたち３人と、河口湖駅で一緒に乗り込んだ、やはり別の制服を着た４人組の合計１１人になった。これが今日の見学者全員なのかしら？・・・雰囲気とか、話している様子から、最初の４人組は高校生らしく、あたしたちと一緒に河口湖駅から乗った４人は、どうやら中学生みたいだ。

バスが走り出すと、早速制服を着た係員のお姉さん（多分、二十

歳前後に見える）がマイクで説明を始めた。
「本日は、富士青木ヶ原搾精牧場へようこそ。皆さんには、私たちの活動の一端をご紹介し、牡蓄として頑張っている男性の様子を、是非学んで頂きたいと思います。ご承知のとおり、私たち女性は毎日男性の精液を飲み続けないと、寿命が１／５程度になってしまい、二十歳になる前に死んでしまうようになりました。それで男性の方々の奉仕活動により精液を多量に生産し、女性の飲料として広く流通させる制度が整備されましたが、その根幹を支えるために、男性には牡蓄となってこの牡牧場に2年間奉仕して頂き、精液を生産し続けることとなったのは、皆さんもよく御存知のことと思います。」
「制度の概要については、既に学校で何度も学んでいるでしょうから説明は省きますが、このボランティアとして参加して頂く2年間、男性は牡蓄として家畜と同様の処遇となり、ただひたすら精液の生産効率を最大化することとなります。つまり皆さんがこれから訪問する牡牧場には、男性は一人もいなくて、すべて牡蓄なのです。」
「これは、牛や豚、鶏などを家畜として飼育してきたノウハウを最大限活用し、一匹の牡蓄から最大の精液を搾精するために必要な処置であり、そこでは牡蓄はすべて精液生産を最大化するためだけに飼育され、各種の身体処置を受け、さらには個体を管理するための躾けを受けることになっています。」
「これは、一部の団体などから、人権侵害であるとの批判が続いていますが、搾精量を確保するためには仕方がないものとして、男性も含めた大多数の国民の賛同を広く得られており、そのために牡蓄に登録され、この牡牧場に入るときには、人権を国に返納するという手続きを踏むことになります。憲法にも明記されており、これは人類という種を守るために、さんざん議論・検討した上でのことですので、今の不思議な病気の治療法が確立され、特殊なパンデミックが完全に収束するまでは、続けられるでしょう。」
「牡牧場というのは、有名なわりに中身の実態については、あまり

正確に知られていません。これにはいくつか理由がありますが、まず経験者である男性の卒業者が、あまり多くを語りたがらないというのがあります。辛く厳しい体験など、誰しも早く忘れてしまいたいものですし、下手に愚痴って自分が惨めになりたいとも思わないでしょう。また、政府や地方自治体なども、伝え方を間違えると、たちまち炎上してしまうと恐れているので、自らＰＲしようとは決して考えません。」

「ですので、皆さんのように見学に来て頂き、自分の目と耳で真実の姿を体験して、牡牧場とはどんな場所なのか、牡畜になると、どういった状況になるのか、是非とも理解を深めて欲しいのです。・・・皆さんの常識とは、少し異なる部分も沢山ありますので、あるいは驚いたり、ショックを受けたりするかもしれません。だから、という訳ではないのですが、この牡牧場のことは、ネットに上げることは禁止されています。内部で撮影するのは動画も含めて自由ですし、それを他人に見せるのもかまいませんが、内容が一人歩きして、変に炎上することも多いネットに上げるのは絶対にお止め下さい。他人に見せるのは、必ず撮影した人が、そのときの状況や、自分がどう感じたかを自分の口から説明できる環境下に限って、自由とされています。」

「なお、外部からの雑菌や病原菌の持ち込みを防ぐために、これから皆さんにマスクと手袋を配布しますので、このバスの中でつけて頂き、終わってバスに戻ってくるまで外さないで下さい。また入り口では靴を履き替えて頂きます。それと、内部では牡畜の側まで近寄ることができますが、牡畜には触らないようお願いします。また牡畜には話しかけないで下さい。・・・あ、先程も申し上げたとおり、撮影は自由です。牡畜は家畜なので、プライバシーは一切ありませんから、どこであっても何をしていても、お好きに撮影して下さい。顔や股間など、いくら写しても大丈夫です。」

「では、到着です。入り口で靴を履き替えて、ロビー横の会議室でお待ち下さい。なお、お手洗いはここで済ませておいて下さい。こ

の後、全部終了するまで約３時間ありますが、途中にはお手洗いがありませんので、ご了承下さい。」

そんな話とともに、入り口の鉄の門を通ってマイクロバスが敷地内に入って行った。何となく監獄とか、そんな場所をイメージしていたけど、案外普通の門で、どこかの工場とかの入り口とか、少し背が高いけど学校の校門だと言われても違和感はない。それと敷地の周囲を取り囲むフェンスも、コンクリート製とかを想像していたら、ごく普通の金網に目隠しの半透明プラスチック板をつけたようなもので、一応は二重になっているみたいだけど、これも取り立てて厳重には見えない。

他のグループの子たちもそうらしいけど、あたしたちも何となく口数も少なくなって、停車したバスから降りると、入り口で靴を上履きのようなものに履き替えて、ロビーの横にある会議室へと入って行った。

お手洗いを済ませ、会議室でグループ毎にまとまって着席して声を落として雑談していると、バスの中に居たのと同じ制服を着たお姉さんが入ってきた。

「お待たせしました。本日は富士青木ヶ原搾精牧場の見学にご足労頂き、ありがとうございます。私が皆さんをご案内いたします篠田と申します。これから約３時間にわたり、牡牧場の実態と牡畜の生活などについて、ご説明するとともに、実際に見て頂くことになりますので、どうぞよろしくお願いいたします。」

「早速ですが、この図をご覧下さい。これは、この牡牧場の概要を示しています。まず場所はここ富士山麓の青木ヶ原・・・よく樹海で迷子になるなどと言われている場所に隣接しています。総面積は・・・。」

「・・・次に、全体の見取図になります。皆さんがいるここはエントランス棟といって、唯一の門に面した建物です。ここですべての

入場退出を管理しています。皆さんのような見学者だけでなく、私たち飼育員なども例外なくこの建物を通って、毎日入場退出します。年に1回だけですが、牡蓄たちも最初にやってくると、この建物を通って、隣接する登録棟というところに向かいますし、卒業するときはここから前の広場に出て行きます・・・。」

流れるような説明が次々と続く。この施設が、どれほど合理的で効率を最大限追求したものであるか、また牡蓄の健康管理と射精管理に気をつかっているか、といったことを、本当にわかりやすく解説してくれている。また途中途中で話を中断して、何か質問はありませんか、と確認してくれるし、本当に親切だわ。

でも、あたしはこの説明を聞いていて、何となく違和感を感じていた。何がとハッキリしたものじゃないんだけど、この施設が、牛や馬、鶏なんかを飼育する施設を参考にしている、という説明を聞いて、少しわかってきた。つまり牡蓄が人間ではなく、家畜扱いされている、それも比喩や説明の都合ではなく、本当に家畜として飼われているんじゃないか、ここにいる係員のお姉さんの言葉の端々から、そんな雰囲気が感じられたから・・・。それは、牡蓄が暮らす『畜舎』（この用語も完全に牛か豚なんかを飼うための建物のことよね）の写真を見せられたことで、確信に変わってきた。だって、ひとりひとりの個室（これも『ケージ』というんだって）が、まるで乳牛を一頭ずつ繋いでおくための柵というか囲いそのもので、それが通路にずらっと並んでいる様子は、まさに乳牛を飼育するための施設としか見えなかった。しかも、このケージ、寝るためのベッドが入っていて、それ以外は何もない上に、仕切りは透明のアクリル板で、ずっと先のほうまで完全に見通せちゃう。これって視線を遮（さえぎ）るものが何もないから、常に誰かの眼がある状態で、あたしだったらストレスで倒れちゃうかもしれないわ。いくらプライバシーがないからって、これじゃあねぇ・・・。ちなみに、トイレはどうするのかって聞いたら、ケージの隅に排泄用の穴があるから、そこに

座るなりしゃがむなりしてするそうで、それってまるで囚人よね。
（しかも壁は透明だし・・・）
このケージというか牡蓄が暮らす場所については、あとで実際に見学に訪れるとのことで、詳細はそのときに教えてくれるらしい。
全体で小一時間の講義の最後に、この牧場での牡蓄の1日の生活スケジュールを示された。それによると、搾精が1日4回、朝7時から4時間のインターバルで夜の7時まであって、平均的な牡蓄は毎回5㎎（5cc）を搾精するようにしているんだって。あたし、牡蓄がどの程度射精できるのか、そもそも知らなかったんで聞いてみたら、普通の成人男性では1回の射精で1㎎～5㎎で、平均値は3．5㎎程度なんだって。でも、ここではいろいろな処置（投薬など）を施すことにより、射精機能を向上させているんで、平均的に5㎎は射精できるようにされていると説明された。確かに市販の精液は、必ず1パックが5㎎となっているから、それに合わせたような気もするけど・・・。その辺も、実地見学が終わったときの、最後の質問時間で聞いてみようっと。
・・・そんなことを漠然と考えていたら・・・。

「これで概要説明を終わります。この後、牡蓄たちの見学に行きますが、荷物は持って行っても置いて行っても、どちらでも構いません。結構歩きますので、メモとかスマホとかだけ持って行く方が多いですね。・・・それから、見学を終えたなら、またここに戻ってきて、最後に1時間の質問と歓談の時間を設けてあります。」
「では、私について来て下さい。今は午後の放牧の時間なので、牡蓄は屋外に放牧され、運動のために歩き回ったりしている筈です。そこから見て行くことにしましょう。」

第22話　見学（その1）（後書き）

いよいよ放牧場で牡蓄たちと対面する塚田さんは、どんな反応を示すのでしょうか。

第23話　見学（その2）（前書き）

塚田さんたちにとっては、次々と驚くことばかりが起きてきます。

第２３話　見学（その２）

　ついてきて下さいと言われたので、全員（といっても１１名）で飼育員（この用語も本人が話していたんだけど、本当に家畜の牧場という雰囲気だわ）のお姉さんの後について廊下に出て、会議室をぐるっと回り込むように建物の裏手のほうに歩いて行く。途中にドアが２カ所あったけど、特に鍵がかかっているということもなく、飼育員さんは、やや高い位置にあるドアの丸い把手（とって）を捻（ひね）ってドアを開けた。ドアは手を離すとゆっくり閉まったけど、別にセキュリティが厳しいという訳ではないみたいだわ。だってどちらの側からでも、把手（とって）を回せば誰にでもドアが開けられるようになっているんだから、これで牡蓄たちが外に出ちゃうことはないのかしら？

　三つ目のドアを開けると、そこは芝生が一面に広がるグランド、いや、ゴルフ場といった雰囲気の広大なエリアが広がっていた。芝生といっても、やや長めの種類で、ゴルフ場みたいに短く刈り込んだ様子はないけど、普通の牧場のように牛や羊の餌となる草ではないわよね。まさか牡蓄がこんな草を食べるとは思えないし、これは単なる運動場だってさっきの説明にもあったから、きっと管理の都合で選んでいるんじゃないかしら。・・・でも、それなら人工芝でも良い気もするけど・・・。

　放牧場はとても広くて、数百メートル先のほうに、何かが動いているのが見えた。引率の飼育員さんは、そちらに向かってスタスタと歩いていくので、あたしたちもそれに続いた。やがて・・・。

「えっ、なにっ？・・・あの人たち、裸？」

「それに、皆、四つん這（ば）いで動いているけど、誰一人立ち上がらないわよ？」

「はい、皆さん驚いていているかもしれませんが、ここで飼育している

のは人ではありません。すべて牡蓄という家畜です。なので当然ですが服は着ていません。世の中には、たまにペットに服を着せる飼い主もいますが、本来動物は基本的に何も着ないものです。」
「畜舎の中は一年中常に28℃に管理されていますので、裸で何の問題もありません。ただ放牧のときは外気温を考慮して、真冬とか真夏には、外に出ている時間を調節したりします。」
「また、四つん這いに関しては、膝と足に装着したプロテクターによって、立ち上がれないようになっています。膝のプロテクターは、ある一定角度までしか動かないので、足をまっすぐに伸ばすことができません。また足の裏には、シリコンゴムのボールのような形の肉球がついているので、バランスが取れず、どうやっても立ち上がれないのです。近くに寄って見てみて下さい。」
「でも、素っ裸なんて・・・。目のやり場にも困りますし・・・。」
「皆さんの中で牛や羊を飼っている家はいないでしょうが、犬や猫を飼っている方は多いでしょう。そのような飼い主や、他の人も含めて、飼っている動物が裸で性器を露にしているからといって、恥ずかしがったり目のやり場に困ったりするでしょうか？」
「牡蓄は、あくまで家畜であり、人間ではありませんから、裸を見ることも、見られることも、お互いになんとも思う必要はないのです。例えば・・・、あ、ほら、あそこで一匹の牡蓄が排泄していますよね。でも、別にそれをあなたたちが見ているからといって、あの牡蓄はまったく気にしていないでしょう？・・・だから、あなたたちも何も気にすることはないのです。犬のお散歩だと考えてみて下さい。」
「あと、足元には気をつけて下さいね。見てのとおり、踏んづけると拙いものが落ちていたりしますから。」

そう指さされた50メートルほど先には、一匹（繰り返しこう呼ばれている）の牡蓄が、中腰でまさに大きいほうをしている最中だった。これはつまり、あちこちにウンチが落ちている可能性がある

ということなのね。そうか、だから人工芝じゃなくて、本物の草を植えた地面になってるんだ！・・・それにしても、あの牡蓄、他の牡蓄よりもずっと日焼けしていて逞しい感じがするし、慣れていて自然体に見えるわ。あと、遠目にもはっきりわかる、乳首とたまたまが黒ずんでいて特に大きいんだけど、何か理由があるのかしら。

「牡蓄は皆、あそこの毛がないんですが、これは何故ですか？・・・それと、そのっ、あそこの先の皮が皆剥けていますが、そういうものなんですか？」

「あ、それは両方ともここに到着して、牡蓄となった段階で処置をしています。毛があると搾精するとき邪魔ですし、非衛生的です。また包茎だと、搾精筒の装着がうまくできなかったりします。・・・そうですね、あとで会議室に戻ったら、その辺りを説明するビデオがあるのでご覧になって下さい。」

「あそこのウンチしている牡蓄は、他の牡蓄と少し雰囲気が違うんですが、種類が違うんですか？」

「いえ、あれは去年入った2年目の牡蓄です。だからずっと慣れていて、堂々としていますよね。それに乳首とたまたまが明らかに大きいのでも見分けがつきます。・・・皆さんの近くに居るのは、全部今年の春に入った牡蓄で、まだ入ってから1カ月半位です。」

「どの牡蓄も首と胸に何かをつけているようですが？・・・それに口にも何かつけているんですか？」

「胸に下がっているのはＩＣチップの入った管理タグです。牛や豚だと耳に番号札をつけたりしますよね。それと一緒で、乳首にピアスで取り付けてあります。首輪は単なるアクセサリーです。口枷は給餌用ですが、話をできなくする効果もあります。」

　涼子や市村さんは何も言わなかったけど、他のグループの子（特に中学生）が矢継ぎ早に質問を繰り出してきた。飼育員さんはひとつひとつ、丁寧に答えてくれて、ときどき「それは後で説明します。

」ということもあったけど、基本的にはその場ですべてをわかりやすく解説してくれた。（背景なんかもある程度は教えてくれた。本当に聞けば聞くほど、これは家畜として精液をたくさん搾るための合理性を最大限追求しているということがよくわかってきた。）
　ふと気がつくと、１０メートルほど先に居た牡蓄が片足を上げてジャーッとおしっこをしていた。この子もあそこはツルツルで、先端は皮を剥かれたばかりなのか、かわいいピンク色をしているけど、小柄な身体つきにしてはあそこが大きいわね。・・・あたしがじっとみていると、ちょっとだけ視線を避けるようなしぐさでそっぽを向いて、四つん這いのまま歩いて行ってしまったけど、あの子、どこかで見たことがあるような気がするのよね・・・？

　いろいろな質問をしたり、周囲の牡蓄たちを写真や動画に納めたりしていると、どこからか下校時の音楽が流れてきた。これ、わりと有名なクラシックの曲だったわよね・・・。
　その曲を聞くと牡蓄たちが一斉に移動を始めた。それぞれいくつかのグループになりながら、異なる建物を目指しているみたい。きっと自分の巣（どうも「畜舎」という表現は慣れないけど、「巣」という言葉なら、まだぴったりしそうな気がした）に向かっているのかな・・・。

「では、皆さんも畜舎に行きましょう。その牡蓄について行って下さい。これから搾精の時間になります。」

　そう言われて、四つん這いで並んで歩く牡蓄の後ろについていくと、牡蓄は次々に一番近くの畜舎に入って行った。入り口は特に鍵がかかっていることもないようで、牡蓄たちは体でドアを押すと、内側に開いたドアを次々と通っていく。私たちも牡蓄に続いて、同じドアから建物に入った。
　畜舎の中はかなり温かくて、裸でちょうど良い位だけど、湿度は

低いらしくて、快適な環境だった。さっきの説明で見たとおり、通路の両側にケージという個室がずらっと並んでいて、番号からここには全部で１００匹の牡蓄が収容されているのがわかった。あたしたちが皆、キョロキョロしたり写真を撮ったりしていると、牡蓄たちは透明のプラスチック製トンネルのようなものの中を、四つん這（ば）いで進んでいくところだった。

「まずこのドアですが、入るほうはドアを押すだけで入ることができます。でも、出るほうはドアノブを回して引っ張る必要があり、私たちには簡単に開けられるのですが、牡畜には開けることができません。というのも、先程説明したとおり、牡畜は立ち上がることができないので把手（とって）に前足が届かないというのと、牡畜にはプロテクターが装着されているので、前足で把手（とって）を掴（つか）んで回すということができないからです。・・・このドアの方式は、この施設の至る所に採用されています。」
「次に牡蓄たちが通っているトンネルですが、これはシャワーです。外から戻った牡蓄たちは、必ずこのトンネルを通ってシャワーで体をきれいにしてから、それぞれ自分のケージに戻ります。ケージのドアも、このドアと同じ構造です。」

言われてみると、牡蓄たちが透明のトンネルを進むうちに、強いシャワーが四方八方から牡蓄の体に浴びせられている。そこを通り抜けると、どうやら強い温風が吹きつけられる区画があり、向こう側で出てくるときには、すっかり身体を洗って乾燥まで済んだ状態になるらしい。

「これ、よく考えられてるわね。毎回、運動から戻るとシャワーで身体を洗うのが流れ作業で済むようになってるわ。清潔だし気持ちも良いんじゃない？」
「でも、なんだかガソリンスタンドの自動洗車機みたいね。」

「これから搾精が始まりますので、皆さんお好きなケージの前に移動下さい。この牧場では1日４回、４時間の間隔を開けて精液を搾っています。毎回、５㎎、概ね５ｃｃを搾りますので、1匹の牡蓄からは毎日２０㎎ つまり皆さんが毎日飲んでいる精液パック４個分が生産されることになります。」

「射精できる年齢は限られていますので、このように若い牡蓄には、毎日最低でも４名分を射精させていますが、これでもギリギリで慢性的に不足しているのです。」

　ケージの仕切りは透明なアクリル版らしくて、どのケージも完全に丸見えだから、どこでも良かったんだけど、あたしはさっき、目の前でおしっこをしていた牡蓄が何となく気になって、その子のケージの前に移動した。この子、どこかで見たことがあるようなんだけどなぁ・・・。

　他のグループでは、バラバラに分かれて一人ずつケージの前に陣取ったりしていたけど、あたしたちは三人で纏まって、あたしが選んだケージの前に集まってきた。牡蓄たちはどれも、あたしたちが居ることなんて気にもしないような雰囲気で、通路側のアクリル版に開いた穴から首を出している。何をするんだろうと見ていると、ガタンと音がして、皆の首のところに上から半円形の切欠きがあるアクリル版がおちてきて、ギロチンのように首を固定してしまった。それと並行して、端から順番に飼育員さんがケージに入ってきて、四つん這(ば)いで首を固定された状態の牡蓄のおちんちんに、床から引き出した透明の筒のようなものを次々に装着していく。この筒、透明のチューブが３本付いていて、そのうちの1本は筒の中まで伸びている。この伸びているチューブを、おちんちんに挿入するようにして筒を根元までぐっと押し込むと、筒の中の透明なシリコンゴムによって、おちんちんにしっかり固定されるみたいだわ。

　そんなことを漠然と考えていたら、突然、この子は同級生の西田君だって気がついた。頭を丸坊主にしているのと眼鏡をかけていないんで、ずっと同じクラスだったあたしでも今まで気がつかなかっ

たんだけど、多分間違いない。涼子は別のクラスだったし、西田君とはあまり接点がなかった筈だから気がつかないんだろうし、市村さんはそもそも面識がない。それであたしも思わず息を飲んだけど、何かをできるわけでもなく、ただ西田君の顔と股間をガン見していた。多分だけど、あたしたちはマスクをしている所為で、西田君はあたしのことに気付いていないいんだろう。あるいは眼鏡をかけていないんで、あたしたちのことが良く見えていないのかもしれないわ。・・・あたしのこと気付いちゃったら、きっと恥ずかしくなっちゃうと思うから、このまま気がつかないでいてくれると良いかな・・・。（注1）

ピピピッ。・・・グゥイィーン。シューッ。カシャポン、カシャポン、カシャポン・・・。

キュィーン、シャポ、シャポ、シャポ、シャポ。

「なんか工場で機械が動き出したみたいだわ。」

「あのおちんちんに取り付けた筒がピコピコ動いているけど、あれって空気圧で前後しているのよね。」

おちんちんに嵌め込まれた筒が音に合わせておちんちんを扱くようにシコシコ動いている。筒の動作は小さいけど、中のシリコンゴムがかなり激しく動いて、おんちんをギュッギュッと絞るように大きく前後している。・・・あんなに激しく擦られて痛くないのかしら。さっき見た2年目の牡蓄のように、黒ずんで硬そうになっていればともかく、西田君のおちんちんの先端はまだ皮を剥かれたばかりで初々しいピンク色をしている。あたしも一人で楽しむことがあるけど、クリトリスの皮を剥いて触ると、痛くて快感なんてまるで感じない。・・・それをゴシゴシされているんで、なんか痛々しくて見ていられない。

「見て見て！・・・あの牡蓄の顔！！・・・快感で蕩けちゃってるわ！」
「幸せそうな顔だわね。牡蓄にとっては快感漬けにされて、天国にいるような気分なんじゃない？」

あたしがおちんちんに気を取られていると、涼子と市村さんは西田君の顔を見て盛り上がっていた。切ないような表情で、それでいて口をだらしなく開き、涎（よだれ）が垂れていて、何かを見ている様子はない。眼はとろんと焦点が合っていなくて、男女問わずこういう顔って見たことがないんだけど、きっとこれが、俗に言う「アヘ顔」なんだろう。
機械が動き出してから、ほんの1分か2分で、西田君は眼をぎゅっと瞑（つぶ）り苦しそうな顔をすると、「あっ、あっ、あぉっ、ぉほっ、うっ、っぐっ。」と声を上げて腰をビクビクッと痙攣（けいれん）させた。股間を見ると、搾精筒が動力の動きとはあきらかに異なる動きで、やはりビクンビクンと動き、先端から出ているチューブの一本には、精液が勢い良く流れて吸い取られていくのが見て取れた。牡蓄は口に何かを装着されているんで、言葉にはならないけど、そもそもイク瞬間に叫ぶことはあっても、意味のある言葉を話すことってないわよね。
一通り射精が終わると、西田君の機械が停止した。他のケージの機械も次々に止まっているので、射精を確認すると自動的に停止するんだろう。

「どの牡蓄も、あっと言う間に射精しちゃうのね。こんなに簡単だとは思わなかったわ。」
「ホント、1分から2分程度じゃない？・・・まさにお乳を搾る乳牛と一緒ね。」
「仰るとおりです。・・・この姿勢とかケージのデザインとかも乳牛の飼育を参考にしています。限界まで精液を搾り、最大限の精液

を生産して皆さんに届ける体制を確立するまで、いろいろと試行錯誤の連続だったそうです。」

見渡すとすべてのケージで機械が止まっていた。ただ、あたしはケージの上にあるランプが気になった。大部分のランプは緑なんだけど、ちらほらと赤ランプが点いているケージがある。西田君のケージのランプも赤だった。

「あの、このランプの色はどういう意味ですか？」

「あ、それはですね・・・。」

飼育員さんが話しかけたと同時に、またグウィイイーーンというモーターの音とともに、機械が動き出した。ただ、気の所為(せい)かさっきよりも音が小さい。・・・弛緩(しかん)していた西田君が、またビクッピクッとなって、今度は切ないというよりも、ちょっと苦しそうな表情になった。

「このランプが緑色になると、規定量の５㎎の精液が射精されたということなのです。でも赤ランプは射精ができなかったり、規定量に足りなかったということでして、そうすると３分後にそのケージの搾精筒がまた動き出すのです。」

緑の牡蓄たちは寛(くつろ)いでいた。でも赤の牡蓄たちは、皆、苦しそうな顔をしていた。

「牡蓄の生理として、連続射精というのは本来難しいのです。これは一度射精してしまうと、そのあとしばらくの間、いわゆる『賢者タイム』という時間があって、この間は刺激があっても勃起も射精もできなくなるのが普通だからです。」

「でも牡蓄はそれでは困ります。そこで、賢者を解消するため、牡

蓄は毎晩、寝る前にプロクラチンという特別なホルモンを長い綿棒に染み込ませて尿道に挿入し、一晩中前立腺に内側から塗布というか吸収させるようにしています。」

「このホルモンは、本来ですとお乳の出を良くするためのものなんですが、牡蓄に投与すると、何故か前立腺に作用して賢者タイムがなくなってしまい、連続射精できるようになるんです。大変便利なお薬で、これによって皆さんに精液パックを提供できているんですよ。」

「ただこのホルモンは、お乳の出を良くするためのものなので、牡蓄に投与するとさすがにお乳は出ないんですけど、乳首がどんどん肥大化してしまうという副作用があるんです。だから、ここに入った当初は小さくてかわいい乳首だったのが、卒業するころには何倍にも大きくなってしまい、牡蓄によっては小さめの巨峰位のサイズになってしまうのも居ます。また乳首の感度も凄く上がるらしくて、乳首への刺激だけで射精しちゃうようになる牡蓄も居たりします。」

そうか、そう言えばお父さんも巨峰とは言わないけど、結構大きな乳首をしていたっけ。男性用ブラジャーは女性用と違って、乳首だけを隠すというか、押さえつけて保護するような構造でずっと小さいけど、お父さんは自宅にいる時は付けていないことが多いのよね。男性には勿論、おっぱいはないけど、乳首だけを比べると大人の場合、女性より男性のほうが大きいのは、ここで肥大化されちゃうからなんだわ・・・。普通、男子は中学まではブラジャーをしない子が殆どで、高校に上がると一斉にブラジャーをするようになるんだけど、こういう事情があったのね。（注2）

「あっ、ぁうっ、っくっ、んぐっ。」

眉間に皺（しわ）を寄せて苦しそうな顔をしていた西田君が、呻（うめ）くような声を上げてガクガクと痙攣（けいれん）した。見ると搾精筒から出ているチュー

ブの中を、精液がビューッと吸い上げられて行くのが見えた。すると、西田君のケージの上にあるランプが、赤から緑に変わった。

それと同時に、西田君がガクッと崩れ落ちるようにだらっとなり(といっても首を固定されているので、半分首吊りのような状態になっちゃったけど、大丈夫かしら・・・?)、見ると白目を剥いて意識を手放していた。開いた口からは涎が泡となって吹き出していて、まさに精根尽き果てたという雰囲気だけど、ちょっと心配。

見渡すと、ここから見えるケージは全部緑ランプが点いていた。

「だいたい終わったみたいですね。どうやら全部うまく緑になったようです。今回はまだ3回目の搾精なので、落ちこぼれる牡蓄はいなかったですが、これが最後の7時の搾精になると、さすがに4回目なので赤ランプが消えないのもいるんですよ。・・・ま、とにかくこれで全部です。またさっきの会議室に戻って、あとは質疑応答にしましょう。」

第２３話　見学（その２）（後書き）

（注１）本来、こういうことがないように、同一の学校で同一のクラスといった見学者は別の牡牧場に回されるのですが、申し込んだのが他中学出身の市村さんだったため、偶然にもチェックから漏れてしまったようです。

（注２）この時代、成人男性は下着としてブラジャーをするのが普通です。そうしないと肥大化した乳首が服と擦れて痛かったり感じてしまうことがあるのと、大きい乳首を保護するのが目的で、いわば乳首サポーターの役目となります。男性下着売り場には、いろいろなサイズやデザインの男性用ブラジャーが揃っていますが、人気があるのは三角形の面積が小さめのスポーツブラのようなものです。ただし男性は殆どの場合、乳首を他人に見られること自体は気にしません。これは小さい時からの習慣に加えて、そもそも牧場役で全裸生活をしていたことから、裸や性器を晒すことに対する羞恥心が除去されてしまっているからです。

第24話　見学（その3）

「皆さん、お疲れさまでした。放牧場での運動の様子や、畜舎での飼育と搾精の様子など、如何でしたか？・・・はじめてのことで、いろいろと驚いたり疑問に感じたりしたことも沢山あろうかと思います。」

「これから、4時半までの1時間、・・・少し早く戻ってきましたのであと1時間15分位ありますが、質疑応答の時間に充てたいと思います。」

「まず、皆さんが一番驚かれた裸についてですが、これは公式な回答としては、『牡蓄は人間ではなく家畜なので、裸が当然です。』というものなのですが、それでは皆さんの疑問に答えたことにはなりませんよね？・・・ですので、なぜこうなったのか、という経緯からお話致します。」

「一言で述べてしまうと、これは管理上の都合なのです。先程来、繰り返しご説明していて、また皆さんも見学で理解されたと思いますが、牡牧場では、少しでも多くの精液を搾精するため、あらゆることが合理化され、最大の効率が得られるよう工夫されています。そのため、わざわざ憲法改正までした上で、乳牛からお乳を搾る経験を参考に、いろいろな制度・システムが設計・構築されています。これは、そうしなければ皆さんが毎日飲んでいる精液を、必要なだけ流通に回すことができなくなってしまうという現実の前に、あらゆる知識と経験を動員して改良してきた成果なのです。」

「現代において、家畜の飼育は、ある意味工業製品を生産するのと同等の合理化・効率化が求められています。というか、合理化・効率化を追求すると、工業製品を生産するのも家畜を飼育するのも、極めて似たものになってくるのです。」

「そして、そのように合理化・効率化を追求した結果、このように

人権を制限し、家畜として取り扱うことが最適であるという結論に至りました。・・・勿論、ここに到達するまでには、さまざまな議論があったのは事実ですが、これをしなければ人類が絶滅してしまうというギリギリの状況にあって、このような決断を下さざるを得なかった訳でして、その後、試行錯誤や微修正は常に繰り返されていますが、女性は勿論、男性も含めて国民の大多数・・・いろいろな世論調査はありますが、平均的に見て賛成者は９５％程度・・・がこれを納得し、受け入れているのが現状です。」

「ちなみに、諸外国でも、細かい制度設計は国により多少異なるにしても、基本的な考え方としては殆ど変わらない制度・方法で運用されています。授業でも繰り返し学んでいるとは思いますが、私たちの命は、こうした男性たちの奉仕と犠牲の上に成り立っているのです。」

「そこで最初の質問に立ち返るのですが、多数の牡畜を集めて飼育する場合、衣服というのは管理が大変で、事実上不可能なのです。この牧場には約一万匹の牡畜が飼育されていますが、この数の牡畜に衣服を提供するというのは、現実的ではありません。体型が異なる一万匹の牡畜にそれぞれのサイズの衣服を準備し、それを定期的にクリーニングし、破れたら新しいものに取り替えるというのが、どれ程の手間であるか、ちょっと考えてみて頂きたいのです。というか、そのような運用は、どう考えても不可能なのです。それこそ、〇ニクロのような衣料品メーカーを丸抱えして、そのためだけに運営しなければやっていけません。」

「そこで牡畜となって牧場役に従事する期間は、完全な家畜扱いとして、一切の人権を停止し乳牛などとまったく同じ取り扱いとすることが、最も合理的で効率が最大になるということで、憲法を改正してまで現在の制度が構築されたのです。というか、現状、それしか解がなかったということを、是非ともご理解頂きたいのです。」

「家畜であれば衣服は必要ありません。逆に、裸でも快適に過ごせるように畜舎内の温度管理をきちんとするべきでして、これはどん

な生き物を飼う上でも基本です。牡蓄の畜舎は一年を通じて、常に２８℃に管理されており、湿度も低く保たれています。」
「また、裸であるということは、皆さんもご覧になった、あのシャワートンネルを通るだけで身体も清潔に保てるという効果があります。これも服を着ていては望むべくもありません。」
「畜舎内の清掃についても、天井から強力なスプリンクラーのようなシャワーを流し、それでケージから通路まで一瞬で洗い流すようになっているのですが、裸であれば、仮にこれを全身に浴びてしまっても、特に問題はありません。・・・といっても、畜舎の清掃は放牧時間に実施するようにしていますので、殆どの場合、牡蓄はそのようなことがあったというのも知らないでしょう。」
「つまり、牡蓄が裸なのは、家畜だから裸で過ごすというのは話の順序が逆でして、裸で過ごすことが一番手間が少なくて合理的だというのがまずあり、それを実現するには家畜の飼育に倣(なら)うのが適切だということで、現在の法律ができているのです。」
「法律の話が出たので、牡蓄と牡牧場に関係する法律についても、簡単にご説明しておきます。まず、この資料にあるとおり、憲法を改正して、牡蓄になると一切の人権が停止されることになります。」

＜ｉ９６２８７０―３１９４２＞

スクリーンには、憲法の該当条項の抜粋が映し出され、改正部分が赤文字でハイライトされていた。

「ご覧のとおり、憲法の改正は２ヶ所だけでして、両方とも国民の権利及び義務についてです。まず権利では、意に反する苦役を課せられないとする第十八条の例外として夫役を規定し、また第三十条の二に義務として納税と並び夫役に参加する義務を負うとしてあります。・・・この辺りは、多分学校でも繰り返し学んでいると思いますので、ここでは詳しく述べることは致しませんが、とにかく権

利、つまり人権を制限するということと、義務として夫役に参加するということを、男子国民に課したということをご理解下さい。」

「この憲法改正を受けて今から五十年ほど昔に、『飲料用精液の提供義務及び供給方法に関する法律（光明二年法律第六十四号）』という法律が制定されました。この法律が牧場役について規定するもので、通常、『牧場役法』と呼ばれています。この法律では、男子国民の定義から始まり、牧場役の定義とか、牧場役の実施主体である搾精局の設置などが決められています。」

「搾精局というのは各県にひとつずつ設置されていますが、それら全体を統括するのが搾精蓄管理運営機構でして、これは行政執行法人という種類の独立行政法人となっています。本来は国が行うべき仕事を、効率などの面から別の組織にしたものでして、職員は国家公務員身分を持ち、国の業務を肩代わりするものです。上部組織は女性救済省です。」

「なお、この法律は光明2年に成立していますが、この光明という元号は、令和天皇がご高齢で退位されて上皇となり、後を継いだ秋篠宮悠仁殿下が即位するタイミングで、このパンデミックが飲精によって回避できるということが判明したことから、人類滅亡がギリギリで回避できるかもしれないという一筋の光が見えたため、極めて異例のことではありますが退位される令和天皇が、『何とか光明が見えたかもしれない』と発言されたため決まったという逸話が伝わっています。といっても、光明天皇陛下も既に退位して上皇陛下になって久しいので、確かめる術（すべ）はありませんが・・・。」

「この牧場役法についても、学校で繰り返し学んでいるでしょうから多くは語りません。ただ、ここでちょっと気をつけて頂きたいのは、この法律に基づく男子国民というのは、戸籍法などによる男子ではないということです。これは何もＬＧＢＴとかの差別とか、そういったことではなく、実際に女子国民の寿命減少をくい止める効果のある精液を射精できる者という意味でして、法令上の話ではなく医学的に牡である国民という意味です。」

「それより、皆さんに是非覚えて頂きたいのは、牡蓄になると人権が制限されてしまうということです。牡蓄は家畜であり、人間ではありません。これは、管理上の都合からそうした、と先程説明致しましたが、発端はなんであれ、形式的にはここに到着した男性は全員、牡蓄となるために、人権を一時的に返納して貰うことになります。この両面印刷1枚・・・裏表ですので2ページですが・・・の『人権返納同意書』という書類に、署名捺印することにより、自らの意志で人権を国に一時的に預けることとなり、その結果、人間ではなくなって牡蓄という家畜になります。」

「憲法改正や牧場役法については、広く知られていて解説もネット等に沢山上がっていますが、あまり世間には出回っていないこの『人権返納同意書』こそが牡蓄をここで飼育する上で一番大事な書類ということになります。」

そう言いながらスクリーンに映された書類は、次のようなものだった。

＜ｉ９６２８７１―３１９４２＞

＜ｉ９６２８７２―３１９４３＞

「記載されているとおり、この同意書は憲法で保証された権利・・・中でも基本的人権と言われるものですが、・・・それを牡蓄になっている間は一時的に放棄するという効力の書類です。牧場役に就くことを申請し、認められた男性は、この牧場に到着すると、まず最初にこの書類にサインすることになります。」

「この書類に署名捺印した瞬間から、人間としての権利は一切なくなり、牡蓄として取り扱われることになります。牡蓄は家畜ですから、牛や馬、羊などと同等の扱いとなります。これによって、最大限の搾精効率を得るため、各種の処置・・・裸になるのもそうですし、投薬によって射精量を増大するのもそうですが、そういった処

置を受けて貰うことになります。これら処置は、非可逆的なものもあり、牧場役を卒業した後も、元に戻せないものもありますが、それは仕方がないこととして納得して貰うことになっていますし、卒業者から一切のクレームは受け付けないために、この同意書に自らの意志で署名捺印して貰うという形式を取っています。」

「また、放棄して貰う権利には、プライバシーも含まれます。まあこれは家畜なので、そもそもプライバシーなど存在しないから、というのもありますが、それ以上にここでは個々の牡畜という考え方はせず、沢山飼育している牡畜の中の一匹という扱いになりますので、個別のプライバシーというものは意味がないという整理です。」

「といっても、牡畜は国の貴重な財産でして、ことさら虐げられたりストレスを与えたりすることはないように、最大限の注意が払われています。これは、牡畜が苛められたとか虐げられたと感じたり、ストレスが多い環境になると、搾精量つまり射精できる精液の量が減ってしまうという現実があり、それどころか射精できなくなってしまう牡畜もいます。俗にＥＤなどと言われる症状ですね。・・・それでは困りますので、この牧場で飼育されている間、牡畜は射精することだけを考えていられるように、逆に言うと他のことは考えられないように、いろいろと工夫されているのです。」

「実際に卒業生からクレームが来たりすることはないんですか？」

「まったくゼロではないですが、まず殆どありません。多くの場合、妙な人権団体とか知識人と称するプロ市民のような人がバックに付いて焚きつけているようですが、少なくとも本人は納得してサインしている訳ですから、あまり大事にはならないのです。それに、この同意書があるため、契約自由の原則により、裁判所は民事不介入を貫いています。最近だと、ほぼ１００％門前払いになるようですね。」

「そもそも憲法を改正して、牧場役では苦役を与えても良いとされているところを、強制は一切せず、あくまで本人の自発的意志により牧場役に就くという手続きにしてあるので、法的には二重の意味

で守られているわけです。仮に最高裁まで争っても、結果は変わらないでしょう。」
「非可逆的身体改造って、どんなことがあるんですか？」
「全部が適用になるということではないんですが、ざっと列記すると、まずピアスと割礼・・・これは男性器の先端の皮を切り取ることですね・・・、次に乳首と睾丸の肥大、それと射精不全になった場合のリモコン電極埋め込み手術・・・、こんなところですかね。あと、脱毛剤の働きが強すぎて、永久脱毛になってしまうこともたまにあります。また性格が変わってしまうというか、性癖が歪(ゆが)んでしまうということも言われることがありますが、これはどこがどう変わってしまったのかを説明することが難しいですし、何かのきっかけで治ることもあるんで、非可逆的身体改造という範疇(はんちゅう)には入らないとされています。」
「何かイメージが湧かないわね？」
「実際にどんな感じなのかしら？」
「口で説明しても、理解がなかなか追いつかないでしょう。ですので、さっきちょっと触れましたが、ここにやってきた男性が、どのようにして牡蓄になるのか、入営の様子を撮影した10分位のビデオがありますので、それを是非ご覧になってください。写っているのは今年入った牡蓄の一匹についてですが、まだビデオが完全に編集作業を終えていないので、説明のためのナレーションとかテロップは入っていません。音声はその場で同時録音したものが流れるだけです。」
「ですので、私が弁士となって、画面に合わせた解説をしていきます。申し訳ありませんがビデオが終了してからまとめてお願いします。」

説明者のお姉さん（この人、さっきから自分たちのことを「飼育員」と呼び続けていて、こういったところにもここが家畜を飼育する牧場だっていうことが徹底されているみたい）が操作すると、ス

クリーンにこの建物の入り口が写りだした。
そこには、見慣れたバス（あたしたちを迎えに来てくれたバスで、あの市民ホール前に並んだバスと同じもの）から、中学生から高校生位の男の子がぞろぞろと降りてきて、あたしたちも入ってきた建物の入り口に吸い込まれていく。そのとき、入り口の横に看板が写っていて、そこには、以下のように書かれていた。
「山梨局・青木ヶ原牡蓄搾精牧場」
「Yamanashi bureau Aoki-ga-hara Livestock Farm for Ejaculation and Semen Collection」
ほんの一瞬だったけど、あたしは、この英文見て、頭文字が磯部君の認識票に記されていた番号の途中にある英文字と似ていると閃(ひらめ)いた。あとで帰るときに、入り口の看板を撮影しておかなきゃって、取り敢えず考えて、画面に集中することにした。

第２４話　見学（その３）（後書き）

みてみんでは、画像がｊｐｅｇしか入りません。もう少し解像度が良いものにしたいのですが、ｗｏｒｄからうまく変換できなかったので、これで我慢して下さい。（そのうち修正する予定です。）

第２５話　見学（その４）（前書き）

普通の意識を持っている女子にとっては、なかなかハードな見学ですが、これを機会に塚田さんの意識はどう変わって行くのでしょうか？

第25話　見学（その4）

次のシーンは、個室の天井隅に設置された監視カメラの映像のようだった。部屋の中には向かい合わせになった机が2つ、片方にはPCとプリンターが載っていて、一人の係員（この施設にいる女性は全員が飼育員なのかしら？）がちょっと偉そうな雰囲気でPCの前に座っていた。他には立っている若い飼育員が二名が脇に控えていて、そこに一人の男の子が入室してきた。斜め上からのアングルなので、顔はあまりよくわからない。椅子に座ると、持ってきた認識票を出すように言われ、それをPCに読ませて1枚の書類を印刷した。

「いま、人権返納同意書を印刷しています。持ってきた認識票のデータを読み込んで、氏名とか住所、認識番号が記載されたものが印刷され、それを本人に確認させて、間違いなければサインと拇印を求めます。」

「ここでサインした瞬間から、牡蓄となります。飼育員の対応の変化に注目して下さい。」

そう言われて見ていると、サインした用紙を回収した瞬間、部屋の空気がガラッと変化したようだった。飼育員の言葉づかいも命令口調となり、しかもその命令たるや、直ちに脱衣しろというもので、サインを終えたばかりの子がうろたえていると、PCの前に座った飼育員が突然立ち上がって腰に下げていた短い鞭で机を思い切り打ち据えた。木製の机の表面が少し削れて、木屑が飛び散ったのを見て、男の子は「ヒッ」と短い悲鳴とともに急いで服を脱ぎだした。しかも、最後のボクサーブリーフ一枚になったところで、ちょっと躊躇する様子を見せると、横に立っていた二人の飼育員が、こちら

も腰の鞭を取り外して構えたため、焦ってそれも脱ぎ捨て、全裸になった。
　ここでカメラが切り替わり、男の子を真正面から撮影するアングルになった。股間は黒々としたジャングルで、縮こまったおちんちんが見えた。小柄であどけない雰囲気にしては、わりと大きめだわ。・・・顔はちょっと判り辛い。でもこの子、間違いなく西田君だ。ただ眼鏡を外しているんで、印象が随分違う。その所為(せい)か、それとも股間に視線が釘付けだからなのかわからないけど、涼子はこの子が西田君だとは、まったく気付いていない。きっと知り合いの子に会うなんて、夢にも思っていないんで、思い至らないのかもしれない。
　と、画面でどこからか、ピシーッという鞭で叩く音と、それに被って「ギャーッ」という悲鳴が聞こえてきた。それも2回、3回と繰り返し・・・。それを聞くたび、西田君がビクッと恐怖に慄(おのの)いたようだ。でも、説明している飼育員さんが解説した。
「あの鞭の音と悲鳴は、実はSE(サウンド・エフェクト)です。言うことを聞かないと、鞭で打たれるという恐怖を植えつけているのです。」
　西田君が何となく手で前を隠すようなしぐさで部屋を出て行こうとすると、二人立っていた飼育員さんが西田君の手と尻を鞭で打ちつけた。
「ひーっ！！」
「隠すな！！・・・性器を隠す家畜なんて聞いたこともないぞ！・・・それと静かにしろ！」
「もっと思い切り叩かないとダメだ。随分手加減しただろう。・・・ま、最初だから少しソフトにしてやっても構わないが、牡畜を付け上がらせないように力を込めるんだぞ。」
「申し訳ありません。次からもっと強く叩(たた)くことにします。」

「凄く怖いことを話していますが、これらもすべて計算され尽くした寸劇です。そもそも今、牡蓄を叩いた二人の鞭は、肌着などに使われるポリエステルで柔らかく編んだものでして、思い切り叩いたとしても少し太めの輪ゴムでパッチンした程度の痛みにしかなりません。でも最初に主任が机を叩いた鞭は、上等のなめし革を固く編んだものでして、あれで打ちつけると木製のテーブルなど、表面が削れてしまいますし、皮膚を叩けば裂けて大変なことになります。つまり、鞭で叩かれる恐怖を徹底的にたたき込み、牡蓄が無条件で服従するように精神を縛るのが目的でして、実際に革鞭で叩くということは一切ありません。牡蓄は柔らかいポリエステルの鞭で打たれることが、とても痛いものだというように意識の底まで刷り込まれてしまい、私たちが持っているこの柔らかい鞭でちょっと軽く叩かれるだけでも耐えられないほど痛いと信じ込まされて、重い罰を受けたと誤解するようになるのです。」

「ただ、訓練が進むと、やがて一部の牡蓄では、鞭で叩かれることにより射精してしまうようになる個体も出てきます。そうなると、飴と鞭で躾けるという目論見が少し変わってきて、鞭＝飴となってしまい、鞭で打たれることを待ち望む牡蓄になってしまいます。・・・まあ、これはこれで、少し変わった形の躾ではありますね。」

「どんな牡蓄がそうなるんですか？」

「これはまだ研究が進んでいません。元からＭ気質だったという説とか、繰り返し鞭打ちされているうちに心が折れて、Ｍ気質を植えつけられてしまったという説とか、いろいろとあります。卒業時点で大体二割程度の牡蓄がそうであるという統計データはありますが、本当のところは、よくわかっていないのです。一度そうなってしまうと、卒業しても元に戻ることはないと言われていますので、これも本来なら、非可逆的身体改造処置に含めるべきだという議論はあります。さらに卒業してから急に、そうなってしまう牡蓄も多いようです。」

「ただ、性癖というのは極めて個人差が大きいものでして、どこまでを性癖と見るのか、難しい問題があります。またそれ以上に困難なのは、そもそも牡蓄になる前はどうだったのかデータがないので、何と比較して身体改造・・・この場合は精神改造ですが・・・、が行われたかを特定することが事実上不可能なのです。それで、先程もご説明しましたが、現時点では精神とか心については、かなり大幅にかわってしまっても、人権返納同意書に述べる身体改造という範疇には含めないという整理になっています。」

個室を出た全裸の牡蓄たちが無言でぞろぞろ歩いて、それぞれ開いているドアに入っていく。ドアには「処置室」と書かれているのが一瞬写った。ここでまたカメラが切り替わり、入ってきた牡蓄が部屋の真ん中にある、椅子のようなものに座らせられるところを、真正面で、目線よりはやや上側から撮影した画像となった。この椅子、何となく歯医者の電動椅子のような雰囲気だけど、よく見ると足を置く（載せる？）部分が左右で分割されているようで、また頭を載せる部分の上にはバーのようなものが付いていた。

入ってきたのはやっぱり西田君だった。さっきの映像では確信は持てなかったんだけど、どうやらずっと西田君を被写体にして撮影しているみたい。鞭で指し示すように指示されて、西田君がおっかなびっくり椅子に座ると、部屋で待機していた三人の飼育員のうち一人が西田君の頭をバリカンであっと言う間に完全な坊主頭にしてしまった。多分、１分もかかっていない。西田君は鞭にすっかり怯えてしまっていて、鞭で指示されると急いでそのとおりの行動をとる。でも、この鞭は柔らかいほうなんだって説明があったから、してみるともう西田君は心が躾けられちゃって、飼育員に逆らえなくなっちゃっているんだわ。

西田君を坊主頭にした飼育員は、腕を取ると頭の上にあるバーにベルトで固定した。また両足首を、それぞれ電動椅子の足の部分に、これもベルトで固定した。その間、もう一人の飼育員が口を開けさ

せて、中になにやらスプレーのようなものを吹きつけると、コードの付いたピストルのような形の機械をつかって、口の中に青紫色の光を丹念に照射した。

「さっきも見てきたとおり、牡蓄は完全に丸坊主にします。頭髪があると不潔になりやすく、洗うのも大変なので、バリカンで2ミリ程度に刈り上げてしまい、この後も2週間に1回位の頻度で丸刈りしています。」

「今やっているのは、虫歯の応急処置ですね。2年間は虫歯の治療ができませんので、その間、虫歯の進行を止める処置をしています。まず薬品で口の中を完全に殺菌して、虫歯になっている部分に強力な紫外線を照射しています。・・・これで虫歯菌を完全に死滅させるため、2年間は虫歯の進行が止まるようになります。といっても、あくまで進行を止めるだけですので、卒業したら普通に治療をしなければなりません。それらは卒業時の注意事項に明記されています。」

「次に口枷・・・いわゆるマウスピースですが、これを装着します。これでもう、牡蓄は話すことができなくなります。せいぜい、アーとかウーとか、鳴き声をあげる位ですね。・・・この口枷は卒業の日までつけたままになります。」

「口枷は何のためにつけるんですか？・・・話をさせないためですか？」

「いえ、それは結果的にそうなるというだけでして、もともとは別の意味だったんです。つまり、牡蓄に餌を与えるのに、どういうものが一番良いのかというのを試行錯誤した結果、ゼリー状の飼料をチューブで胃の中に直接流し込むというのが栄養学的な面でも、また飼料の保管や取り扱いの手間、それに給餌の時間など、どれをとっても圧倒的に合理的で簡単だということが判明し、すべての牡牧場で一斉に取り入れられました。」

「この口枷の真ん中には穴が空いていて、給餌の時間になると片端から牡蓄の口にチューブを胃まで挿入し、胃の中に直接飼料を流し込みます。１匹あたり概ね１５秒で給餌が終わるんで、畜舎の全牡蓄１００匹に給餌を完了するのが、せいぜい３０分位なんですよ。」
「牡蓄への給餌は朝と夜の一日二回だけですので、先程の見学では、時間が合いませんでしたが、このあとビデオで見ることができますので、給餌の様子も是非ご覧になって下さい。」

西田君が口枷を装着されている画面に合わせて、飼育員さんが口枷の現物を取り出して見せてくれた。こうして手にとってみると、確かに真ん中に穴が空いている。形は洋梨型で、装着は頭の後ろでマジックテープで留めるだけだ。

「最初は給餌の合理化のために始まった口枷ですが、実はもうひとつ大きな意味がありました。それは口を使えなくすることによって、足枷を口で外せないようにするということです。見てわかるとおり、足枷も口枷も、ともにマジックテープで留めてあるだけです。だから口が使えると、歯で噛んで前足の足枷を外してしまう可能性があったのです。」
「手枷とか足枷には、どんな意味があるんですか？」
「牡蓄には手枷はありません。前足枷と2種類の後足枷となります。それで、この足枷の理由ですが、これも当初は搾精時の姿勢・・・既にご覧になったと思いますが、ケージの穴に首を入れて、四つん這いで首を固定されている、あの姿勢ですけれども、その姿勢を強制するために、最適なものということで導入されました。」
「それと、逃亡防止という意味もあったそうです。四つん這いでしか移動できなければ、どうしても逃亡は困難になりますし、それ以前にこの建物の構造を見てもお判りのとおり、牡蓄ではドアが開けられないようになっているのは、あの足枷があるからなのです。足枷を外せないように、口を使えなくするという意味もあったようで、

つまり口枷と足枷は両方がセットになって、相乗効果を発揮しているのです。」
「でも、これらは結局、ほとんど意味がなかったようです。というのも、牡蓄が逃亡を図ったことは、これまでの５０年の歴史の中で一度も発生していません。これは牡蓄が牧場での飼育に満足しているのか、少なくとも逃亡するほどには嫌ってはいないということなのかもしれませんが、そうではなく、ここで飼育されていると、そもそも逃亡しようという気にならなくなってくる、つまり訓練によって心が折れてしまい、従順で受け身となって飼育員の指示には無条件で従うように躾けられていくのではないかと考えられています。」
「その他にも、口枷によって会話ができないので、不満や愚痴を言い合うことが防止されているとか、四つん這いで会話もできない状態を強制されることが心を躾けるのに最適な効果を発揮しているとか、いろいろな議論がありますが、この辺りの研究は、まだあまり進んでいません。牡牧場は最大限の効率で精液を採取することが最大の目的であり、このためには多額の研究予算も認められていますが、それ以外の、例えば今のような牡蓄の意識ですとか生態についての研究は、どうしても後回しになってしまうのです。」
「同様に、牡蓄の鳴き声についての研究も、ほとんど進められていません。」
「ただ、充分な研究に基づく学説ということではないのですが、卒業時のアンケートでは、いきなり全裸にされ、会話もできなくなり、そして四つん這いを強制されるという、この3点セットによって、自分が人間ではなく家畜になったということを心の底まで意識させられ、心身ともに家畜であると刷り込まれたことで、その境遇を一気に受け入れざるを得なくなったと言う回答が、かなり多いのです。とすると、この三つの措置こそが牡蓄を牡蓄たらしめている中心的役割を果たしていて、牧場の運営において、まさに牡蓄の精神面の躾に多大な貢献をしているということになります。」

そんな話を聞いているうちに画面の中の西田君は、両手をバンザイのように頭の上で固定され、足首も電動椅子に固定されると、その電動椅子がモーターで動き出して、上半身は後ろに大きくリクライニングし、下半身は膝を大きく開きながら上に持ち上がってきて、M字開脚姿勢を取らされていた。この姿勢、あそこが完全に晒(さら)される体勢で、ここであたしはこの椅子が、産婦人科の内診椅子なんだと気がついた。

カメラは西田君の顔から胴体そして股間までを特等席からアップでばっちり捉えている。一人の飼育員さんは、西田君のお尻の穴にイチジク浣腸のようなものを注入すると、次に茶色いドロッとした液体を、刷毛筆のようなものでお臍(へそ)からVゾーン、たまたまの袋、会陰そしてお尻の穴の周りまで、体毛が生えているところにすべて丹念に塗っていった。またもう一人の飼育員さんは、腋毛にも同じ液体を塗りたくった。

そして、西田君の両手と両膝、それに両足に、今見せて貰った足枷を次々に装着した。また股間に座っている飼育員さんは、お尻の下のクッションを外すと、そこにステンレス製の容器（おまる？）をセットした。なぜこれがおまるだと判ったのか、それは画面の中での飼育員さんたちの会話で、これから検便すると言っていたから・・・。

やがて、浣腸の効果なのかどうかわからないけど、西田君がウンチをした。お尻の穴まで完全に晒(さら)されているM字開脚姿勢で、ウンチが出てくるところまでばっちり撮影されている。飼育員さん同士の会話で、このビデオが研修目的に使われるというのが聞こえると、それまで恥ずかしさに耐えていた西田君が急に泣きだした。多分、自分の恥ずかしい姿が公開されちゃうっていうのを聞いて、耐えられなくなっちゃったのかな・・・。

泣きだした西田君を飼育員さんが鞭で叩いていたけど、傍目にもわかる、あきらかに手加減した打ち方だった。ちょっとした注意、

そんな感じかしら。確かにこれなら、そんなに痛いようには見えないわ。でも西田君は、もう心の底まで鞭打ちの恐怖が刷り込まれちゃってるのか、怯えきっている。・・・それはそうよね。あの姿勢で、大事なところを全部差し出しているポーズ、しかも最初の一発はおちんちんを鞭打ちされていたみたいだし、これって男の子にとっては、どんなことでも言いなりになるしかない、恐怖以外のなにものでもないんじゃないかしら・・・。きっと、他の牡畜たちもこうやって、心を削られて、従順に躾けられていくんだわ。

第２５話　見学（その４）（後書き）

また長くなったので、話を分けます。次回で、この見学エピソードは終了しますが、いずれ見学は繰り返しエピソードが出る予定です。

第２６話　見学（その５）（前書き）

他にも記載していますが、次週（６／１５）は出張で不在にしますので、更新ができません。それで次の「杉田家」の更新は６／２２に、また牡牧場の更新は６／２９に、それぞれ繰り下がりますので、ご了承下さい。

第２６話　見学（その５）

ウンチが終わった西田君は、股間と脇の下をシャワーで流して貰っている。お尻をきれいにして貰っているのは、どうやらついでらしくて、このシャワーで、股間と脇の下の毛を洗い流しているみたい。お湯をかけただけで、毛がきれいに根元から抜け落ちちゃって、これってさっき塗った茶色い薬の効果だわ。西田君はこれにもショックを受けたみたいだけど、これは脱毛剤として女の子には馴染みがあるものなのよね。でも、あの脱毛剤、あたしも使ったことがあるけど、いくら毛根から抜けるって言っても、また毛は生えてきちゃうんで、普通だと何度も繰り返す必要がある筈なのに、どうやっているのかしら。

「脱毛剤は皆さんも身だしなみを整えるために使っていると思いますが、1回だけではまたすぐ毛が生えてきてしまいますよね。ですので、これで今生えている毛を抜いてしまった後は、ホルモン剤の投与によって卒業まで毛が生えなくなるように処置します。これは毎日、睾丸に注射している射精機能増強剤に混ぜて投与しています。」

「ただ、ここで使っている脱毛剤は、皆さんが使っている脱毛剤よりもずっと強力です。またその後のホルモン剤投与によって、意図せずに永久脱毛になってしまうことがあります。つまり、卒業してホルモン剤投与がなくなっても、二度と生えてこなくなってしまうのです。これも非可逆的身体改造になりますが、これについては、ほとんど問題にはなりません。ここで二年間、ツルツルで過ごすと、殆どの牡畜はツルツルのほうが楽で清潔だと考えるようになるので、それで卒業後に自分でハイジニーナ処置を受ける卒業生も結構いるそうです。・・・ちなみに、牡畜は卒業時に希望すれば、特典とし

て無料で完全脱毛処置を受けられます。・・・最近では、男性でもハイジニーナが流行りだしているようですね。」
「なお、この体毛を生えなくする薬ですが、これは人間に対する治験をしていませんので、一般には流通していません。牡蓄なら人間ではなく動物ですので、このように管理の手間を減らすために利用しているだけです。・・・皆さんが永久脱毛で使えるのは、あの毛根を破壊する茶色い液体を毛周期に合わせて繰り返し塗って、毛根を完全になくしてしまう方法が唯一となっています。」
「なんだ、あれはまだ人間には使えないものなのね。早く人間で治験をやって、動物だけじゃなくて人間にも使えるようになれば良いのに・・・。」
「それは多分、難しいのではないかという気がします。と言いますのは、これは体内のホルモンバランスを操作する薬なのですが、さっきも皆さんにご説明したとおり、牡蓄では睾丸に注射しています。・・・この、睾丸に直接注射するということが、この発毛抑止の効果を発揮するポイントらしいのです。それで、人間の場合、男性ならば治験が可能なのですが、女性ですとどこに注射すれば効果が出るのか、実はまだよくわかっていないのです。」
「そっか、女性に使えなくっちゃ、薬としてはあまり価値がないかしら。」

涼子は、使ってみたいような口振りだけど、たまたまへの注射ができないので治験ができないという説明で納得したみたい。でも、涼子がハイジニーナに憧れているとは知らなかったわ・・・。

股間も脇の下も、すっかりツルツルになった西田君は、顔にタオルを掛けられていた。これってかなりの恐怖なんじゃないかしら。
全裸でM字開脚姿勢というか、股間を完全に差し出した姿勢で椅子にベルトで拘束されている。この姿勢で目隠しされると、大事なところに何をされるのか、疑心暗鬼になる筈だわ。ましてあの人権

返納同意書にサインしたばかりなんだから、それこそおちんちんの鞭打ち程度で済めば良いけど、あそこに入れ墨とか焼き印を押されたりするんじゃないかって心配になると思う。事実、西田君はブルブルと小刻みに震えていて、これって獣医さんのところに連れて行かれた小犬や子猫が、目隠しされて身体を拘束され、不安で震えが止まらない状態そのものよね。（実際にいろいろと酷いことをされているし・・・。）

「処置は、あと二つだけなんですが、頭髪の刈り込みと虫歯の進行阻止が終わり口枷も装着したので、ここで目隠しをします。変に情報を与えて暴れられても困りますので・・・。」
「これからするのはピアスと割礼です。ピアスは、胸に持ってきた認識タグを取り付けるためです。」

画面では両側に控えた飼育員さんたちが乳首をまず消毒すると、ペンチの上の部分に箱のようなものがついた器具を手にとり、西田君の乳首をクリクリとこね回して乳首を勃起させようとしていた。片側はうまくプクッとしこりあげることができたが、もう片側はうまく勃起しなかった。すると、スポイトのような器具で乳首をキュッーッと吸い出して、乳首が強制的にポチッと膨らまされた。そこをすかさず、手に持ったペンチのような器具で挟み、ペンチをぎゅっと握った。

「カチャン・・・カチャン」
「ぃあー！・・・いぁいいぁいいぁいあーーっ。」
「胸に認識タグをつけるためのピアスをしたところです。」
「ガシャン」
「ひっ、ひーっ、ひーっ、あぁーっ。」
「これは割礼・・・ペニスの先端の皮を切り取りました。」

あれはピアッサーだったのね。西田君は思い切り喚きながら暴れたけど、ベルトで内診椅子に固定されていて身動きがとれない。・・・あ、割礼されたら、どうやら気絶しちゃったみたい。・・・ちょっと可哀相・・・。麻酔なんてしないのかしら？

「これで入営の処置はすべて完了しました。この後は放牧場をぐるっと回ってから、それぞれの畜舎に向かい、自分の番号のケージに入ることになります。」

「ちょっと早送りして・・・、ここは時間の関係でご覧になれなかった給餌の様子と、就寝前の投薬の様子が写っていますね。・・・これがチューブで胃の中に直接給餌しているところで・・・、最後のシーンは精液を増やすための投薬となります。」

「投薬は、睾丸への注射・・・これは睾丸の機能を強化して、沢山射精できるように身体改造するためのもので、これによって牡蓄の性器は全体的にどんどん大きくなってくるのです。睾丸は体積で三倍以上になり、小さめの鶏卵位になりますし、それに伴って精嚢やペニスも大きくなります。」

「最後は連続射精ができるようにするホルモン剤を、前立腺に塗布しているところです。・・・あのように長い綿棒に浸した薬品を、前立腺に届くまで尿道から挿入して、それを一晩中留置すると、薬品の効果が高まるんです。ただこれも副作用があって、乳首が肥大してしまうので、それで牧場役を卒業すると男性も必ずブラジャーをするようになります。」

「以上でビデオは終了です。この写っている牡蓄は今年度に入ってきた個体でして、多分、皆さんがさっき搾精をご覧になっていた牡蓄ですよ。」

「それでは、質問を再開します。まだ時間は十分ありますので、どんな疑問でもどんどん質問して下さい。」

「どうして乳首にピアスするんですか？」

「家畜には管理タグを取り付けます。牛や豚ですと、耳とかの場合

が多いですし、お尻に焼き印するというのもありますよね？・・・牡蓄だと、どこに付けるのが良いのか、いくつか候補はあったようですが、身体から出っ張っている場所で、中に何も入っていない、単なる皮膚だけの場所というと、耳か乳首しかなかったようです。」

「耳のほうが一般的じゃないんですか？」

「耳だと、あの認識タグが両側にぶら下がった状態で首をケージの穴に出し入れするとき、引っかかったりして具合が悪いとなったそうです。・・・認識タグは、私たち飼育員が目視で番号を読み取ることもあるので、あまり小さくできなくて、乳首しか場所がなかったというのが実際のところですね。」

「それと、これも意図したものではありませんが、投薬によって乳首がどんどん肥大してきますので、ピアスが目立たなくなるという効果があります。あのピアスは、乳首を保護するために細いパイプをまず入れて、そのパイプの穴にネジ止めするようになっています。パイプは長さが決まっていますので、乳首が肥大化すると完全に埋もれてしまい、まったく見えなくなります。ただこのパイプ、乳首の中に完全に埋まって癒着してしまうので、乳首を切り取らないと外すことはできなくなります。それもあって、肥大化した乳首は、とても敏感になり、ちょっとした刺激でも耐えられないほどの快感になってしまうので、殆どの男性は、この牧場役を卒業するときからブラジャーをするようになります。女性も胸が大きくなってくるとブラジャーをするようになりますよね？・・・それと一緒です。」

「ピアスのとき泣き喚いていましたが、麻酔とかはしないんですか？・・・痛そうですが・・・。」

「家畜に何か処置するときは、よほど暴れるとかでないと麻酔はしません。麻酔は大きな手術などで眠らせるときに使う程度です。あの牡蓄が泣き喚いたのは、目隠しされていて突然だったので、驚いたからです。それに、そもそもピアスは、人間でも麻酔などしないことが普通ですよね？・・・私も耳にピアスをしていますが、特に麻酔などせずに施術して貰いました。痛いのは一瞬だけですし、傷

口に塗っている万能傷薬には麻酔成分も含まれています。実際、どの牡蓄も処置が済んだら、自分で歩いて畜舎まで移動していますので、この事実をもってしても、痛みを感じるのは一瞬だけということがわかります。」

「あの・・・。おちんちんの皮を切り取ったのは・・・？」

「割礼ですね。これれは搾精筒を装着するためです。搾精筒は内部のシリコンゴムで固定しているのですが、空気を抜いて、いわば吸いつけて固定しています。外側の透明な筒は、あまり動いていないので、そんなに激しい動きには見えませんが、実は内部のシリコンゴムの筒は、空気圧でかなり大きく上下に動きます。そのとき皮が被っていると、動いているときに空気が漏れたりして、搾精筒が外れてしまうことがあります。でもつるんとした亀頭の皮膚にぴったりと密着していると、激しいピストン動作でも簡単には外れないのです。」

「なお、どうでも良い知識ですが、あの搾精する装置というかシステム一式なのですが、もともと牛乳を搾る装置を改良したものでして、日本の企業が世界シェアの９９％を持っているそうです。」

「ペニスの先端の皮を切り取って亀頭を剥き出しにする割礼という習慣は、世界中の至る所で何千年も昔からありました。特に成人のための通過儀礼とか、宗教上の儀式として多く見られ、ユダヤ教やイスラム教の信者は１００パーセント割礼をしています。パンデミックが始まる前の調査ですが、世界全体で見て、男性の３割程度が割礼をしていたというデータもあります。・・・勿論、これらの割礼を施されるときは、麻酔など一切ありません。」

「現在では、世界中の殆どの国で日本のように搾精義務を課すようになったことから、おそらく世界全体の成人男子の９０％以上が割礼を施されているのではないでしょうか。ちなみに日本人については、身体障害者とか牧場役の代わりに兵役に就いた方など、全部あわせて１％程度の例外はありますが、成人男性はほぼ全員、牧場役によって割礼を受けています。ですので、すべての成人男性は亀頭

が剥き出しと考えて良いでしょう。」
「あの器具は、どんなふうに・・・？」
「ZSR方式割礼用器具（注1）ですね。これが現物です。」
「このように、中のカップと、外のカバーで包皮を挟み込み、圧迫して包皮を切断するとともに、切断面をプラスチックのホチキスのようなもので固定するようになっています。」
「画面では手早く処置してしまったので、わかりにくかったかもしれませんが、このように・・・この部分のネジを外すと、内側のカップと外側の本体に分かれます。この内側カップのエッジのところと、外側の本体カップのエッジの部分にそれぞれ刃がついていて、ペンチのような把手を握ることによって、ここで皮膚を圧し切るようになっています。」
「まず内側カップを包皮の中に入れて、亀頭にぴったり密着させます。次に包皮を上に引っ張り上げ、カップを包むようにして包皮口のところを糸で縛って固定します。そして、その上から器具の本体を被せてネジをきちんと閉め、ペンチの把手の部分をぎゅっと握ると、中と外の二つのカップに挟まれて、包皮だけが切り取られるのです。・・・さっきの映像でも見たとおり、消毒に20秒程度、その後カップを装着するのに1分から2分で、あとは把手を握ればガチャンと一瞬で包皮が切断されます。・・・慣れれば、後始末まで入れても3分はかからないでしょう。」
「毎年3月末には、一日に千匹もの牡蓄が入ってきます。次々に到着する牡蓄を流れ作業で速やかに処置するには、最適の方法です。」
「包皮を切り取ってしまうと、最初は亀頭粘膜が敏感ですのでヒリヒリしたりして不快らしいですが、数日もすれば粘膜が乾燥してきて、あまり気にならなくなるようです。それは搾精筒を装着された牡蓄の反応を見てもわかります。また剥き出しにされた亀頭は、最初の3ヶ月位はピンクで初々しい雰囲気ですが、どの牡蓄でも半年もすると亀頭を含むペニス全体が逞しく日焼けして、また色素も沈着し、黒くて立派で精悍なペニスに育ちます。」

「あの、食事を食べさせるところですが、口にチューブを入れるとすぐ抜いちゃいましたよね？・・・あれしか食べられないんですか？」

「あれは、この口枷に開いた穴を通して、チューブを胃まで挿入して、そのチューブを通じてゼリー状の合成飼料を空気圧で流し込んでいるのです。いろいろと試行錯誤の結果、これが一番早くて簡単で、飼料の管理も便利だということで取り入れられたものです。見てのとおり、1匹あたり15秒程度しかかかりませんよね？・・・でもこれで栄養学的にも分量的にも、必要十分な餌を与えられるのです。」

「牡蓄の胃袋は、最大で2リットル程度の容量がありますが、普通の状態では1リットルというのが現実的に1回の給餌で食べられる限界です。これを超えてしまうと、胃がパンパンで苦しくなってしまい、拷問状態になってしまうのです。・・・あのチューブによる給餌は、ゼリー状の合成飼料を圧搾空気で一気に流し込むのですが、一回に概ね0．7リットルが送り込まれます。でも、牡蓄にしてみれば、もうお腹一杯で限界まで食べさせられたと感じているでしょうね。」

「なお、必要なカロリーや糖質、資質、タンパク質、ビタミンなど、完璧にバランスの取れた飼料を毎食与えられ、また毎日必ず適度な運動をさせられていますので、ここに来て2カ月もすると、どの牡蓄も見事に引き締まって筋肉質の健康的な身体になります。今日見ていただいた牡蓄は殆どがまだ入って1カ月ちょっとですので、そこまで大きな変化はないかもしれませんが、1匹だけ2年目の牡蓄が居ましたよね。・・・あの排泄していた個体ですが、あの牡蓄は、引き締まった身体で健康的に日焼けして、しかもペニスも陰嚢も、そして乳首も色素が沈着して真っ黒で、いかにも鍛えられたように見えませんでしたか？」

「今年入った牡蓄も、1年もすれば全部、あの2年目の個体のように精悍な身体つきになります。しかも、多量の射精を毎日しなけれ

ばいられないように身体改造をされていますので、卒業生は多くの場合、女性にとても人気があるようですね。」
「他に質問はありませんか？・・・」
「先程来、何回か話に出た『実験牧場』って何ですか？」
「実験牧場とは、普通の牡牧場のように、精液を一般の流通に載せるために大量生産するという目的だけでなく、牧場をどのように運営すると搾精効率が最大化できるか、どのような搾精が牡蓄にとっても負担が少なく、多量の精液を生産できるかを研究することを目的に併せ持った施設です。といっても、普通の牡牧場と、やってることはそんなに大きくは変わりません。同じような建物がある施設で、同じような方法で飼育し、搾精しています。規模も基本的には一緒です。」
「ただ、搾精の間隔とか搾精方法とかをいろいろと変えて工夫したり、牡蓄の状態観察もずっと細かくなって、性機能に特化しているのですが健康診断のようなものも実施されています。関東には３ヶ所、日本全体でも８ヶ所しかない施設で、そこに配属になるのは事前にスクリーニングされたエリート牡蓄のみとなっています。精液の質とか量とかが、特に優れている個体が回されます。いわゆる高級ブランド精液の生産拠点でもあります。」
「待遇が良いんですか？」
「待遇が良いということではなく、むしろモルモットに近いのかもしれません。そういう牧場も、見学は受け付けていますので、もしよろしかったら希望して申し込んでみて下さい。」
―――――――――――――――
―――――――――――――
その後もいくつか気になったところや疑問があったところを質問したりして、終了時間いっぱいまで、質疑応答が続き、普段の牡蓄

の処遇とか、また私たちが毎日飲んでいる精液が、どのようにして生産されているのか等について、細かいところまで教えて貰った。
　帰るとき、入り口で記念撮影をするという名目で、例のプレートがあるところで三人で写真を撮って貰った。その写真に記された文字を読むと、アルファベットの最初の文字はＹＡつまり「山梨」「青木ヶ原」だとわかった。西田君の写真に写っていた胸のタグには、ここことまったく同じ文字（ＹＡＬＦＥＳＣ）とあって、これはまさに入り口のプレートの頭文字と一致していた。それでスマホの待ち受け画面にしていた磯部君のタグを確認すると、ＩＨＬＥＦＥＳＣとある。してみると、最初のＩが県で、次のＨが地区または都市名ということになるわね。あと比較するとＬＦＥＳＣとＬＥＦＥＳＣとなっていて、Ｅがひとつ追加されてるけど、これは何かしら。帰ったら考えてみようっと・・・。
　今日の見学では、あたしたちは皆、かなりのショックを受けたために、帰りの電車の中では言葉少なめになっていたんだけど、市村さんは西田君のことが気に入ったみたいで、またここに来てみたいと話していたっけ・・・。まあ市村さんなら、西田君とは面識もないし、別にクラスメートだったってバラす必要もないわよね？

第２６話　見学（その５）（後書き）

（注１）

このＺＳＲ方式割礼器具については、第９話のあとがきに詳細が出ていますので、そちらをご参照下さい。

第27話　磯部君の手掛かり（前書き）

今回も、牡蓄そのものは一匹も出てきません。
これからも、このような回はときどきあると思います。

第２７話　磯部君の手掛かり

「牧場役って、大変なのね。」
「本当！・・・あたし、昨日の夜はずっと見学したときのことを考えていたんだけど、夜眠ろうとすると牧場の光景が浮かんできて、寝つけなくなっちゃった。」
「これまで何度も、男子が精液を提供してくれるから、あたしたちがこうして生きていけるんだって、ソーシャルジェンダー教育の時間に繰り返し教えられてきたけど、男子が頑張ってくれているんだっていうのは、どこか観念的で実感がなかったの。でも、これひとつをつくるのに、あれだけ男子が必死になって、身体改造まで受けてくれているんだって見て知ったからには、これからもっともっと男子に感謝して、また男子を労(ねぎら)ってあげないといけないわね。・・・この精液パックも、こんなに簡単にチュッと飲んじゃうんじゃなくて、もっとしっかり味わって、感謝を込めて一滴も残さず舐めるようにしないとだめなのね。」

そう言いながら、涼子が手に持った精液パックを愛(いと)おしそうにおし抱いて、じっくり味わうように少しずつ口に含んだ。

あのあと、あたしたちはあまりの衝撃に、口数少なく帰路についた。今日、学校で出会っても、人前で話すことは何となく躊躇(ためら)いがあって、お弁当を食べるために三人だけが集まったときに人目を憚(はばか)ってこそこそとヒソヒソ話をするようになっていた。

あたしたちの学年には、中卒で2年間の牧場役を終えて復学してきた男子学生もそれなりの数が居る。といっても彼らの多くは去年の3月に卒業して、それから1年間の受験勉強をして、この高校に入ってきた生徒が殆どだ。勿論、クラスには高卒で行くことにして、中学から直接、高校に進学してきた同じ歳の男子生徒も結構居る。

牧場役に行かずに中学から直接来た生徒は、あたしたちの知っている中学のクラスメートと同じ雰囲気なんだけど、牧場役を済ませてきた生徒は、年齢が3歳上ということも相まって、完全に大人の雰囲気だわ。必ずしも背が大きい訳ではないけど、皆真っ黒に日焼けしていて逞しく、何より決定的に違うのが胸（正確には乳首）と股間が比較にならないほど大きいのよね。胸はブラをしているんで、多少は隠れているけど、それでもツンと三角形にとんがったブラがシャツを通してよく目立つし、股間に関しては前の部分に余裕を持たせたデザインのズボンというのを履いているらしくて、そこにいっぱいに中身が詰まっている状態が目を引くわ。あれだけ大きいと、まさに狸の置物のキ○○マといっても通る位だわ。・・・あ、でも、あれ本当にキ○○マだけなのかしら。それとも、おちんちんも一緒に大きくなっているのかしら・・・。いずれにせよ、あの明白な膨らみの中には、剥き出しにされて先端まで真っ黒に色素が沈着したおちんちんと、鶏の卵ほどもあるたまたまが入っているのよね。ついつい眼がそっちに行っちゃうわ。・・・あの可愛かった西田君も、2年後にはあんなふうになっちゃうのかしら。・・・磯部君はどうなるんだろう・・・。

そもそも磯部君はどこに配属されたのかしら。昨日の牧場で、識別記号の最初の文字は県を表すのがわかったのは大きな収穫だった。磯部君のIで始まる県というと、岩手県、茨城県、石川県の3つしかない。岩手と石川は、東京からバスで行くのは遠すぎる気がするんで、そうなると残るのは茨城県ということになる。多分これは間違いないと思うわ。

次のHはひたちかしら。でも茨城県にはひたち○○という地名が山ほどあるみたいで、人里離れた場所も沢山ありそうだ。（それに「ひたち」といっても、「日立」もあれば「常陸」も「常磐」も「常盤」もあるし、ひらがなの「ひたち」もある。）それともHは東○○なのかしら。マップで調べたら、東筑波という地名があったけど、これ筑波山の裏側で、かなりの僻地っぽいところよね・・・。

そもそも牧場の所在地一覧みたいなものは調べられるものなのかしら・・・。
　そんなことを話しているうちに、話題は牧場役で見た搾精の場面になっていた。

「ねぇ、あの一斉に搾精されるところでさ、一発目で緑ランプが点いた牡蓄は良いけど、一発目は赤ランプになっちゃった牡蓄・・・あたしたちが見ていた子もそうだったわよね？・・・あの子たち、2発目の搾精が始まると、一発目とはうって変わって、結構苦しそうな表情だったじゃない？」
「そうね。そもそも射精って、そんなに連続でできるものじゃないんでしょ？・・・前にクラスで男の子たちが、何回連続射精したかを話していたことがあるんだけどさ、それでも30分とか1時間とか、間隔を開けての話だったみたいよ。」
「それに、1回の射精量は平均値で3．5cc程度だって言ってたわよね。それなのに、このパックがどれも5ccになっているから、つまりあたしたちに提供する都合で、無理やり5ccを搾り取られているんでしょ。それって、たとえ1発目で緑になったとしても、かなり辛いんじゃないかしら。」
「そこは薬品とかで身体改造されているから、大丈夫なんじゃないかしら。昨日も1発目で緑になった牡蓄はどの子も皆、蕩けきったような顔で快感に浸っていたじゃない。それに終わったあとはケロッとしていたから、きっと1発目で緑になれば苦しくはないんだと思うわ。」
「それよりもさ、2発目や3発目まで行っても緑にならない牡蓄とか、そもそも何らかの理由で射精できなくなっちゃった牡蓄の話のほうが衝撃的だったわ。」
「そうね。お尻から電気プラグを入れられて、前立腺を電気刺激して射精させるって言ってたわよね。・・・それこそ痛かったり苦しくて辛かったりしないのかしら？」

「痛かったり辛かったりするのもそうだけど、それによって電気刺激がないと、二度と射精できなくなっちゃう話のほうが大変よね。それって、牧場役によって、身体改造なんて生易しいものじゃない、言い方は悪いけどさ、かたわにされちゃうんだから。」
「そうなっちゃったら、リモコン電極埋め込み手術をするって言ってたわよね。それで射精はできるようになるから問題ないって・・・。」
「でも、それって自分の意志じゃなくて、機械的にというか強制的に射精させられるだけでしょう？・・・しかも、最後にチラッと話していたけど、電気刺激による射精は、気持ちの良いイクっていう快感は得られなくって、だらだらじわじわとお漏らしするような射精になっちゃうんだって言ってなかった？」
「うーん、あたしたちにはそもそも射精の快感っていうのがよくわからないから、それがどういう変化なのか、さっぱりなのよね。でも、殆どの卒業生は、そんなに悲惨な目にあったという意識ではないらしいって言ってたから、これも身体改造の一種なのかもしれないけど、ピアスなんかと一緒で慣れちゃうものなんじゃない？」
「そうなっちゃったら、もう結婚はきっとできないわよね・・・。可哀相に・・・。」
「あら、あたしは話を聞いて、逆にリモコン電極を埋め込まれた卒業生って、結婚相手としてかなり理想的じゃないかって思ったわ。だって旦那さんの射精というか性(セックス)をすべてあたしが管理することになるのよ。あたしがリモコンを持っていれば、あたしの望んだときに射精して貰えるし、逆にあたしがリモコンを操作しなければ絶対に射精はできないんだわ。これって、決して裏切ることができない、絶対的な貞操を生涯にわたり捧げてくれることになるんでしょ？・・・こんな相手と結婚できるなら、是非ともそうしたいわよ。・・・将来、彼氏ができたら単刀直入に聞いてみようかしら？」
「まあ、いずれにせよ、男子はそこまでのリスクを負ってまでして、あたしたちのために精液を提供してくれているんだわね。あたした

ちを生かすために、男子が家畜になって人権をすべて諦めているなんて、なんだか凄い話ね。」

市村さんはアッケラカンと話していて、涼子もわりと軽く受け答えていたけど、あたしは男子に申し訳ない気分で一杯だった。このクラスにも多数居る牧場役卒業生には、心から本当にご苦労さまでしたとお礼を言いたかった。クラスでは、牧場役を卒業してきたグループと、まだ牧場役に行っていないグループでは、あきらかに別の人種としか思えないほど大きな差があり、そのため両方のグループは、別に仲が悪いということではないんだけど、接点もなければ考え方も価値観も異なり、両者が融合するなどということは、ちょっと考えられなかった。

まさかと思うけど、この中にもリモコン電極埋め込み手術をされた卒業生が居るのかしら。昨日、どのくらいの牡蓄が手術を施されるのかと質問してみたけど、何となく言葉を濁（にご）されて、凡（およ）その率も教えてくれなかった。直接の参考にはならないのかもしれないけど、一発目の搾精で赤ランプになったのは、ざっと見渡したところでは１割よりも少し多いかしら、という位だった。また、２発目でも緑になれなかったのは、多分だけど５％位に見えたわ・・・。そして最後まで赤のままだったのが、確か２匹だったと記憶している。あの畜舎は１００匹を収容しているから、そうすると２％から１５％位の間が可能性のある範囲よね・・・。赤になっちゃった西田君は大丈夫かしら・・・。磯部君はどうなんだろう・・・。もし磯部君がそんな身体にされちゃったら、あたしが全力で支えてあげる・・。

「ねえ、牧場役の話ってさ、やっぱり何となく大っぴらに話しにくいじゃない。まして卒業生が居るところでは、お互い気まずいよね？」

「？？・・・それで？？」

「でも、興味は尽きないし、もっといろいろな情報も知りたいじゃ

ない？・・・実は、あたしの中学のときの同級生で、私立高校に行った子がいるんだけど、その子の妹が先週、北のほうにある牡牧場に見学に行ってきたんだって。その妹というのが、やっぱりいろいろとショックを受けて帰って来たらしくてさ、他の見学者と話をしたいって言ってるらしいのよ。」

「あたしたちもさ、もっと情報が知りたいし、他の牡牧場ではどんな様子だったのか興味があるじゃない？・・・だから今度、駅前通りのミスドで会ってみない？」

「賛成！！・・・是非アレンジしてよ。」

ーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーー

「そうですか。皆さんは富士山の麓の牧場に見学に行かれたんですか。あの辺りは、冬だと雪が降ったりして、ちょっと寒いですけど、別荘地として有名な場所ですよね。」

「まあ、人里離れた場所で、ある程度の広さが確保できるとなると、大都市の近隣では場所も限られちゃうんじゃないかしら。」

「そうですね。でも、あの中は本当に別世界で・・・・・・。」

　お互い、牧場役で見た光景を、次々に語り合う。学校など、見学していない（つまり牧場役の内実をよく知らない）人や、逆に牧場役の卒業生が居るところでは、どうしても周囲を憚(はばか)ってしまい話ができないことを、何の遠慮もなくぶつけ合い、何に驚いたか、どういうところがショックを受けたか、止まるところなく話が弾む。でも、まだあたしが一番知りたいところには、話が至っていない。それで、それとなく話題を振ってみた。すると・・・。

「・・・で、先週あたしたちが見学に行ったのは、茨城県の北の外れにある常陸実験牧場というところなんです。場所は常陸大宮とい

うところにあって、もう少し先に行くと福島県に入ってしまうんですが、何でもここは関東全域でも3ヶ所、日本全部でも8ヶ所しかない実験牧場といって、牡蓄の飼育方法をいろいろと研究し改善したり、搾精効率を上げたりして、高品質な精液を少しでも沢山搾り取るためにはどうしたら良いかということを研究する特別な牡牧場で、世の中に少量出回っている高級精液・・・凄く値段の高いブランド精液って知ってますよね？・・・そういったものの生産も行っているんだそうです。」

茨城県！・・・ひたち！！・・・それを聞いて、あたしの心拍数は一気に跳ね上がった。もしかすると、いや、多分、磯部君が配属されたのは、ここで間違いない！・・・そんな期待感に、あたしは前のめりになって喰いついた。

「そっ、そのときの写真っ、撮影しているわよねっ？！！・・・見せてくれるかしら！」
「ええ、勿論です。・・・これ、ネットに上げるのは禁止されていますが、話をしながら直接渡すのは確か大丈夫だった筈ですよね？・・・いま、そちらのスマホにダイレクトに送信します。」

送られてきた画像データは、写真も動画も沢山あった。あたしは話に適当に相槌（あいづち）を打ちながら、物凄い勢いで胸の識別カードが写っているものがないかどうかを探してみた。けど、残念なことに識別カードの文字は小さくて鮮明でなく、まともに読めるものがひとつもなかった。がっかりしながら、さらにパラパラと写真をスクロールしていくと、説明のパワーポイントがスクリーンに映されている部分があり、その表紙（だと思う）を撮影したものに、あたしのまさに求めていたものがはっきり記されていた。
『見学者向け説明資料』
『茨城局　常陸牡蓄搾精実験牧場』

“Ibaraki bureau Hitachi Lives tock Experimental Farm for Ejaculation and Semen Collection”

“IHLEFESC”

ついに見つけた！！・・・ここに磯部君が居る！

あたしは、思わず溢れる涙を隠そうと必死だった。そして、何としてでもここに見学に行くんだと、心に誓った。

第27話　磯部君の手掛かり（後書き）

ようやく磯部君の手掛かりを掴んだ塚田さんですが、はたして無事、磯部君にたどり着くことができるのでしょうか。